マルガリータ

村木嵐

Ran Muraki



文春文庫

著者紹介

村木　嵐（むらき・らん）

1967年京都生まれ。京都大学法学部卒業。2009年「春の空風」が松本清張賞候補になる。2010年、本作で第17回松本清張賞を受賞。著作に『遠い勝鬨』『船を待つ日　小坂屋お嬢の江戸見廻り始末』がある。故司馬遼太郎氏夫人・福田みどりさんの個人秘書も務める。



マルガリータ

村木　嵐

Ran Muraki

文春文庫

マルガリータ　村木　嵐　む 15 1　文春文庫　630 ＋税

9784167838591

1920193006308

ISBN978-4-16-783859-1

C0193 ¥630E

定価（本体630円＋税）

戦国時代末期、天正遣欧少年使節としてローマに派遣された四人の少年。八年後に帰国した彼らを待っていたのは禁教と厳しい弾圧だった。三人は信仰に殉じたが、千々石ミゲルだけが棄教する。なぜ彼は信仰を捨て生き抜こうとしたのか。その生涯をある女性の視点から描いた傑作歴史小説。第十七回松本清張賞受賞。解説・縄田一男

む 15 1

文春文庫

文春文庫

村木　嵐の本

マルガリータ

装画・八木美穂子
デザイン・大久保明子

文春文庫

マルガリータ

村木 嵐

文藝春秋

マルガリータ
村木 嵐
文春文庫

文春文庫

マルガリータ

村木嵐

文藝春秋

目次

マルガリータ

序

ようまあこのような西国の果てへ、お暑い中をうち揃うて、ようこそおいでくだされました。この婆をたずねて、幕府のお役人様がお三方も。はあ、将軍家光様がこの婆をお探しに。畏れ多いことでございます。どうぞどうぞ、ぼろ家でございますがお座りになってくださいませ。

　はい、私の名は珠（たま）、齢（とし）は六十四でございます。この伊木力（いきりき）はかつて夫が肥前国大村藩主様より拝領しておりました土地でした。それゆえ、やもめになりまして後、少しばかりの畠を貰うて耕しております。

　夫はお尋ねの清左衛門こと、千々石（ちぢわ）みげるに間違いござりませぬ。齢はそう、生きておりましたら七十にとどいておりましょうか。たしかに、天正年間に南蛮へ使節として渡りました少年四人のうちの一人でございます。西国のお大名がお三方で寄って、南蛮の羅馬（ろおま）とやらへお遣わしになった旅……。はるかな昔、まだ天主教がさかんな時分のことでございました。

　当時みげるは十三だったそうですが、この大村のご藩主様に連なる血筋ゆえ、使節の中では正使でございました。ええ、切支丹大名として名高かった大村純忠（すみただ）公の甥にあたります。

　二十歳の時分にこの国へ戻り……、はい、南蛮へは八年あまりもまいっておったのでございます。帰ってしばらくは天主教が開いていた学林で学問を続け、修道士になったのでございますが、司祭にはなりませんでした。

　は、修道士と申すのは、切支丹どもがいるまんと呼んでおる宣教師、つまり天主に仕える伝道者のことでございます。司祭とは修道士のさらに上におる者で、これはぱあどれと呼ばれておりました。

　司祭だけが御みさと呼ぶ祭礼を開くことができ、すべてを差配するというたいそうな権勢を持っております。まあ、たとえて申せば司祭はお奉行様、修道士はお役人様というところでございましょうか。お奉行様がおられねばお裁きは開かれぬし、罪を罪と定めることもできますまい。つまり、みげるはお役人様にまでは引き上げられたが、お奉行様にはなれなかったということでございます。まあ、どのみち棄教してしまったのですから、お役人様もなにもありますまいが。

　おおよその話はそこにおります玄蕃（げんば）から聞きましてございます。お調べの通り、玄蕃は私とみげるの子でございます。もう一人、上に男子がおりますが、これは有馬家の転（てん）

封について日向へ行ったきり、今ごろはどうしておりますのやら。玄蕃とも、このようなことでもなければ年に何度会いますことか。どうもこの婆は身内の縁に薄いのでございますよ。

お役人様、そう急かされますな。天草四郎時貞と申せば、この冬、島原のお城に籠もり、将軍様相手に大きないくさを仕掛けた者でございましょう。あ、はあ、いくさではない、一揆でございますか。はい、切支丹どもの一揆。さようでございますな、島原は昔から切支丹の多い土地でございましたゆえ。

いいえ、滅相もありませぬ。この大村は今や、ご藩主様以下、皆ことごとく日蓮宗徒でございます。先々代藩主の大村喜前公が、かの加藤清正様のお勧めで天主教を棄てられたことをご存知ありませぬのか。わが夫の勧めによるかどうか……、それは婆は存じませぬ。

ただ夫が信仰を棄てましたのは、確かに喜前公より先でございました。それゆえ口添えぐらいは致したかと存じます。ええ、みげるは喜前公とは、当時はずいぶん親しゅうございましたから。みげるが南蛮から戻りました折、喜前公御自らお出迎えに来てくだされたほどで。はい、二人は従兄弟でございます。

分かっております、天草四郎時貞とやら申す切支丹の頭目が、みげるの子かとお尋ねなのでしたな。そこはそれ、あの大乱の首謀者ともなれば、将軍様はどこまでも身元を

洗われるのでございますな。

もちろん、将軍様に弓引いた者のお調べでございます。この婆とても、できるかぎりのお手伝いはいたします。

乱のとき天草四郎はいくつだったのでございますか。三十？　四十？　しかとは分からぬと申されても、だいたいのところはお分かりなのでございましょう。婆の息、玄蕃は三十二でございますぞ。

え、十八？　とすると天草四郎は……、婆の四十五のときの子でございますか。

おや、お役人様でもお笑いになるのでございますな。ああ、これはご無礼申し上げました。

ですがお役人様。天草四郎とやらが十八であれば、みげるにとっては五十の子でございます。女子と違うて、男ならば五十で人の親になることもできましょう。みげるの子でないとは……、この婆には言い切ることはできませぬ。

これはこれは、婆のほうが笑わせていただきますぞ。男が、妻に分かるように他の女子のもとへ通いましょうか。この婆がみげるの、よその女子など知るわけがありませぬ。まあ一人ばかり、そのような女子に心当たりもございますがの。

とは申せ、それには婆の長い話を聞いていただかねばなりませぬ。

夫みげるは棄教して、切支丹どもから、それは酷い目に遭わされ通しの生涯でござい

ました。逃げるように住まいを変え、行く先々でなぶりものにされ、私や玄蕃ともども殺されかかったこともございます。それゆえ切支丹には恨みこそあれ、近しさと申すものは一切……、むろん庇いだてしようなどとは毫も思いませぬ。私もみげるも、この国に天主教など伝わらなければと、何度泣いたかしれませぬ。

たしかにみげるは少年使節に選ばれて南蛮へ渡り、ざびえる司祭の流れをくむ耶蘇会で修道士になりましたが、帰って十数年のうちに棄教したのでございます。しかも当節の切支丹のように、拷問を受けて転んだというのではありませぬ。みげるは誰に強いられるでもなく棄教いたし、己で天主教の下から離れたのでございます。南蛮へ渡った四人の使節のうち、棄教したのはみげるただ一人。あとの三人は司祭になりおおせ、殉教さえ成し遂げたのに、ですぞ。

みげるは棄教して、切支丹とは一切の関わりを断って生きてまいったのでございます。それを今ごろになって天草四郎の父だなどと。

たとえみげるがこの婆のほかに子を生ませておろうとも、みげるが子に天主教を説くことだけはありませぬ。みげるが己の子を天主教に近づけたはずがございませぬ。

みげるが天主教にどのような仕打ちを受けてきたか……。みげるは天主教のせいで命を落としたのでございます。棄教者じゃ、転び伴天連じゃと蔑まれ、生涯一日たりと安穏と過ごしたことはなかった。みげるは南蛮に行きさえしなければ、あのような酷い生涯は送らずにすんだのでございます。

それが……、そのみげるの子が、生い立って信仰の道を歩み、皆に押し立てられて切支丹の頭目になったなどと。婆は、この婆は、それだけは認めることはできませぬ。

第一章　再会

一

その朝、たまは夜が明ける前から岬に立って海の彼方に目を凝らしていた。八年前、この長崎の湊を旅立った南蛮の船がついに今日戻ると報せが来たのは昨日の夕刻のことだった。沖へ出ていて三本柱の大きな南蛮船を見つけた漁師が、お前が皆に報せ終わってから湊に入るのだと告げられて、まるで津波に追われたように急いで町へ駆け上がってきたのである。

西国の切支丹大名三家が手を携えて、長崎の湊から少年たちを南蛮に遣わせたのは天正十年（一五八二）正月のことだった。あれから八年半が経ち、湊の天主堂で母のおさきと手伝いをして暮らしているたまも十六になっていた。

丘の上の天主堂に朝日が射すと、海が白くなり始めた。

凪いだ夏の海と空の境目は、八年前に教わったとおり、両端へいくほど真珠のように丸く下がって見えた。

「それが、この世が丸いという証なのだ」

「丸い？」

さっぱり意味が分からずに見上げた幼いたまに、あのときみげるは春のお天道様のようににっこりと微笑んだ。

「たまや私が立っているこの大地は、実はこの真珠のように丸いのだ。ほらごらん、そなたの母上が私にくだされた真珠を。私はこれほど美しい物をほかに知らないよ」

みげるは首から提げた巾着を逆さにふって、大きな一粒の真珠を手のひらに取り出した。あのときみげるは十三歳で、たまとは五つしか違わなかったけれど、ずいぶん大人に見えたものだった。

「この世が丸いから南蛮の修道士様たちも海の彼方からやって来ることができるのだ。たま、修道士様たちの船を見ていてごらん。海と空の境目に目を凝らしていれば、たまが真っ先に見つけるのは帆柱だろう。それもこの世が丸いという証だ。もしも丸くなければ、たまが真っ先に見るのは船の舳先のはずだからね」

海の彼方を指し、湊に静まっている南蛮船を指し、みげるは丁寧に教えてくれた。

それなのにあのとき、たまはつんと唇を尖らせてみげるに言い返した。

「みげる様は間違ってる。真珠をあげたのは母上様ではなくて私です。私がみげる様にお届けしたんです」

「だが父上様の形見なのであろう？　母上様が、これを懐（ふところ）に入れておけば船が沈むことはないと言って、私に届けさせてくだされたのだろう」

たまはいよいよ頬をふくらませた。

「でもみげる様に真珠をあげたのは私です」

するとみげるはにこにこと笑ってたまの頭を撫でた。

「よしよし、分かったよ。父上様の形見の真珠を私にくれたのはたまだ。たまが、私の船が沈まぬように、父上様と母上様の大切な宝を私にくれたのだな」

「うん。だからみげる様の船が沈まず、無事に帰って来られたら私をお嫁にして」

まだ十にもなっていなかったから言えたのにちがいないが、他の同い年の少女ならもう少し分別があっただろう。たまは侍の子というだけで父も亡く、一方のみげるは藩主大村純忠公の甥だった。

だがみげるはもとから人の身分など考えもしない人だったから大笑いしてこう言った。

「そりゃあ私もたまが妻になってくれれば嬉しいが、私は天主教の修道士になるのだ。修道士は妻を持てないのだよ」

「でもみげる様がうんと学問をして、うんと偉くなれば特別に許してもらえるでしょう」

「うんと偉くなっても妻は持てないよ。私がこれから行く羅馬の教皇様にも妻はいないのだから」

「教皇様というのは偉い人？」

「ああ。天主教で一番偉い御方だ」

「じゃあ、織田信長様よりも偉いの」

「信長様よりも、京におわす帝よりも偉い御方だ」

「偉いのにお嫁はいないの」

みげるは空をあおいで笑い声を上げると、もう一度たまの頭を、ぐるぐると混ぜるように撫でた。

「どのみち私が帰って来るのは五年、いや十年くらい先だよ。その頃たまはもう誰かのお嫁になって、かわいい子らの母上になっているとも」

私が帰って来たときだって、こうして出迎えに来てくれるかな――

笑ってそう言い残し、みげるはこの湊から、はるかな南蛮の国へ旅立って行った。

たまは母のおさきと手をつなぎ、大きな南蛮船が帆を上げて波の上を滑って行くのを見ていた。南蛮船は最後の最後まで高い帆柱と帆を残していたけれど、それでこの世が丸いというわけは分からなかった。

暗くなるまで海を見ていたあの日から八年が経ち、澳門（まかお）からの南蛮船が、この夏みげ

るたちの船が長崎に戻ると告げたのはちょうど桜が散った時分のことだった。夏というのはいつから始まるのだと、おさきに毎日のように尋ねてはあきれられ、それでもこの十日あまりは毎朝湊を眺めてから手伝いに行っていた。

「海を見ているより、天主堂の皆様方を見ているほうがよほど確かですよ。沖に出ている漁師たちが、たまよりもずっと先に船を見つけて皆様方に報せるはずですからね」

おさきはそう言って、たまの手を休ませなかった。

おさきは龍造寺家と大村家とのいくさで夫を亡くしてから、長崎にある天主堂や、修練院と呼ばれる南蛮の学問所を手伝って暮らしをたてていた。長崎を擁する肥前国大村藩は三十年も前に天主教が伝来してからというもの、南蛮との往来が何にもましてさかんになっていた。龍造寺家を南蛮の助力で退けた純忠公は、自身も熱心な切支丹であり、長崎を天主教の修道会に寄進していた。あの時分の長崎は丸ごと南蛮の国のようで、天主教の家作が辻々に立つような町だったのだ。

寡婦になったおさきはいっとき、島原半島の日野江にあった修練院で、諸国から集まる切支丹の子弟らの身の回りの世話をしていた。たまはおさきを手伝う合間に、その脇にある天主教の手習い所で読み書きや算術を習ったが、そこの上の組にいたのがみげるたちだった。

とにかくみげるたちは何でもよくできた。夏は寅上刻、冬は下刻に始まる祭礼にも一

度も遅れたことはなかったし、読み書きや教理はもちろん、幾通りもある南蛮語も、南蛮の音楽も演奏も、一日の終わりの戌刻に行われる道義吟味も、何から何まで皆の手本となっていた。

そうして肥前国大村藩主の大村純忠と島原日野江藩主の有馬晴信、豊後国の大友宗麟（そうりん）が南蛮国へ使節を遣わすことに決めたとき、選ばれたのがみげるたちだった。みげるたちは出発を控えて長崎へ移り、おさきとたまも後を従いてやって来た。そしてそのまま長崎の天主堂で働くことになった。

天正十年（一五八二）、南蛮人司祭率いる一行が大きな帆船に乗り込んだとき、正使に任じられたのが十三歳の千々石みげると伊東まんしょで、副使として十一歳の原まるちのと十四歳の中浦じゅりあんが加わった。みげるは大村純忠の、まんしょは大友宗麟の血縁で、どちらも南蛮船を遣わす藩主に連なるから、副使に選ばれた二人こそ学問に秀でているのだと言われたけれど、たまから見ればこの四人とも、修練院の中で別格に光り輝いていた。修練院では皆が揃いの衣を着ていたが、この四人だけはいつ見てもほつれの一つもなく、頭の先から足の先まで別仕立てでできているかのようだった。四人とも、まるで容姿で選ばれたように目鼻立ちが整っていた。

たまはいつも思ったものだ。この世に美しい女子は多いけれど、ふつうは男が美しいかどうかは考えないものだ。それなのにみげるを見ていると、たまはどうしたって己が

恥ずかしくなってしまう。美しい男なんてそうはいないはずなのに、みげるはその少ない中に入る。だけどたまは、あそこにもここにも美しい女子がいるこの町で、どうしても美しくないほうに入ってしまう。

なにも伊奈姫様ほど美しくなりたいと高望みをしているわけではないのに——

八年前なら考えもしなかったことが、今はたまの心の真ん中にあった。みげるとたまでは身分が違うということ以前に、人としての格が違っていた。みげるは男なのに美しくて学問もできるけれど、たまは美しくない女子で読み書きもままならない。一所懸命働くけれど、それだってしょっちゅうおさきに心がけが足りないと叱られる。気働きができないし、人より優れたところはただの一つもない。今のたまは、みげるにお嫁にしてとは絶対に言えない。

しょんぼりとため息をついたとき、たまは沖を見て目をしばたたいた。その刹那（せつな）、何もかも吹き飛んだ。

たまは丘に向かって走りながら、四方八方に叫んだ。

「司祭様！　修練院の皆様！　帆柱が見えます！　使節の方々の船が帰ってまいりました」

そのときたまが考えていたことといったら、やっぱり天主様はたまの願いを叶えてくださるということだった。

みげるの船は沈まなかった。みげるはたまの贈った真珠をきっと今も大切に首の巾着に入れている。みげるは、たまのいる長崎へ戻って来た——

岬の突端、少し高くなった丘の上にたつ天主堂は、船を下りた使節たちと出迎えの人々でごった返していた。たまはおさきや近在の女たちにあっちへこっちへと忙しく使われながら、使節の一行が丘への道を上って来るのを盗み見ていた。

湊まで迎えに下りていた天主堂の修道士たちを先頭に、使節を南蛮まで導いて行った南蛮人司祭、その後ろに正使のみげるとまんしょが続く。そのさらに後ろを副使の二人が行き、四人とともに南蛮に渡った三人の少年と、五人ばかりの修道士たちが歩いて行った。両脇から修練院の年嵩（としかさ）の子らが大きな傘をさしかけて、たまにはその傘のえんじの柄しか見えなかった。

みげるたちが長崎を出たときは、道々には別の天主堂や手習い所や、南蛮人がこの地で泊まるための特別の旅籠（はたご）がたくさんあった。だが三年前に関白秀吉が伴天連追放令を出し、この地でもいくつもの南蛮家屋が打ち払われた。この天主堂への一本道を通るだけでも長崎の変わりようは目につくはずだが、使節たちは驚くでも立ち止まるでもなく、まっすぐに天主堂へ歩いて行った。

たまたちが膳を並べた広座敷にみげるたちはしずしずと入って行った。茶を運んだり、足りない膳を出したりと、いくらでも広座敷に入る仕事はあるのに、たまに割りふられたのは新しい米を炊くことと、次々に戻ってくる器に酒肴を盛ることだった。みげるの姿など、首の巾着どころか衣の端すら見ることはできなかった。

やがて三城のお城から大村藩主の一行が到着し、いよいよたまは広座敷に近づくこともできなかった。

だが伊奈姫様がみえられたという声を聞いて、台所に立っていた手習い所の少女たちはいっせいに外へ飛び出した。そのときばかりはおさきも、たまが飛び出して行くのを止められなかった。伊奈姫といえばおさきでも一目姿が見たいほどの、歩く宝石のような美しい姫だった。

手習い所の少女たちが見物に集まっている人々をかきわけてお城の一行に近づいたとき、伊奈姫たちは天主堂の山門をくぐるところだった。

「まりた様！」

幼い呼び声に伊奈姫はくるりと振り向いた。そしてかわいい声の主を見つけると、優しくほほえんで両手を広げた。

周囲から波のようにざわめきが起こった。誰もがこうして伊奈姫の笑顔を見られただけで、今にも倒れそうな人垣の中で立っているのも報われたと思ったのにちがいなかっ

た。伊奈姫の美しさは、一人で南蛮使節の代わりがつとまってしまうほどだった。

伊奈姫は着物の裾もかまわずに土の上にしゃがむと、走ってきた童女を抱きとめた。

「まりた様、赤児がお生まれになって、おめでとうございます」

童女は懸命なようすで声をはりあげた。それはそこにいる誰もが言いたいことだった。

「ありがとう」

伊奈姫はにっこり笑いかけると、手早く童女の髪のふくらんだところを直してやりながら立ち上がった。

「お母上様の言われることをよく聞いて、お帰りになった皆様のお世話をしてあげてくださいね。では行ってきますね」

誰もが己に言われたようにうなずいた。伊奈姫のあとに花の香でもただよっているようだった。

伊奈姫は前藩主大村純忠公の娘で、父にならって熱心な切支丹だった。まりたという洗礼名を持ち、この上もなく優しくて美しいというので、三城城下ばかりでなく長崎でも知らぬ者はいなかった。みげるとは父同士が兄弟の従姉弟にあたり、伊奈姫の弟で現藩主である大村喜前公がみげると同年ということもあり、この三人は幼い時分から特別に仲が良かった。大村純忠公の下で、三人は切支丹の信仰を深めながら生い立ってきたのだ。

みげるが南蛮へ旅立って数年後、伊奈姫は藩家老の朝長大学頭純盛(あさながだいがくのかみすみもり)に嫁し、三城城を出て、湾をへだてた対岸の琴海町戸根(きんかいとね)へ移った。みげるたちが帰ったという報せはここ長崎から三城、琴海へと飛び、三城からは喜前公が、琴海町戸根からは伊奈姫が駆けつけたのだった。

「本当に、なんておきれいな方だろう」

たまは並んで立っていた手習い所の仲間につぶやいた。

その声が聞こえたのか、伊奈姫に抱きとめられた童女は、ついと鼻を高く上げるようにして目の前を通っていった。

「でも皆様、まりた様が嫁がれたと知れば、がっかりなさるでしょうね」

少女はからかうような目でたまを見た。

「どうして。使節の方々はもとからどなたとも夫婦(めおと)にはならないもの。がっかりも何もなさらないでしょう」

すると少女はくすっと笑ってたまの背を軽くたたいた。

「たまはばかね。夫婦になる、ならないと、好きという胸の内とは違うでしょ。いくら生涯妻は持たないと決めていても、胸の内で誰かを好きになることはあるものよ」

「そうなの」

「そうよ。たまだって、みげる様が妻を持たれないと知っていたくせに追いかけていたでしょう」

少女は明るく笑って言い捨てると走って行った。見ると庫裡(くり)の横手でおさきが合図の手を振っている。いいかげんに戻れということだ。

たまも肩をすくめて駆け出した。

「たま!」

振り返ると、背の高い男が立っていた。

琥珀(こはく)織に似た美しい絹布の黒い上着に、のどから臍(へそ)の辺りまで等分に六つばかり金色に光る丸い物がついていた。腰紐の下も琥珀織のような軽衫(かるさん)で、南蛮の修道士が履いているような、かかとだけ高くしためずらしい履物に足を入れていた。

蛮服が襟まで詰まっているから、首は見えなかった。

「みげる様……」

「おお、私だと分かったか」

「みげる様こそ……」

「だって、たまは少しも変わっていないもの」

「このようなところにいらしていて、いいのですか」

たまは、なにも今聞かなくてもいいことばかりで口が勝手に動いていく。会えたのは八年ぶりで、もっとたくさん話したいことはあるのに。

「厠（かわや）へ立ったついでに、少し庭へ下りてみたのだ。この天主堂の中はなにも変わっていないのだね」

「でも長崎は変わりましたよ」

　そっけなくたまは言った。

「天主教は筑前守（ちくぜんのかみ）様に禁じられてしまいましたし、この長崎だって、筑前守様に取り上げられたんです」

　筑前守とは豊臣秀吉という新しい天下人（てんかびと）のことだった。みげるたちが長崎を旅立ったときは織田信長が天下統一を果たす寸前だったけれど、みげるたちの船が長崎を出て半年の後に京の本能寺で殺された。その後を襲ったのが秀吉で、その軍勢が九州を平らげていったのが三年前のことだった。

　純忠公は秀吉に臣従していたのでいくさにはならなかったけれど、秀吉はただでは帰って行かなかった。いったんは天主教の宣教師たちがすべて追放され、長崎にあった天主堂の大半が焼き払われた。この天主堂は南蛮人の旅籠だといつわって破壊を免れたもので、修道士たちは、馬尼拉（まにら）に引き上げていたのが少しずつ商人にまぎれて戻ってきた。

　天主教の天地だった長崎は没収され、同じ年に純忠公と大友宗麟が相前後してみまかった。みげるたちを南蛮に送り出した藩主三人のうち、二人までがこの世から消えたのだ。

「知っているよ。だけどまだ有馬晴信様がおられるだろう」

「知ってるって、どうしてご存知なんですか」

「そりゃあ司祭様には文も来ていたし、印度でも澳門でも、日の本からの帰りだという南蛮船に行き会ったものだ。なんでも知っているよ。去年、筑前守様には鶴松君というお世継ぎ様がお生まれになったのだろう」

　みげるは睫毛の長い目を大きく見開いて、たまをわざと驚かせるように顔をのぞきこんだ。

　たまはあわてて一歩後ろへ下がった。

「そんな、おふざけになっていて大丈夫ですか。日の本では天主教が禁じられてしまったのですよ。みげる様も司祭様にはおなり遊ばすことができないのではありませんか」

「司祭様になれるか否か、お決めになるのは天主様だ。筑前守様がどのようにお考えだろうと、日の本でどうであろうと、私たちには関わりのないことだ」

「でも……」

「たまが案ずることはないのだよ。純忠公の後を継がれた喜前公も熱心な切支丹だ。この国から天主教が絶えることはない」

　たまはぶるぶると首をふった。

「みげる様は何もご存知ないのです。この長崎でも天主

堂がいくつも火をかけられました。お寺なんて一つもなかったのに、今ではお坊さんがいっぱいいて、ここだって石を投げられることもあるんです」

湊のそばの天主堂が焼かれたとき、たまはとても恐ろしかった。この天主堂の庫裡の窓から湊を見下ろして、屋根にかかげられた十字架が火に包まれて燃え落ちるのを、おさきと肩を抱きあって見ていたのだ。

「かわいそうに、みな恐ろしい思いをしていたのだね。だが、たまは知らぬのだ。この長崎も切支丹の地になる前はいくつも仏寺があったのだよ。それを天主教の司祭様たちが一つずつ焼き払っていかれたのだ。なにも寺を焼かれたのは天主教ばかりではない。切支丹であろうとなかろうと、人のすることはいつも同じなのだ」

「……本当に司祭様がそのようなことをなさったのですか」

「ああ」

「きっと、みげる様が間違っておられるのよ」

するとみげるは、まるで童女にするようにたまの頭を撫でてほほえんだ。

「お前には八年前もそう言われたね」

そして首の後ろに指を這わせると、詰まった襟の下から一本の紐を引っぱりだした。紐の先には小さな巾着がついていた。

「八年の間、ずっとこうして持っていた。私の船が沈まなかったのはたまのおかげだ

な」

みげるはたまの手を取ると、巾着を逆さにふった。艶やかな丸い粒がたまの手のひらに転がり出た。

「私はこうして無事帰って来た。そしてたまは八年前と同じように私を出迎えてくれた。何も変わっておらぬではないか。この国も、天主教の信仰も、きっとこれからもなにも変わらないよ」

そう言ってみげるはそっと、たまの手のひらを握らせた。

「私はもう船を下りたからね。たまのお守りはたまが持っておいで」

「でもこれは、もうみげる様に差し上げたんです」

「いいや。もう私にはいらぬのだ。ねえ、たま。南蛮はこの真珠のように美しい地だったよ。たまは南蛮を見たことがないから、これを南蛮の国だと思うことはできないか。この真珠はずっと私といて、私と同じものを見てきたのだから」

たまはみげるに握られた、閉じたままの己の手を見つめた。

これまで南蛮が美しい土地かどうかと考えたことはなかった。みげると別れた八年前がはるかな大昔のようでもあり、ふしぎに、その間のことなど何も思い出せない昨日のことのようでもある。南蛮でみげるがどんな物を食べ、どんな人と話していたのか、たまは頭に思いえがいてみたこともなかった。

南蛮にはどんな美しい人が暮らしているのだろう。たとえば伊奈姫のように、誰もがこの真珠のように美しく輝いているのだろうか。

「この真珠のことを南蛮では」

そのとき、あっとたまは声を上げた。

「みげる様、先ほどまりた様がおいでになったのでございますよ。みげる様が厠へ立たれたあいだに……、入れ違いになられたのではありませんか」

みげるは驚いたように目をしばたたいた。その幼い顔にたまはほほえんだ。たまを八年前と少しも変わらないと言ったけれど、みげるにもあの時分の面影がまだたっぷり残っている。

「やっぱり。きっと皆様、みげる様を探しておいでですよ。さあ、早くお戻りになってください」

「ああ、そうしよう」

みげるはぱっとたまの手を離すと、もう大股で走り出していた。その後ろ姿を見送っていると、たまは笑いがこみ上げてきた。

みげるはちっとも変わっていない。南蛮使節の正使で八年も海の向こうへ行っていたというけれど、あれは今のたまより幼い、ただの十三歳の少年のようだった。

千々石ミゲルは永禄十二年（一五六九）、肥前国を領する有馬家の傍流に生まれた。そのころ京には屋台骨もなしに屋根だけ残ったような足利幕府があり、西国はもちろん、幕府ののど元である畿内でまで、武将たちが領土を広げようと勢力争いを繰り広げていた。織田信長が桶狭間で今川義元を破って一歩覇権に近づいていたが、まだ武田信玄もいた。ひるがえって九州では、薩摩の島津、豊後の大友、佐賀の龍造寺、肥前の有馬が入り乱れ、そこに山陰から毛利が食指を伸ばして、目を覆うばかりの戦国の世になっていた。

ミゲルの生まれた肥前国は、大村を付け根に島原、長崎、西彼杵（にしそのぎ）と、三つの半島からなるが、つねに佐賀龍造寺家の圧迫を受けていた。有馬家は大村家と結び、付け根の大村で三つの半島を死守したが、何度防いでも波のように返しては寄せる龍造寺家に、ほとほと疲れ果てていた。有馬家にとっては大村が落ちれば後ろは三つに分かたれた半島と海だけで、龍造寺家にとっては有馬家さえ追い落とせば、豊かな海と数々の湊がふところに転がりこむ。そして新たな波は海からやって来た。

天文（てんぶん）二十三年（一五五四）、南蛮人が島原で天主教の伝道を始めたとき、有馬家から出て大村家を継いでいた大村純忠は、領内に到来した天主教に関心を持った。

なにしろ南蛮人は航海術にすぐれ、匙一杯の秘薬でありとあらゆる病を治す。鉄砲弾

薬は好きなだけ用意してくれるし、国崩しという大筒（おおづつ）の威力は、その音だけで何十人もの兵をなぎ倒した。

南蛮人が上陸するようになって純忠の城下はたちまち肥えた。知ってみれば天主教こそ南蛮の力の源であるようで、波濤（はとう）をこえて日の本までやって来たのも、ひたすら天主教を広めるためという。南蛮人は天主教を守るためには南蛮船から国崩しを放つし、天主教に敵対するものには鉄砲一つ、南蛮黍（なんばんきび）一つ、船から下ろさなかった。

これはもう一族郎党うちそろって切支丹になるがいいのだと純忠は考えた。まずは己が切支丹となり、子にも家臣にも、有馬家を継いだ長兄にもその子晴信にも、そして亡き弟の忘れ形見であるミゲルにも、洗礼を受けさせた。

天主教で城下を豊かにした純忠は、同じ志を持つ大友宗麟、自身が後見をつとめる有馬晴信とはかって、天主教の大もとの南蛮国へ使節を遣わすことにした。それがミゲルたちである。

だがミゲルたちが南蛮へ行っている八年のあいだに、この国は純忠の思いもかけない方向へ流転をはじめた。

ミゲルたちが長崎を出発して半年後の天正十年（一五八二）六月、織田信長が天下統一を目前に本能寺で殺された。その後を羽柴筑前守秀吉が継ぎ、京の朝廷から関白に任ぜられて豊臣姓をたまわった。

もう天下は秀吉のものだった。唯一の敵対勢力だった徳川家康にも妹を嫁がせ、母を人質に出して臣従させた。昨天正十七年（一五八九）にはついに鶴松という世継もさずかり、家康の脅威も、東国の江戸へ移封して遠ざけた。

南蛮びいきだった信長と異なり、秀吉は天主教を一顧だにしなかった。秀吉の独力で戦国が去り、国が治まってしまえば、南蛮の大船も大筒も鉄砲も不要だ。しかも戦乱の世に互いになりふりかまわずに取り込みあった南蛮と日の本のあいだには少しずつ齟齬（そご）が生じはじめていた。

南蛮は天主教を広めたいという宣教師の熱意に、新しい利を求める商人の思惑が重なってできていた。どんな蛮地であろうと恐れず上陸していく宣教師の後ろを、南蛮の商人がついて来たにすぎなかった。九州各地で幾人もの宣教師が命を落としながら、ときには逃げ腰になる商人たちを宣教師が励ましつづけ、ついには京の中央政権近くまで認められるようになっていた。

だが秀吉が九州征伐に下って来てみると、長崎も横瀬浦も天主教の所有地にされていた。貧しい百姓はかどわかされて南蛮に売り飛ばされているし、寺社は焼き打ちにあって大勢の僧侶が殺されていた。それになにより、宣教師たちは天下人の秀吉よりも天主を重んじた。

ついに関白秀吉が天主教の宣教師を追放したと、洋上のミゲルたちに報せたのは、長

崎帰りの南蛮商人たちだった。

秀吉は天主教は禁じても、商いは国を富ませるといって大いに奨励したから、南蛮船の行き来は衰えていなかった。東の果てから戻る幾艘という船が、日の本のようすをミゲルたちに絶え間なく知らせてくれた。決して大ぴらにでなければ、天主教はいくらでもあの国で生きていけると、商人たちは口を揃えていた。

そして長崎に帰って来てみると、ミゲルたちはたいそうな歓迎を受けた。大村純忠は死に、大友宗麟の跡継ぎは天主教を棄てていたが、純忠の嫡子喜前も有馬晴信も、自ら迎えに出て司祭たちをあつく労った。今に関白様もお気が変わると、一人として深刻な顔はしていなかった。

その楽観を裏づけるように、秀吉からミゲルたちを京の聚楽第に招きたいという報せも届いた。そして帰国して半年も経たない天正十九年（一五九一）閏一月、ミゲルたちは秀吉に対面した。

その聚楽第の神々しさに、まずミゲルは目を奪われた。金銀をまばゆいばかりに使い尽くした屋敷は、決して教皇の住まう宮殿に劣るものではなかった。いかに南蛮が大きく豊かで、町そのものが華麗だといっても、日の本で生まれ育ったミゲルにとっては、目になじんだ山や川のほとりで雲居に包まれて建っている聚楽第のほうが荘厳だった。ミゲルには屋敷も町も、海も山も、貧しい百姓の姿でさえ、この日の本のもののほうが

美しく輝いて見えた。

それが他の使節たちとミゲルの異なるところだった。マンショもマルチノも、そして向こうで最も語り合い、生涯の友となったジュリアンでさえ、羅馬の都のほうがはるかに美しいと断じた。ジュリアンはうっとりと目を閉じて、教皇様のあの宮殿や大広場を思い出すがいいと言った。

だがミゲルの目には、椀を伏せたような丸い石造りの天井よりも、金の瓦で葺いた聚楽第の屋根のほうが美しかった。鼻の奥が痛くなるような香に満ちた宮殿よりも、しっとりと皮膚にしみるような材木の匂いのほうが心地よかった。丸いというこの世を、裏側まで見通しているような教皇の薄い灰色の瞳よりも、なにひとつ見落とすまいと、目の前の若者たちを頭の天辺から足の先まで舐めるように見つめている秀吉の細い目のほうが、人の血が勢いよくめぐっているような気がした。

教皇はこの世のなにものもわけへだてせぬ目をしていたが、秀吉は何もかもを即座に見分ける目を持っていた。そしてミゲルたちを一目見ただけで、四人の使節のうちでミゲルだけが、この聚楽第に目をとめていることに気がついた。

目をとめているということは、聞く耳を持つということだ。

「そのほうたち、儂に仕官せぬか」

顔を上げた途端そう言われて、あのとき四人は互いの顔を見回すこともできなかった。

秀吉はまったく考えのよめぬ目を下げて、体まるごとでほほえみかけていた。耶蘇会から長崎を奪い、南蛮の宣教師を追放した、その同じ口と体で、聚楽第で生涯暮らせと四人に命じたのだった。

　ミゲルたちは目をしばたたいて、それぞれが必死で口をつぐんで首をふった。四人はちかぢか天草に建つ修練院で、修道士になる学問を続けることになっていた。

　もちろん秀吉は、四人が首を縦にふるはずがないことなど最初から分かっていたにちがいない。あっさりと仕官の話を引っ込めると、かわりに懐から浅葱(あさぎ)色の美濃紙で綴じた書物を取り出した。

　ミゲルは思わず目をそらせた。

「これを書いたのはそのほうか」

　どんな抑揚もないその声は、ただまっすぐミゲルに向けられていた。

　秀吉はミゲルをのけた三人を下がらせ、屋敷の中を好きに歩かせた。そしてそのあいだミゲルを泉池(せんち)の見える縁側にみちびいて、あれが唐門(からもん)じゃ、その先が飛雲閣(ひうんかく)じゃと、一つひとつ肩を抱くようにして教えていった。

「そなた、悲しかったろう」

　と秀吉は言った。

「儂はそなたがこの国のことを、ああは思っておらぬことをよく分かっておるぞ。あれはまあ、南蛮の司祭殿の、こうあってほしいと思うあまりの先走りじゃな」

　さっき懐から取り出して見せた浅葱色の書物のことだった。

『対話録』と題されて澳門で刊行されたその手記は、日の本に帰国したミゲルが有馬家の縁者に、南蛮について語って聞かせる形になっていた。著したのは四人を南蛮へ先導した南蛮人司祭だが、手記の中で、南蛮で見聞きしたものが日の本とくらべていかに優れているかと熱を入れて語らされているのはミゲルだった。

「遠い異国のことでございますのに、関白様はよくご存知であられます」

　ミゲルはつい俯いた。

　あの書物は司祭が臥亜(ゴア)にいる時分から書いていた。南蛮のすばらしさを大声で唱えるあまり、ミゲルの目を通した日の本が見る影もないつまらない国だと書き記されている。もちろんミゲルは言ったこともないし、思ったこともないのである。

　秀吉は辺りの百姓と変わらない、人の良さそうな目を下げて、ミゲルににいっと笑いかけた。

「儂はのう、みげる。海の向こうへ売り飛ばされた日の本の者どもを買い戻してやろうと思うてな、ずいぶん調べたのじゃぞ。そのときお前の書物のことも知ったのじゃ」

「申し訳ございませぬ」

　それだけ言うのが精一杯で、ミゲルは顔を隠すように身を伏せた。だが秀吉は大きく

手をふって、そのままミゲルの肩をばしんと張った。元気を出せとでも言われたようだった。

「お前のあずかり知らぬことだとは、儂はよう知っておるぞよ。それより案じられるのはそなたのここよ、ここ」

そう言って、秀吉は己の胸をどんと叩いた。

「南蛮国に行けばこそ、日の本の良さも見えようものじゃろうになあ。あれではこの国はまるで、猿の住まう暗黒の沼の国ではないか、のう」

その感慨をもらしたのはミゲルということになっている。

南蛮船の上から長崎の丘が見えたとき、ミゲルは船から飛び降りて、一散に頂上まで駆け上がりたいほどだった。この国の低くやわらかな山の線が涙でにじんだ。ミゲルの頭には母の顔も誰の顔も浮かばなかった。ただ、風をはらんで大きくふくらんだ帆ももどかしいほどに、早く湊に入りたいとだけ思った。

それなのに『対話録』の中でミゲルは、南蛮ほど美しい国はない、一方のこの国は血と争いに満ち、人は貧しく愚かだと何度も繰り返している。

「よいかのう、みげる。南蛮人には南蛮人の考えがあろう。そのすべてを真に受けることはないのじゃぞ。言いたければ言わせておけ。この日の本に生まれて、南蛮のほうがぴたあっと、その身に沿うはずがあろうかよ」

秀吉は己の両袖で己の身を抱き、ぴたあっとな、と繰り返した。ミゲルは肩に入っていた力がわずかに抜け、ほんの少し頬がゆるんだ。

「そうじゃ、そうじゃ。若い者は笑っておらねばならん。みげるのような若い者が笑って暮らせる国を作るのが、儂のような年寄りの役目じゃもの」

それから秀吉は縁側の端まで行って、そこに腰かけて童のように足をぶらぶらさせた。

恐ろしくてならないのに、ミゲルは秀吉に心をつかまれたようになっていた。その動きのどんな些細なものも、見落としたくないと思っていた。

「のう、みげる。儂だとて、そのほうら四人のうちの一人ぐらい、天主教をやめて儂の家臣になってくれぬものかと考えぬわけではないのだぞ」

「それは、ですが」

目をしばたたいた拍子に睫毛が目に入り、ミゲルは乱暴に目をこすりつけた。焦って目を開けると、天下人の秀吉はまだ消えずにミゲルの前に座っていた。

「いやいや、それは分かっておるのじゃ。ただな、みげるがそれとこれとは別じゃと申すように、儂もな、こと政（まつりごと）にかけては、他ならばせぬということもせねばならぬのよ。これが政じゃ、ということをのう」

ミゲルは座したまま、わずかに上半身を秀吉のほうへ乗りだした。どれほど秀吉に惹かれようと天主への信仰は別のものだと、どこか胸の奥で囁きかけるような声は、どん

どん小さくなっていった。

「四人が四人、揃うて修道士になられては困るのじゃ」

己の足先を見つめている秀吉は、母に怒られている童のように背を丸めていた。

「儂が四年前、伴天連追放令を出したのは存じておるであろ。にもかかわらず、儂はそのほうらをここに招いた。このような屋敷、南蛮人からすれば鼻にもかけぬつまらぬ城じゃということは分かっておるが」

「そのようなことは、決して」

ミゲルがそう言うと、ふとこちらを見返した秀吉が、母に褒められた童のように嬉しそうな顔になった。

「うんうん、儂はな、もとは百姓じゃったでな。百姓が一代で造るにはこれが限度じゃわ。南蛮人の自慢するような荘厳な城をこの国にも造ってやりたいが、それは儂一人では無理というものでな」

ミゲルは力をこめて首をふった。

「じゃが、いくら元は百姓じゃというても、今はこの国の関白なのじゃ。儂が軽く見られるということは、この国が軽んぜられるということであろ」

ほうっとため息をついて、秀吉はまた肩を丸めた。

「関白の儂がじきじきに家臣になってくれと乞うて、四人に揃うて断られたとあっては、関白が南蛮の天主に屈したことになろう?」

「まさか、そのようなことには」

だが秀吉はふるふると首をふった。するとまた元の叱られた童に戻ったように見えてくる。

「南蛮にまで行ったそのほうらが、百姓あがりの儂の家臣にならぬことくらい分かっておったがのう。そこはほれ、儂としても言うてみぬわけにはいかぬであろう?」

「関白様、私たちは何も」

「いやいや、分かっておるとも。ただのう、そなたらは儂ではなく南蛮の神を選んだだけのつもりでも、人はそなたらがこの国を捨て、南蛮の国を取ったと思うのじゃ。それが政というものでな。なに、儂は、いくら天下人でもしょせんは百姓あがりよと言われるのには慣れておるがの」

政というのが何を指すのか、ミゲルにはよく分からなかった。ただ秀吉という天下人がどことなく弱く守ってやらねばならぬ年寄りのようにも見え、だがその細い目がかつて誰の顔にも見たことのないほど光っても見えた。

ミゲルは息が苦しかった。はっきりと答えようとすればするほど、声が小さくなっていった。

「私たちは……、この世のだれを取るのでも取らぬのでもありませぬ。ただ、司祭とな

るためには、これから何年も学問をせねばなりませぬゆえ、仕官は……」

「そうじゃなあ。これればかりは儂が諦めねばならぬわい」

さっぱりした顔つきで秀吉は腿（もも）に手をつき、よいっと声をかけて縁側から立ち上がった。

「のう、みげる。四人みなとは言わぬ。そなただけでよいのじゃ、天主教を棄ててくれぬか」

刹那、大きく目を見開いて、ミゲルはただぼんやりと秀吉を見返した。よりにもよって南蛮を訪ねた使節が棄教とは、ありえないことではないか。

「棄教で……、ございますか」

「そうじゃのう、どだい無理な話じゃの。そなたは八年も南蛮へ行っておったのじゃからのう」

秀吉の目を見ていると、ミゲルはうなずくことも首を振ることもできなかった。

秀吉はふうっと大きなため息をついた。

「儂も半生、天下取りに忙しゅうしてきた身じゃでなあ。それは八年どころではないぞよ」

ミゲルが目をしばたたくと、秀吉はいたずらでも仕掛けるような顔をして、それからぷるぷるっと首をふって見せた。

「よし。儂はみげるが気に入った。政じゃというて、いい齢をして若い者を苦しめとうはないわ。みげるにだけは正直に話すゆえ、他言は無用ぞ」

ミゲルは首をかしげかけて、急いでその首を縦に、頷いた。

「天正十五年（一五八七）に儂が出した伴天連追放令じゃがな。あれはまあ長崎が南蛮人に寄進されておった一件でつい、こう、頭に血がのぼっての。実は本気ではないのじゃ」

「それは……」

「まあ聞け。ここからが政でな」

「政……」

秀吉は目をさらに細めてほほえんだ。目の玉など頬に埋まって見えないのに、それはたしかに何もかも見透かすような強い光を放っていた。

「関白ともあろう者が、いったん出した禁令を改めることができるわけがなかろうて。それゆえな、正面から禁令にさからう者がおれば仕置をせねばならんわい。しかし儂は百姓の出じゃで、むやみな殺生は好かん好かん。じゃでなあ、みげる。こう、儂のここをそっと汲んでのう」

と秀吉は己の胸を撫でた。

「正面きって禁令にさからうようなことは止めてもらいたいのじゃ。仕置はされる者も

辛かろうが、する側も辛いのじゃぞ」

秀吉の顔は真実、苦しそうにゆがんで見えた。

「儂はこれほどみげるが愛おしいに、伴天連じゃというてこの国から追放せねばならぬことになってみよ。ああ儂は、つくづく関白などになるのではなかったわ」

「そのような、関白様」

ミゲルはひたすら首を振りながら頭を下げた。

「分かってくれるかのう」

ただただミゲルはうなずいた。もう己が何にうなずいているのかも分からなくなっていた。

「ああ、かたじけないことじゃ。良かった良かった、さあ、遅うなったの、聚楽第を案内いたす」

そうして秀吉はミゲルの手を取ると、優しく引いて立たせた。驚くほど厚くあたたかい手のひらだった。

「これも政じゃでなあ、みげる。儂はやはり、そのほうらの一人くらいは棄教してくれぬものかと思い続けるであろうのう」

秀吉がそう言ったとき、ミゲルはこの人のよい男が天下人だということも、天下を掌中におさめるためには何でもするのだということも、ちらりとも頭をかすめなかった。

ただ秀吉のために、心の中で祈りを唱えつづけていた。

京から戻った使節の一行はそのまま天草に建てられた学林に入ることになった。学林というのは南蛮人たちがコレジヨと呼ぶ学問所で、大きく三等に分けられた南蛮の学問所のうち最難関のものだった。ここですべての学問を修めれば、南蛮人でなくても天主教の修道士になることができた。

ミゲルたちは幼い時分、セミナリヨと呼ばれる南蛮の手習い所で童向けの学問を習い、次にノビシャドという修練院へ進んだところで南蛮への使節に選ばれた。そこでは南蛮の言葉のほかに信仰の教理を修め、四人揃っていずれは天主教の修道士になることを望んでいた。生涯、信仰をつらぬき、妻を持たないことが課せられた。

南蛮に渡ったミゲルたちは彼の地でさまざまなものを見たが、初めて見たものの一つが修道女だった。顔のほか全てを布で包み、ほとんど声を発することもなく、やはり夫はいなかった。

長崎へ帰り着いたとき、使節を出迎えた伊奈姫がなにより熱心にたずねたのが修道女の暮らしぶりだった。従姉弟どうし、幼いときから共に育ってきたミゲルは、伊奈姫が修道女になりたがっていることをよく知っていた。

男に生まれて修道士になりたかった、だが男はいくさに行かねばならぬから厭だというのが伊奈姫の口癖だった。腕組をして、女子にも抜け道がないものかと探していた幼い愛らしい横顔が、今もミゲルのまぶたにはっきりと焼きついている。もちろん戦国の世に藩主の姫に生まれて政略のために嫁ぐ以外の途がないことは、まだ十にも満たなかった伊奈姫にもミゲルにもよく分かっていた。

そしてミゲルが戻って来たとき、やはり伊奈姫は嫁していた。相手は大村家の家老をつとめる朝長家の嫡男で、伊奈姫の父純忠がたった七騎で大村を守った折、ともに籠城して戦いぬいた腹心の家臣だった。

この肥前大村という土地は石高は二万を越えているが、一門十五家がそれぞれ千石ほどを領し、藩主喜前の直轄地はわずか五千石ほどという成り立ちだった。一門の盟主が喜前というだけで、各地にそれぞれ小さな城主がいるようなもので、喜前にとって朝長家は何よりも重んじなければならない相手だったのだ。

伊奈姫は西彼杵半島の琴海に領地を与えられ、そこで夫の大学頭とともに切支丹をあつく保護していた。大学頭も切支丹だから、秀吉の伴天連追放令が出されたときは、伊奈姫が修道士たちを城下にかくまうのを手伝った。

大学頭に守られて切支丹の道を歩みつづけている伊奈姫は、ミゲルが南蛮へ旅立ったときよりも力強く頭を上げ、これから先、何があろうと己の信仰をなくさない強い女子

になっていた。子にも恵まれたという伊奈姫はしあわせそうだった。

黒い真珠のように美しい瞳を輝かせて、南蛮という国はどのように美しいのでしょうと何度も尋ねられて、この日の本のほうがよほど美しいとはミゲルにはとても言えなかった。あのとき出迎えてくれた伊奈姫には、ひたすら南蛮の文物ばかりを話して聞かせたものだった。

そしてミゲルが気にかけるもう一人がたまだった。

たまは母のおさきとともに長崎を引き払い、この学林の世話をするために天草に移ってきていた。たまはもう十七だというのにいっこうに嫁に行こうとせず、おさきに言われるまま、学林の飯炊きやら洗濯やらを忙しくやっている。

学林は他にも端仕(はした)事の女子たちを置いているが、やはりどれも夫を亡くして幼い子を抱えた者たちだった。天主教の手習い所に通っていた童女たちも暮らしのあいまに手伝いはするが、数年も経たないうちに次から次へと片づいていった。たまのように母子そろって天主堂に住んでいる者は他にはおらず、たまが男であれば今ごろは、学林とはいわないまでも修練所くらいには入っていたはずだった。天主堂では十七になったたまを扱いかねて、どこへなりと嫁におさまれと言い始めていた。

つい一月ばかり前、たまは修道士になりたいと言い出した。お前は一体いつまでここにいるつもりかと南蛮人に聞かれて、たまはそう答えたという。

南蛮人があわてて、それを言うなら修道女だと言葉を直したので、たまは大喜びになった。

ああ良かった。やはり天主様にお仕えする女子がいるのでございますね。私はそのような者になりたいのでございます——

だがたまが声を弾ませたのもそこまでで、南蛮に行かなければ修道女にはなれぬとたまは言われた。

「たま！」

堪（たま）らなくなってミゲルはたまを呼んだ。たまが坂道の下でミゲルを探していた。

たまが困ったように辺りを見まわしているのを見て、ミゲルのほうが坂を下りていった。

「みげる様、長崎に今年の南蛮船が入ったそうにございます。葡萄牙（ぽるとがる）からの大切な文を携えてまいったそうにございますよ」

たまはきっと文の用件をもう聞いている。わがことのように喜んで、早く学林へ戻れと言うのは、己が告げるのは出すぎたことと思っているのだ。

「皆様、みげる様をお待ちでございますよ」

「ああ。ついに我らを耶蘇会の会士にしてくださるという報せだな」

ちらりと横を見ると、たまは頬を赤くして嬉しそうにほほえんでいる。まるで口から

こぼれそうになる祝いの文句を懸命にこらえているかのようだ。

「……たまも耶蘇会に入れるとよいのにな」

「みげる様、たまは心底、修道女になりたかったわけではありませんから」

胸を押し返すような強い風が吹きぬけて、一瞬ミゲルは立ち止まった。

「ああでも言わねば、たまは学林を追い出されてしまいます。それゆえ申しただけでございます」

たまは顔にかかった髪を耳にかけながら微笑んだ。

「たまはいつまでもこの学林に置いていただけたらそれで十分でございます。たまはみげる様を通してしか、天主様のお姿が見えぬのですから」

ミゲルはたまを振り返った。

「たまは私を通せば天主様が見えるのか」

「はい。はっきりと」

「どうして」

するとたまは驚いたように目を見開いて、それからくすくすと笑い出した。

「それはみげる様がしっかりと天主様をごらんになっているからなのではありませんか」

「私が、見ているから……」

南蛮船に乗っている時分ならそうだった。ミゲルは四人の使節のうち誰よりもはっきりと天主の姿を見ることができた。

だがこの国に帰り着いてから見えなくなった。それを打ち明けているのは、ミゲルがいつも真実を話すことができるジュリアンだけだった。

たまはきょとんとした顔でミゲルを見返していた。

「私のほうこそ、たまが居てくれると天主様のお姿を見ることができるようだ」

つまらぬ物思いなどやめよう、とミゲルは両手をあげて大きく伸びをした。

「そうだ、たま。ずっとお前に教えてやろうと思っていたのだ。真珠のことを南蛮で何と言うと思う」

「真珠を？」

たまは首にかけた巾着を着物の襟のあいだから取り出して、袋ごとミゲルのほうへ見せた。

「これのことでございますか」

「ああ。マルガリータというのだ」

「まるがりいた……」

ミゲルは優しく微笑んだ。

「南蛮では女子につける名だ。マルガリータという名の修道女もたくさん見たぞ」

たまは巾着に目を落とした。

「まるがりいた……、修道女の名……」

「な、たまと同じだと思わないか。たまも、真珠という意味なのだから」

「たまが、真珠？」

ミゲルは頷いて地面にしゃがんだ。そして土に真珠と書き、珠の字のほうに指でぐるぐると丸をつけた。

「この字はたまと読むだろう。だから、たまも文を書くときはこの字を書くといい」

たまの生涯で文を書くことがあるはずもなかったが、ミゲルはそう思っていた。

「修道女かどうかは外見(そとみ)だけのことだろう。たまは修道女にはなれないけれど、己の心の中では修道女でいるといい」

ミゲルはどこか己に言い聞かせるような心持ちになっていた。耶蘇会士にはなれたものの、日本人は修道士にも司祭にもしないという噂がミゲルたちの耳に届きはじめていた。

二

冬の海をまっすぐ切るように進んだ船は、ゆれる炎に吸いよせられるように湊に入っ

た。

　灯りを振っていたのは伊奈姫だった。

「皆様、ご無事ですか」

　五年ぶりに聞いた声は昔と少しも変わらなかった。

　暗くてほとんど何も見えないが、みげるたちは夜目でもきくように音をたてずに船から下りてゆく。最後に下りたたまに手燭をかざしたとき、伊奈姫のこわばった顔がくっきりと闇に浮かび上がった。

「ああ、たまも来てくれたのですね。大丈夫かしら」

「マリータ様こそ大丈夫ですか。あなた様は必ず行かれると思っておりましたが」

　かわりに応えたのはみげるだった。

　みげるに伊奈姫は頷いた。

「よく存じ上げている御方なのです。京へ行かれる前も城へ立ち寄ってくださいました」

「……それならば尚のこと、マリータ様はお止めになったほうがよいのではありませぬか」

「私は平気です。鑑を読んでおりますから」

「鑑？」

「その話はいずれまた。さあ、こちらへ」

　伊奈姫はみげるの手を取り、二人の足下へ手燭を照らした。

　今日、長崎の西坂で切支丹が磔けられることになっていた。天草の学林へ伊奈姫から報せが届いたのは十日前で、伊奈姫はそれとともに船を仕立ててみげるたちを呼び寄せた。だが海が荒れてなかなか船が出せず、今朝ようやくみげるたちは海を渡って来たのである。天草から来たのはみげるとたまと、じゅりあんだった。

「一体なぜこのようなことになったのか。太閤様はミゲルに、あの追放令は決して本心ではないとおっしゃったというのに」

　じゅりあんはみげるの横へ行き、肘をさしだした。このところみげるは足に腫れ物ができて、小さな石にもつまずくことが多かった。みげるが歩くときは常にじゅりあんが杖の役目をしていた。

「やはり二月前の土佐の一件が？」

　みげるが尋ねると伊奈姫は、おそらくはと、ささやくように応えた。

　この十月、さん・ふぇりいぺという西班牙の船が土佐に漂着し、秀吉が積み荷を没収して水主を牢に入れるという事件が起きていた。遠い航海に出る南蛮船の常で、さん・ふぇりいぺに修道士が乗っていたことが伴天連追放令を出した秀吉の逆鱗にふれたのだと大村には伝えられていた。だが事はいつの間にか、漂着した南蛮船から離れて秀吉の

いる京大坂へ移り、その地で修道士たちの捕縛ということになった。

「真偽のほどは分かりませぬが、さん・ふぇりいぺの船長が太閤様のお使者に大きな絵図を広げて見せたそうにございます。そこには芥子粒のような日の本と、大男の手のひらのような巨大な西班牙国が描かれていて、われらに何かしようものなら大西班牙国が黙っておるまいと吠えたのだとか」

ずいぶん愚かな物言いをしたものです、と伊奈姫はつぶやいた。

「ですが、それで修道士を磔けるとは太閤様もあまりでございましょう。台風でやむなく土佐に流れ着いた、か弱き者たちですのに」

伊奈姫の足はしぜんと早くなり、みげるは伊奈姫とその供たちに遅れまいと懸命に歩いていた。

横からじゅりあんが重い口を開いた。

「これが太閤様のなさる政なのでしょうか。太閤様は迫害者になられるおつもりか」

「そうとばかりは……。大坂では兄弟会が物怖じもせず、辻で堂々と説教をしていたそうでございますから」

兄弟会というのは修道会のひとつだった。みげるたちが属しているのは耶蘇会で、後からこの国に入って来た修道会に説教会や兄弟会などがあった。

「太閤様は見つけるたびに追い払っておられたそうですが、箒で落ち葉を掃くようなやり方をなさっていたために、いっこうに止まなかったのです。きっと太閤様はみげる殿におっしゃった通り、本心ではお目こぼしなさりたかったのですわ」

「同じ天主教でも、耶蘇会と他の会では伝道の仕方がずいぶん異なりますからな。この国では兄弟会のやり方は通用せぬのだ」

じゅりあんが低い声で言ったのへ、伊奈姫は静かにうなずいた。

「ですがここまで進んでしまえば引き返せぬのが政の恐ろしさでございます。京では帝が三十年も前に南蛮人の立ち入りはならぬと仰せ出されましたのに、京で捕縛されたとなれば申し開きのしようがありませぬ。見逃したとあっては、太閤様ご自身が帝にお申し開きなされますまい」

「しかし大坂にいた者たちまでもお仕置になるとは」

「それほどお怒りだということでございましょう」

伊奈姫はあっさりと言った。同感だというように頷いたじゅりあんの横で、みげるはまだ何か言い足りないようすだった。

さん・ふぇりいぺ号の漂着をきっかけに京大坂で捕縛された修道士たちは二十四人にのぼるという。多くは京で伝道していた兄弟会の修道士たちだが、どういうわけか大坂にいた耶蘇会士が三人含まれていた。

「なぜ西坂でお仕置をなさるのでしょうな」

「決まっています。確実に南蛮へ伝わるからですわ」
「ですが仕置を見に行ってはならぬとお達が出たのではないのですか」
「そんなものは表むきです。これから行ってごらんになればお分かりになります。竹矢来で囲んで役人も立っておりますが、人が群れるのを少しも厭うておりませぬ。太閤様という御方は民の心をよくご存知です。二十六人ものお仕置があると聞いて、民が集わぬはずがありませぬ。噂はまたたく間に南蛮船に乗りましょう」
「二十六人？」
みげるが聞き返したとき、伊奈姫は唇をかむようにした。
「京からの道中、一行の世話をつとめてまいった者が、自らお仕置を願い出たそうでございます。今日これから磔けられるのは二十六人です。……十二の幼子もいるのですよ」
じゅりあんが苦しげに首をふり、胸の前で十字を切った。
「十二歳ということは、天主堂で侍者でもしておりましたか」
みげるが尋ねた。侍者とは祭礼などで司祭の手伝いをする幼い切支丹だ。みげるもじゅりあんも、その齢の時分はよく侍者をしていた。もしもこれが十五年ほど前に島原の天主堂辺りで起こったことなら、捕らえられていたのはみげるたちだったかもしれない。
「京の天主堂だそうですわ。捕吏が、お前は幼いゆえ立ち去れと言ったのを、すすんで

縛についたとか」
伊奈姫はそっと涙をぬぐった。
「兄弟会は京に天主堂を置いていたばかりでなく、そのような幼子に堂々と手伝いをさせていたのですか」
じゅりあんが厳しい声で言ったので、みげるが困惑したようにそちらを向いた。
伊奈姫もふと足を止めかけて、思い直したようにそのまま歩き続けた。
「私ども、ただの切支丹にとっては兄弟会も耶蘇会もございませぬ。ですのに修道士様方はつねに争うておられるのですね。弟に聞きましたが、兄弟会が京であのように説いてまわっているのは、この日の本に辿りついたのが耶蘇会より遅かったゆえ……、耶蘇会に追いつけ追い越せと、張り合うておられる由とうけたまわりました。まさかまこととは思われませぬが」
弟というのは現大村藩主、喜前公のことだ。秀吉の九州征伐で所領を安堵され、天領にされた長崎以外の大村一円を治めている。
伊奈姫はぐるりとみげるとじゅりあんを見まわして、最後にたまで目を止めて、案ずるなというように微笑みかけた。
みげるは己の足が悪いぶん、遅くならぬようにと前のめりになって先頭を歩き、そのせいでかなりの早足だった。伊奈姫はそのみげるの前を歩かねばならないので、脚絆の

足をばさばさと音をたてるほどに踏み出している。

「お待ちを、伊奈姫様」

暗がりの中、ふいに太い声がした。

伊奈姫と、みげるやじゅりあんが一斉に足を止めた。

五人ばかりの侍がたまの後ろに立っており、伊奈姫のほうへ揃って頭を下げた。

「殿の使いで参りました。皆様にはひとまず上郷の館（たて）にお入りいただくようにとのことでございます」

「喜前殿が」

「はい。捕吏（ほり）がいつ新たな捕り方にかわるか分からぬゆえ、ろざりおを置いてゆかれるようにとのことでございます」

伊奈姫をはじめ、誰もが各々のろざりおを握りしめた。ろざりおという天主教の十字架のついた数珠は、首にかける者もあれば懐にしのばせている者もある。

「これから西坂に参るのに、ろざりおなしでは」

「殿がお待ちでございます」

有無を言わせぬ声音に、みげるたちは顔を見合わせた。大村の三城にいるはずの喜前公が真実このようなところまで来ているのだろうか。

「ですが、急がねば」

伊奈姫が前を向きかけたとき、

「まりた様」

と使者の一人が洗礼名で呼びかけた。

「私どもも皆、切支丹なのでございます。お仕置までにはまだ十分に時がございます。どうぞ足をすすがれるだけでも、館へお立ち寄りくだされませ」

上郷の館から見る夕日は、涙の粒が海に落ちるようににじんで消えた。天草なら夕日が落ちればすぐに暗くなるのに、その日はまるで昼が始まったように闇がおとずれなかった。

昼間のように明るい中を、喜前公たちは帰って行った。

「たま。お前も座敷へいらっしゃい」

縁側の柱にもたれるようにして伊奈姫がたまを呼んだ。

喜前公が館を出るときは袖で涙をかくしていた伊奈姫の目はもう乾いていた。たまは喜前公を初めて間近で見たが、さすがに伊奈姫の弟だけあって美しい人だった。みげると三人で並んでいると、面差しの似た顔が三つだった。

「まりた様、私は皆様のご用意がありますので」

伊奈姫は柱の陰で小さく首をふった。

「お前たちは夜のあいだに帰ってしまうのでしょう。私のことは館の者にまかせておけばよいのです。たまはわざわざ今日のお仕置のために冬の荒海を来てくれたのです。天草に戻ればこのような機会もないでしょう。今日はゆっくり、みげる殿とじゅりあん様のお話を聞かせていただきましょう」

「でも……」

すると伊奈姫はにっこりと微笑んだ。

「たまはまるたのようだと、みげる殿が申しておられたけれど本当ですね」

「みげる様が？」

「ええ。たまは、まるたのたとえ話は知っていて？」

たまは不躾（ぶしつけ）なほど伊奈姫をまっすぐ見てうなずいた。

天主の子が皆に説法を始めたとき、まるたという女子は皆の夕餉（ゆうげ）を調えるのに忙しく働いた。そのとき妹のまりあは姉を手伝いもせずに、じっと天主の子のそばに座って説法を聞いていた。たしか、人は妹のまりあのようにならねばならないというたとえ話だった。いいや、逆だっただろうか。

伊奈姫はくすくす笑ってたまを手まねきした。

「たまは働きすぎだということですよ。ね、今日はもうよして、こちらへいらっしゃい。

今日は……、特別な日なのですから」

この世のものとも思われない美しい顔でほほえまれて、たまは熱に浮かされたように草履を脱いだ。そしてそのまま伊奈姫の後について縁側を歩いて行った。

伊奈姫が障子を開けると、座敷にみげるとじゅりあんが座っていた。二人の正面の、喜前公の居たらしい上座に空の座布団と脇息（きょうそく）がそのまま置かれてあった。

「みげる殿がとつぜん、西坂へ参らぬと申されたときは驚きました」

軽い足取りで座敷を横切りながら、伊奈姫は歌でも歌うように言った。たまは仰天したが、みげるもじゅりあんも黙って前を向いたままだった。

「たま、お前はそこにお座り」

伊奈姫は障子の脇の空いたところを指した。そして自らはその向かいに座り、左手になる空の座布団のほうへちらりと目をやった。

「喜前殿はお止めになるような気がしておりましたけれど」

たまは三人の顔を順に見て、ただ目をしばたたいていた。

伊奈姫たちがこの上郷の館に着き、座敷に入ったとき、外ではあわただしく門が閉ざされた。何が起こったのかとぼんやり立っているたまの目の前で、ここまで導いてきた侍たちが水ももらさぬようすで、ずらりと縁側に座ったのだ。

座敷の中の声は聞こえなかったが、ついにそのまま中からは誰も出て来ず、きっとも

う西坂の仕置は終わったろうと思う時分に喜前公が帰って行った。

　この館にいた者は誰一人、仕置を見に行かなかった。みげるもじゅりあんも、伊奈姫も喜前公も、そして切支丹だと言った家士たちも、ずっと物音一つたてなかった。

「せめてこの世にとどまる者は、刑場で祈ってさしあげるべきだったのではありませんか」

「喜前公のおおせになった通り、捕吏どもは次の切支丹を探すのが狙いだったのかもしれませぬ。ならばマリータ様を行かせるわけにはまいりませぬ」

　みげるは空の上座をにらんだまま答えた。

「私が館を出してもらえずとも、みげる様たちだけならば、弟も行かせたとは思われませぬか」

　じゅりあんが眉根を寄せてうなずいた。どうやらみげるだけが喜前公に同調して伊奈姫を止めたらしかった。

「弟が私達を止めたわけは分かります。太閤様をはばかって、それこそ政というものでございます。ですが弟は、万が一みげる様たちが西坂へ参られ、それでお二方が捕らわれるようなことになれば、どんなことをしてもお二方を守ります」

「そのようなことは、よう分かっております」

「ならば、なぜ行って、祈ってくださらなかったのです。十二の子が磔けられるのですよ。祈りで力をさずけてやらねば、乗り越えられぬではありませんか」

　言葉は烈（はげ）しくても伊奈姫の声はおだやかだった。じゅりあんは前をにらんで腕を組みつづけていたが、みげるは少し頭をうつむけた。

「祈りはどこにいてもできましょう」

「切支丹が集うて禅問答ですの」

「ふざけておるのではござりませぬ。あとの二人が参らなかったのもそれゆえでございます」

　使節として南蛮へ行ったみげるとじゅりあん以外の、まんしょとまるちのである。四人は聚楽第から帰ったのちも天草の学林で学問をつづけているが、今日は来なかった。

「刑場へ参らずとも、今日の二十六人のさまははっきりとまぶたに浮かびます。見ずともよいのです」

　そのときじゅりあんがはっきりと頷いた。小さく、さようにございます、とつぶやいた。

「もしも私たちが西坂へ参ったら……、マリータ様だけ行くことが叶わなければ、マリータ様は後から、どのような有様であったと熱心におたずねになるのではありませんか」

「もちろんです。これこそ、まるちりよの道なのでございますから」

「まるちりよ？」
たまはぽかんとして思わず口をはさんでしまった。だが誰もそれには答えてくれなかった。
みげるが口元を引きつらせて笑いを浮かべた。
「マルチリヨの道……。他にもあるそうでございますね。マルチリヨの鑑（かがみ）、マルチリヨの心得……」
いよいよ分からなかった。目をしばたたいて伊奈姫を見、みげるを見、じゅりあんを見たとき、じゅりあんがうなずいてくれた。
「マルチリヨとは殉教ということだ。殉教する際の心構えのたぐいを説いておる書物だ」
「マリータ様。ふところに入れておられるのでございましょう」
今度は伊奈姫が目をしばたたいた。
「たしかに入れておりますけれど、それがどうかしたのですか」
みげるとじゅりあんは頷きあった。
「そのようなものを読んでどうなさるのでございます」
「どうと申されても……。切支丹の教えの書でございましょう」
「ばかなことを申されるものではありませぬ。殉教など、本来あってはならぬのです」

「ですがこれからの世は」
「さようにございます。これからのこの国の切支丹は、南蛮に生まれておれば関わらずにすむ苦しみを味わわねばならぬのです。なぜ日の本の切支丹ばかりがそのような目にあわねばならぬのです」
伊奈姫は薄く唇を開いた。
「それが天主様の御意志だからではありませんの」
童女がたずねるような目で二人に問いかけた。
「殉教はわれら修道士の役目でございます」
じゅりあんの強い言葉に、みげるもうなずいた。
「マリータ様が殉教などなされば喜前公はどうなります。ましてや大学頭様、長太郎様は」
伊奈姫の夫と、五歳になったばかりの嫡男だ。
そのとき伊奈姫ははっとして二人を見返した。
「もしや、それでお二方は今日、行かれなかったのでございますか」
「……私は、ミゲルがそう考えているだろうと思いましたゆえ抗（あらが）いませんでした」
じゅりあんが確かめるようにみげるのほうを向くと、みげるは眉根をよせて目を閉じた。

「マリータ様のように殉教を是としておられる御方が、今日の西坂のありさまなどをごらんあそばせばどうなります。そしてマリータ様のような御方が、この上もなく清らかで美しい最期を遂げられたら、後にどれだけの者が続きましょうか。今、辻でかざぐるまを吹いておるような童女が、生い立って磔けられて死ぬ道を選ぶようなことになれば、どうなさいます」

たまはそっとまぶたを閉じてみた。母の背に負われて、かざぐるまが回るのを澄んだ目で見つめている赤児が、その同じ目で伊奈姫が刑場へ曳かれていくのを見守っている。畦(あぜ)で花をつみ、こんなにきれいなものを見つけたと母にほほえんで見せる子が、それと同じ顔つきで天をあおいで磔けられる。そんなことを天主がお望みになるだろうか。

「私がまるちりよの道を歩んでも、天主様はお喜びにはならぬのですか」

「一人でも多くの者が己の生涯を全うして天の国へまいることこそ、天主様の望んでおられる道でございます」

じゅりあんの言葉に、みげるが続けた。

「マリータ様にはマリータ様の道があるはずでございます。人は生涯かけて、その道を探さねばなりませぬ」

「生涯をかけて……。どんな世になろうとも？」

みげるとじゅりあんは頷いて目を閉じた。

「では私は……、たまと競い合うて励まねばなりませんね。だって私とたまは、みげる殿やじゅりあん様とちがって己の道をまだ見つけていないのですもの。ねえ、たま」

急に名を呼ばれたので、たまは、へでも、はでもない妙な声を出してしまった。それがあまりに頓狂だったのであわてて頭を下げて、伊奈姫たちにひとしきり笑われた。

外はようやく暗くなり始めていた。

みげる達が門を出たとき、たまは伊奈姫に呼び止められた。

「たま、あの方をお願いしますね」

伊奈姫の目はみげるの背を追っていた。

「あの方はずいぶん煩いをかかえておられるようですから、力になってあげてください」

「みげる様が？」

「ええ。足もお悪いご様子ですし。私がおそばでお手伝いできればよいのですが」

みげるはじゅりあんの肘にすがって歩きはじめていた。人と歩くとなると遅れるまいと思うものだから、みげるはいつも早足で、たまはみげるが足をいためていることをそれほど深く考えたことはなかった。

「足ばかりでなく手も、しびれて動かせぬときがあるそうです」

館に入るまでも始終、肘をさすっておられたでしょう、と伊奈姫はうるんだ目でほほ

えんだ。たまはずっとみげるといるのに、そんな仕草に気づいたことはなかった。
「まりた様、かしこまりました。私、一所懸命お世話をいたします」
「ええ。頼みましたよ」
伊奈姫はたまの手を力強くにぎりしめた。手のひらが溶けてしまいそうに柔らかくて温かくて、およそたまが触れたことのない手ざわりだった。日暮れの闇の中で伊奈姫の手だけが光を放ったように白く浮かび、たまは目を離すことができなかった。
「さあ行って、たま。また会いましょうね」
たまは呆けたように頷いただけだった。
伊奈姫に背を向けて走り出したとき、みげるがじゅりあんの肩にもたれるようにして振り返っていた。
みげるの目は遅れて駆け出したたまを待っているのではなく、ただ伊奈姫を見つめていた。
たまが伊奈姫を振り返ると、伊奈姫もじっとみげるを見ていた。そして思い切るように深々と頭を下げた。
たまは前を向いて駆け出した。そして追いついたら聞いてみようと思っていた。
みげる様は殉教なさるのですか。みげる様のお役目とは殉教なさることなのですか。みげる様はそのために南蛮国へ行かれたのですか――

短い休みを告げる昼の鐘が鳴り、ミゲルは坂道を上っていった。
天草にあった学林が長崎に移ってきたのは一昨年のことだった。新しい学林は湊のそばに建ち、門から続く一本道を上がると、高台になった草原に出る。そこに行けば長崎の町を見はるかすことができるので、ミゲルはそこまで行って、ぼんやりと町や海を眺めるのが好きだった。足がしびれるといっても、まだそれくらいなら一人で上ることができる。いつも杖のように寄り添ってくれるジュリアンと離れているのは、ミゲルが海を見に行くそのときくらいのものだった。
「ミゲル」
後ろからジュリアンの声がして、ミゲルが振り返るより先にジュリアンが横に並んだ。
「また上へ行くのか。私も行っていいか」
そう言ったときにはジュリアンはもうミゲルに肘をさしだしていた。
「海を見に行くなら声をかけてくれればいいのに。それとも一人になりたかったかい」
「いや。ジュリアンはラテン語をさらっていたようだったから」
「うん、持ってきた」
ジュリアンはもう一方の手にある矢立と書物を軽くふって見せた。

「私はどうもラテン語が上手くならないな。ミゲルのように耳が良ければ、せめて司祭様の言葉を聞きもらさぬのだが」

屈託のない顔でジュリアンはほほえんだ。

南蛮から帰って約十年が経ち、四人の道は少しずつ分かれはじめていた。三十歳になり、四人は一人前の修道士として伝道をつづけながら学林で学んでいるのだが、それぞれに得手、不得手ができていた。

己が南蛮語をうまく書けないから余計に思うのかもしれないが、マルチノは南蛮語が本当によくできた。たった一本、どこまでも横に紐を伸ばしていくような南蛮の文字を、マルチノは筆に墨をたっぷりふくませて一気に書いていく。ミゲルのしびれた手では、くるりと輪を書くたびに墨が落ちて童の手習い帳のようになってしまうが、マルチノはそのまま手本になるような文字で、司祭の言葉を一言もらさず写していくことができた。マルチノは笑って首を振るだろうが、天主教より南蛮語自体のほうが好きなのではないかと思うほどだった。

「南蛮語の上手といえばマルチノだ。西班牙（イスパニア）語も葡萄牙（ポルトガル）語も自在に操っているし、ラテン語の読み書きは、司祭様のほうが教わっておられることもある」

ミゲルがそう言うと、ジュリアンも笑ってうなずいた。四人は互いに、だれかが褒められると己のことのように嬉しかった。

学林のあった天草は秀吉の九州征伐以降、切支丹大名の小西行長が領していたので、一時は大勢の宣教師がとどまって、のびのびと息をしていたものだった。だが秀吉が朝鮮に出兵することになって、名護屋城を造る材木を求めて役人がひんぱんに現れるようになり閉じられた。

宣教師は切支丹の百姓たちにかくまわれ、明日をもしれぬ暮らしを送っていたが、昨年秀吉が死んで、伴天連追放令は事実上かまいなしとなった。学林は長崎に移り、ミゲルたちも学問を再開することができた。

一昨年、長崎の西坂で二十六人の切支丹が仕置を受けたときからは、何もかもが大きく、良いほうへ変わっていた。

「マルチノは南蛮へ行ったとき、まだ十一だったからな。覚えているか。臥亜（ゴア）に着く時分にはもう南蛮人の船乗りと仲良くなって、背に負ぶさって帆柱の上まで行ったろう」

「覚えているとも。マルチノはまだ小さくて、南蛮人はいつも軽々と肩に載せていたものだ」

「それなのにあの高いところに上ったんだものなあ」

「危ないことをすると、司祭様にこっぴどく叱られていたな」

あの旅では四人はそれは大切にされていた。ミゲルたちは少し食がすすまないといっては医者に取り囲まれ、目にするのは美しい物ばかり、耳にするのは心地よい話ばかり

という日々を送った。つねに通詞がそばにおり、言葉の通じない寂しさやもどかしさもあまり味わわずにすんだ。

「いつか澳門へ行くことになっても、言葉に困らぬのはマルチノだけだろうな」

ジュリアンがしたり顔で腕を組み、うんうんと一人でうなずきながら言った。

「私とミゲルは苦労するだろうなあ」

「……本当に行けるのだろうか。澳門の学林へ」

「行けなければ司祭になれないのだ。行けるに決まっているだろう」

「そうだといいのだが」

するとジュリアンがミゲルをふりむいて微笑んだ。

「どうしたのだ」

「いや。ミゲルの良いところは、まわりで起こるありとあらゆることを、一度に全部考え合わせられるところだと思ったのだ」

思わずミゲルはジュリアンの顔を見返した。考えすぎだとか、悪いほうにばかり考えると言われても仕方のないところを、ジュリアンこそ良いほうに考えてくれる。

凪いだ海を見下ろすと、小さな茶色い船がちくちくと動きながらいくつも浮いていた。ここからでも一回り大きく見えるのは帆をおろした南蛮船で、これは湊にいるときは舳先を外海へ向けたり陸へ向けたり、まるでこの長崎の海になじんだ飾りのようにのんび

りと波を楽しんでいるように見える。

二人は草原にならんで腰をおろしたが、ジュリアンはまったく書物を開く気はないようだった。

「マンショはしっかりしているからねえ。彼を見ていると、マリタ様を思い出すよ」

「マリータ様を？」

ジュリアンはうなずいて、伊奈姫のいる長崎の向こう、琴海町のほうへ目をやった。

「マンショはなんでも揃っているだろう。そりゃあ南蛮語はマルチノのようにはできない。顔だってミゲルのほうが美しいよ。だが整った顔立ちをしているし、大友宗麟公の血筋だろう。楽器も上手に奏でるし、どんな学問もよくできる。一度ラテン語を教えてもらったことがあるが、マルチノに教わるより分かりやすかったな」

悪口になると思ったのか、ジュリアンは笑いながら胸の前で小さく十字を切った。

「ねえ、ミゲル。人に教えるというのも、司祭にとっては大切な能力だと思わないか。マンショはだれからも親しまれるし」

「ああ。四人の中で司祭に最もむいているとすればマンショだろうな」

「そうだよ」

二人は明るく話していたが、すぐにどちらからともなく真顔に戻った。互いに相手の考えていることが手に取るように分かる。

「マンショのような者にだけは殉教させてはならないよ」

ミゲルはジュリアンにうなずいた。

海からの風が辺りの下草をそよがせていく。風が一つ抜ければ、たとえそれが弱くても巻き上げられてしまう葉はある。強ければ幾枚と舞い上がり、どこへ落ちるかもわからない。なぶられて、飛ばされて泥の中に落ちるのは風のせいだ。

「ジュリアンは……、また殉教者の出る世になると思うのか」

「ミゲルは思わないか？」

ジュリアンは澄んだ目でミゲルをのぞきこんでいた。

ジュリアンの良いところは、ミゲルには思いも及ばない遠い先をつねに見すえて、それでも強く明るいところだ。ミゲルが今このときの周囲を広く見渡すとすれば、ジュリアンはこれから先のことを遠く見通している。

「太閤様のお世継ぎの御拾様（おひろいさま）はまだ六歳だからな。大きくなられたら天主教を禁制になさるかもしれないよ」

「その前に、いくさにならねばよいが」

「そうか。いくさとは、私は思いもしなかったなあ」

ジュリアンはおどけて両手を後ろにつき、背を反らせた。

こんなふうに何でも笑い飛ばすことができるのがジュリアンだった。くよくよしてい

るところは見たことがないし、きっとこれからも見ることはないだろう。この世のどんなものもジュリアンを暗く沈ませることはないとミゲルは思う。

「なあ、ジュリアン。私たちは司祭になれるのだろうか」

天主に仕える修道士たちを束ね、切支丹のみならず修道士たちにも祭礼をさずける役目だ。南蛮人の修道士すら指図して、ときには新しい国へ伝道に渡る。洗礼を受けて切支丹となり、耶蘇会士に加えられても道はまだほんの数歩しか来ていない。会士となり、誓願をたてて修道士にまではなったが、司祭になるのはまだまだ先のことだ。

とくにザビエル司祭の流れをくむ耶蘇会では、よほどのことでなければ司祭には任じなかった。新しい国への宣教をなによりの使命と考えている修道会だから、天主教を全く知らない人々の手本となれるように、ありとあらゆる面で秀でていなければ司祭にはしないのである。

「日本人の司祭はまだ一人もいないからな。でもきっとなれるよ。私たちはこの目で南蛮を見ることだってできたのだから」

「南蛮人でないのに、司祭になれると思うか」

「なれるとも。司祭にしてくださるのは天主様だ。天主様の前では日本人も南蛮人もない」

耶蘇会の本国で日本人を司祭にするつもりがないといわれているのは、どうやら真実

らしかった。耶蘇会士に迎えられて八年、修道士となって六年、これほど長いあいだ学林にとどめ置かれているのもミゲルたち四人だけだった。

「私たちは一体いつまで学林に居ればいいのだろう」

耶蘇会の修道士というからには伝道につとめてこそ役目が果たせるというものなのに、学林で学問をして楽器を奏でているだけでは、南蛮まで行かせてもらった恩を返すこともできない。焦っているといえばミゲルほど焦っている者もいない。体がいうことをきかず、いつまで働けるか知れたものではないからだ。

「ミゲル……。私たち三人は八代（やつしろ）へ行くことになったのだ」

「八代？」

「肥後国の天主堂だよ」

「……修道士として伝道をはじめるのか」

「ああ、そうだ……」

四人のうちでただ一人置いて行かれるということは、南蛮人司祭たちがミゲルだけは伝道につかせられないと判じたということだ。

ミゲルは黙ってジュリアンの手を取った。ジュリアンの心はよく分かっていた。

「私はミゲルのことを案じてはいないよ」

「もちろんだ。私もジュリアンのことは案じていない」

二人は静かにうなずきあった。

この眼前の凪いだ海からミゲルたちが南蛮を目指したのは十七年前のことだった。十七年が経ち、今度はミゲルだけが長崎に置いていかれるのだ。

旅立つことの許されぬ身でただ祈るということを、これからミゲルは知ることができる。旅立つ者がジュリアンたちなら、ミゲルはそれができる。

「私がどんなに喜んでいるか分かってくれるだろう」

「ああ。だからミゲルも……」

ジュリアンはそこで口をつぐんだ。だからミゲルも、本当は私がどれほどミゲルを案じているか分かるだろう――

ミゲルは左手をジュリアンの肩に置き、右手でその額に十字を切ってやった。今、ミゲルにできるのはそれだけだった。

「私は今ほど修道士になれて嬉しいと思ったことはない」

無二の友に祝福の十字をさずけることができて、これにまさる喜びはない。

「私はこれからだ」

そう言って、ジュリアンもミゲルの額に十字を切った。

「天主の平安がいつもミゲルと共にあるように」

「また、ジュリアンと共にあるように」

二人は互いの肩を抱き、額と額を近づけた。
坂道の下から、休みの終わりを告げる鐘の音が聞こえてきた。

三

慶長五年（一六〇〇）、美濃の関ヶ原で大きないくさが起こっている最中に、じゅりあんたちは八代へ旅立って行った。長崎の学林に一人残るかたちになったみげるは、たまが見たところ考え込んでいるふうもなく、学林の畠を耕したり難しい南蛮語の学問をしたり、あいまに手習い所の童たちの面倒を見たり、今まで通りの忙しい暮らしを続けていた。

たまはもちろん、みげるが残ったことが嬉しかった。長崎の学林や修練院は秀吉が死んでから存分に勢いを取り戻し、大勢が学んでいたから、たまのような女手は大いに必要とされていた。みげるが八代に移ったとしてもたまがついて行くわけにはいかなかったから、そのまま二度と会えなくなったかもしれないのだ。

それに二十六になったたまには、もうさすがにだれも嫁に行けと言わなくなっていた。老いたおさきが死んだときは司祭が天主堂で弔いを出してくれ、みげるたちも手習い所の童たちも祈りをささげてくれた。司祭たちには何から何まで世話になりどおしで、こ

の地に天主教がなかったら、たまなどどうなっていたか分からない。これからはみげるが居ようと居まいと、たまが生きていけるところはここだけだった。

満足に文字も書けない頭でたまは考える。人が生きていくのはとても悲しいことだ。嬉しいこともたくさんあるけれど、ときどきその嬉しさを全部消してしまうような悲しいことが降ってくる。

おさきが死んだり、みげるが杖をつくようになったり、いやな噂を聞いたりしたときは、たまは唐紙（からかみ）をぴっちり閉めて、真っ暗い板間に幾日も膝をかかえて座っていたいと思う。だけどそれは天主様がお許しにならない。たまはひとりでに唐紙を開けて、お天道様を浴びに外へ出る。だってたまは、まるただったから。天主の子のそばで懸命に働く女子だと、みげるが褒めてくれたから。

学林の井戸を汲みあげて、たまがふうと息を吐いたとき、向こうからみげるがやって来た。

「みげる様、試問はいかがでございましたか」

わざとからかうように言うと、みげるは顔をしかめて手を大きくふった。今日は学林をあげての南蛮語の試問の日だったのだが、その様子ではあまり出来なかったようだ。

手が震えるのだから、書けなくて当たり前なのだ。

井戸のそばに来たみげるに、たまは水を汲んでやった。

「早くお治りになるとよろしゅうございますね」
「いや、私はきっともう治らないだろう」
「そのようなことをおっしゃるものではありません。たまは毎日毎晩お祈りしています。みげる様はきっと治られます」
「そうか。信じぬのは罪だな。ありがとう、たま」
　みげるは手で水をすくって口に運んだが、水は口に届くまでにあらかたこぼれてしまった。
「お辛いですか」
「もう慣れたよ。それよりたまこそ、私の病が恐ろしくはないか」
「恐ろしいものですか。みげる様は何年も前からずっとこの病だったのですよ。今ごろになって噂を真に受けるほうがどうかしています」
　このところ、みげるの病はうつるという噂が流れていて、みげるはどうかすると病自体よりその噂のほうを気にかけていた。
「つまらぬ風聞をたてるものではないと、手習い所の童らを叱っておられたのはみげる様ではありませんか。たまもそう思います」
　秀吉が死んだとき、前の年に西坂で二十六人もの切支丹を磔けた報いだという噂がぱっと流れた。それをみげるは、くだらぬことを言うのではないと手習い所の子らを叱ったのである。
　だがみげるがそう言ったときから今のみげるの噂は始まったようだった。出どころは案外、手習い所のいたずら童たちなのかもしれない。
「じゅりあん様たちがいらしたら、こんな、たちの悪い噂はすぐに消してくださいますのに」
「毎度ジュリアンたちを頼ってはいられないよ。私も修道士なのだから、しっかりしなくては」
「天主様はなぜ、みげる様ばかりを辛い目にあわせるのでしょう。お一人だけ学林にお残りにならねばならないなんて」
　みげるは優しくたまの顔をのぞきこんだ。
「そんなふうに言うものではないよ。私はこんな病はちっとも辛くない。私は指が震えるたび、天主様がこの指を持って震わせておられると思うのだ。この病のおかげで、天主様がだれより私と共にいてくださると分かるのだよ」
　どうしてそんなふうに考えられるのかたまには分からないが、みげるが強がっているのでないことは確かだった。
「そうだ、たま。いいことを教えてやろう」
「いいこと？」

「ああ。秋になればジュリアンたちが帰って来るぞ。ちょうど一年ぶりだ」
「まあ、それは。一体どうしてですか」
そのときみげるは首にかけているろざりおを大切そうに握りしめた。
「私たちにとってこれほど嬉しいことはない。この国の修道士の中から、初めて司祭が生まれるのだ。ジュリアンたちはその祭礼に出るために戻ってくる」
たまは目をしばたたいた。それこそ日本人は司祭にしないという噂は何度も聞いたことがある。こちらのほうはもう何十年も、たまが生まれた時分からあった話だ。
やはり噂ほどあてにならないものはない。
「どなたが司祭様になられるのですか。たまの存じあげているお方でしょうか」
「セバスチャンとおっしゃるのだが、どうだろう。ずっと澳門に行っておられたから、たまは知らないかな」
「澳門に」
みげるはうなずいた。
「島原の日野江にあった南蛮の学問所を、最初に終えられた方だ。私たちがそこで使節に選ばれたとき、わがことのようにたいそう喜んでくだされて……。ご自身は齢がゆきすぎているというので使節から外されたのだ」
ふとみげるの顔が暗くなった。

「どうなさいました」
「いや。セバスチャンはさぞ南蛮へ行きたかっただろうと思ったのだ。だがあのとき私は、己がつとめを果たせるかどうか、そればかりが案じられて、セバスチャンの胸の内など考えなかった。向こうに行っているあいだ、どれほど祈ってくだされたことだろう」
たまはなにかとても満ち足りた心持ちがした。修道士の方々はいつも互いに祈りあっている。それがどんな力を持っているのかたまには少しも分からないけれど、多分それが分かるのが修道士なのだ。なんといってもたまのお慕いするみげる様は、耶蘇会の修道士、いるまんなのだから。
「では今度はみげる様が祈ってさしあげる番ですね。この国でいっとう最初の司祭様ですもの。せばすちあん様しだいで、あとに日の本の司祭様が続くかどうか、道が分かれてしまうでしょう」
「そうだね、その通りだ。セバスチャンは大変だな」
それからしばらくして長崎の湊に冷たい風が吹き始めたころ、せばすちあんは学林にやって来た。華奢（きゃしゃ）な体つきに笑みを絶やさない人で、どこにも責任という堅苦しい荷をかかえている様子はなかった。たまにはせばすちあんが、ただひっそりと満月にでも照らされた喜びの中にいるように見えた。せばすちあんを中央に、みげるたち使節の四人

がひとかたまりになって夜遅くまで話しこんでいることも多かった。

　せばすちあんが司祭に列せられる祭礼が十日後に迫ったとき伊奈姫がやって来た。伊奈姫は司祭になろうというせばすちあんとも相応な話のできる人だから、毎日館から通って来ては、せばすちあんやみげるたち四人と話していた。前と違ってもうたまを座敷に呼んでくれることはなかったけれど、中からときおり明るい笑い声が聞こえてきて、庭にいるたままで共にいるように楽しかった。

　そうしてせばすちあんの祭礼が明日に迫った日、伊奈姫はたまを探してわざわざ学林の畠のほうまでやって来た。

　たまはあわてて頬被りしていた手拭いをとり、ほかに恥ずかしいところはないかと体を見まわした。そんなたまを見て、伊奈姫は優しくほほえんだ。

「たまはまるで修道女様になってしまったようですね」

　たまは飛び上がって首をふった。

「いやな噂を……、たまも知っているでしょう」

「みげる様の手足の病が、近づけばうつるという話でしょうか」

「ええまあ、そういうような」

　伊奈姫は言葉を濁した。

　伊奈姫が案じるのはいつもみげるのことだった。伊奈姫は二つ違いの従弟を、実の弟

の喜前公よりも気にかけている。顔立ちも似通って、下の者に優しいのや学問のあるところが一対になっているような二人だ。

　そばで面倒を見てさしあげられない伊奈姫のぶんも、たまはまるたとして働かなければいけない。

「まりいた様、その噂ならもうご心配には及ばぬと存じます。じゅりあん様たちが戻られて、始終みげる様と腕を組んだり、一冊の書物をのぞきこんだりなさっています。手習い所の童たちもじきに、あんなつまらぬ噂には飽きてしまいますよ」

「……そうはいかぬような気がするのですけれど」

　たまはぶるんぶるんと手拭いをふった。

「ご心配なさることはありません。まりいた様も、こちらにおられる間、みげる様の杖となってお歩きになってくださいませ。手習い所の童らもどれほど驚くでしょう」

「まあ。それくらいで噂が消えますか」

「はい、十分でございます」

　伊奈姫は背を丸めてころころと笑った。身じろぎをするといい香がただよって、笑顔となると美しさに息が止まる。たまはこの世の誰より伊奈姫が好きかもしれない。

「みげる様があなたといると心が晴れるとおっしゃるのがよく分かります。難しい顔をして額にしわを寄せて考えていても、何もいいことはありませんね」

たまは手拭いを落としそうになった。みげるがたまのことをそんなふうに話してくれているとは考えてもみないことだった。

「たまのような女子がそばにいるみげる様は……、学林の皆はしあわせですね」

「とんでもないことでございます。私はみげる様のために何一つ」

「たまに頼みがあるのです。たまのほかに頼める人がおらぬのです」

伊奈姫は裾を持ち上げていた両手を離し、たまの手を取った。金糸の縫い取りのある着物の裾が土の上に落ちた。

「これからあの方がどんなことになっても、たまだけはずっとあの方を信じてあげてください」

「信じる。みげる様をですか」

「ええ。あの方がたとえ……、たとえ司祭になれなかったとしても、たまだけはあの方から離れずにいてあげてください」

「司祭になれない？　まりいた様、そのようなことがあるはずがございません。みげる様ほど司祭にふさわしい方はおられません」

「分かっています。私もみげる様は司祭になられるべきだと思っています。ただ、そうならなかったとき……、みげる様が司祭にならぬと申されても、あなたはみげる様を信じてさしあげてほしいのです」

たまは大急ぎで何度もうなずいた。

「大丈夫です、まりいた様。私、みげる様のことはよく分かっています。みげる様が間違ったことをなさるはずはありません。それはたしかに今はお体が悪いですが、いつかきっと治ります」

「……」

「私、みげる様が司祭になられた後もお世話をするつもりです。だからたまには、みげる様がいつ司祭になられようと関わりはございません」

たまは働く女子、まるたなのだから。

伊奈姫は大きく息を吐いた。

「ではたまにとっては、あの方が修道士だろうと司祭だろうと変わりはないのですね」

「はい。修道士であってもなくても、たまにはどちらでもいいことです」

「……あの方はあの方ですものね」

「はい。みげる様はどんなお体になっても、みげる様です」

たとえ手が動かなくなり、歩けぬようになったとしても。これから先、じゅりあんたちだけが立派な司祭になり、みげるだけが慈悲屋で体を横たえるしかなくなったとしても。

そのときたまの頭のどこか奥のところで雷がとどろいたようになった。

「まりいた様、それはみげる様が慈悲屋へ行かれるようになったとき、私にお世話をせよということですか」
「たま……」
「私、喜んでそうします。もしもみげる様がこの学林を出て、慈悲屋に入らねばならぬようなことになったときは、私がまりいた様の分もみげる様にお尽くしいたします。まりいた様がおっしゃるのは、そういうことでございますね」
伊奈姫は切れ長の輝くような目をしばたたいた。睫毛の音が聞こえてくるようだった。
「たまは……、そうしてくれるのですか」
「はい。お約束いたします。私、もしもそんな悲しいことになったら、みげる様が一日も早く学林に戻れるようにお世話をします」
気がつくとたまは伊奈姫の手を強く握り返していた。
たまの生きていく道を教えてくれたのは伊奈姫かもしれなかった。みげるは手足が悪いのだから、たまが特別にお世話するのは悪いことではない。たまは、天主様に身をささげたみげるの、名もない一本の杖になる。
「あの方のそばにたまがいてくれると思えば、私も気が晴れます。よろしく頼みます」
畏れ多くて、たまはぶるぶる頭をふった。
「ねえ、たま」

中へ戻りかけた伊奈姫がふと足を止めた。
「はい、何でございましょう」
「あなたも私を、まりいたと呼ぶようになったのですね。私の名をそのように呼ぶのは、たまとあの方だけですね」
伊奈姫は顔だけこちらを向いてほほえんでいた。
「私たちだけは、これからどんなことになってもみげる様を信じてまいりましょうね」
先になにか悪いことが待ち受けているような気がしたのはそのときだった。たまは急いで手のひらで両頬をこすった。
こうやって頬をやわらかくしておくんですよ、たま。そうすれば人はいつでも笑うことができるのですからね——
おさきの優しい声が聞こえてくるようだった。
祭礼までの十日間はあわただしく過ぎてゆき、たまはそれきり伊奈姫と二人で話をすることはできなかった。だから祭礼のあとに何が控えているか、たまはその日が来るまで何も知らなかった。
巳刻（みのこく）を告げる天主堂の鐘が鳴り、たまのいる学林はにわかに騒がしくなった。三人の

旅立ちが一刻（いっとき）後に迫っても、みげるは学舎から出て来なかった。

たまは二階へ駆けのぼり、一番奥のみげるの座敷の前に立った。

「みげる様、ご出立までもうあと一刻でございます。そろそろ皆様が湊へ向かわれます。お話をなさるのは今しか……」

唐紙の外から、おそるおそる声をかけた。今朝はまだみげるの姿を見ていなかった。

「みげる様……」

「今行くよ」

その声と同時にみげるが座敷から出て来た。手にろざりおを持ち、開いた唐紙の向こうから薫（た）きしめた香のにおいがした。

「お急ぎになりませんと」

「よいのだ。もう話すことはないのだよ。ジュリアンたちとは、ずっと話し続けてきたのだから」

案ずるなというようにほほえんで、みげるは先に立って廊下を歩きはじめた。

今日、長崎の湊を出る南蛮船にはみげるを除く使節の三人が乗りこむことになっていた。それぞれに八代の天主堂で修道士として働いてきたじゅりあんたちが、いよいよ司祭となる修行のために澳門へ赴くことになったのである。

三人が長崎へ来てせばすちあんの祭礼にあずかったのは、そのあと長崎から出る船に

乗るためだったのだ。

今度もまた置いて行かれるのはみげる一人だった。しかも今度ばかりはみげるに追いすがるすべはない。司祭になる仕上げの学問をするには澳門の学林へ行くしか道はなく、南蛮船に乗るには南蛮人司祭の許しがいる。みげるにはその許しを出さないと、南蛮人が決めたのだ。

伊奈姫はそれを見届けるのが辛いとでもいうように、せばすちあんの祭礼が終わると琴海に帰ってしまった。たまは何も知らずにじゅりあんたちの世話をし、ひょっとすると三人はみげるの身にまといつく噂が完全に消えるまで学林にとどまってくれるのだろうかと浅はかに考えていた。湊には祭礼のために長崎へ立ち寄ったとばかり思っていた南蛮船が居つづけて、ようやく一昨日になって、たまは誰からともなく三人の旅立ちを聞かされた。

そのときの驚きといえば、寝汚（いぎたな）いほど眠りの深いたまが夜どおし目を開いていたほどだった。たまは童女のときのまま、みげるが好きだけれど、だからといってみげるがどこか上の学林へ行かぬようにと願ったことはない。たとえもう一度南蛮へ行くことになっても、それでもみげるが司祭になるほうが嬉しいのにきまっている。たまはみげるが司祭になってから、どこへなりとついて行ってお世話をすればしあわせなのだから。

いくら手のひらで頬をこすっても笑顔は浮かんでこなかった。生きているとどうした

って辛いことが降ってくる。この国で最初の司祭が生まれた祭礼に並ぶことができたという大きな喜びも、十日の後には粉々になった。

「たまがそんな顔をすることはない。四人のうち三人も澳門の学林に入ることを許されたのだ。ジュリアンたちは私のために祈ってくれる。三人もだ、三人もの修道士がどれほど私のために心を砕いてくれていることか。だから私は脇目もふらずに祈らなければならないだろう。一人で、三人分も祈らなければならないのだから」

だからなかなか部屋から出て来られなかったのだと言ってみげるは笑った。

「ですがみげる様はお辛いでしょう。一人残されて、この世に一人きりになってしまったように心細いのではありませんか」

「……たまはありがたい。私にまっすぐにそう言ってくれる者はないからな」

あっと、たまは口をおおった。

けれどもみげるは優しく首をふった。

「だからね、たまは皆に言っておくれ。私は心底喜んでいるのだ。ジュリアンたちの心と私の心は一つだ。だから私が悲しんでいるとすれば、三人が私を慮って悲しんでいることが悲しいのだ。私の心は喜びで満ちている。私たちは八年以上もともに南蛮で暮らしてきたのだから」

「ですが」

「たまもセバスチャン様の祭礼を見ただろう。立派なものだったろう」

たまは素直にうなずいた。町中の鐘が鳴り響き、大きな天主堂が南蛮人の司祭や修道士たちで埋めつくされた。白く輝く冠を頭にのせた大司祭が、せばすちあんのためだけに一刻も祈りつづけて天主堂の床にぬかずいた。祭壇には司祭がひしめいて、ふしぎな音を鳴らしながら香炉が振られた。せばすちあんが通ると南蛮人が皆ひざまずいた。祭礼のあいだ中、南蛮の楽器が奏でられて、涙の出るような美しい歌が天井にこだました。

「あまりに眩しくて、たまは目が開けていられませんでした」

「そうだろう。あのときセバスチャン様は新しく生まれたのだ」

修道士のみげるが、もう二度と同列に、呼び捨てにできない者に。

「司祭になるとは人が新しく生まれるということだ。しかも生まれるのは赤児ではない。天主様の姿も忘れて生い立ってきた大人が、この世にありながら、天主様の姿をおのが胸の内によみがえらせるのだ」

そう言いながらみげるは階段の手すりにつかまって、ゆっくりと下りはじめた。

「分かるか、たま。司祭になるとはそれほど大事なのだ。ラテン語も書けず、満足にも働けぬような者が情けを受けて歩んで行ける生やさしい道ではないのだ。司祭は人の先頭に立ち、おのが身を用いて茨をかきわけ、後ろにできた道に人を歩ませねばならぬ」

「みげる様だって茨をかきわけて進んでいかれます。それを情けだとは誰も」

「私はね、たま。私が選ばれなくて良かったと心から思っている。ジュリアンたちはそのような厳しい試しをくぐりぬけて澳門へ行けることになったのだ。私のような者が共に行けば、司祭などたやすいものだと、この国の者たちは思うだろう。それでは司祭が軽んじられてしまうだろう」

階段を下りたとき、使節の三人はちょうど天主堂の門の前に出てきていた。みげるを見つけて、三人がそれぞれにみげるに頷いた。

みげるは三人を遠巻きに、湊に向かう一行に加わった。

一行の先頭にいる三人は、まるでどこも目指していないように、のんびりと坂道を歩いている。足の悪いみげるがついて来られるようにそうしていることを、みげるとたまだけは知っている。

だれよりも凛と頭をあげて、みげるは歩いていく。十三歳のあの日、みげるはやはりこんな顔をして湊への道を歩いていたのだろう。

この同じ道を行きながら、あのときみげるは一度だけ、おさきに手を引かれたたまを振り向いた。そして首にかけた巾着を持ち上げて、襟元で小さく振ってみせてくれた。

その同じみげるが今日は南蛮船に乗ることができない。たまがみげるなら、腹が立って悲しくて、切支丹なんてやめてしまうだろう。じゅりあんたちを見て恨まずにすむように、決して湊には近寄らないだろう。

みげるはしゃんと背を伸ばして、三人の艀舟（はしけぶね）のそばまで行った。

人垣が割れて、みげるは三人と順に肩をだきあった。

「天主の平安がミゲルと共にあるように」

まるちのがみげるに十字を切った。

「マルチノ。南蛮語も励んでな。生涯、マルチノのために祈っている」

まるちのが再びみげるの首に抱きついたとき、その両目から涙があふれた。

次にまんしょがみげるに十字を切った。

「ミゲル……」

「マンショ、皆を頼んだぞ。この身はどこで何をしていようと、つねに私たち四人は共にいるのだから」

まんしょは何度もうなずいた。やはりまんしょも泣いていた。

じゅりあんとは十字を交わしあい、額を近づけただけだった。どちらも一言も口をきかなかった。

艀舟が出たとき、みげるは手を伸ばし、足をもつれさせて地面に倒れこんだ。

海の上で艀舟が大きく揺れた。

三人のかわりにたまが駆けよってみげるを起こした。これからはもうたまの他にみげるを支えられる者はいないのだ。

みげるはたまの肩を支えにして伸び上がった。
「ジュリアン、私を許してくれ。どうか私を許してくれ」
みげるは肩をゆすって泣いていた。
「マンショ、私を許してくれ。マルチノ、私を」
何度も何度も、みげるは大声で艀舟に向かって叫んだ。
許してくれ、私を許してくれ――
たまの目にも涙がわいてきた。
「みげる様、皆様には聞こえておりますよ。もう、伝わっておりますよ」
三人はただじっとみげるを見ていた。走るように遠ざかっていく艀舟の上で、それぞれがかすかに頷いたように見えたのはたまの思い違いではなかったはずだ。
「どうしてみげる様が許しを乞うのですか。あの方たちこそみげる様にあやまるべきです。みげる様お一人を置いて行くなんて」
そうだ。ひどいではないか。たった一人、みげるだけを残して海の向こうへ旅立ってしまうなんて。八年半もともに南蛮を旅してきて、みげるだけをこの国に置いて行くなんて。己たちだけ、司祭になるなんて。
たまはみげるを支えながら、大きく前へ踏み出した。
「じゅりあん様！」

みげるが衣を引くのもかまわず、たまは大声をあげて必死で宙を掻いた。
「まんしょ様！　まるちの様！　お待ちくださいませ」
そのたまの手を、みげるが覆いかぶさるようにして止めた。
「たま。もう決めたのだ。私たちはそうするより仕方がないのだ」
「なぜ仕方がないのですか。仕方がないことなどあるものですか」
みげるは目を閉じて激しく頭をふった。
「私たちは話したのだ。もう十分、話して決めたのだ」
「何を決めたとおっしゃるのですか。みげる様だけ置き去りにすることをですか」
「………」
「じゅりあん様！」
「たま！」
みげるは短く叫んでしゃがみこんだ。
「やめてくれ、たま。私たちは決めたのだから」
「みげる様……」
みげるは土に手をついて、肩をふるわせて泣いていた。
「私たちはそうするしかないのだ。もう決めたのだ……」
「何を……、お決めあそばしたのですか」

みげるは答えなかった。ただがっくりと手をついたまま、沖の南蛮船が行ってしまうまで二度と頭を上げなかった。

第二章　新たな地

一

長崎の海はもう師走というのにわずかに波が立っているだけだった。この湊は一年を通して波がおだやかで、陸地の泥を運ぶ大きな川も流れ込まず、古くから南蛮人が好んで船を着けてきた。艀舟で少し行けば、高い帆柱の南蛮船を湊の奥深く停めておけるからだ。

「珠(たま)、そろそろ行くぞ」

清左衛門(せいざえもん)が珠の横に並んだ。二人は今日、長崎の住まいを引き払う。

「何を見ている」

「皆様はもう澳門(まかお)にお着きあそばしただろうかと」

「もうふた月だからな。今時分は学林に通いはじめているだろう」

さあ行くぞと、清左衛門は背負子(しょいこ)を背にかけた。

「そのように大きな荷を、大丈夫ですか」

「ああ。このところは足も手もずいぶん具合が良いのだ」

珠と清左衛門はこれから琴海へ行くことになっていた。そこから舟に乗り、玖島（くしま）へ渡るのである。

「まりいた様はさぞかし驚かれるでしょうね」

「何を驚かれる」

「何って……、それは私とお前様が夫婦になったと知れば、どなたも驚かれましょう」

清左衛門は優しくほほえんだ。

「だれも驚くものか。私と珠は幼い時分からずっと一緒だったではないか」

「でも……」

それはどうでもよい。伊奈姫はそんなことより、清左衛門の形（なり）が変わったことにどれほど驚き、悲しむか知れない。

「お前が案ずることはないのだ。マリータ様は私がこの道を選ぶことは分かっておられたろう。驚きも悲しみもされぬ。あの御方は、われらがどのような姿であらわれようと受け入れてくだされる」

そのとき珠は胸がちくりとした。珠の知らなかったことを伊奈姫は知っていたかもしれない。前は気にかからなかったことが、珠は聞き逃せなくなっていた。

清左衛門は珠のその変化に気づいているだろうか。

「マリータ様にはしっかりお願いしなければな。これから私は珠を養ってゆかねばならぬのだ。珠にはいつか、マリータ様に劣らぬ美しい衣を着せてやれるとよいがな」

その言葉と優しい顔で、珠の胸のとげはすぐ消えていった。どんな衣を着てもまりいた様に叶うものですかと、素直に笑うことができた。

ふた月前、じゅりあんたちを乗せた南蛮船の帆柱が丸い水平線の彼方へ消えたとき、清左衛門は己の名を捨てるとたまに言った。耶蘇会を脱（ぬ）け、みげるという名を捨てて、かつて清吉と呼ばれたただの侍の子に、いや、もう三十を過ぎているのだから清左衛門という名の侍に戻るのだと告げた。

どうしてそのようにお考えあそばしたのですと尋ねたたまに、みげるは、学問についていかれなくなったからだと言った。南蛮まで行ったのに南蛮語を書くこともできず、手習い所の子らを満足に教えてやることもできない。かといって手足がいうことをきかないので学林の畠を耕すこともままならない。

このままでは穀潰（ごくつぶ）しではないかと、みげるは頬の涙をぬぐって無理に笑顔をつくった。

「もう決めたのだ、たま。私はもう気がねなく、思うままに生きていくことにする。学林を出て、どこか別の地で暮らすことに決めたのだ」

まさかみげるが真実そう考えたとは思えなかった。けれどたまの心はそのとき、みげ

るがどこかへ行ってしまうということで一杯になった。たまはまるたとして、みげるのそばで働く女子であろうと決めてきたのに、それが終わってしまうのだ。

たまが口もきけずにいると、みげるは言った。

「たまは、学林を離れた私には生きていく甲斐がないと思うか」

たまは首をふった。たまにとっては修道士も司祭も、学林も長崎もない。みげるがいたから学林で働いて来ただけだ。

だけどそんなたまは、みげるのいなくなった学林でなにを寄る辺に生きていけばいいのだろう。

「みげる様はひどい。ひどい、ひどい……」

気がつくとたまは泣きじゃくってみげるの胸を叩いていた。みげるが生涯、天主だけに仕えて生きていくと思ったからこそ、たまも学林で懸命に働いた。たとえ長崎からいなくなることがあっても、どこにいてもみげるが天主のみを見ていると知っていたから、たまはしゃんとしていられた。だからたまは天主教が分からなくても修道女になろうとさえ思った。それなのに。

みげるなど南蛮船に乗って、澳門でも羅馬でも行ってしまえばよかったのだ。八年も十年も、日本へ帰って来なければ、そのあいだたまはどんなに安らかでいられたか分からない。

「たま、聞いておくれ。私たちは夫婦(めおと)になろう。たまさえ傍にいてくれれば私は生きていかれる。たまが私を信じていてくれれば、私は私を信じることができる」

あの日、一体いつからみげるの言葉が耳に入るようになったのか、たまは今もはっきり思い出すことができない。けれど南蛮船が出て十日も経たないうちにみげるとたまは学林を出た。そしてみげるは清左衛門に、たまは珠になった。

たまは修道士みげるの傍らで働くまるたから、千々石清左衛門の妻の珠になったのだ。

学林を出た清左衛門のまわりでは、ぱっと噂が広がった。湊に南蛮船が入ると報せは半日で豊後に届くというけれど、それと同じくらい早いと珠は思った。

南蛮使節の正使、修道士のみげるが女と学林を出奔したそうじゃ――

学問についてゆかれず、一人だけ澳門へやってもらえなかったのを恨んでおったとな。

天主様の御前でたてた誓いを破るとは、なんと罰あたりだろう。八年も南蛮へ行っておきながら――

さすがに学林の修道士や司祭が噂をするのは見たこともなかったが、天主堂や手習い所、ずっとみげるが講席を持っていた修練院、それについ昨日までみげるが共に学んでいた学林でも噂は止む気配を見せなかった。

これまで通り学林にいたほうがよほど楽だったと清左衛門が思わなかったはずはない。

噂はつねにみげるが主体で、珠が修道士を惑わせた悪い女子だと矢面(やおもて)に立たされること

はなく、みげるが修道士の誓いを反古(ほご)にした穢(けが)れ者だとののしられた。

それはみげるが選ばれて南蛮にまで行った使節の一人で、珠が取るにも足らぬ目立たぬ女子だったせいだろう。清左衛門は思うにまかせぬ手足を引きずって、これならいっそ修道士のまま学林にいるのだったと、何度も考えたのにちがいない。

だけど珠は違う。人に何と言われても、清左衛門をお前様と呼べるだけでしあわせだった。

海の見える長崎の町にも未練はなかった。これからは清左衛門の暮らす町が珠の町になると思えば、南蛮へでも歩いて行けそうだった。

珠は清左衛門について坂を下りながら、長崎の町を振り返った。

大きな木に寄りそうように建つ、坂の上のさんとすの天主堂、岬の突端に屋根を広げる耶蘇会の天主堂。珠が通った、天主教を説く手習い所に、修練院、そしてみげるたちの世話をしてきた学林。病者のめんどうを見ていた慈悲屋も、南蛮の書物を作る印刷所も、何もかも珠は好きだった。天から降るような鐘の音も、ふしぎな顔をした南蛮人も、どんな景色より珠の目にはなじんでいた。

湊で帆をあげた大きな大きな南蛮船も。真珠のように丸く見える海の果ても。

珠は両手に力をこめて頬をこすった。

丘の天主堂の屋根には白い十字架が立っていた。それをしっかりと目に焼きつけて、

珠は清左衛門の背だけを見て歩きはじめた。

琴海の戸根にある朝長大学頭の館で、珠と清左衛門は伊奈姫の出迎えを受けた。もうずいぶん会っていないような気がしたけれど、まだほんの三月前のことだった。せばすちあんの祭礼で、天主堂の客人の座に伊奈姫が、最前列の修道士の座に清左衛門がついていたとき以来だった。

「このような仕儀になり、マリータ様にはどうぞ、お許しありますように」

座敷に入ると、清左衛門はなにより先に頭を下げた。珠もあわてて清左衛門にならった。

「南蛮にまで行かせてくださった亡き殿様に面目次第もございませぬ」

清左衛門は伊奈姫をとおして大村純忠公にも詫びた。その名代として南蛮に渡ったからだ。

伊奈姫は穏やかな笑顔をうかべて首をふった。

「父は天主様の御もとで何もかも存じておりましょう。ご心配には及びませぬ」

「ジュリアン……、いえジュリアン様たちもそのように申してくださいました」

「お四方とも、お辛かったことでございましょう」

「どのみち私はあのまま学林に残っても司祭にはなれなかったのでございます。早く見切りをつけたほうが良かったのです」

「……清左殿を耶蘇会にとどまらせられなかったのは私たち皆の罪です」

静かに首をふっている清左衛門の横で、珠はまばたきばかりしていた。そういえばなぜ清左衛門が耶蘇会を出たのか、珠はよく分かっていなかった。

伊奈姫はいよいよ優しい顔つきになって珠のほうへ体を向けた。

「珠、清左殿には大村家に戻っていただきます。だからそなたは何も案じることはないのですよ」

珠は驚いて清左衛門のほうを振り向いた。そのことを頼むために二人して伊奈姫のもとへやって来たのだが、なにも言わないうちに叶ってしまった。

伊奈姫はすべて分かっているというように微笑んだ。

「清左殿のお父上は私たち姉弟にとっても叔父にあたられる御方。大村家に戻っていただくのは当然です」

「でも……」

言いかけて口を閉じると、伊奈姫は先をうながすように頷いた。

横で清左衛門も頷いている。

「でも清左衛門様のお父上は、かつて伊奈姫様のお父上様を……、大村純忠公のご城下を攻められたことがあると聞きました。そのような武将の子を、召し抱えてくださるものでしょうか」

清左衛門の父、千々石直員（なおかず）は大村純忠の弟にあたるが、純忠が追い落とした大村家の継嗣（けいし）と結んで兄を攻めたことがある。

すると伊奈姫は袖で口をおおって、ころころと笑った。

「あれは私たちのおじいさまが悪いのですわ。ねえ、清左殿」

もともと大村家は古くから肥前国一帯を支配しており、そこから分かれた枝葉に有馬家があった。だが長い戦国のあいだに立場が変わり、有馬家のほうが幹になった。そして強大化した有馬家の当主だった伊奈姫たちの祖父が、長男を手元に残して、次男の純忠を大村家に、三男の直員を千々石家に養子に出したのだ。大村家では純忠が来たために庶子が他家へ出され、その庶子と直員が結んだそうである。

「とにかくこの大村という土地は、大きな西瓜が生（な）らず、西瓜の種のような家ばかりが生るのですよ」

「西瓜……」

はじめは絶句して、それから清左衛門と顔を見合わせて、珠は吹き出した。伊奈姫という人は天に住む御使（みつか）いのような顔をして、百姓女のようなことをさらりと言う。

「あら、本当なのですよ。ですが種たちも他国にふみ荒らされるのはごめんです。力を

あわせて大きな実にならねば自滅すると、子や孫の代になってようやく分かってきたのですわ。ですからわが弟も、清左殿に他家を立てられては難儀なのです」

珠は困ってしまって清左衛門に目をやった。よく分からなかったし、清左衛門が大村家に張りあう千々石家を立てるなど、雲をつかむような話だった。

「マリータ様。珠が困っておりますゆえ」

伊奈姫が笑って肩をすくめた。

「ごめんなさいね、珠。喜前公は大喜びで清左殿を迎えると言いたかったのですよ。そうなれば珠も私も、ともに喜前公にお仕えする立場。そなたはいつまでも私のことを姫と呼んでいることはないのですよ。私たちは天主様の御前のみならず、武家の女子としても等しい身分になるのです」

「マリータ様」

清左衛門が苦りきった顔をして伊奈姫を止めたが、珠のほうでも少しずつ伊奈姫の軽口に慣れはじめていた。

「おお怖いこと。清左殿がおられては珠と話ができません。先に湯をおつかいになってくださいませ。そのあいだ私たちは女子どうし、清左殿には内密の話に興じておりますゆえ」

珠も笑ってうなずいた。久しぶりに笑ったので涙が出そうになった。

清左衛門がしぶしぶ座敷を離れると、新しい茶菓が運ばれてきた。かすてらという見たこともない南蛮の菓子で、伊奈姫は幼い時分、これが食べたくて長崎の天主堂に通っていたという。熱心な切支丹だった純忠公は天主堂で祭礼があるたびに船を仕立てて長崎へ渡っていたが、天主教など何も分からなかった伊奈姫は、祭礼の後にかすてらを食わせてやるぞと言われて毎回船に乗っていたそうだ。

そして菓子につられて幼い伊奈姫が通っていたのが、ふた月前まで清左衛門が学んでいた学林のそばの天主堂だった。

「あの天主堂は海から見るとそれは美しいのだと南蛮人の司祭様に教わって、海から見せてくれと父にわがままを言ったことがありました。ぬけるような青空の日で……、たとえようもなく美しかった。幼い私は、見たこともないくせに、南蛮の町のようだと思ったものです」

伊奈姫はうっとりと目を閉じた。それから四角くて黄色い菓子に手をのばして、珠にもすすめた。その菓子は伊奈姫の指のあいだで、心地よさそうにくぼんでいった。

「私はあの天主堂にひかれて切支丹になったのですね。さらにその元をただせば、この菓子につられて天主堂に通いはじめた。ずいぶん物に弱い切支丹だこと」

「まりいた様。珠は本気にしてしまいます」

「あら、本当のことですよ」

そうして伊奈姫はぱくんと菓子を口に入れた。

ずっと以前、伊奈姫と二人きりで話したときは珠はただの下仕えの女子で、とても一つの座敷で伊奈姫と菓子を食べてなどいられなかった。珠は一人前の清左衛門の妻になったのだ。

「まりいた様」

思いきって尋ねてみよう。

「清左衛門様が耶蘇会を脱けられたわけをご存知でしょうか」

珠はかすてらに手をのばした。持ち上げると、指が吸いついたようになって菓子がいやにへこんだ。南蛮の羊羹はどうも珠の手にあまる。

「私、実はよく分かっていないのです。ずっと学林にいましたけど、もとから天主教が分かっていませんでしたし、修道士をやめるということがどういうことかもあまり分かりません」

「……長崎で何か言われたのですか」

「私は何も言われませんでした。いつもいつも、悪く言われるのは清左衛門様だけでした。天主様を裏切った清左衛門様は地獄に落ちると……、修道士にまで上っておきながらやめるのは、いちばん罪が重いと」

伊奈姫は聞くだけでも汚れるというように急いで十字を切った。

「清左衛門様は、一人だけ澳門に行けなかったから厭になるような方ではありません」

「……澳門に行けなかったゆえ脱けたと……。そうも言われていらっしゃるのですね」

珠は小さくうなずいた。

「学問についていけないというのだって、修道士のままでおられたら、何も困ることはなかったのです。南蛮人にも、わざと司祭にならなかったという方は大勢おられますでしょう」

「清左殿は、珠にもわけは話してくださらぬのですか」

珠は何と言ったらいいか分からなくて顔をうつむけた。指のあいだで、かすてらがぺしゃんこになっていた。

「珠には清左衛門様の話し相手はつとまらないのでございます。大切な信仰のことも珠にはよく分かりません」

だれよりも長いあいだ岬の天主堂にいたのに、天主様は珠にだけは姿をあらわしてくださらなかった。

「清左衛門様は学林の方々とも、南蛮人の司祭様や修道士様ともうまくいっていました。手習い所の童たちは体がお悪いのをからかっておりましたけれど、童というのは師匠の悪口は申すものでしょう。珠は学林を出てはじめて分かったのです。学林の中のほうが町の中より、よほど住みようございました」

「……長崎の者たちはそれほど悪しざまに申しましたか」

「清左衛門様はこのあいだまで修道士だったのでございますよ。それに切支丹でなくなられたわけではありません。今も学林の祭礼の刻限にあわせて一人で祈っておられます。それなのに」

「珠……。これから世の中も変わるでしょう。太閤様がおられた時分は天主教も流行病(はやりやまい)のように忌み嫌われましたけれど、天下は豊家(ほうけ)から徳川様に移りましたもの。これからは徳川様がお許しになれば、天主教はこの国中に広くゆき渡るのですよ」

「……」

「切支丹であるとか修道士であったとか、そのようなことを誰も気にせずにすむ世が来るかもしれません。そうなれば誰も清左殿のことを口の端にのぼせなくなります」

どんな生き方を選ぼうと清左衛門の勝手ではないか。南蛮へ行ったこともないくせに、修道士をつとめたこともないくせにと、清左衛門こそ皆に言い返してやればいいのだ。

そうは思うのだが、どうも珠はうまくやることができない。この南蛮菓子のように、伊奈姫が持ったときとは形がどんどん違ってしまう。

「ですが珠、そう難しく考えることはないのではありませんか」

伊奈姫が優しく笑い返してくれたとき、手のひらの南蛮菓子がまたふくらんできたような気がした。

「清左殿は珠と夫婦になりたかったのではないかしら。それで学林を出られたのではありませんか」

珠は口をぽかんと開いた。伊奈姫は童女のように笑っている。

「だって珠。そなたが申したのですよ。清左殿はなにも学林をお出にならず、修道士としてとどまっておられれば楽だったのでしょう。それをなさらなかったのは、修道士は妻を持てぬからではありませんか」

目をしばたたいている珠の前で、伊奈姫はまた一切れ、かすてらを口に入れた。

「珠。あまり人に、なぜだなぜだと問わぬほうがよいかもしれませんよ。私もなにやら、当てられているような気がしてきました」

「そんな、まりいた様」

珠はかすてらを握りこんだ拳をふりまわした。伊奈姫は弾けたように笑い出した。

「そうね、こんなに珠を困らせては、また清左殿に叱られますね」

「いえ、清左衛門様がまりいた様をお叱りになるなんて、そんなことは」

伊奈姫はたっぷり一呼吸は苦労して、どうにか笑いを飲み下した。

「しあわせになってくださいね、珠。何にせよ珠はそう思って生きていくことです。珠が笑っておれば、あの方も笑っておられるのですから。どうかあの方の苦しみを珠が消してさしあげてください。そのためには私も、できることはなんでもします」

学林を出て清左衛門は体まで良くなってきたようだと、伊奈姫は珠を褒めてくれた。もう珠は嬉しくて、必死になって両手で頬を押さえたけれど、やっぱりいよいよ笑いがこみ上げてきて、どこに顔を向けていいか分からなかった。かすてらを一口に飲み込むと、あまりに甘くて顔が真っ赤になった。

玖島城は大村喜前（よしあき）公が慶長四年（一五九九）に、わずか半里ばかり北の三城城から、城下町ごとごっそり移して大村湾のほとりに築いた城だった。

喜前公は伊奈姫の弟で、清左衛門にとって同年の従兄弟にあたる。朝鮮出兵での苦しい籠城戦を経て、海に面した城の鉄壁の守りを知り、帰国して造ったのが玖島城である。

清左衛門たちがはじめて玖島の城下へ来たとき、珠は大村湾に突き出した板敷櫓（いたじきやぐら）を見て、

「殿様のお城はまりいた様のお館より小さいのですか」

と言った。清左衛門が、あれは城の端の物見櫓で、手前の堀までが喜前公の住まいなのだと教えてやると仰天して、これは川だと思うていましたと呟いた。長崎からほとんど出たことのなかった珠には岬の天主堂や伊奈姫の館がこの世でもっとも大きな建物だったから、殿様はどうやって道をお覚えになるのだろう、いえ、覚えねばならぬのは陸（ろく）

尺（しゃく）（駕籠かき）ですねと、あちらこちらを指さしては、感心とも呆れともつかぬため息をもらしていた。

「徳川様のお城は、きっとこれどころではないだろう」

そう言ってやりながら、清左衛門は羅馬（ローマ）の天主堂を頭に思い浮かべていた。

あれは大きかったというだけではない。清らかな白い石造りで、人が引いたとも思えぬなめらかな丸い線が、雲でも滑り落ちさすように天にそびえていた。修道士をやめてから、清左衛門の目には南蛮の美しさばかりが蘇ってきた。

清左衛門たちが城下の伊奈姫の別邸を借り受けて、そこにとりあえずの居を定めた翌日、清左衛門は喜前公に対面を許された。

喜前公は上段から下りるばかりのもてなしぶりで、よく決心してくれたと、清左衛門が学林を出たことをしきりに喜んでくれた。

「実は姉上には、伊東まんしょらが澳門に渡ると決まったときから、いずれ清左衛門を召しかかえるようにと言われておったのじゃ。禄高はとりあえず六百石でどうであろう」

「六百石」

清左衛門は息をのんだ。二万七千石あまりの大村家ではかなりの高禄だった。

清左衛門が黙っているので喜前は不服と思ったのだろう。あわてて言い足した。

「千々石家は一門ゆえ、本来ならば二千石あたりがふさわしかろうが、世が世なのじゃ。ううむ、姉上は西瓜のたとえは仰せにならなんだか」

清左衛門は顔がほころんだ。珠が吹きだした。大村は西瓜の種のような小粒の一門各家でできているという話だ。

「伺いましてございます。じきに徳川が東から迫る、それゆえ御一門は手をたずさえねばならぬとおおせでございましたが」

「そうじゃ。どうもこの大村は諸国とは国の造りが違うておるようでな。一門の力を等しうして連なり合うより、一家の下に力を集めて他に当たるのでのうては他国に踏みつぶされるのじゃ」

喜前公はばつが悪いとでもいうように己の首筋を大きな手のひらで撫でた。

そういえば喜前公はまだ小さい時分、よくそんな仕草をしたものだった。だがともに天主堂に通っていた頃の喜前公のその仕草は、父の純忠公をまねたものだった。清左衛門を南蛮へ行かせてくれた純忠公には、窮すると首に手を持っていく癖があった。横なぐりの雨で対岸の天主堂へ船が出せぬとき、幼い伊奈姫がぷうっと頰をふくらませて天主堂になど行かぬと言ったとき、純忠公は困ったのうとつぶやいては首を撫でていた。

「殿。私は殿のおそばで働かせていただけるだけで幸甚にございます。六百石など、あまりに多すぎて清左には荷がかちます」

すると喜前公は首にやっていた手を下ろして、なつかしいような笑顔で清左衛門を眺めた。

「いやいや、六百くらいは出さねば他の家臣どもに示しがつかぬ。知行地は伊木力(いきりき)を考えておる」

「伊木力を……」

この玖島城下から大村湾を渡れば一刻もかからぬ土地だった。伊奈姫のいる琴海も玖島の対岸だが、あちらは湾のもっとも幅のある場所にあたる。それにひきかえ伊木力は玖島から長崎へ行く途次で、この地が均(なら)されれば双方はぐっと近くなる。また琴海の伊奈姫も、玖島へ渡る間際に立ち寄ることができる。

「そなたに隠しごとはできぬ。伊木力は田は少のうてな、三方を嶮岨(けんそ)な山に囲まれておる。だが残る一方は海じゃぞ。ここからもよう見える」

喜前公は気軽に立ち上がって清左衛門に来いと言った。

天守のない城の三階に上り、清左衛門は喜前公と並んで海を眺めた。冬のさなかも雪のない大村の地では、かえって寒いときのほうが遠くがよく見える。

「見よ、あれが伊木力じゃ。近かろう」

「はい、まことに」

清左衛門は初めて羅馬の都が見えてきたときのことを思い出していた。

出立の日から二年半が経ち、海も空も見飽きていた目に、どこよりも青い空に抱かれた白い町の姿が飛びこんできた。

今の清左衛門になら分かる。この世にあれほど美しい地はなかったのだ。

「どうじゃ、伊木力に行ってくれるか」

「私のように何も持たぬ身が。かたじけないことでございます」

清左衛門は床に手をついて頭を下げた。

「これからは殿には、この清左に何なりとお申しつけくださいますように」

「ありがたいの。ならば清左には早速、漬物石のようなわが姉上をなんとかしてもらいたいものじゃ。姉上の押しは強うて、儂など相手にならぬわ」

「伊奈姫様が漬物石、でございますか」

あの春風にも揺れる、桜の枝のような伊奈姫のどこが漬物石なのだ。

「姉上はあれでも鎌倉殿の昔から侍であった大村家の女子ではないか。昨日今日あらわれ出でた天主教に、糠につかりこんだ大根葉のように正体をなくして何とする」

「大根葉とは」

喜前公の前では清左衛門のほうが絶句した。

「清左は長年、政とは関わりを持たなんだゆえ知らぬであろうが、当家は近ごろ熊本の加藤清正公と親しうしておってな」

喜前公は声を強めて、近ごろと言った。鎌倉幕府の御家人だった大村家に対し、加藤家は豊家の下で侍になった戦国の出来星大名だ。だがその加藤家は関ヶ原の後、肥後国で五十二万石となった。

「清正公は、これがまた熱心な日蓮宗徒でな。切支丹を目の敵にしておられる」

喜前公はうつむいて首筋をなでた。

「天草の小西行長は関ヶ原で首を斬られ、後には唐津の寺沢家が入った。この大村の北には、龍造寺に取って代わった鍋島家がおる。島原を治める有馬家の向かいは熊本であろう。われらとしては清正公とよしみを通じるしかあるまい」

龍造寺と大村、有馬両家は戦国を通じてせめぎ合ってきた間柄だから、天下が豊家から徳川へ移ろうと、一朝一夕に手を結ぶことはできなかった。それこそ豊臣が現れる前からの因縁だった。

「清正公とはともに朝鮮で戦い、幾度も命を救われた。あの苦しさは、彼の地へ行った者でなければ分からぬ」

「殿は彼の地で、清正公をご信頼あそばされたのですね」

「そうじゃ。この玖島の城を建てるときも、まるで子に目をかけるように教えてくだされた。あの御方は天下一の縄打ちじゃからな」

城の整地から普請、作事すべてを含めて縄打ちというが、清正公のその腕は天下に並

ぶ者がないといわれていた。

「姉上とて、儂が朝鮮から帰ったときは、泣いて清正公に感謝してくだされたのじゃ。それが、清正公が肥後国の天主堂を打ち払われたと聞いた途端、鬼じゃ魔物じゃと、えらい剣幕でな。たもとを分かてと申されるゆえ、当家はそうは参らぬと押し返してみたのじゃが」

「……何と申されたのでございますか」

「それを何とかするのがそなたの役目じゃと」

つい苦笑がもれた。見えるような気がした。

幼い日から清左衛門と喜前公はいつもそうだった。嵐で船が出せぬという祭礼の日、伊奈姫は二人の前で、男ならば何とかせよと仁王立ちになり、喜前公が骨を折って我慢できぬと泣いていたときは、それを我慢するのが今のそなたの役目じゃと突き放した。あの誰にもまねのできぬ強さに清左衛門はどれだけ惹かれてきたことか。

「殿。伊奈姫様には私も太刀打ちできませぬ。昔から二人揃うて、しっかりせいと尻を叩かれてまいったではございませぬか」

「それはそうなのだが」

喜前公はいよいよ首をなでている。思い返してみれば、あの純忠公でさえ伊奈姫にはしじゅう手を焼いていたのである。

「まあ、清正公も肥前の信仰のことまではとやかく申されるまいが」

「さようでございます。加藤は加藤、大村は大村でございます。それに徳川様は切支丹にもご寛大と聞いております。関ヶ原のあと、これからはやり易うなると南蛮人が申しておりました」

「南蛮との商いは利が大きいゆえの。徳川様もむげにはなさるまい」

そのあたりのことは清左衛門にはよく分からない。

「のう清左。儂らは今、世が大きく変わる狭間におるのではないか」

「は……。関ヶ原は天下分け目の大いくさでございましたゆえ」

「いや。あれでまこと、天下は徳川様と定まったのかということよ」

喜前公はじっと大村湾をにらんでいた。

「儂はこのような西国の果ての、大村の家一つを治めるにさえ汲々としておる小名じゃ。天下のことなど分からぬが、それでもこのまま天下が治まるとは思えぬのだ」

「と申されますと」

「清正公お一人を見ておってもな、徳川様に臣下の礼は取っておられるが、お心の内では、主は豊家と……、御拾様ただ一人と決めておられる」

大坂城に住む秀吉の継嗣だ。関ヶ原の戦いも、名目は豊家の家臣同士の争いだった。

「ですが御拾様はたしかまだ十にもおなりあそばさぬのでは」

「御年八歳じゃ。それゆえではないか」

喜前公は声をひそめた。

「太閤様は亡くなられても、豊家第一と考えておる大名がこの国にはたくさんある。清正公に芸備の福島、金沢の前田、この三家をあわせただけで二百万石じゃ。あと十年もすれば御拾様も一人前の武将になられよう。そのとき豊臣恩顧の大大名どもが結べば、天下など易々とくつがえる。さて徳川様が黙って十年を過ごされるかな」

清左衛門は目をしばたたいた。

「ひるがえってこの大村のことを考えればな、清左。二つばかりの半島という狭い土地に、十五からの一門各家がひしめきあっておる。言うてみれば儂は、十五本の柱の上にのせられた盆にすぎぬであろう。その何本かが結んでひょいと下から抜ければ、儂はたちまち地に転ぶ。そのあと大村は戦乱に荒れての、さしずめ鍋島に食われるであろうな」

清左衛門はだまって喜前公の目の先を追った。

幼かった清左衛門の同年の従兄弟は、知らぬ間に大きく、したたかな藩主になっている。

「大きさは違うてもな、徳川様とわが大村家は同じことではないか。上にのった盆が転がされぬためには、少々の柱が抜けてもびくともせぬ強い柱を己で持っておらねばならぬであろう。徳川様には四百万石からの幕領と三河以来の忠臣八万騎があるが、儂にはそれがない」

「それゆえ殿は、それをこれからお作りになるのでございますか」

「……」

「殿には秘策がおありなのでございますな」

清左衛門は己でも気づかずにつぶやいていた。そういう気がした。

盆が転がされぬための秘策。この大村を戦火にさらさぬ一手だ。

「さよう……」

喜前公は海を見たまま頷いた。

それならば清左衛門はそれを手伝うことだ。修道士をやめざるをえなかった身にこの先できることといえば、喜前公を手伝い、この大村にいくさを呼ばぬことだろう。

「殿ならそれがおできになりましょう」

清左衛門は心の底から思っていた。政が分かったわけではないが、大村が堅固に治まっていなければ、大きく変わろうとしている世に取り残されてしまうのだ。取り残されるとは他国と差がつくということで、差がつけばそこにいくさが生まれる。

「清左は儂に力を貸してくれるか」

清左衛門はうなずいた。これからは懸命に政を学び、この従兄弟の力になることだ。

「清左が来てくれて、どれほど心強いと思うていることか」
「私こそ。残りの生涯をかけるものを、私は殿にいただいたようでございます」

二

珠たちが玖島に移って二度の冬がすぎ、慶長八年（一六〇三）の春になった。この二月、徳川家康公が征夷大将軍に任ぜられ、祝賀の挨拶に江戸へ出かけていた喜前公は、先日ようやく玖島へ戻って来た。そうなるとまた清左衛門の暮らしは慌ただしくなった。
大坂よりも京よりもずっと東の、江戸という徳川家の城下では、大きな山を崩し、海に地面を広げて、目もくらむような立派な町が建ちつつあるという。京と大坂を一つにしたよりも広く、徳川家の城は五層七階の天守閣を黄金に造りかえているのだそうだ。
「私には天下は定まったとしか思えぬのだがなあ」
玖島城で喜前公を出迎えた清左衛門は、江戸のようすを聞くにつけそう思うと珠に言った。天下が定まるということ自体、珠には意味が分からないのだが、清左衛門が笑って話してくれることには、うんうんと頷いておくのだった。
玖島での新しい毎日は、珠には夢のようなものだった。長崎ではあれほど人の口が気にかかり、ほんのふた月とはいえ、それまで親しかった人にも手のひらを返されたような暮らしをしていたのに、ここでは誰もが珠たちに親切だった。侍の暮らしというのは主君のお覚えさえめでたければ、あとは何もしなくてもひとりでに進んでいく。それが珠の新しく知ったことだった。
はじめは物見高く肩をそびやかして噂していたらしい城下の人々も、清左衛門が登城をはじめると一気にうちとけてくれた。大きな邸なのに手伝いを入れなくていいのかと誰彼となく親切に聞いてくれ、このくらいなんでもないと答えたら、清左衛門殿の奥方は城下一の働き者だとあっという間に評判がたった。
玖島へ来た年の秋にはあれほど悪かった清左衛門の手足のしびれる病がうそのように消えてなくなり、年の瀬には赤児が生まれた。その子には清左衛門の一字をとって清助と名づけた。
新しい暮らしをはじめて一年も経った時分には、珠は長崎を思い出すこともないほど玖島の生活になじんでいた。清左衛門はいよいよ喜前公に信任され、藩家老の一人にかぞえられていた。清左衛門には南蛮の修道士の襟の詰まった黒服がいちばん似合うと思っていたが、今では大小をさして城へむかう羽織袴の背が、珠のなによりほっとする姿になった。
今日も私は無事に清左衛門様をお城へ送り出した。ちゃんと送り出しさえすれば、あとは清左衛門様がうまくやってくださる——

伊奈姫に借りたままになっている広い邸にこうして雑巾をかけているときなど、珠はあまりにしあわせで涙が浮かんでくることもあった。

修道士だった清左衛門が、天主様ではなく珠を選んでくれた。いつだったか伊奈姫がからかって言った言葉が、今では己で信じられるようになっていた。

学林の下仕えだった珠が、藩家老と夫婦になって伊奈姫の邸に暮らしている。邸は借り物だけれど、それでもこの大きな邸の女あるじは珠なのだ。

珠は縁側を拭く手を止めて、庭の生垣の先へ目をやった。

はじめてこの町へやって来たとき川とまちがえた玖島城の堀が、たっぷりと水をたたえてお天道様に光っている。

今日、清左衛門はいつもより半刻早く家を出た。城に難しい話が来ていると聞いたのは一昨日のことで、今日はその使者と清左衛門が城で会うことになっていた。

「やはりお前様がお会いになられるのですか」

門のところまで送りながら珠はそう尋ねた。喜前公に面会を求めてやって来たのは天主教の修道士たちだったから、清左衛門が学林へ引き戻されるのではないかと思ったのだ。

「ひとたび修道士をやめた者を、学林だろうと天主堂だろうと呼び戻すはずがないだろう」

清左衛門は、思いもよらぬという顔で珠をふり返った。

「でも妻や子を置いて修道士になられた方の話を、珠は聞いたことがあります」

清左衛門は笑顔で首をふり、玖島へ来ているのは説教会の修道士だと教えてくれた。

「説教会というのは私たちがいた耶蘇会とは別なのだ。ある会の修道士をやめて別の会の修道士になったという話は私も聞いたことがないから、珠はなにも案じることはない」

「ですが同じ天主様を奉じているのでございましょう」

「それはそうだが、この日の本でも、たとえば浄土宗と日蓮宗は違うのだろう。きっと、そのようなもの……、ではないのかな」

珠と清左衛門は互いに首をかしげて、御仏の教えというのはどうなっているのだろうと呟きあった。

「とにかく私は喜前公の家臣をやめぬゆえ、珠は安んじておるがいい」

わざとふざけて清左衛門は胸を張った。主の喜前公が戯れ好きだそうで、清左衛門もこの二年の間におどけて見せることが多くなっていた。

珠はばかだ。清左衛門が修道士に戻れるはずがないことはちゃんと分かっているくせに――

珠は盥（たらい）のところに立ってゆき、力いっぱい雑巾をしぼった。

なにげなく盥の水をのぞいたら、いやにくっきりと珠の顔が映っていた。珠はきっと少しも雑巾に力を入れていなかったのだ。

珠は大急ぎで縁側に戻り、もう一度端からやり直した。

城の御用部屋で二人の修道士と話した清左衛門は畳廊下を小走りになって戻っていた。学林や修練院にいた時分は廊下を走ったことなどなかった。修道士にはできるかぎりの沈黙が課されていたし、廊下は天主堂のごとく、心を静めてひっそりと歩くように定められていた。どのみちあの時分の清左衛門には走ることなどできなかったのだが、武士になって暮らしも変わった。周囲と同じように大股で歩くことも駆けることもできるようになり、また清左衛門自身、気が急く（せ）ことも多くなった。

御座之間（ござのま）の襖を開けると、喜前公と筆頭家老、大村彦右衛門が同時に清左衛門を見上げた。

清左衛門は頭を下げて座った。

「用件は何でござった。やはり千々石殿の思うておられた通りか」

清左衛門が頷くと、彦右衛門は顔をしかめて上座の喜前公へ目をやった。

大村彦右衛門は、齢は四十あまりの恰幅（かっぷく）のよい大村一門の武将である。純忠公の代か

ら大村家の家老をつとめ、伊奈姫を朝長大学頭に娶（めあわ）せるよう進言したばかりでなく、伊奈姫の妹を平戸藩松浦（まつら）家へ嫁がせることに成功して、長年にわたる平戸藩との争いに幕を引いた。純忠、喜前の両主君に影のように仕え、大村をここまで保ってきた大村家第一の智者だった。

清左衛門もまた彦右衛門に、この二年のあいだに多くのことを教えられてきた。

「さても厄介を持ち込まれたものよ」

喜前公が首をなで、彦右衛門がしみじみと頷いた。

今日、玖島城を訪ねてきた説教会の修道士は、ここ大村で伝道する許しがほしいと喜前公に乞うてきたのである。

説教会とすれば無理もないことだった。天下が事実上豊家から徳川へ移り、秀吉の出した伴天連追放令は反古のようになっていた。南蛮船が入るといえば昔も今も大村領内で、長崎には耶蘇会の大きな天主堂が建っている。耶蘇会におくれてこの地に来た説教会としては、かつて耶蘇会が庇護されたように、廃寺もゆずり受けたければ、伝道にでも商いにでも、日本中へ旅立てる足がかりの地が欲しかった。それには、上は藩主から下は童まで等しく切支丹という大村藩は最良の場所だった。

だがそれがどうしてまずいか、政に関わるようになった清左衛門には少し分かるようになっていた。この御座之間にいるのは三人とも切支丹だが、それとこれとは別だと飲

みこんでしまえるのが、政の酷く、醜いところなのかもしれなかった。

「儂としては、許しの一状ぐらい呉れてやりたいが」

喜前公がちらりと目をやると、やはり彦右衛門は即座に首をふる。

「わが藩は大事の前でございますぞ、殿」

「わかっておる」

清左衛門も彦右衛門の言う通りだと思う。大村には今これ以上の天主堂を造らせるわけにはいかないのだ。

彦右衛門はわずかに清左衛門のほうへ膝をつめた。これは清左衛門に政を説くという彦右衛門の合図で、半面、喜前公に決意させる働きも持っている。彦右衛門は清左衛門に政を教えつつ、その理の正しさを喜前公に納得させる。

「今は世が大きく変わる折にございます。豊家の政がそのままこれからの政とは、ゆめ考えてはなりませぬぞ」

「ならば、豊家の禁令から逆に、天主教を大いに許す世となるかもしれぬであろう」

「殿が一介の武士ならば、そのようなお考えで十分でござりましょう。禁令の逆、切支丹かまいなしの世になるかもしれぬと。大いにけっこうでございますな。ですが藩主ともなられれば逆の逆まで考えておかれねばなりませぬ」

彦右衛門は喜前公のほうへ首を向け、それに喜前公はなるほどと、うなずいてみせる。

「逆で止まった場合は大村家にとっては好都合。何もあわてることはござらぬゆえ、殿が煩われることはありませぬ。当家が考えておかねばならぬのは逆の逆。天主教が禁じられ、領内に残るは切支丹ばかりなり、という場合のことでござる。そのとき慌てても間に合いませせぬぞ。まだ徳川の政は明らかになっておらぬということを、ゆめゆめお忘れなきよう」

「ふむ」

「天下人は天下人どうし、豊家と徳川は同じことを考えると思っておかれたほうが宜しゅうござります」

なるほどと清左衛門は思った。大村家が踏みつぶされぬためには、不都合に転んだ場合のほうを考えておくのだ。

彦右衛門は清左衛門を見て満足そうな笑顔を浮かべた。

「わが大村家は南蛮の事情に明るいぶん、日の本の中央には昏（くら）い。それを補うには、熊本の加藤家との縁は何をおいても保たねばなりませぬ」

清左衛門もうなずいた。

「この彦右衛門とて切支丹でございます。当家に大事さえ控えておらねば、清正公や徳川様に多少お覚えが悪かろうと、天主教の隆盛に力を貸しとうござる。ですが天主教を奉ずるあまり大村家が滅ぶようなことになれば、私は純忠公に申し訳が立ちませぬ」

「相分かった。不憫じゃが修道士殿には許し状はやれぬと言うてくれ」

喜前公は御座之間を立った。

喜前公の足音が消えると、彦右衛門はまっすぐ清左衛門のほうへ向き直った。

清左衛門もわずかに膝をつめた。

「当家に控えている大事とは何か、お分かりになりますかな」

「……」

「殿には、おいおい千々石殿には話しておけと言われております。殿はそこもとを格別にご信頼あそばしている」

そして誰より、この彦右衛門をだ。

「千々石殿。わが殿は大した器でございますぞ。このような世にあれほどの藩主をいただくことができた大村家は、まさに強運と言わねばなりませぬ」

清左衛門はうなずいた。

喜前公はかつて龍造寺家へ人質にやられ、龍造寺によって父の純忠公を押しのけて大村領主に据えられた。龍造寺の傀儡（くぐつ）として純忠公に敵対させられるなか、ついには龍造寺の搦（から）め手から逃れ、今の大村藩を築いたのだ。

「当家は喜前公がおわすあいだに、内を拵（こしら）え直さねばなりませぬ」

「……御一門という十五本の柱を、殿の一本に作りかえるということでございましょう

か」

彦右衛門はぱっと明るい顔になった。

「ようお分かりじゃ。して、十五本の柱とは」

「各家が大村の領内に己の土地を持ち、民をかかえていること……」

「さよう。たとえば伊奈姫様の琴海のご領地では、米の一粒から耕す百姓に至るまで、ことごとくが伊奈姫様のものでござる。だが他藩ではそうではござらんな。他藩では領国内では百姓から物成（ものなり）に至るまで、なにもかもが藩主一人のものであり、それを家臣どもが手分けして藩主の下へ運び集めてまいります。そうしていったん全ての物成を藩主の下に集めた後、おのおのの働きに応じて藩主から分けていただく。禄とは元来そのようなものでござる」

今のままでは喜前公はこの大村近辺の、頭一つ大きい領主にすぎず、内から見れば決して藩主と呼べるほどのものではない。徳川家の下、それぞれ独立の経済で成っている藩があるのと同じように、喜前公の大村藩内でも、自立した一門各家が立っている。徳川家にしろ喜前公にしろ、己の支配を堅くするには、あるていどの創意がいる。

「たとえ伊奈姫様が琴海を支配しておられようと、それは殿の名代としてその地におわすにすぎぬ。これからの大村は、そのような形にせねばなりますまい」

徳川家は日の本中をいったん家康公の下に集め、家康公の名で諸侯に分配し直した。

そして諸侯は新しく分配された藩を、本領安堵と呼んで押し戴いた。

「御一門の所領を、残らず殿に返上していただく。ここが肝要にござる。召し上げではなく、返上でござる」

清左衛門は何も言えずに彦右衛門を見た。こうなってくるとよく分からない。召し上げでも返上でも同じことではないのだろうか。

彦右衛門は顔から読み取ったのか、清左衛門にゆったりと微笑んでみせた。

「当家に参られたとき、千々石殿がまっさきに申されたことではないか」

「私が、でございますか」

「さよう。殿が、そこもとは一門ゆえ六百石では少なかろうと仰せあったとき、千々石殿は、己のように何も持たぬ身が六百とはおそれ多いと申されたであろう」

「いかにも……」

「それでござるよ。わが大村では一門がそれぞれの土地を持ってまいったゆえ、同じ六百を貰うても当然じゃとしか思うておらぬ。もとは何も持たぬはずの身が、殿によって六百をさずけられたとの念がないのじゃ」

だがそれでは困る。同じ禄を食(は)ませるにも、もとは喜前公の所領なのだと頭に叩きこませておかなければならない。

「それゆえ所領を返上させる。もとは喜前公の土地じゃ。召し上げる必要はない」

分かったような分からぬようなという顔をしていたのだろう。彦右衛門はそれでよいのでござるよと言ってほほえんだ。

「今、千々石殿に知っておいていただきたいのは、この智恵をさずけてくだされたのは清正公じゃということでな」

「御一門の所領返上……、の一件でございますか」

だが清正公は他国の領主ではないか。

「そのような顔をなさらずにの、千々石殿。殿は前々からなんとかせねばならぬと考えてこられたが、打つ手がなかった。ところがあるとき清正公がどっかりと殿の前に胡座(あぐら)を組まれてな」

彦右衛門は己まで胡座になり、軽く膝を打った。

「喜前殿はいつまで爺婆(じじばば)どもの寄合所帯の長でおられるつもりじゃ。そのような国では、いざ一いくさとなればものの役にも立たぬわ。あちらの爺、こちらの婆と気をつかい、肝心の父祖伝来の地が消えぬようになされよ――

「清正公は、儂ならばとうに一門の土地ことごとく返上させておると、大笑いなされたそうじゃ。そして、せいぜいその国情を他国に気取られぬようになされよ、とも申された」

見込むに足る御方であろうと彦右衛門は言った。

朝鮮から帰ったあとの清正公は、純忠公を亡くした喜前公の父代わりになった。そして今は何をさておいても所領返上を断行し、徳川への根回しも怠るなと言い続けているという。御家騒動ととられかねないからだ。

「しかし徳川様への根回しと申しても、われらには清正公しか頼れるあてはござらぬ」

「根回しとは……、どのようなことを指すのでございましょうか」

彦右衛門ははっと目を見開いて、今度は大きく音がするほど膝を打って笑った。

「それはなかなかに難しゅうござるな。ただ当家の一件についてであれば、あらかじめ徳川様には当家の所領返上をご承知おきいただいて、いざ喜前公が実行なされた折は、決して内紛とは断じぬと内々に言質（げんち）を貰うておく、とでも申しますかの。清正公には、喜前公がいかに健気に徳川様のために働く大名であるかを将軍家のお耳に入れておいていただくのじゃ。そうであればこそ、徳川様も大村家を生かしておいてくだされる」

「それゆえ清正公は格別に大切な御方なのでございますか」

「さよう。大村を保ち、この地にいくさを呼ばぬためでござる。当家としては徳川様のお覚え云々より、まずは清正公じゃ」

清左衛門もうなずいた。

「だがそうなると、いずれわれらは、切支丹を止めねばならぬやもしれませぬがの」

そう言いながら彦右衛門は襟に手をやって、首にかけていたロザリオを胸の前に出し

てきた。

「清正公は熱心な日蓮宗徒というより、あれは切支丹嫌いでござるな。肥後国の天主堂をいくつも……、無惨に焼き払われたそうじゃ」

それは清左衛門も聞いている。

だが純忠公も大村に天主堂を建てるときは道々の寺社を焼き払って進んだものだった。侍というものは常、やることが極端で、血を好み、敵とみれば根絶やしにせねば気がすまぬ獣なのだ。

「千々石殿。そこもとは何でもお顔の色に出るが、侍ばかりを責めることはできますまい。清正公であれ純忠公であれ、けしかけたのは僧や修道士の側でございますぞ」

清左衛門は驚いて顔を上げた。真実、彦右衛門はなにもかも見通しているらしい。

彦右衛門は悠然とほほえんだ。

「的を射ておりましたかな。だが実を申せば、そこもとの顔を読んだわけではござらぬ。儂がこう申せば千々石殿ならばこう考える、そう思うた上でそれに返答を申したまでで な」

「……………」

「そこもとが学林で天主教を学んでおられた間、儂はそのような下らぬことにばかりかかずらって参ったのじゃ。政など、相手の出方を読むばかりで、ふと気づけば己の見上

げておった高みなど、とうに忘れている。己の読み通りに動いたというて得意になっておる愚か者の、砂の掛け合いよ」

「そのような。ご家老様が喜前公ともども読みを誤られなかったからこそ、豊家の九州征伐も徳川の関ヶ原も乗り越えられたのでございます」

彦右衛門はなにごとかを考えているような顔でロザリオを握りしめている。

「清正公は肥後国から天主教の司祭と修道士を追放なされた。おもだった家臣には転（ころ）び証文を書かされたそうじゃな」

「転び証文？」

「切支丹をやめるという誓紙でござる。肥後といえば、かの大友宗麟公とも縁が深く、長らく清正公と小西行長に二分されてまいった土地じゃ。小西行長も名だたる切支丹大名であったというに」

その時分のことなら清左衛門にも多少は分かる。宗麟公は清左衛門たち四人を南蛮へ送り出したほどの切支丹だった。

「それゆえ清正公は切支丹に業を煮やされたのかもしれぬがな」

「しかし転び証文とは」

「さよう。太閤の追放令など足もとにも及ばぬ厳しいものでござる。そしてそれを徳川様は、大いにやれと清正公に申されたとか」

清左衛門は目を見開いた。

彦右衛門は長いため息を吐いた。

「しかとは分からぬが。まあ、これが政であり、根回しともいうものでな。へたな式目よりもあてになるのでござる」

彦右衛門は手のひらの十字架をじっと見つめて、それから着物の内側へ戻した。

「千々石殿。儂とて切支丹じゃ。信仰は棄てられるものではござらぬ。だがそれによって国が荒れるとなればどうであろう。それでも信仰を棄ててはならぬと天主は仰せになるのであろうか」

清左衛門はうなずいた。何があろうと信仰を棄ててはならぬ。ただ一言、天主を棄てると口にすることすら、天主はお許しにならない。

「私はこの世へ火を投ずるために来たと、天主のお子は仰せになっておられます」

「だがのう。あの二十六人の殉教を、そこもとも覚えておるであろう。日の本に天主教さえ伝わらねば、あのような酷いことにはならなんだと思わぬか」

清左衛門は静かに首をふった。天主がおわすのは真実なのだから仕方がない。天主教が伝来したかどうかには関わりがない。

「千々石殿。……清正公は棄教者は出されたかもしれぬが、殉教者は出しておられぬぞ」

胸を衝かれたようになって、清左衛門はつい背を反らせた。己の顔のどこかに、殉教がなにより嫌いだと書いてあるのだろうか。それを見つけて、彦右衛門は問いかけているのだろうか。

「よいか。僧が寺を焼き払われたとて命を捨てるか。幼子を道連れに火の中へ身を投ずるか。そのようなさまを見て清正公が憎悪されたとて仕方あるまい」

「……」

「徳川様の政が天主教を禁じると定まったとしても、肥後国は清正公の働きで一人の殉教者も出さずにすむのではないか。そうであろう、もう肥後国には宣教師は一人もおらぬのだからな」

「ご家老様は徳川様が天主教を禁じると……」

「いずれ、そうなるのではないか」

「なぜでございます」

「儂に天下人の考えなど分かろうはずがない」

それにしては、確信を持っているではないか。

彦右衛門は清左衛門にほほえみかけようとした。だが笑顔とまではいかず、唇がひきつれた。

「儂は相手の出方を読んでおるだけよ」

そしてこれほど清左衛門の考えを読み当てているということは。

「駒がすすむほど、次の一手はかぎられてくるものでな」

「……」

「のう、千々石殿。この大村を、殉教者だけは出さぬ国にせねばなりませぬな」

「……」

「死なんでくれと泣いてすがる親に、涙も見せずに天主の国で待っておるとうそぶきおったと、清正公は怒り狂うておられた」

侍者だった幼い殉教者の、長崎西坂の刑場でのありさまだ。後から聞いた清左衛門も心のどこかでは清正公と同じように考えた。

さて、と彦右衛門は一つ息を吐いた。

「では儂は修道士殿に申し渡してくるとしよう。そこもとはもう戻られるがよい。今日は早くからご足労をかけ申した」

清左衛門は頭を下げた。

座敷を出て行くとき、彦右衛門は満足そうに清左衛門に笑いかけた。そのとき清左衛門は、そなたが棄てよと言われた気がして、ふと耳を澄ませた。

そこもとが棄てよ。どうせ一度棄てたのではないか――

大手門をくぐって堀を渡るときも、もう一度その声が聞こえた。

清左衛門は城をふり返った。

信仰など、そこもとが棄てよ。そこもとはすでに天主を裏切った身ではないか——

久しぶりに玖島城へ来ていた伊奈姫は、今日は領国へ出立という昼前に珠を訪ねて来てくれた。二歳になっていた清助に、手ずから縫ったという衣を三枚もくだされて、珠はもうおそれ多すぎて気が遠くなりそうだった。

「この子が無礼にも大きくなり、まりいた様の衣が入らなくなったらどういたしましょう」

ばかげたことを口走って伊奈姫と清左衛門を大笑いさせた。

「赤児はきっとまだまだ生まれますよ。そのお子たちにも着せてやってください」

しあわせというのに天井はないのだろうかと、珠は伊奈姫と清左衛門をかわるがわる見ては頭を上げたり下げたり、一人で忙しくしていた。

伊奈姫は、このように広い邸をたった一人で、幼子も抱えながらきれいにしていると言って珠を褒めてくれた。

「ねえ、珠。じゅりあん様がお戻りになるのですって」

珠が茶を運んで来たら、待ちかねていたように伊奈姫が言った。

そのときの清左衛門の嬉しそうな顔で、やっぱりしあわせに天井はないのだと珠ははっきり分かった。清左衛門のこんな明るい笑顔は、珠は見たことがなかった。

「ではついに司祭様になられるのですか」

清左衛門と伊奈姫は笑顔を交わしてうなずいた。

「遅すぎたくらいですもの。長崎にお着きになって、その足できっと、あの天主堂で」

伊奈姫はうっとりと目を閉じた。

珠も一昨年のせばすちあんの祭礼の日を思い浮かべた。天の国と見紛うばかりの荘厳な天主堂。じゅりあん達と最前列に佇んでいた清左衛門は、次に司祭となる特別に輝いた修道士だった。

だがあれからすぐ清左衛門は耶蘇会を出たのだった。

私たちは話したのだ。もう十分、話して決めたのだ——

あのときの清左衛門の泣き声はまだ珠の耳朶に残っている。

「本当にお迎えに行かれませんの」

驚いて珠は清左衛門を振り向いた。清左衛門は静かに伊奈姫に首をふっている。

「お城で申し上げた通りにございます。私が湊におれば、学林の方々も肝をつぶされましょう」

「ですがお三方は、清左殿のお姿が見えねばさぞ落胆なさいますよ」

もう一度清左衛門は首をふった。

「ジュリアンたちは私の心を知っております。私の風聞を誰からどのように聞こうとも、ジュリアンたちは今の私の、この胸の内を分かってくれております」

「清左殿……」

「私は何も案じておりませぬ」

それに、と清左衛門はほほえんだ。

「マリータ様は行ってくださるのでございましょう」

伊奈姫がうなずくと、清左衛門はほっとしたようにため息をついた。

伊奈姫はしばらく清左衛門から目をそらさなかった。そして最後にうなずいた。

「どうかジュリアンに伝えてくださいませ。迎えに行かれぬ私を許してくれ、と」

「分かりました。では私が皆様にお会いしてまいります。これまでのことも、これからのこともきっと話してまいります」

清左衛門はなにか胸にあるような顔をして目を閉じた。珠はただ清左衛門を見たり伊奈姫を見たり、どことなく居心地の悪いような気がしながら、それでも清左衛門が学林の近くへ行くよりはここにいてくれるほうがいいと思っていた。

それから三月もしないうちにじゅりあん達は帰って来た。

だがいくら待っても三人が司祭になったという報せは届かず、やがてじゅりあんは長

崎を離れ、島原の修練院へ移ったと伊奈姫が文をくれた。

清左衛門が見せてくれた伊奈姫の文には、ひときわ力強い墨の色で、清左衛門に伝えてほしいと言われたじゅりあんの言葉が記してあった。私はいつも祈っている、天主の栄光が清左衛門と共にあるようにと。

三

慶長十年（一六〇五）四月、江戸では家康公が将軍職を退き、秀忠公が後を継いだ。いまだ大坂には豊家があったが、これで天下は徳川家のものと明らかになったようなものだった。豊家があろうとなかろうと征夷大将軍は徳川家の世襲で、日本中の大名は幕府に臣従する。江戸城の周りでは諸侯が競うように普請を続け、徳川家のために地面を広げていた。各藩は徳川家の意向を汲むのに必死になり、秀忠公がなにも言わぬうちから参勤交代をはじめていた。

これからの世で徳川に従っていくことがどれほど肝要か、徐々に明白になっていた。だから幕府から大村家に長崎替え地の案が持ちこまれたとき、たとえそれがどこのどんな土地とであろうと決して否と言えぬことは清左衛門にも理解できた。

大村家には浦上、家野（よの）、外目（そとめ）の各村がかわりに与えられ、大村家はそれを三拝して受

けた。

「石高は等しゅうござるがな」

　と彦右衛門は忌々しげにつぶやいた。穫れる米の高は同じでも、この日の本に、長崎にかわる湊はなかった。

「こうなれば、残る手だては一門の所領返上じゃ。さもなければ儂は干上がるわ」

「とは申せ、策がござりませぬ」

「策はある」

　喜前公が重苦しく口を開いた。

「儂さえ天主の罰を受ければよいことではないか。大村家を滅ぼすわけにはゆかぬ」

　天主の罰？

「殿にばかり忍従いたさせて家老がつとまりましょうか。棄教ならば私が」

「棄教？」

　清左衛門は口をはさんだ。

「いったい何の話をなさっておいでなのです。御一門の所領返上の件ではないのですか」

　喜前公が首を一なでして脇息（きょうそく）にもたれこみ、かまわぬから話してやれと彦右衛門に言った。

　彦右衛門は渋々という顔でうなずいた。

「殿は一門の所領返上を考えられた初めから策を持っておられる。清正公がおさずけくだされたゆえな」

　筆頭家老にしてみれば己の智恵のなさを明かすようなものだった。

「この大村の一門はことごとく切支丹でござる。そこで殿が宗旨替えをなされたとすればどうなるか」

「宗旨替え、ですと」

「さよう。一門ことごとく喜前公には従わねばならぬが、まさか昨日まで己が親しんでおった天主堂をおのが手で焼き打ちなどできまい。領主どもが見ざる聞かざるで喜前公のご処分を待っておる間に、駆けるように戻ってくるのは坊主どもじゃ……。もとはおのが寺であったところへ南蛮人が入っておるのじゃ。日の本各地の本山の後押しを受け、喜前公の御名を讃えながら、あっという間に大村一帯に広がるではないか」

「まさか本心、そのような……」

　うろたえている清左衛門の横で、喜前公が脇息に肘をついたまま言った。

「これこそ清正公がさずけてくだされた秘策じゃ。清正公は申されたわ。藩内に伴天連追放令を出すだけでよい、さすれば後は、諸国の寺社が地面を均してくれるとな」

　土地と庇護を与えてくれた藩主には、寺社は心から臣従するだろう。もちろんその地

を治める一門各家にではなく、呼び戻してくれた喜前公に信を置く。と同時に領主と領民のつながりは切れ、逆に喜前公との関わりが強くなる。
「ほかに手だては……」
清左衛門は、喜前公を見ては彦右衛門を見た。
「ご家老様……」
「考えてもみられよ。この大村に苔のように一面びっしり立ち並んでおるのは、切支丹とつながりのある家屋敷のたぐいじゃ。殿がなにより返上させたい土地と、密に関わっておるであろう。それをいっせいに取り上げることができ、しかも後には喜前公を崇(あが)める者どもが暮らすことになる。これこそ、器はそのままに、内だけごっそり替える最良の策でござる」
「しかし棄教せねば成らぬことならば無理でございましょう」
そのとき喜前公が脇息から身を起こした。
「儂が宗旨替えすればよいことであろう。表は清正公にならって日蓮宗徒にでもなるわ。さすれば策は成り、大村は安泰じゃ」
「まさか、殿」
清左衛門は上段へにじり寄った。
喜前公も彦右衛門も、どちらもこれ以上ないというほど顔を歪めている。だが棄教など、口にするだけで身が汚れる。棄教するくらいならば――
「棄教せねば、いずれ大村は滅ぶではないか。儂一人が宗旨替えして大村の戦火を防げるならば、儂は民のために喜んで天主教を棄てる」
「殿。愚かなことを申されてはなりませぬ」
清左衛門の声は大きくなっていた。
だが喜前公は、上段から斬りつけるような目で清左衛門を見た。
「清左。長崎と浦上の替え地の一件、だれが仕組んだと思うておる。あの一件、説教会の企みというぞ。先達て、この大村で伝道させてくれと言うたのを儂は断った。あれの逆恨みと申すではないか」
「逆……恨み？」
「大村藩は耶蘇会にしか伝道させぬ、あのように耶蘇会と親しんでおるのは、さてはまた長崎を耶蘇会に寄進するつもりではないかと、徳川家に囁きおったのは説教会じゃぞ」
「まさか、そのような」
「まさかなものか。よいか、耶蘇会と説教会が何を競い、どのように争うておるかは知らぬ。だが妙なことを言われては、この大村の家が滅ぶのじゃ。鎌倉の昔から国主であった大村家が儂の代でつぶれるようなことになれば、儂は死んでも死にきれぬぞ。それ

も戦国の世に他国と覇を競うて敗れたというならまだしも、南蛮人の讒言で、申し開きもできぬ間に取りつぶされてみよ。儂は土の下で恥ずかしゅうて、敗残の将の列にも加われぬではないか」

「ですが……、ですが棄教とは。殿は天主堂を焼き払い、切支丹を殉教させなさるおつもりでございますか」

清左衛門が上段に目をやると、喜前公はぷいと顔をそむけた。

「今のうちに追い出しておけば、殉教のさまを見ずにすむというものじゃ」

「ですが藩主が棄教したとなれば、寺社はどのように増長するか分かりませぬ」

「それとて坊主が修道士にかわるだけの話じゃ。儂はもはや飽いたわ」

そのとき彦右衛門が静かに口をはさんだ。

「私が棄教いたします」

「彦右衛門が？」

「私という奸臣が殿に棄教をそそのかし、先走って伴天連追放令を出したことにいたします。所領返上が成ったところで、私を閉門にしていただきます。さすれば伴天連追放令も殿の手で覆していただけます。殿は棄教なされずともすみましょう」

「ご家老様……」

喜前公なり彦右衛門なり、棄教しなければ成らぬことなのか。なにか代わりの策。大

村にいくさを起こさぬ道。なにか、喜前公が棄教せずにすむ一手。

そなたが棄てよ。どうせ一度棄てたのではないか――

清左衛門は耳を澄ませた。だれか、何か言ったのか。

そなたが棄てよ、そなたが棄てよ――

「……彦右衛門では皆も妙じゃと思うであろう。いずれ、儂が棄てねば収まりがつかぬ」

清左衛門は目を閉じた。深く息を吸い込んだ。

「ならば私が……」

喜前公と彦右衛門が同時に清左衛門をふりむいた。

「この清左衛門が天主教を棄てましょう。もとは修道士であった清左衛門が殿に天主教の悪を説いたとあれば、一門の皆様も、殿がいっとき惑わされても不可解とは思われますまい。その間に所領返上を断行なさり、ほとぼりがさめたところで殿は天主教に立ち返られたことにする。さすれば誰も不審には思いませぬ」

「待て、清左」

清左衛門は首をふった。大村を守るに一門の所領返上しか打つ手がなく、所領返上にだれかの棄教がいるなら、棄てる者は清左衛門をおいてほかにない。

棄教するほどの罪を、喜前公にも彦右衛門にも犯させたくはない。

「私が殿に棄教をすすめたと、藩内にどうぞ仰せになってくださいませ。ですが、どうか殿は決して棄教なさらないでくださいませ。喜前公が天主教を棄てたとなれば、皆どれほど嘆き悲しみますことか。どうか殿だけは……」

そのとき喜前公は上段から駆け下りて、膝に置いていた清左衛門の拳を強く握りしめた。

「相分かった。私は決して天主教は棄てぬ。清左との誓いは必ず守る。所領返上が成れば、儂は棄教しておらぬと触れを出す。そしてまた、元どおりの大村を作るぞ」

「千々石殿。所領返上ののち、千々石殿の棄教はいつわりであったと、大村じゅうに撤きましょうぞ。さすればそこもとの汚名もすぐ消える」

「……かたじけのうございます」

清左衛門は膝の上の拳をひらくことができなかった。

一度棄てれば同じことだ。一度でもこの口から信仰を棄てると言ってしまえば、天主の前では同じなのだ。命よりはるかに重い信仰を、一度でも棄てると言った清左衛門には生きている価値もない。

あの美しい羅馬に行ったミゲルが、たかが小さな半島を守るために信仰を棄てるのだ。こんな小さな大村を守るために、天主教を棄てるしか道がないなどということがあるものか。清左衛門が愚かにも他の道を見いだせなかっただけのことだ。

「清左……」

「千々石殿、どうか……」

彦右衛門が清左衛門の頬に手を伸ばそうとした。清左衛門も気づかないあいだに涙が頬を流れていた。

「千々石殿……」

己は信仰を棄てたのだ。あの輝く羅馬にもミゲルが棄教したことは伝わるだろう。あの大きな南蛮船が西班牙（イスパニア）や葡萄牙（ポルトガル）の町へ入るたび、日本へ帰り着いたミゲルの愚かしいその後を語るだろう。ミゲルは天主を棄てた。ミゲルは教皇を裏切った。天主はこれまで一度としてミゲルを見捨てられたことはなかったのに。

「清左」

「千々石殿」

二人の声が遠くなる。

南蛮使節のミゲルは棄教者になった。なぜミゲルは南蛮へ行った？　なぜミゲルの南蛮船は沈まなかった？　なぜミゲルは日の本へ帰ってきた？

ぐらりと頭がかたむいて、清左衛門はそのまま仰向けに座敷に倒れた。

慶長十一年（一六〇六）二月、喜前公は大村領内に伴天連追放令を出して江戸へ出立した。諸法度で参勤が定められたわけではなかったが、諸侯は我先に隔年の江戸在府を願い出、喜前公もこの四月から江戸で一年を過ごすことになっていた。

「このごろお城へ登られないのですね」

縁側に出てぼんやりと玖島城の堀を見ていると、背に赤児をくくりつけた珠が声をかけた。珠は三月前に二人目の子を生んだばかりだが、こまめによく働いた。清左衛門が棄教したと人づてに聞いても問いただすこともなく、それなら私も棄てることにいたしますと笑って言っただけだった。

「殿が参勤へ出られたゆえな。この一年はゆっくりできるぞ、珠」

「さようでございますか」

珠は背の赤児を見やりながら嬉しそうにほほえんだ。二人目も男で、名は玄蕃という。

今年、喜前公が大村を出立するのにあわせて伴天連追放令が出されることは去年から決まっていたことだった。まず清左衛門が棄教して喜前公に天主教の悪を説き、さしもの喜前公も宗旨替えに心が傾きつつあるという大芝居が一年をかけて少しずつ進められてきた。もちろん幕が下りるのはさらに一年後、御一門の所領返上が成ったときである。

伴天連追放令が大村領内に広がるにつれて、これまで噂にすぎなかった清左衛門棄教の風聞は、確実なものとして伊奈姫の琴海、学林のある長崎、ジュリアンの教える島原

へと伝わっていくだろう。伊奈姫は怖くない。ジュリアンも怖くない。だから清左衛門はこの世に恐れるものなどない。この世には。

「あの、お前様」

清左衛門がふり返ると、珠が清助の手をひいて庭に立っていた。

「内田川のそばに鶏を飼う百姓家があるのですが、今日、玉子をいただきに参ることにしていたのです。お前様がおられるとは思わなかったものですから」

「ああ、そうか。気をつけて行っておいで。清助は私が見ていよう」

「でも」

「かまわぬ。清助、父とともに母上のお帰りを待っていよう。おいで」

手招きをすると清助はぱっと珠の手をほどいて清左衛門のもとへ走ってきた。

清左衛門は清助を膝の上へ抱きあげた。

「清助、母上にご挨拶をしなさい」

「はい。行っていらっしゃいませ」

清左衛門と珠は顔を見あわせてほほえんだ。

「では、お前様」

珠は玄蕃を背負いなおすと出て行った。

後ろ姿を見送りながら、これからしばらくは珠を手伝ってやることだと清左衛門は思

っていた。よしなしごとを考えず、地に足をつけた当たり前の人の暮らしをすることだ。

　この正月、早くも清左衛門が棄教したと聞きつけた熊本の清正公は、わざわざ清左衛門にお褒めの言葉をたまわった。

　実は亡き太閤様より、南蛮使節の一人でよい、棄教させるよい手立てはないものかと言われたことがあったのじゃ。太閤様もさぞかし喜んでおいでであろう。いや、めでたいのう――

　清正公が上機嫌であったと、これまた上機嫌で清左衛門に話して聞かせた喜前公は、これでそなたも棄教した甲斐があったというものじゃなと付け加えた。喜前公は決して浅はかな人柄ではなく、政にたずさわっておればそうも言うのだと、あのとき清左衛門は思いながら聞いていた。そんなことより清正公の実直さにいつわりがないと分かったことのほうが清左衛門にとっては喜びだった。なぜと言って、秀吉が四人のうち一人を棄教させようと謀(はか)りつづけていたのは真実だったからだ。それを軽口と思い、なんの屈託もなく喜前公に話した清正公は、秀吉とは比べものにならない実直そのものということだった。

　己のことなど、清左衛門はもうどうでもよい。

「父上」

　清左衛門は己の膝を見た。五つになった清助が、清左衛門の握りしめた拳の上に小さな手のひらを重ねていた。

「父上は私のことを嫌いになったのですか」

「うん？　父が子を嫌いになるはずがないだろう。どうしてそのようなことを尋ねる」

「だってもう私を裏山に連れて行ってくださらぬから」

　清左衛門は清助を抱きよせた。

　玖島に来てから清左衛門は毎朝、夜が明ける前に裏山に登り、人目をはばかって天主に祈ってきた。それを知っているのは珠だけで、三つになった頃からは清助が一緒だった。

「清助、父はお前がこの世のだれより好きだぞ。本当はお前を裏山へ連れて行ってやりたくてな……、父も裏山へ行きたくてたまらぬのだ。だがもう二度と行くことはできぬのだ」

　だれに見とがめられなくても、清左衛門は天主を棄てると口に出した者だから。

「だがな、お前は行ってもよいのだぞ。行ってはならぬのはこの父だけだ」

「どうして父上は行ってはならぬのですか」

「清助……。大きくなればお前には行ってほしいと、父は願っている。行ける世であればな」

「行ける世？」

「それまでは、こうして胸に手をあてて祈るのだ。天主様、天主様と呼びかけてごらん。天主様は清助にはきっとお返事をしてくださるから」

清助は丸い目をふしぎそうにしばたたいた。

「裏山に行かずに祈るのですか」

「そうだ、清助。天主様に祈っていることはだれにも話してはならぬのだ。天主様と清助だけの秘密にするのだ。いいね」

「はい」

「父はもう、清助に天主様のお姿を話してやれぬのだ」

清左衛門は清助を庭へ抱き下ろした。

「さあ、そこで遊んでおいで。父はここで見ておるぞ」

「はい」

清助は庭の先へ行ってしゃがんだ。

この子が大きくなったとき、清左衛門は己の生涯をきちんと話してやることができるだろうか。太閤の罠で修道士をやめざるをえなくなり、ついには棄教までした父を、この子は許すだろうか。

清助と玄蕃、二人の子が大きくなる時分には、この国はどうなっているだろう。

清助はしゃがんだまま無心に土に顔を近づけている。あの子が天主と出会えるように、

そして出会えばともに歩んでいけるように、清左衛門はこれからも祈り続けるだろう。

と、清助の頭上に黒い影が落ちて、清左衛門はふとその上を見た。

頭巾を被った侍たちが庭の生垣からなだれ込んできた。咄嗟に清左衛門は庭に飛びおり、清助を引っつかんだ。

四人、五人、六人。六人がそろって生垣の内側に入ると、一人が刀を抜いた。続けて残り四人も清左衛門に向かって刀を抜く。抜刀しない一人が、この六人の頭目らしかった。

清助の顔をふところに押しつけて、清左衛門は縁側へ後ずさった。ただなんとか草履を履こうと思っただけで、邸の中に己の大小があるということすら頭には思い浮かばなかった。

これは天主の御意志かと、この期に及んで考えている清左衛門はやはり武士ではない。ついに清左衛門は武士にも、天主の下仕えにもなりきれなかった。

誰だろう。己はなぜ殺されるのだろう。

ふいに伊奈姫の顔が浮かんで消えた。

「なぜ私を……」

輪がせばまり、腿（もも）が縁側のへりに当たった。清助はおとなしく清左衛門の胸に頭をつけている。

「子ぐるみか」

侍は常にそうだ。だれなのだ、なぜ清助まで殺さねばならない。

一人が青眼に刃をかざし、清左衛門は目を閉じた。

「待て」

清左衛門は目を開いた。

「喜前公のおられぬ隙に、なんの真似じゃ」

生垣のそばに脚絆をつけた男が立っていた。そちらも数人を連れている。

どこかで会った覚えがあるが咄嗟に思い出せない。年恰好は五十くらいだろうか。考え深そうな、この目鼻の整った顔を清左衛門はたしかに知っている。

侍たちは明らかにうろたえているようだった。

頭目らしい侍も配下に指示できず、頭巾から出た目が激しくまばたきをしている。この目にも清左衛門は見覚えがある。

「殿のお留守に城下で重臣が斬られるようなことになれば、責は筆頭家老の大村彦右衛門様に及ぶのだぞ」

五人が五人とも刃をふらふらと揺らした。

「退け」

頭目のその声に清左衛門は目を閉じた。聞き覚えどころではなかった。たちまちその

顔まで浮かび、縁側に尻をついた。

侍たちは旅装の男の脇をすり抜けて行った。

入れ替わってその男が入って来た。

「大事ござらぬか」

清左衛門はしばらくは口をきくことも頭を下げることもできなかった。

この男、誰だったろう。いかにも己で作り上げてきたという風貌の、森の大木のようなこの男。決して彦右衛門のように、人をだまし討ちしそうにないこの男は。

男は大らかにほほえんだ。

「お久しゅうござる。朝長大学頭純盛でござる」

あっと清左衛門は声をあげた。琴海を所領とする伊奈姫の夫だ。

「昼に船を出すつもりでおったら伊奈にたたき起こされましてな。早う参れと申すもので玖島城にも顔を出さずこちらへな。いや、伊奈の手柄じゃの」

坊も驚いたであろうと言いながら、大学頭は清助を抱き取った。そして、おっと声を発して笑いだした。

「清左衛門殿、坊は寝てござる。さすがは侍の子、肝がすわっておるのう」

そのとき清左衛門はようやく珠と玄蕃のことを思い出した。

「大学頭様、妻と子を外に出しております。いそぎ、迎えにまいらねば彼奴らが」

大学頭は小さくうなずいた。
「我らも参ろう。案内してくだされ。だが奥方たちはご無事でござろうよ」
「それは……」
「先ほどの輩(やから)はおそらく口封じでござる。ならば清左衛門殿より先に奥方を斬って城下を騒がしゅうするのは下策。手出しはなさるまい」
なさるまい。大学頭ほどの重臣が刺客を己より上に置いている。やはりあの侍は彦右衛門だったのだ。
「ですが私には口を封じられる覚えは」
「ござらぬか。では、私怨(しえん)と申されるか。清左衛門殿のような御方が、子もろとも殺されるほどの恨みを買うものですかな」
それに、と大学頭は小声になった。
「あの御方はたかが私怨でこのようなことをなさる方ではない。それゆえ儂も呑気に歩いておられるのだが」
清左衛門はつい下を向いた。やはり大学頭は気づいていた。だから刺客にむかって彦右衛門の名をわざと出したのだ。
「なぜ儂がここへ参ったと思われる。なぜ伊奈が参れと言い、私まであわてて船に乗ったか」

分からない、分からない。己の身に起こったことであるのに、何一つ。
「琴海ではたいそうな噂になっておりますぞ。清左衛門殿が棄教し、喜前公にも棄教をすすめ、それがため伴天連追放令が出されたとな。はじめは儂も伊奈も、清左衛門殿の棄教などあろうはずがないと笑いとばしておった。ところが真実、追放令が出された。となれば、もう笑うてはおられぬ」
そこで大学頭は恥じるように額に手をやり、ぐるぐると一所をこすった。
「儂は領内の天主堂やら手習い所やら、その他もろもろをどういたそうと頭をかかえて、清左衛門殿のことまで気がまわらなんだ。ところが伊奈が仁王立ちになりましてな」
これがまことならば清左殿は大村じゅうの切支丹に恨まれましょう。何かあってからでは遅い。一刻も早う琴海へお連れくださいませ——
「いや、儂はこう見えて、昔から伊奈に頭があがりませんでな。あれの悲しむ顔だけは見とうないのでござる。それゆえ今日も血相変えて、船を漕いでまいった次第」
大学頭は少しおどけて見せた。こんなときでも妬(ねた)ましくなるような満ち足りた笑顔だった。
「ではマリータ様が」
「さよう。あれはさすがに純忠公の娘でござってな。追放令が出たうえは四の五の言うても仕方がない、琴海の天主堂を坊主に取られてはたまらぬと、はやばやと外見を寺に

作り替えましての。おかげで儂も、こたびの喜前公の追放令には思うところもでき申した」

「思うところ？　大学頭様はもしや」

清左衛門が見つめると大学頭は、好きに春風に吹かせておく大木のようにゆったりとほほえんだ。

「所領など、全て返上してさしあげる。喜前公にはそう申し上げればよろしいかな」

清左衛門はぽかんと口を開いた。一体どこからそのようなことが分かるのだ。

大学頭は満足そうに清左衛門の顔を確かめると、前を向いてさらに大きな笑顔になった。

「おお、奥方があれに。なんとなんと、前掛けに玉子が山のようじゃ。道中なにごともなかった証でござるな」

きょとんとした珠の胸の前で、真っ白な玉子の山が光を弾いていた。

その日のうちに珠たちは大学頭の船に乗せられて伊奈姫の館のある琴海に渡ることになった。

船の中でも難しい話が続き、珠にはさっぱりわけが分からなかった。大学頭たちが玖

島にとどまって清左衛門を守れば角が立つから、珠たちが移ることになったのだそうだ。邸で何があったのか、清左衛門はまったく話そうとしなかった。

日が暮れる頃に船から戸根が見えたときは、湊でたくさんの灯火がゆれていた。船着き場から上がると、そこがもう伊奈姫たちの館だった。

灯火の映った伊奈姫の顔はぞっとするほど暗かった。とてつもないことが起こったのだと、そのときこそ珠ははっきりと気がついた。

「珠も恐ろしい思いをしましたね」

伊奈姫はまっさきに珠を気遣った。そして珠はようやく何があったかを知らされた。

「あの襲撃は、清左衛門殿に恨みをいだいた切支丹がやったということでござる」

大学頭は渋面をつくってそう言った。首謀者が誰であれ、そういうことで決着がつくのだから、事実はそうなるということだった。

「でも大学頭様。清左衛門がどうして切支丹に恨みを受けるのですか」

珠がそう尋ねると大学頭も伊奈姫も、一様に困った顔をした。

「珠殿。清左衛門殿は南蛮にまで参られ、あまつさえ修道士であられた。切支丹ばかりの大村藩では、空にひときわ大きく輝く明星のごとき御方だったのでござる。その清左衛門殿が、天主教は誤りであったと申されて棄教なされた。一途な切支丹どもにとっては計り知れぬ裏切りでございましたろう」

「なぜでございますか。喜前様も、清左衛門のおすすめにはことのほか満足なされたと」

「それゆえでござる。ほかならぬ清左衛門殿の言葉ゆえ、喜前公も感じ入って伴天連追放令を出された。清左衛門殿でなければ、喜前公はお聞き入れにはならなかったであろう」

そのとき清左衛門がはっとして大学頭をふり返った。

大学頭は静かにうなずいた。

「そういうことでござるよ、清左衛門殿。棄教するのは清左衛門殿と、はじめから決められておったであろう」

珠の目がきょときょとしていたのだろう、伊奈姫が珠に言った。

「珠。これが政（まつりごと）というものなのですよ。喜前公はどうしても伴天連追放令を出さねばならなかった。政に関わる者には、その立場もよう分かります。私や珠のような女子や、大勢の子を守らねばならぬのです。わが弟は本心、己が信仰を棄てるだけでよいならばと考えたことでしょう」

「だがそれでは切支丹の恨みの矛先が喜前公へ向けられる。それを諾々と許しておるようでは、筆頭家老はつとまりませぬからな」

清左衛門がしみじみと頷いているので、珠もあわてて頷いた。

「大学頭様。今日のことは喜前公もご存知の上だったのでございましょうか」

清左衛門が尋ねると、大学頭と伊奈姫が顔を見あわせた。

「大村藩士の切支丹と、学林の切支丹とは違うのでござる。昨日今日、学林を出て来られた清左衛門殿など、赤児の腕をひねるようなもの。だがその強（したた）か者の儂が申すのじゃが、喜前公は清左衛門殿のお命までは取るつもりはなかったであろう」

伊奈姫がぱっと明るい顔になって大学頭に目をやった。大学頭は、うそではないぞというように伊奈姫にうなずき返した。

「なぜ清左衛門殿を襲わせたかと申せば、おそらくは、げに切支丹は恐ろしきものと城下に知らしめ、さらに切支丹を締めつける口実になさるご所存。それには生き証人の清左衛門殿には足の一本でも引きずって城下を歩いていただくほうが効き目がござる」

清左衛門は膝の上で拳を握りしめていた。

いずれにしても清左衛門は彦右衛門たちの手駒として殺されかけたのだ。それに喜前公がどこまで関わっているのか、果たして傷つけるだけのつもりだったのか、そのあたりのことはこれからも分からない。

そして助かってみてから困ったことになったと思うのは、彦右衛門たちの意図が清左衛門はもちろん、伊奈姫たちにまで伝わってしまったということだ。彦右衛門にすれば清左衛門たちが伊奈姫のもとに取りこまれているのも不安だし、大学頭にしてもこのま

までいれば喜前公に敵対することになりかねない。どちらにせよ清左衛門たちは早くここを立ち去らねばならなかった。

「なに、彦右衛門殿は愚物ではござらぬ。こちらが知らぬ顔を決めこんでおれば同じように出方を見ておられるであろう。あの御方は良くも悪くも、儂という男を知っておられる」

大学頭がそう言うと伊奈姫も頷いた。

だが清左衛門がじっと前を睨んだままで、珠は落ち着かなかった。珠は武士の娘だが、四つ五つの時分から天主堂で暮らしてきたから、侍というのも政というのも、まるで見当がつかなかった。

珠が清左衛門の顔を見ては大学頭たちの目の先にあるものをうかがい知ろうとしているうちに、伊奈姫の館での暮らしもひと月経ち、ふた月が過ぎていった。

そんなある夜半、清助と玄蕃がちょうど寝ついたときに伊奈姫が珠のところへやって来た。清左衛門ににっこりと笑って、珠をお借りしますねと言われたときは、誇らしいような恥ずかしいような心持ちがした。

大学頭はこのところ島原へ行っているそうで、その夜も姿を見なかった。

伊奈姫は座布団を二つ敷いた座敷へ珠を通して座らせた。

「珠たちがここへ来たとき大学頭が、喜前公は清左殿を殺すつもりはなかった、ただ少し傷つけるつもりだったのだと話しましたけれど」

こちらに目をやった伊奈姫に、珠はうなずいた。暗に喜前公の指図かと尋ねた清左衛門に、大学頭は首をふったのだ。

「あれはやはり口封じだったと思います。弟は……、喜前公は清左殿を殺(あや)めるつもりだったに違いありません」

珠は仰天して顔を上げた。だとしたら大学頭が来あわせなければ清左衛門は死んでいたということだろうか。

「まりいた様、それは」

「弟が清左殿を殺そうとしたなどと、大学頭は私が悲しむと思ったのでしょう」

「でも、傷つけて生かしておくほうが役に立つと、大学頭様は」

伊奈姫は静かに首をふった。

「賊は六人だったのでしょう。清左殿お一人を傷つけるには多すぎます。幼子二人と珠と、清左殿を討ちもらさぬのにちょうどよい数ではありませんか」

「まさか、清助たちも殺めるつもりだったのですか」

「当たり前でしょう。口封じに女子も童もあるものですか」

彦右衛門も喜前公も、甘い男ではありませんからね、と伊奈姫は付け足した。

「珠には信じられぬかもしれませんが、武家は、それで袂を分かつということにはなら

ぬのです。喜前公が清左殿を殺めようとしたからといって、私たちが喜前公を恨むようなことにはならない。今、喜前公という藩主がおらねば、この地は立ちゆかぬと分かっていますから」

「……まりいた様は、清左衛門が殺されてもよかったとおっしゃるのですか」

伊奈姫がそんなことを言っているのでないことは分かっているのに、つい珠はそんな口になった。

「喜前様は清左衛門と従兄弟ではありませんか。それなのに」

「珠。酷なようですが、清左殿が死んでおられれば何ひとつ詳らかにはなっていなかったのです。喜前公も生涯、清左殿を殺めたとは申されなかったでしょうし、私たちは疑いすらしなかったでしょう。私も大学頭も、珠と同じ心で喜前公を憎んでやることはできぬのです」

「それは……」

伊奈姫たちが喜前公の立場なら同じことをしたということだろうか。

珠は大あわてで頭をふって、両手で頬を力一杯こすった。

「それほど……、清左衛門は憎まれているのですか」

「いいえ。だれも清左殿を憎んではおりませぬ。喜前公も、彦右衛門殿も」

この館へ来てすぐの頃、よくぞ私たちを置いてくれていると清左衛門は言っていた。

伊奈姫と大学頭にすれば、喜前公に反して珠たちを守る形になっている。

「清左衛門も私も、まりいた様と大学頭様には心から感謝しています。ここにお連れいただかなければ今頃はどうなっていたか」

「そんな恐ろしいことを考えるのはやめましょう。それよりも珠は二人の子の母なのです。先のことを考えなければ」

「先のこと……」

「清左殿はこの先、喜前公にお仕えするわけにはまいらぬでしょう」

珠はうつむいた。それは分かっているが、まさか学林に戻ることもできない。清左衛門と珠には行くところがない。

「珠、そんな顔をしないで。大学頭が島原に行っているのはそのことなのです」

「そのこと？」

「ええ。大学頭は清左殿を島原の有馬家に仕官させようと考えているのですよ」

「島原の……。有馬晴信公ですか」

「ええ」

よく知っていますねと言って伊奈姫はほほえんだ。

清左衛門や伊奈姫姉弟と晴信は、父親が兄弟同士のいとこにあたる。晴信は四歳で家督を譲られて島原日野江城の主になっていたが、十歳のときに父を亡くし、叔父である

大村純忠公に後見されて大きくなった。齢は伊奈姫と同じだから、清左衛門と喜前公より二つ上の四十歳だ。

「晴信公が熱心な切支丹だということも知っていますか」

「はい。清左衛門たちを南蛮に送られた三人の大名のお一方ですね」

「そうです。清左殿はわが父純忠の名代でいらしたのですが、それは晴信公の名代ということでもあったのです。あの方は本当はご自分が南蛮へ行きたかったのを、私の父に止められたのですから」

伊奈姫は少し遠くを見るような目になった。

「でもまりいた様。それならば晴信公は、南蛮まで行きながら棄教した清左衛門に腹を立てておられるのではないでしょうか」

「あら、だからそれを大学頭が話しに行っているのではありませんか。清左殿が修道士をおやめになったのも、こたび棄教なさったのもご事情がおありだったのです。大村藩一門の所領返上の思惑も、大学頭は晴信公には正直に打ち明けると申していました。そのほうが話の通りが良いですからね」

「ではまりいた様は……、清左衛門が修道士をやめたわけをご存知なのですか」

ぴたりと、刃にでも触れたように伊奈姫の動きが止まった。

珠は清左衛門にその理由を尋ねたことはない。だけどそれは尋ねて教えてもらえなければ寂しいからだ。珠は清左衛門が教えてくれぬと分かっていたから聞けなかった。夫婦というのに、清左衛門の胸の内には珠の立ち入れない暗がりがある。その暗がりをぬきにしては夫婦になることはなかった、全てのはじまりである大切な暗がりなのに。

「珠は尋ねたことはないのですか」

「はい。だから珠は知りません」

一度だけ伊奈姫は珠から目をそらした。珠はそれを見逃さなかった。

だが次に伊奈姫が珠を見たとき、その顔はどんな隠しごともしていないように見えた。

「私は尋ねてみたことがあります。でも清左殿は教えてくださいませんでした。ただ、政に関わるのだと」

また政だ。珠には分からない、清左衛門でさえもてあそばれている、侍たちの特別のわざだ。

「太閤様がなにか……。太閤様と関わりがあるのだと、じゅりあん様にうかがいました。清左殿から聞いたわけではありません」

「じゅりあん様に？」

「ええ。南蛮使節の四人のあいだのお話だとか。それゆえ私も深く尋ねることができずに。でも殿方は殿方同士、太閤様と聞くだけでなにか察するところがあるのかもしれません。大学頭ならば晴信公にきっとそう申しますわ」

私たちは話したのだ。もう十分、話して決めたのだ――

「まりいた様にもお分かりにならないのでしょうか」

すると伊奈姫は顔の前で小さく手のひらをふった。

「私にはとても。政には多少関わりのある暮らしをしてきましたから、太閤様と聞いてなにやら、におうのは分かりますが、それ以外はこれといって」

珠は心の中でほっと息をついていた。伊奈姫も知らないのなら、珠は己が知らなくてもかまわない。夫婦でも立ち入れぬ暗がりがあるのは当たり前のことだ。

伊奈姫は珠を見てにっこりほほえんだ。

「ねえ珠。すてきなことを教えてあげましょうか。晴信公のご嫡男の洗礼名はみげるとおっしゃるのですよ。そしてね、その方の奥方様の名はまるただそうですよ」

「みげると、まるた？」

「そう。ねえ、清左殿はよく珠のことを、まるたのようだと話しておられたでしょう」

「まるた……」

天主の子のそばで働く女子、まるた。天主の子の言葉を聞くいとまもなく、ただ懸命に働いた娘だ。

「なにか有馬家ではいいことばかりが待っているような気がしないこと？　日野江の城下町にはじゅりあん様が教えておられる学問所もあるでしょう。その学問所で、清左殿たち使節のお四方は出会われたとか」

「そうです、そうです。みげる様はそこで南蛮語や南蛮の楽器を習われたのです。まるたとまりあの芝居も皆でやったと話してくださったことがあります。私、男ばかりでどうやってやるのですかと尋ねたことがございます。ああ懐かしい」

つい手のひらを打って、珠ははっと我に返った。伊奈姫が背を丸めて笑っていた。

「みげる様ですって。そのみげる様は、もうあなたの夫になられたのですよ」

今度は珠が背を丸める番だった。あまりに恥ずかしくて両手で頬をかくしたが、ほてった耳たぶまでは覆いきれなかった。

「島原へ行くのが楽しみになってきましたか」

珠は背を丸めたままうなずいた。

第三章　流れる

一

慶長十二年（一六〇七）、喜前公は玖島城に一門各家を集め、それぞれが有する領地を返上させる旨、申しつけた。千五百石を領していた異母弟をはじめ、十三家にのぼる一門諸家が所領を没収され、二家が所領を半減された。ふたをあけてみれば所領を返上させられたのは大村と名のつく家に限られ、伊奈姫のような家臣にくだっている家には沙汰がなかった。だが所領を奪われ平戸へ移っていった喜前公の異母弟の姿は、一門に連なる者たちを体の芯からふるえあがらせた。どれほどの血縁があろうと主は喜前公ただ一人で、あとはただの藩士にすぎないと、喉元に刃を突きつけられたようなものだった。

　こうして内実四千石あまりにすぎなかった喜前公は、名実ともに二万七千石の藩主になった。ここ二十年のあいだに朝鮮へ出兵し、玖島城を築き、その一方で長崎の湊を失って悪化の一途をたどっていた藩財政は立て直された。百年以上にもわたって大村家の

悲願だった一門各家の所領返上を、喜前公は成し遂げた。

　一門を大村から追い払い、所領を喜前公の下に集めるために伴天連追放令は出された。喜前公は追放令を出しはしたが切支丹のままだと囁かれ、切支丹の怨念は、南蛮使節だった元修道士の清左衛門ただ一人に向かった。

　島原の有馬家に移ってきたとき清左衛門は、心からこれで良かったのだと思っていた。大村家の念願を遂げさせ、己が汚名をかぶることで喜前公には疵（きず）がつかなかった。伴天連追放令が出されたのも一門の所領返上のためだったのだし、なにより切支丹である喜前公はいつまでも追放令をそのままにしてはおかないだろう。一門払いが完成したとき、かつて秀吉の伴天連追放令がそうだったように、喜前公の追放令も反古にされる。そうすれば大村藩内の切支丹も、戻りはじめた僧と共生していくことができる。

　それこそ清左衛門ののぞんだ世の中だった。切支丹が天主の名のもとに寺社を焼き払うという忌まわしい所業をせず、殉教のようなむごい行いを望まず、殉教者は一人も出ない。大村を離れる清左衛門にとって唯一の気がかりは、一体いつ伴天連追放令が改められるかということだけだった。まだそれができないまでも噂に拠りどころが与えられること、つまり喜前公は今も変わらず切支丹で、この大村で切支丹はかつてのように暮らしてよいと高札が立つこと。それだけが清左衛門の願いだった。

　だが伊奈姫の文が伝えてきたのは思いもかけないことだった。

喜前公は棄教した。

南蛮で天主教を見きわめてきた清左衛門が説いたとおり、天主教は悪である。もはや断じて切支丹を許すことはできない。これまでは家士にのみ天主教信仰を禁じてきたが、明日からは百姓商人にいたるまで、大村藩内では天主教信仰をかたく禁じる。気に入らぬ者は大村を立ち退くがよい。寺社が天主堂を打ち払うことはいっさい止めぬ――

伊奈姫の所領でも天主堂はことごとく打ち払われた。無事だったのは、最初の伴天連追放令が出されたときに伊奈姫が機転をきかせて日蓮宗寺院に造りかえておいた戸根の天主堂だけだった。

珠たちはそこに居りますゆえ、どうぞご安心くださいますように――

伊奈姫の文はそう結ばれていた。島原での暮らしが定まるのを待ち、珠たちは遅れて清左衛門のもとへ行くことになっていた。それほどの短時日のうちに喜前公の棄教が国中に知らされたのである。

清左衛門が島原の晴信公のもとを初めてたずねた道々、大学頭が口にしたことがことごとく、伏せた札を一枚ずつめくるように現実になっていった。

喜前公はおそらく棄教なさるであろうと、大学頭は言ったのだった。

もともと喜前公は幼いあいだこそ父純忠公に連れられて天主堂にも通っていたが、十三歳のときに人質として佐賀の龍造寺家へやられている。龍造寺家が幼い喜前公を心身ともに佐賀へ取りこもうとしたのは決まりきったことで、十三の少年の大きな特徴といえば切支丹ということだったろう。それを龍造寺が切り崩しにかかり、それはできなかったにしても、その間喜前公が天主教から遠ざけられたのは確実だったから、と。

その話を聞いたとき、清左衛門は黒い海の底でも覗きこんだような心持ちがした。喜前公と清左衛門は同年だから、喜前公が十三といえば清左衛門が南蛮船に乗って羅馬（ローマ）へ旅立った年にあたる。あのとき清左衛門は南蛮へ行って帰るという荷を背負うだけで精一杯で、選ばれなかったセバスチャンの心を思いやることすらできなかった。ひるがえって、敵の中へただ一人で送りこまれ、待ち受けるのは己から天主教を引きはがそうとする者ばかりとは、思いをめぐらすだけで背筋が凍りつきそうだった。

十三歳の清左衛門は勝手に大海を進む南蛮船に寝そべって、道中で見せられるものは美しい物ばかり、接する人々は身分の高い切支丹ばかりという八年間を送った。どの湊に降り立っても一人残らず諸手をあげて歓迎し、人々は親鳥が雛（ひな）をあたためるように四人の信仰を優しくくるんでくれた。それにひきかえ喜前公は、明日には己の首を斬りおとすかもしれない者たちの中で一人きりの信仰を守ったのである。

己の信仰と喜前公の信仰は違う。喜前公は、国が立たなければ信仰など守りようもないと十三のときに知り、己に突きつけられた刃と向かいあうなかで信仰を保ってきた。

清左衛門があの南蛮船に乗ったとき、きっともう喜前公が龍造寺家へやられることは

決まっていただろう。それなのに純忠公はそんなそぶりは毫も見せなかった。辛くとも励めと清左衛門の二の腕をつかんで、喜前のように細い腕をしておる、と情け深い目で言った。

よいか。誰のために行くのでもない、そなたはそなたのために南蛮へ行くのだぞ。誰にも何にも縛られることなく、その大きな両の眼で、しっかりと南蛮の国を見てまいれ――

その言葉を、同じ十三歳の喜前公はどんな思いで聞いていただろう。

喜前公は己のために生きることは許されなかった。ただ大村が龍造寺に踏みつぶされぬために、それこそがんじがらめに縛られて大村を出された。

清左衛門とはなんという違いだったろう。

清左衛門は齢だけは三倍にもなり、くれぐれもお頼み申すと頭を下げてくれる大学頭の背につかまりながら、愚かな背信者として日野江に戻ってきた。天主はときに選びぬいた者に殉教の場を与えるが、清左衛門のような者にはただの死に場所も与えない。

清左衛門に許されているのは雑草として生きていくことだった。大学頭の口添えで晴信公に召し抱えられはするが、このさき二度と政に関わることはなく、なかなか枯れぬ雑草と貶められて生きていく。

玖島城下で、少しは分かるようになった気がしていた政に清左衛門は足を掬われた。

そして最後まで喜前公が棄教するとは思いもしていなかった。

清左衛門殿、もはや伴天連追放令が改められることはありますまい。それどころか喜前公、あれはもうお心も決まっておいでであろう。ちかぢか棄教なさるでしょうな――

大学頭がそう言ったとき、伊奈姫も傍らでうなずいていた。大学頭や伊奈姫に見えることが、清左衛門にはいっこうに見えない。

藩主が式目を出すとはどういうことか、清左衛門には分からぬのだと伊奈姫は言った。出したうえは、たとえ誤りと悟っても改められぬ、だから初めから改めるつもりはなかったことになる。棄教は決めていたことで、ただその順序と理由を入れ替えただけだ。清左衛門にすすめられて半信半疑で追放令を出した、そして清左衛門が切支丹に襲われ、辛くも大学頭に助け出されるという事件をつぶさに見、心底天主教を嫌うようになったのだ、と。

大学頭にはそこから徳川家の政まで透けて見えるという。大村家の一門払いに徳川がくちばしを容れなかったということは、十中八、九、徳川も伴天連追放令を出すつもりであろうという。

そうでなければ滑りだしたばかりの幕藩体制に逆らうような、意に染まぬ藩士を藩主が大量に追放するという専横がまかり通るはずがない。それがまかり通ったのは、一門払いに伴天連を追放するという大義名分があったからで、つまりはそこに幕府のお墨付

きが下っていたのだ。

それにはあらかじめ熊本の清正公の根回しが、と清左衛門が言うと、大学頭は大笑いをした。

まさか将軍様に黄金をお渡ししたわけではござるまい。根回しに用いた賄（まいない）が、切支丹を追放するということだったのでござろうよ——

清左衛門には何がどうなっているのかも、なぜ大学頭にこんなことが見通せるのかも見当がつかなかった。

それなのに清左衛門は有馬家でも御目見得を許され、重臣の末席に加えられた。五日に一度城に登り、五人の評定衆とともに晴信公を囲む。

評定衆から御端下（おはした）の女中にいたるまでことごとく切支丹という中で、清左衛門だけが天主教を棄てた者だった。しぜん皆の目が冷ややかな一方で、清左衛門が棄教した事情を知る晴信公はいたわってくれていた。それがまた悪い憶測をよびそうで、清左衛門はおそろしくもあった。

清左衛門は膝をかかえた。その上に頭をのせて、そっと耳を澄ませた。

ミゲル、私も丘へ行っていいか。それとも一人になりたかったかい——

一人では十分に坂も上れなかったあのころは、なんと満ち足りていただろう。

「ミゲル……」

清左衛門は膝から頭を上げた。そしてすぐ膝をかかえなおした。

日野江の学問所にいた十一の時分、清左衛門はよくジュリアンと、この裏山の大岩まで上って、岩の上に帳面を広げて南蛮語をさらいあったものだった。海が見えるわけでも城下町が見えるわけでもない。ただ岩の上だけぽっかりと木の葉が空いて明るかった。平らな岩は二人だけの文机で、晴れた空は二人だけの灯火だった。

「ミゲル」

清左衛門はたまらなくなってふり返った。

その人影を見たとき、清左衛門の目から一気に涙があふれ出た。

「まさか来てくれるとは……。一体どういうわけだ、どうして私がここにいると……」

ジュリアンが木の陰に立っていた。

ジュリアンは顔を洗いでもするように手のひらで頬をはたいた。涙の滴が飛んでいった。

「よくそんなことが言えるなあ。私はミゲルが晴信公に仕えたと聞いてから一日も欠かさずここに上っていたのだ。きっといつかミゲルが来てくれると信じていた……。だって私たちは毎日ここに来ていただろう。だからミゲルが私に会いたくなれば、きっとここ

こへ来てくれると」

清左衛門はジュリアンの首に抱きついた。

「ミゲル、どれほど案じていたことか。やっぱり私たちはいつも同じ心なのだな」

しばらくはどちらも言葉にならなかった。最後に会ったのは六年前、ジュリアンたちが澳門（マカオ）の学林へ旅立ったときだ。

あれから清左衛門は耶蘇会を脱けて修道士をやめ、政と関わって暮らしをたててきた。ジュリアンは澳門から帰り、日野江の学問所で教えつつ、去年は副司祭になった。もう少し、あとわずかで念願の司祭だと清左衛門は信じている。

清左衛門は唾を飲みこんだ。

「ジュリアン、私が棄教したことは」

するとジュリアンは唇の前にひとさし指を立て、しいっと合図をした。

「知っている。だから私にまで棄教、棄教と言うことはないのだ。私たちのために修道士までやめたミゲルではないか。ひとたび天主との約束を違（たが）えたのだ、潔いミゲルにすれば、一度背を向けたら同じだったのだろう」

清左衛門はもう一度ジュリアンの首に抱きついた。

「ミゲル、辛いことばかりではないとも。来年、ついに私たち三人は司祭になれることになった」

清左衛門は飛び上がってジュリアンの首から離れた。

「本当なのか、ジュリアン」

「ああ。私たちはついにやったよ。マンショもマルチノも、ミゲルに負けぬように精進したのだ。いつも私たちは四人で一つだ」

両手で顔をおおって清左衛門は泣いた。

これほど嬉しいことはなかった。清左衛門が修道士をやめたことも棄教したことも、すべて報われたようだった。もうどうなってもいい。清左衛門はもうすべて成し遂げたも同然だった。

「ジュリアン、おめでとう。よくやってくれた……」

あのときの四人の決断は誤っていなかったのだ。聚楽第から戻り、手足のしびれと噂に苦しみ、ついには諦めて清左衛門だけ長崎に残ることにした。澳門の学林へ旅立つ三人に、後のことは何も案じるなと言った清左衛門のあの決心は、今こうして三人の日本人司祭の誕生となって実を結ぶ。

「ミゲルが成し遂げたのだ。ミゲルのおかげだよ」

清左衛門は泣きながら首をふった。

ジュリアンが優しく清左衛門の肩に手を置いた。

「だからミゲル、もう戻ってもいいだろう。な、戻ってこい」

天主教を棄てたという作りものの姿を捨て、もう一度天主の下へ戻るのだ——
「もうなにも恐れることはないのだから。もう大丈夫だ。マンショたちもそれを望んでいる。分かるだろう」
「一度でも天主に背いた私の罪は決して消えぬ。それなら、棄教した者がどんな無為の生涯を送るか、それを証して死んでゆくほうが、まだこの世に生まれてきた甲斐がある」
「ばかな。それでは羅馬の思う壺ではないか。ミゲルは言っていただろう、殉教など南蛮人が勝手に、己が見たい夢を東の果ての島に押しつけているにすぎないと。それは天主様の御意志ではなく南蛮人の意志にすぎぬと。それなのにミゲルが、南蛮人のために南蛮人の望む生涯を送ってやることはない」
清左衛門はおだやかに首をふり、胸の前で十字を切った。言葉で罪を犯したとき、天主に許しを求める切支丹のしるしだ。
「ジュリアンが私の立場なら、きっと同じことをするはずだ。私もともに南蛮に行ったのだ。少しでもジュリアンたちを大きく輝かせる手伝いをさせてくれ」
棄教した清左衛門がみじめであればあるほどジュリアンたちは輝くのだから。
「私たちは四人で一つだろう。私の受ける苦しみはジュリアンたちも共に受けてくれている。だから私は少しも辛くはない」

「だがミゲルはたった一人、棄教までして……」
「棄教、棄教と言うなと言ったのはジュリアンではないか」
清左衛門は頬をぬぐうと明るくほほえんだ。
「まだ南蛮へ渡る前、私たちはここでよく語り合っただろう。覚えているか」
忘れるはずがない、とジュリアンは空を見上げて言った。目からは今にも涙がこぼれそうだった。
清左衛門が十一、ジュリアンが十二のとき、この日野江に南蛮の学問所ができた。同じ大村から入学した二人はすぐに仲良くなって、まだこの国の司祭など夢にすら描けないなか、いつか必ず司祭になろうと励ましあった。
だがあるときの講席で殉教した切支丹の話を聞いたとき、二人はそろって首をかしげたのだった。
どうして死ぬことがそうも尊いのか。
「南蛮人司祭は、名誉を重んじて死を選ぶ武士の生きざまを、信仰を守って死んでいく殉教者に似ていると申された。だから私たちは天主教を学ぶにふさわしい民なのだと教わった。ミゲルはとても怒っていた。まさか日の本へ殉教者を募りに来たわけではあるまい、と」
「ずいぶん、ひねくれた少年だったのだな」

清左衛門は己をあざけるような笑みを浮かべた。若い日の己の強さが、今の清左衛門にはまぶしかった。

「マンショたちも腹を立てていただろう。マルチノはまだ九つだったから、私を殉教者にさせないでくださいと一所懸命祈ると言っていたな」

「ジュリアンが気づかせてくれたのだ。こんな東の果ての小島に暮らす民が、天主を慕って殉教したと聞けば、南蛮人はさぞ喜ぶだろうな、と。ついこの間まで天主のことも知らなかった民が、こぞって天主をたたえて命を捨てれば、さぞ己たちの信仰は強まるのだろうな、と」

天主は滅多に人に姿を見せてくれぬものだから。人は生きていれば始終、天主がおわすかどうか疑わねばならないから。ただのか弱い切支丹の身には、少しでも確かな証がほしい。

「あのとき私たちはミゲルを中央にして誓った。私たちは日の本で初めての司祭になろう、そして殉教者など決して出さぬ伝道をしよう……」

清左衛門は力をこめてうなずいた。

「そして私たちはここまで来た。ついにこの国の司祭が、この国の切支丹のために天主教を説いてやれる日が来るのだ。天主教は死ぬためのものではない、生きるためのものだと」

清左衛門もジュリアンも何年と天主教を学んだが、その思いだけは変わらなかった。棄教者と司祭という対極の姿になってすら、それは同じだ。

「ジュリアンは、幕府が伴天連追放令を出すかもしれぬという話は聞いているか」

四人で司祭になろうと誓ってから、数えきれぬほどのものが変わってきた。あのときの四人の心だけが変わらぬもので、あとは何一つ同じではないのかもしれない。

「この島原はいまだ晴信公が熱心な切支丹だが、隣国の大村も、対岸の熊本も天主教を禁じる国になった。今に……」

ジュリアンはうなずいた。

「徳川様が日の本中に禁教令を出されるかもしれぬとマリタ様にうかがった。あの方もこれからはご苦労なさるかもしれないな」

それからジュリアンは短く祈りを唱えた。

「……そろそろ戻ったほうがいい。私といるところを見られたら、ジュリアンまでどんな噂をたてられるか分からない」

「ここは大丈夫だろう」

「いいや。子供だった私たちが見つけられたほどの場所だぞ」

清左衛門がそう言うと、ジュリアンも顔をうつむけた。

「たとえ城下で行き会っても言葉を交わすことはできぬ。だが私たちはそんなことには

慣れているからな」

清左衛門が笑いかけるとジュリアンも笑ってうなずいた。

「学林でも修練院でも、沈黙を守らねばならぬときは多かったからな」

「ああ。学林の廊下をすれ違うようなものだ。目を合わせてもいけなかったものな」

清左衛門とジュリアンは手を握った。

「ミゲル、またここで会おう」

「そうだな。ああ、そうだ。ほらジュリアン、見てくれ。私の足は治ったろう」

「……修道士をやめたらすぐ治ったそうだな。辛かったろう」

清左衛門は静かに首をふった。もう済んだことだ。

「おかげで今の私は一人でこんなところまで上ってこられるのだ。病が癒えるというのはすばらしいことだ」

「病が癒えて天主様を疑いたくなったのは私たち四人だけかもしれないな」

「本当に」

二人はうなずいた。

「じゃあ、ミゲル。また会おう」

清左衛門はうなずいて、ぽんと岩から飛び降りた。それを見てジュリアンは嬉しそうにほほえんだ。

ジュリアンの姿が木々のむこうに消えてしまうまで清左衛門はじっと立っていた。ジュリアンがこの日野江にずっと居ることを、そしてこの地に決して追放令が出ぬことを、清左衛門は心の中で祈り続けていた。

慶長十三年（一六〇八）九月、ジュリアンとマンショ、マルチノの三人は長崎の岬の天主堂でそろって司祭に叙せられた。この日野江の学問所に入学してから二十八年、修道士になって十五年という、気の遠くなるような長いときが経っていた。もはやこの国の者は司祭になれないのだと誰もが思いかけていた中での祭礼だったから、修練院や学林で学び続ける日本人たちにとっては大きな励みになった。

もちろん清左衛門は祭礼に行くことはできなかったが、伊奈姫を通してその荘厳なようすを知った。町じゅうの大小の天主堂がいっせいに鐘を鳴らし、湊のすべての南蛮船が岬の天主堂に舳先をむけて、幾度となく祝砲を放った。天主堂どころか岬も丘も人であふれて、漁師たちの舟に乗って海から天主堂をあおぎ見る者もあったという。

皮肉なことに幕府と大村藩のあいだで長崎新町と浦上各町が替え地されていたために、この辺りでは幕府直轄領の長崎だけが天主教かまいなしだった。伊奈姫は幼い姉弟の昔に戻ったような不敵な笑みを浮かべて、この日のために長崎は喜前公から取り上げられ

たのだと言っていた。セバスチャンの祭礼の折は秀吉の死で追放令が反古になっており、ジュリアンたちのときは喜前公の追放令を幕府が退けることになったのだ。これこそ天主様のお計らいだと、伊奈姫はまるで己の手柄のように喜んでいた。

けれども清左衛門が城詰めでしばらく裏山の岩へ行くことができなかった間にジュリアンたちは日野江を離れた。耶蘇会の司祭は伝道が最大の役目だったから、祭礼から帰った明くる日にはそれぞれの移り先が決められたのだ。ジュリアンは博多の天主堂へ、マンショは小倉へ、マルチノは耶蘇会の日本上長となって長崎へ、ついに四人が四所へ分かれることになり、清左衛門はその誰とも会えなかった。

だがたとえ言葉は交わせなくても心は通じ合っていた。四人はそれぞれに、それぞれの道を行くしかなかった。

清左衛門はものの役に立たぬと陰口をきかれながら、五日に一度、日野江城へ登っていた。五人の評定衆は、幾人か欠けることもあれば晴信公が加わらぬこともあった。辰下刻に御座之間へ入り、出るのは未下刻頃で、その間ほとんど口を開かない清左衛門は、晴信公がおらぬときには、まるで祐筆のように口をきかぬと嘲弄されることもあった。それほど清左衛門は政にいや気がさしていた。

城へ登らぬ日は城の三の丸のそばに与えられた広い邸で珠と二人、朝から晩まで畠に鍬（くわ）を入れていた。お前様は修道士よりも侍よりも、百姓がよほど性にあっておられるよ

うですねと言って珠は笑った。

この日野江という町は有馬家の先祖が四百年あまりも前に城を建て、いっときは島原半島から大村、さらには鍋島家の藤津、東彼杵（ひがしそのぎ）辺りまで、二十万石を越える所領をもつ国主の城下町だった。そのせいか城は大きく、清左衛門の邸から見ると丘を縁取るように三の丸があり、その頂きに本丸が見えた。本丸は丘の上というのに三の丸を凌ぐように大きくそびえ、畠を耕しているときは二つ並んで見えるのが、城に近づくにつれて本丸が奥にあると分かり、だまし絵のようだった。己が身をおく政とは、きっとそのようなものだと清左衛門は思っていた。

「でもあれほど大きなお城にご嫡男様はともにお暮らしではないのですね。晴信様はおさびしいですね」

いつも清左衛門のそばでにこにこと笑う珠は、移ってすぐの時分だったか、そう言った。清助は七歳、玄蕃は三歳になっていた。

「珠はあのお城に雛人形のようなご嫡男様と奥方様がいらっしゃると思って、それが楽しみで日野江へまいったのですよ」

「それはまた妙なことを楽しみにしていたものだ」

鍬を下ろす手を止めなかったので珠がどんな顔をしていたかは知らないが、どことなく珠はその晴信公の嫡男がひいきのようだった。幼い頃から家康公のそばで仕えている

そうで、清左衛門は一度も顔を見たことがなかった。

だがどうやら珠の晴信公嫡男への肩入れは本物で、あくる年になって雛人形の二人が離縁になったと教えたときは、涙まで湧いてくるのではないかというような顔をしていた。

かわりに徳川の姫様をもらわれたそうだから目出度いのではないかと言うと、珠はついにほろりと涙を流した。

「なにも珠が泣くことはないではないか」

「どうしてお二人は離縁なさったのですか」

「そのようなことを私が知るわけがないだろう」

清左衛門が面食らって言ったときは、珠はぷいと顔を背けた。

そんなことで言いなりになる清左衛門だが、並んで下城してくることの多かった評定衆の一人に尋ねてみると、あっさりとわけは分かった。晴信公が大手柄をたて、それを喜んだ家康公が、ひ孫にあたる姫を養女にして娶せ（めあわ）たという。

牧野隼人正（はやとのしょう）という、齢も清左衛門に近いその評定衆は、精悍な顔に人の良さそうな笑みを浮かべて言った。

「拙者も一度、千々石殿とはゆっくり話してみたいと思うておりました」

慶事にはだれの口も軽くなる。政ではないと思えば清左衛門の相づちも多くなった。

一年前、晴信公の船が澳門に停泊していたとき、水主（かこ）と原地人のあいだで争いがおこり大勢の日本人が殺された。だが澳門を治める葡萄牙（ポルトガル）人の甲比丹（カピタン）（頭領）はすべての責を日本に負わせ、しかも自身はのうのうと南蛮船に乗って長崎へやって来たのである。

烈火のごとく怒った晴信公は数多（あまた）の小舟を率い、長崎湊の沖でその南蛮船、マードレ号を取り囲んだ。そして長さ五十間、幅二十間、帆柱四十八間という、山のごとく大きなマードレ号を三日がかりで海に沈ませ、甲比丹を討ち取った。

「家康公は飛び跳ねんばかりのお喜びようで、晴信公父子を駿府城であつく饗応（きょうおう）なされた由。お輿入れの話はそのとき決まったそうにござる」

「では御自ら望まれたわけではないのでございますな。家康公のご養女をもらわれるとなれば、側室というわけにはまいりませぬな」

「さよう。だが前の奥方様は小西行長の縁に連なる御方。当家としては、徳川様に切腹を申しつかった小西よりも、万倍も有難いことでござろう」

清左衛門はつい目を伏せた。ここもまた政かと、ふと考えたのだった。

だがそのとき隼人正のほうが、なにかを思いついたような顔になった。

「これは失礼を申し上げた。千々石殿は政ぎらいでござったな」

驚いて見返すと、隼人正はにっこりと笑いかけていた。

「千々石殿が来られる前、晴信公がいの一番にそう申されましてな。元をただせば修道

士であられた御方ゆえ、評定の場では何も申されぬのじゃと。皆は祐筆じゃ何じゃとあれこれ申していたが、なに、千々石殿がまいられるまで、評定の場で死んだ貝のように口を開かなんだのは拙者でござってな。矛先がそちらに向いて、ほっとしておるのでござる」

そのときから清左衛門は、登城下城で隼人正と出会うと話をするようになった。評定の場でも見るようにしていると、隼人正は真実、滅多に口を開かない。たまに首まで赤くして思いきって口を出してみると評定衆の失笑をかうようなこともあり、晴信公に、お前は黙っていよと言われて、童のようにうなだれたまま未下刻まで座っていたりもした。

「これでも槍働きは得意なのでござるが」

晴信公に黙っておれと言われた日には、隼人正は道々、すねて立ち止まるようにしながら何度もそう言った。

「拙者のような侍は、このままいくさがなくなれば働きどころを失うのでござろうな。また先達てのように、南蛮の船でも沈めさせてもらえればよいのだが」

その姿に、なんともいえない愛嬌があった。

清左衛門は秀でたもののある隼人正が羨ましかった。清左衛門は政はいうまでもなく、槍働きとなるとさらに目も当てられず、これではとても侍とはいえなかった。

すると隼人正は心底親身になって、それは一大事、拙者が教えてしんぜようと、木刀を取りに走ろうとする。

話せば話すほど清左衛門と隼人正は気が合うようになっていった。どちらも晴信公の評定衆とはいえ政の話はまったくせず、また隼人正は熱心な切支丹だったが、清左衛門が棄教したことについては一切尋ねようとしなかった。清左衛門にしてみれば、棄教した者に近寄られるよりずっと心が安まった。

こうして清左衛門たちが、体だけは評定に加わりながら実は何が話し合われているか分からずにいるあいだに、有馬家が御加増になるという噂が流れてきた。例の南蛮船を沈没させた大手柄で、有馬家に旧領が復されることになったらしかった。

有馬家の旧領といえば晴信公の祖父、つまり伊奈姫や清左衛門にとっても祖父にあたる有馬晴純公の築いた二十一万石である。島原半島を根城に大村藩の所領すべてと、さらにその北、今は鍋島家の所領になっている佐賀の南半分が含まれる。

「しかし清左衛門殿。われらにはとんと、わけが分かりませぬなあ。当家を旧領に復すとなると鍋島家はどうなるのでしょうなあ」

隼人正はいつからか清左衛門を名で呼ぶようになっていた。

たしかに鍋島家が治めている佐賀の南半分は、大本をただせば晴純公の所領を鍋島家の旧主、龍造寺家が奪っていったものだった。だが百年に及ぶ戦国を経て定まったもの

が、幕府の一存でくつがえるものなのだろうか。

「鍋島も徳川様のお声がかりとあらば黙って従いますかのう。でなければ、いくさでござろうか」

己の立身はいくさしかないと分かっていながら、決していくさ好きではない隼人正が清左衛門は好きだった。いくさあそびをしている童がそのまま大きくなったようなものだった。

「なぜ今のままではならぬのでしょう。有馬家には南蛮とつながる海もあり、領民も豊かに暮らしております。四万石の所領に南蛮との商いもあれば十分ではございませぬか」

「これはこれは、清左衛門殿。武士がそのようなことでどうなさる。折あらば版図（はんと）を広げてこそ武士でござるぞ」

たった今、鍋島とのかねあいを口にしていたかと思うと、次はもう鍋島から切り取るつもりでいる。武士というのは政をしていようといまいと忙しいようだが、隼人正には憎めないところがあった。

「とにかく徳川様が下されるというからにはまことでござろう。今は徳川様がこうとお決めなされたら、鍋島のものが明くる日から有馬のものになる世なのでござるなあ」

「さようでございますね。徳川様の御威光さえあれば」

何にしても楽しみなことだと言い言いしながら清左衛門は隼人正と城へ登り、帰ってきては珠と畠に手を入れていた。隼人正とは互いに行き来もしつつ静かにその年も暮れた。

日野江城がにわかに慌ただしくなったのは明くる慶長十七年（一六一二）の正月早々のことだった。

年賀の総登城などのひとつづきの行事が終わり、また五日に一度の評定が始まったばかりだった。清左衛門と隼人正がいつもの刻限に御座之間に入ると、評定衆の顔がみな揃って青ざめていた。二人は顔を見あわせて腰を下ろしたが、話しかけてくる者はなかった。

いつものことで清左衛門たちを除けて話は進むから、居ようといまいと、だれも二人を顧みることはない。結局清左衛門たちに声がかかっていなかっただけで、火急の事態に、あとの面々は連日評定を続けていたのだった。

それでも深更まで評定に加わり、明日またこの場でといって一旦評定が打ち切られたときには、清左衛門も隼人正もひととおりのことは分かるようになっていた。なんでも晴信公が家康公の陪臣の何某（なにがし）に賄をおくっていたことが明るみに出、晴信公は急遽、駿府の家康公のもとへ事の次第を説明するために旅立ったのだという。清左衛門たちが知らなかっただけで、この一年、有馬家ではその何某に、南蛮貿易でたくわえてきた金子（きんす）

のあらかたを渡していたらしい。

事の発端は意外にもマードレ号だった。

マードレ号を討ち果たした晴信公を、家康公は関ヶ原の一番手柄もここまではというほどに褒めた。さすがは龍造寺も攻めあぐねた晴純公の嫡流、肥前国一の大名じゃと持ち上げて、そちのような孫を持った晴純公は果報者だとまで仰せになったという。

すっかり面目をほどこし、雲の上でも歩いている気分になっていた晴信公に、さらに思いがけない話が舞い込んだ。

このたびのマードレ号撃沈は、南蛮から受けた国の恥を雪ぐという古今未曾有の戦いで、晴信公が完膚なきまでに勝利したものだ。家康公としては並ではない褒美を取らせねばならないが、それには有馬家を旧領に復してやるというのはどうであろう――

家康公の陪臣の何某は、家康公の命を受けて老中が折衝をはじめているとささやいた。

とは申せ、関ヶ原で大名各家の所領は決まりましてござる。それを覆すとなると鍋島もただでは引き下がりますまい。わが主、本多正純も存外、手を焼いておるようで――

本多正純といえば父ともども家康公に仕え、揃って幕府老中をつとめている当代随一の名門譜代だった。その正純が家康公の内命で周旋しているとなれば、これはもう三月や四月はかかっても実現しないはずがない。鍋島がどれほどごねようと、有馬家の旧領はこちらへ返ると決まったも同然だった。

大喜びした晴信公は、その何某に言われるまま、賄を渡しはじめた。

なんといっても事が進むのは駿府でだが、懸案の旧領というのは肥前国佐賀だった。路銀もかかり、そうそう足を運んでもおられずと言われれば、晴信公は五百両といわず千両といわず、前に倍して渡すようになっていった。事がなかなか進まなかったのも、多忙をきわめる老中が、こと西国の地を動かさねばならぬとなれば不可解な月日とは思われなかった。

だがマードレ号が沈んでさすがに丸二年がすぎると晴信公も、おそれながら進捗具合をお聞かせいただきたいと、じかに正純に乞うた。それが去年の暮れのことである。

驚いたのは正純で、正純はその日のうちに家康公に、何が何やら分からぬその全てをぶちまけた。

ぶちまけられたほうの家康公は、はじめはマードレ号と聞いても何のことか分からず、ずいぶんお褒めになって国姫様まで娶せられましたろうと言われて、ようやく澳門での一件を思い出した。

「それゆえ余は、褒めに褒め、国姫までやったではないか」

それでは不足かと家康公は怒鳴り、

「不足と申しておるのは私ではござりませぬ」

と正純はあわてて、すっかり晴信公は不足を唱えていることにされてしまった。

正純の家臣何某に死をたまわるのは決しているとしても、事はここからが複雑にもつれることになる。

まず厄介なのは晴信公の処遇だった。賄は、贈られた側が罰せられるなら、贈った側も同罪だ。晴信公は何某に要求されて渡したというが、先に何らかの願いがあってこそ渡すのが賄だから、実は晴信公の側から働きかけたと考えるのが筋ではないか。

そして次は、何某を家臣に持つ正純の立場だ。

何某は神妙に頭を垂れて、わが主君正純様にはまったく関わりがないと断言した。

正純様に取り次いでくれとしつこく頼まれましたが、僕（やつがれ）ごとき軽輩に言い出せるはずがございませぬ。勝手に千両万両と送りつけられ、当方こそ年来、窮しておりました――

事が明らかになればなるほど晴信公の旗色は悪くなった。

それで晴信公は取るものもとりあえず駿府へ向かい、主のいなくなった城では、この二年ひたすら金子の工面に奔走してきた評定衆が、どのみち大したことにはなるまいとたかを括り、ぼんやりと空を見上げていた。

だが晴信公が再び日野江城に帰って来ることはなかった。正純の家臣何某が捕縛され、火あぶりにされた翌日、晴信公は改易のうえ甲斐国に配流（はいる）された。

それからひと月後の慶長十七年（一六一二）五月、晴信公は切腹を申しつけられた。

切支丹の晴信公は、天主教の教えで自ら命を絶つことができず、家臣に首を落とさせて四十五年の生涯を閉じた。

二

珠が二人の子を連れて日野江へ移ってから五度目の夏が来た。十歳になった清助はこのところは毎日、辺りの童らと有馬川へ泳ぎに行っている。まだ六つの玄蕃もついていってしまうのがいやなのだが、川や海のそばで育つ子は仕方がないと近在の女房衆に言われて珠も諦めることにした。心配などいくらしてもし足りなかった。

それにこちらも、とため息をついて、珠は鍬の柄に体をもたせた。この春からの清左衛門を見ていると、童だけで水遊びをさせておくほうがよほど気安く思えるほどだった。

「お前様、少し休みますか」

「いいや。疲れたのなら、珠は軒へ入っておれ」

珠はふうと息を吐いた。広いとはいっても百坪あまりの邸内の畠だ。こうして毎日朝から晩まで清左衛門に耕されていては、珠の仕事がなくなってしまう。

「お前様はどうして珠がご嫡男様に肩入れしてまいったと思われますか」

「さあな。それよりご嫡男はもうやめるがよい。直純公とお呼びしなければな」

晴信公が亡くなられ、日野江は上を下への大騒動だったが、ひと月経って少しは落ち着いた。嫡男の直純公にはお咎めがないと決まり、あとは直純公の御国入りを待つばかりだった。直純公はずっと駿府におられたので、お顔を見たことがないという家臣も多かった。

「お前様。直純公は洗礼名をみげるとおっしゃるのだそうですよ。日野江にまいる前、まりいた様に教わったのです」

清左衛門はようやく鍬をおろす手を止めた。

「そうか、マリータ様がな」

まりいた様ではなくて直純公のほうのお話ですと言いかけて、珠は口をつぐんだ。このところの清左衛門は、人の顔色がほとんど読めない珠にもはっきりと分かるほど苦しげな顔をすることがあった。そんなときは声をかけるのもはばかられた。

「お前様……」

「かわいそうだがな、珠。直純公は棄教なされたそうだ。大御所様は名だたる切支丹嫌いゆえ、ずっと大御所様のそばにおられて、幼い日のまま切支丹というほうがどうかしているな」

清左衛門は軽く顔を上げて珠を見、もう面を取り替えたというように優しくほほえんだ。

将軍職を秀忠公に譲った家康公は、西国でもすでに大御所と呼ばれるようになっていた。徳川将軍家も二代十年になり、その政も少しずつ輪郭が浮かびあがってきた。どうやら天主教は禁じられてしまうらしく、すでに幕府直轄領では禁令が出、切支丹武士のかかえ置きが止められていた。これが直轄領以外にも広げられれば、島原日野江藩はふたたびの大騒動になる。

「日野江にも禁教令が出されるのでしょうか」

「ああ、出されるだろう」

清左衛門はまた鍬を持ち上げた。

さくっ、さくっと柔らかい土の音がする。二人で何度も鍬を入れてきたから、この庭の土はその辺りの百姓家にも引けをとらない。

「ご家臣の皆様はどうなさるのでしょう」

隼人正だけではない。この島原は、いっときの大村以上に切支丹だらけだ。

「棄教なさるのではないか」

さくっ、と柔らかい音がした。

このごろ珠は思っている。清左衛門は心の中では決して天主教を棄てていないのではないか。たった一度、棄てると口にしたために、天主に顔を向けることができないだけなのではないか、と。

「ですが棄教というのは、たやすいことではありませんでしょう」
「たやすいではないか。私も珠も、棄てたではないか」
そう軽々とおっしゃるところが怪しいのですと、思ってもうまく言葉にあらわせないのが、珠の頭の足りぬところだ。
「まさかこの日野江でも西坂のようなことが」
清左衛門は鍬を止め、すぐにまた土へ振りおろした。ざくりと鈍い音がした。
「殉教などあってはならぬ。武士が切支丹であってはならぬなら、武士をやめればよいのだ。どうせもういくさなどありはせぬ。みな、土を耕して生きてゆけばよいのだ」
「では百姓ならば切支丹でいてもよろしいのですか」
清左衛門は顔を上げて珠を見た。
「……珠は口が回るようになったのだな。二の矢が継げぬとはこのことだ」
「おからかいにならないでください」
「いずれ武士をやめたとて天主教は許されぬ世になるのだろうな。それにしてもなぜ分かった」
「城下ではみな申しております。こたびの晴信公の一件できっと天主教は禁じられると」
春先、晴信公が改易のうえ配流と決まり、清左衛門たちが次の沙汰を待って城に詰め

ていたあいだ、城下には事実とも憶測ともつかぬ噂が次から次へと流れてきた。晴信公の一件は長崎をめぐる西班牙（いすぱにあ）と葡萄牙（ぽるとがる）の争いが発端だとか、耶蘇会が南蛮を利するために政に関わろうとした結果だとか、どれもが家康公の駿府筋の話として城下をかけぬけていった。
「とにかく大御所様は、晴信公といい相手の何某といい、この一件のことごとくが切支丹だったというのでひどくお怒りなのでございましょう。切支丹めは政に口を出しすぎる、南蛮人の血かと、おおせだったそうではありませんか。だとすれば大御所様はいっそ、この日の本じゅうに禁教令を出されるのではありませんか」
清左衛門はうなずいた。
「珠の申すとおりだな。いつかきっと禁教令は出されるだろう。それは多分、大村の喜前公が出されたような生やさしいものではない。城下に切支丹が居れば、藩主が改易になるというほどのものだろう。藩主は家を守らねばならぬゆえ、さぞ厳しい詮議になるであろうな」
「では、どうすればよいのですか」
「決まっている。南蛮人は伝道をやめるのだな。この国のことはもはやこの国の司祭に任せるのだ」
「じゅりあん様たちに？」

「ああ、そうだ」
「ですがじゅりあん様たちはどうなるのですか。あのお三方が信仰を棄てられるとは思えません。だったら十五年前のように、今度はじゅりあん様たちが磔けられるのですか」
「………」
「この先、この国はどうなってしまうのです」
「どうなる、か。……どうなるのであろうな。私にも分かるはずがないのだが」
清左衛門はぼんやりと宙を見つめた。
そのとき珠はようやく、清左衛門こそ、どうなると自らに問うているのだと気がついた。だからこその春先からの、この生気をなくしたような顔なのだ。
「私はもはや南蛮はこの国に関わらぬほうがよいと思うのだ。同じ天主に向かうのでも、南蛮人の見方とこの国の見方は違う。日の本の者の体には、上は大名から下は百姓、女子供にいたるまで、死を潔いとする考えが染みついている。そのような土地へはこれ以上、天主教は入ってこぬほうがよい」
「でも、じゅりあん様たちは……」
「ジュリアンたちのことは珠が案じずともよい。天主がついておられる」
「………」

「それより珠は牧野殿のことを案じてさしあげるのだな。だがくれぐれも棄教をすすめるような罪を犯すでないぞ」
珠はうかがうように清左衛門を見た。やはりこの人は切支丹のままなのだろうかと、春先からの同じ思いが頭をよぎった。
「このところ牧野様はおいでになりませんね。少し前までは毎日のようにのぞいて帰られましたのに」
「ああ見えて牧野殿は有馬家の譜代ゆえな。評定では末席といっても、目立たぬところで格別のお働きをなさっていよう。きっとまだお忙しいのであろう」
清左衛門は隼人正の邸へつづく辻のほうに目をやった。いつも二人はそこまで並んで戻り、隼人正はあの辻で大きく手を挙げて、角を曲がって行ったものである。
「今ごろお城では何を話し合っておられるのでしょう」清左衛門はもう答えなかった。
さくっと、清左衛門が鍬を下ろす音が聞こえた。
珠は金に輝く本丸の瓦に目をやった。

有馬直純公が御国入りを果たすことになり、一足先に島原に伴天連追放令が発布された。天主堂や学林がなくなってからでなければ帰らぬと直純公に申し渡されて、評定衆

は急いで打ち壊しの普請方まで組織した。日野江城下では清左衛門と隼人正が選ばれて、下にそれぞれ十人ずつの侍をつけて組とした。

清左衛門は日野江に戻って初めて、天主堂の隣に建つ学問所へやって来た。清左衛門の邸とは日野江城の丘をはさんで裏側になり、これまでは見ることもなかったのである。

学問所は入り江に近い高台の端に、天主堂と並べて建てられていた。短い休みのときは皆が海のほうへ出て行くのに、清左衛門たち四人は日野江城とのあいだにあたる裏山に入って行った。城の石段には打ち壊された寺社の仏像や墓石が使われていて、胸を痛めたものだった。

もしかするとあの石段を上ったときから、四人はこの国にふさわしい天主教の姿を探しはじめたのかもしれない。寺社を壊してその上に天主堂を建てるのではなく、寺社と天主堂が隣りあう、大村と有馬のような関わりを作りたかった。

だがもう無理だ。これからは天主堂や学問所が打ち払われ、後には寺が建っていく。はやばやと大村からやって来た僧たちが、独力で壊し始めているところもある。

かつて南蛮の天主教がやってきたことだ。

あのようなやり方が許されるはずがなかったのだ。天主教を教わるのにこの国の寺社が壊され、あまつさえ殉教を望まれて、命までひきかえにさせられねばならぬはずはない。すべて、幼い日から清左衛門たちが考えてきたことだ。

「ついにこのような日が来てしまいましたなあ」

隼人正がそっと清左衛門にささやいた。

「直純公の天主教嫌いは生半(なまなか)なものではありませぬな。晴信公のお子というのに、ずっと駿府におられたせいでしょうな」

どこか体に痛いところでもあるように、隼人正はさかんに目をしばたたいていた。

「このところ清左衛門殿はお城へ登られぬゆえご存知なかろうが、あの晴信公の沙汰には直純公が一枚嚙んでおられると申しますぞ」

直純公自らが家康公に、晴信公への厳しい処断をのぞんだというのである。そこには切支丹を蛇のように嫌う新しい奥方、国姫の入れ知恵があったともいう。

「まさか親子でそのようなことがあるはずは」

「いや。親子とはいうても直純公は大御所様に育てられたようなものじゃ。いざとなれば有馬家を捨てても徳川をお取りになるわ」

だがその直純公が家康と太いつながりを持っていたから有馬家は取りつぶしを免れたのだ。それがあったから晴信公一人の咎として所領は安堵され、直純公は転封(てんぽう)にもならずに島原へ帰って来ることができる。

「まあ、晴信公のお子じゃ。そのうち、この島原の良さも分かってくだされよう」

隼人正は自らに言い聞かせるようにつぶやいて、かかれと合図の手を振った。所在な

げに立っていた配下たちが、いっせいに学問所の板塀に斧をふり下ろした。

「ここに居った者どもはいずこへ参ったのでしょうな。清左衛門殿は聞いておられるか」

「おおかた口之津（くちのつ）辺りではありませぬか」

島原半島の南端の村だ。内海のようなおだやかな湊があり、南蛮人が好んで船を着ける。

隼人正は驚いたように清左衛門をふり返った。

「どうなさいました」

「いや、そうぬけぬけとお教えにならぬほうが切支丹どものためではないかと思いましてな。われらは表面、直純公の命じられるままに幕府の公儀として働かねばならぬ。だが日野江の侍はだれ一人、このような仕儀を心から望んではおらぬ」

とにかく直純公が入城する日野江はこのままとはいかずに普請方をたてた。だが島原は広い。よそでならまだ当分は時が稼げる。

「ですがいずれ追放令は島原じゅうに広まりましょう。ならば早いうちに島原を出たほうが司祭たちのためでございます」

「……さても清左衛門殿は情のこわい御方よ」

隼人正は足もとの石を草履でつついてから、地面を蹴るようにして走り出した。獣が

吠えるような声をあげて、学問所の塀に鳶口（とびぐち）で打ちかかった。

その一撃で、学問所の板塀はめりめりと向こうへ倒れていった。砂煙が上がり、それが落ちると、がらんどうの板間があらわれた。

奥の一段高くなったところに祭壇が置かれていた。

「祭礼の間だ……」

だれかが呆然と声をもらしたとき、清左衛門は静かに目を閉じた。

この学問所にいた時分、清左衛門たちは寅刻に起き出してここに集まった。まだ暗い祭礼の間に蠟燭がともり、天主の母子像が闇に白く浮かび上がっていた。

ぬかずいて祈りをささげる肘置きの最前列に、四人は押しあいながら場所を取った。寝坊のマルチノはいつも後ろからそっとかがんで割りこんできて、明日こそはちゃんと起きるのだぞとマンショに叱られていた。司祭はそんな子供らの姿を振り返り、優しくほほえんであの祭壇の横の棚を開いたものだ。

「どうするのだ」

「祭礼の間を壊せというのか」

ざわめきは大きくなって誰もが手を止めていた。天主のおわす祭礼の間を壊せるような者はいない。そんな恐ろしい罪を犯せるはずがない。

罪を犯すのは清左衛門一人でいい。清左衛門は天主を棄て、天主との誓いに背いた者

だ。

清左衛門は目を開いて祭壇の前へ進み出た。

「聖餅（せいへい）の類はとうに持ち去っておりましょう。ここはもう、ただの板間でござる」

清左衛門は斧を大上段に構えると、祭壇めがけて力いっぱい振り下ろした。ぱっと火花があがり、一枚板の祭壇が中央で二つに割れた。

後ろでだれもが息を飲んでいた。これがただの台座なものか。ここがただの板間なものか。司祭が手をつき、祈りをささげ、葡萄酒を置いた場所ではないか。

だがそれなら清左衛門は言ってやる。刃向かうにはどうすればよい。禁教令を拒み、藩主を拒み、皆で殉教するとでもいうのか。

清左衛門はふたたび斧を振り下ろした。祭壇の足が砕け散り、木っ端が床を跳ねて転がった。

祭壇の角を踏んで残り半分の祭壇の前に立ち、みたび斧を下ろした。まるで人の身を切るようなこもった音をたて、刃が祭壇を突き抜けて床に食い込んだ。

今ここにいる誰よりも清左衛門はこの祭礼の間で祈ってきた。南蛮へ私を、だれも殉教させぬ道へみちびく司祭に私をと。そのためならばどんな苦難も受けると、この粉々になった祭壇に幾度となく跪（ひざまず）いてきたのは清左衛門だ。

斧を引き抜くと、またそのそばに振り下ろした。ただ一人、清左衛門のふるう斧の音

だけが板間に響く。

だれも命を落とさず、だれも棄教せずにすむ道。それが今の清左衛門には一つしか見えない。清左衛門だけが罪を重ねればよい。誰よりも棄ててみせ、壊してみせ、己一人が背信者になればいい。

「そこまでせずともよいわ」

後ろで誰かがつぶやいて、清左衛門はようやく目が覚めたようになった。

振り返ると隼人正が立っていた。

「さあ、われらもお役目じゃ。お役目じゃぞ」

その声でまた皆がそれぞれの道具をふるい始めた。

伊奈姫から文が届いたのは十一月のことだった。日野江の天主堂や学問所がひととおり打ち払われ、それを待ちかねたように直純公が入城して、清左衛門だけが閉門にでも処せられたように登城もせず、邸で過ごしていた昼すぎだった。

朝から灰色の雲が低くたれこめ、縁先に出ても文字が見えなかった。清左衛門が珠に燭台を持たせ、ちょうど開こうとしたとき、生垣から隼人正が顔をのぞかせた。

「まあ、牧野様。お久しゅうございます、どうぞお上がりくださいませ」

脇から文を見ていた珠は、庭に飛び下りようとして立ち上がった。燭台の炎がふっと消えて、清左衛門はなにか厭な心持ちがした。
「あいや、奥方。少々、清左衛門殿にご足労いただきたいのだが」
「まあ、それは失礼いたしました」
清左衛門は文を珠にあずけて立ち上がった。先に読んでもいいかと珠が目でたずねていたので、清左衛門は笑ってうなずいた。
それを見届けると隼人正は背をむけて早足で歩きはじめた。
「お城で何かあったのでござるか」
隼人正は無言で首を振った。
いつも隼人正が手を挙げて曲がっていった辻まで来ると、隼人正は常と逆のほうへ折れた。その先は道が徐々に細くなり、やがて田の間の畦道にかわっていく。
冬も盛りのことで、田にはかけ稲も残っていなかった。この時節、日は高くても人影はない。
隼人正は口をつぐんだまま畦道を歩いて行く。
「牧野殿……」
ここらでよいか、とつぶやいて隼人正は振り返った。
「武士はいかなるときも刀を手挟んで歩くものですぞ」

なんのことだろうと思いつつ、清左衛門は何もさしていない己の腰に目をやった。隼人正の腰には木刀があった。
「清左衛門殿に伺いたいことがござる」
このように人目のないところに呼び出してだ。
「このところ清左衛門殿はお城へ呼ばれぬであろう。そのわけをご存知か。身に覚えがありますかな」
清左衛門は頷きも首をふりもしなかった。わけは分からないが、身に覚えはある。いずれ清左衛門が棄教者だからだろう。
「心してお答えめされよ。晴信公に棄教を説いておったというのはまことか」
清左衛門は思わず目を見開いた。だがすぐに畦に目を落とした。
所詮、まことだ。清左衛門は棄教者として晴信公のそばにいたのだから。珠など、清左衛門が棄教したというだけであっさりと棄教した。棄教者は棄教者を呼ぶものだ。
ぼんやりと見返すと、隼人正は左手をゆっくりと腰紐の上に沿わせていた。体の前を交差した右手が、木刀の握りの上でぴたりと止まった。
「答えられぬのか。大村喜前公に棄教させ、伴天連追放令を出させ、領内の天主堂を焼いたというのはまことか。それゆえ大村におられぬようになり、島原へ逃げてまいったというのは」

清左衛門は目を閉じた。

それこそまことだ。清左衛門が棄教したから喜前公は切支丹をやめ、藩内に追放令を出した。念を入れてその形を作りあげ、挙げ句、切支丹に恨みをかって玖島城下を逃げ出してきた。ほかの誰でもない清左衛門自身が、そう思われることを望んできた。

隼人正が腰から木刀を抜くのが気配で分かった。

「清左衛門殿、違うなら違うと申されよ」

「その通りだ」

木刀が風を切ってうなり、腿（もも）に鋭い痛みが走った。

「大村でやったと同じことを、この日野江でも為そうとしたか。だが晴信公が思い通りにならぬゆえ、直純公に取り入った。南蛮が大村の次に食い物にしようとしているのは島原じゃと、直純公にごたくを並べたか」

隼人正はもう一度木刀をふりおろした。びしりと腿が鳴り、清左衛門は膝をついた。

「南蛮へ行って、天主教の禍々（まがまが）しさを知ったと申しおったか」

ああそうだ。南蛮人はわれらに殉教を望んでいる。それがいかに忌むべきことか、清左衛門は誰よりよく知っている。南蛮に行ったからこそ分かったのだ。あの輝く目、輝く天主堂。南蛮人は美しい黄金の髪をなびかせて、南蛮など知りもせぬ小さな島の人々が、われ先に命を捨てるのをうっとりと眺めている。それを、食い物にしているといわずに何と言う。

木刀がうなった。背も腹も、足も首も、清左衛門はしたたかに打ちのめされた。

「命までは取らぬ。拙者はそなたと違うて切支丹ゆえ、どれほど憎うても殺しはせぬ」

裏切り者、裏切り者、と隼人正は泣きながら繰り返した。涙でにじんで、隼人正はよく見えていないのだ。そこではない、私の体が倒れているのはもっと手前だ。

「お前のような者がなぜ日野江へ来た。なぜ拙者の目の前へあらわれた。お前がおるゆえ拙者が罪を犯さねばならぬ」

隼人正は泣きじゃくっていた。お前など日野江から出て行け、お前など死んでしまえ
――

「お前の思い通りにはさせぬぞ。島原は渡さぬぞ」

「……」

「直純公を連れて、どこへなりと行くがいい。直純公がどこへ国替えになろうと拙者は行かぬ。棄教した裏切り者になどついて行くものか。拙者は侍などやめて、この地で百姓になってやるわ」

隼人正は清左衛門の襟をつかんで地面から持ち上げた。そして力いっぱい冬田に突き落とした。

「よいか、二度と顔を見せるな。お前を打ち据えたいと思うておるのは拙者だけではな

いぞ。子らに手出しされぬだけ有難いと思え」
隼人正はくるりと背を向けた。
「牧野殿……」
呼んだときには隼人正は駆けていた。
どうにか畦にはい上がったとき、隼人正の姿はどこにもなかった。
清左衛門はそのまま畦の上に仰向けになった。
立てるかと自問して目を閉じた。しばらく休んでいよう、そうすれば歩けるようになるだろう。
もう日野江を出るしかない。だがどこへ行けばいい。
清左衛門はそっと目を開いた。
よくこうして南蛮船の上で仰向けになり、雲を見上げたものだった。青い空に真っ白い雲が浮かび、白い帆をふくらませた帆柱が、雲への架け橋のように高くまっすぐ伸びていた。
なあ、マンショ。南蛮という国はすごいなあ。こんな大きな船を海にうかべ、私たちをはるかな異国へ連れて行ってくれるのだものな――
ミゲルの南蛮びいきは聞きあきたよと、横でマンショが笑っていた。
今ごろマンショはどうしているだろう。

そう思うと涙がこぼれて耳へ伝っていった。辛いとき思い出すのはいつもジュリアンなのに、なぜかマンショの顔ばかりが浮かんできた。
あれは長崎を出て三月ばかり経ったときだった。やはり甲板に寝ころんで、マンショととりとめのない話をしていた。
マンショのお母上、ずいぶん泣いておられたな――
四人が四人とも、少し古里が恋しくなっていたのかもしれない。
マンショの母は長崎湊で、まるでマンショが南蛮へ売られて行くかのように泣き叫んでいた。従者を何人も従えた若い母親が人目もはばからずに泣いているのは、四人の胸をとりわけしめつけた。
また会えるのだから案じてはいない。天主様が私の分も母上を守ってくださるよ――
そうしてマンショは寝ころんだまま、顔をミゲルのほうへ向けた。
ねえ、ミゲル。ミゲルは本当はマリタ様が好きだったのだろう。マリタ様だってミゲルをじっと見て泣いておられたね――
あのとき己は何と答えただろう。多分、また会えるからいいと、マンショの言葉をそのまま返したのではなかったか。また会えるからかまわない、きっと天主様が守っていてくださるから、と。
あのときの甲板は日の光に照らされて真綿のようにあたたかかった。

腕に少し力が入るようになり、清左衛門は土にのびていた腕を胸の上へ持ってきた。

「よし……」

掛け声をかけて体を起こしてみた。背に幾筋も痛みが走る。歯を食いしばると血の味がした。

畦に胡座になると、少しずつ泥を払った。

子らに手出しされぬだけ有難いと思え——

清左衛門は襟に入り込んでいた土を落とした。

二度と顔を見せるな。どこへでも行くがいい——

だがどこへ行けばいい。大村で生まれ、十一で日野江の学問所に入った。十三で南蛮船に乗り、戻ってからは耶蘇会の中と大村しか知らないのだ。子と妻を連れ、西国中の切支丹に追われているにも等しい。大村に行けば喜前公の息のかかった彦右衛門がただでは済まさないだろう。

清左衛門は地面に手をついてゆっくりと立ち上がった。尻を浮かせたとき周囲を見回すと、隼人正の放り出していった木刀が転がっていた。

心の内で密かに祈りを唱え、清左衛門は木刀に手を伸ばした。

杖さえあれば、歩こうと思えば歩けるものだった。こうして杖をつき始めたのは秀吉の聚楽第から帰って数年の内だから、もう十五年は昔のことである。

人というのは杖のつき方を忘れぬものだと、清左衛門は笑みが浮かんできた。

大丈夫かい、ミゲル——

またマンショの声が聞こえてきた。まるで今、隣で寄りそって支えてくれているかのようだった。

マルチノはどうも、がさつだからね。ミゲルを支えるのはジュリアンに任せるように言っておいたけど、このあいだ、つまずかされたって？　ひどいなあ、大丈夫だったかい——

あのとき二人で同時にはっとして、口元で十字を切ってほほえんだものだった。

「マンショ……。私は四人だから堪えられたのだ」

大丈夫だね、ミゲル——

「ああ、大丈夫だとも。私たちはいつも四人だ。四人なら、どんなことも堪えられる。私たちは南蛮に行ったのだから」

清左衛門はゆっくりと畦を歩きはじめた。

畦は少しずつ太くなり、天秤棒をかついでいる百姓とすれ違った。向こうはまじまじと清左衛門を眺めたが、こちらは目をやらなかった。よほどひどい形（なり）をしているのかと顔に手をやると、ざらざらと土のかたまりが落ちていった。

これではさすがに珠が仰天すると、立ち止まって泥を払った。ぽんぽんと衣を叩いた

ら面白いように泥が落ちる。体はそう痛くない。
「お前様！」
突然珠の声が聞こえて、清左衛門は頭をあげた。
隼人正の邸との分かれ目にあたる辻がぼんやりと見えていた。そこに女が立っているようだが、今日は暗くてよく見えない。
「お前様！」
女が駆けよってきた。やはり珠だ。
「お前様、どうなされたのです」
珠は片手で杖に力を添えると、もう片方の手で頭から順に清左衛門の体の土を払っていった。珠も杖を使う者の支え方を覚えているようだ。
耳にも首にも泥がこびりついていたらしく、珠は顔を引きつらせて清左衛門の顔をぬぐっている。手についてきた血を見て、いよいよ眉根を寄せた。
「どこでこのようなおけがを。誰が」
はっと口をつぐんで、珠は清左衛門を見つめた。
「何があったのです」
「それより、珠はどうしてここへ」
清左衛門を支える珠の手がぴくりとふるえた。

「お前様を迎えにまいったのです。ですが辻の先はどちらへ行かれたか分からなくて、そこで待っておりました」
「何があった」
出かける前、燭台の炎がかき消えたことを清左衛門はふいに思い出した。
「マリータ様の文か」
こくんと珠は小さくうなずいた。
「何が書いてあった」
「珠はあまり字が読めませんので、お前様がご自身でお読みになってくださいませ。珠が意味をとり違えているだけかもしれません」
珠は慣れた持ち方で清左衛門の片側に力を貸し、だまって歩きはじめた。

座敷の燭台のそばで文を開いた清左衛門は、一度文を顔に近づけて、それからぱたりと膝の上に落とした。
灯りの影にならないように少し離れて座っていた珠は、薄暗がりの中で、やはり読み違えてはいなかったのだと思った。
伊奈姫の文は、長崎の学林でまんしょが死んだと告げていた。まだ四十三歳という若

さだったが、ここ数年、体を悪くしており、その身にさまざまな心労が降りつもってついに病が癒えなかったという。

　四年前に司祭に叙せられてから、まんしょは小倉の学林で教えつつ伝道に生きていた。だが幕府の顔色をうかがった藩主に禁教令より先に追放され、行き場を失って長崎へ戻っていた。

　もとは天主堂が立ち並び、学林も修練院もあった長崎の町は、ちょうどその頃から目まぐるしく変わりはじめていた。元来そう大きな町ではないのに、喜前公が棄教したことで大村領から大勢の切支丹が逃げこんで来た。切支丹同士の小競り合いも起こりはじめ、加えて説教会という修道会の天主堂が新しく建てられた。もとからあったまんしょたちの耶蘇会と兄弟会と、新参の説教会が反目しあうことも増えていた。

　そこへ今年になって島原でも藩主が切支丹から棄教者へと代わり、まずは日野江城下で切支丹が一掃された。日野江にあった学問所は長崎へ移ってきたが、相前後して幕府直轄領でも天主教が禁じられた。

　長崎の天主教を支えるのは、南蛮貿易の利という、信仰とは関わりのない頼りがいのないものだけになっていた。幕府か南蛮か、そのどちらかが貿易の利を捨てることに決めてしまえば、長崎の天主堂はたちまち打ち払われるのだった。

　病の身に先行きの不安を両手いっぱい抱えるようにして、まんしょは旅立った。

「マンショほど、この国になくてはならぬ司祭はいなかったのだ」

　珠はこれほど悲しそうな顔をした清左衛門を見たことがなかった。西坂で多数の殉教者が出たときも、彦右衛門に殺されかけて玖島城下を後にしたときも、清左衛門はもっとましな顔をしていた。棄教したときなど、清左衛門の口から聞くまで気づかなかったほどだ。

　珠はそっと座敷を出ると、桶に水を張って戻った。清左衛門の後ろへまわり、だまって袖を脱がせた。

　清左衛門の背は一面、赤紫に腫れていた。

「ずいぶん容赦なく打たれておしまいになって」

「……」

「牧野様がなさったのですか」

　清左衛門は答えない。

　珠は手ぬぐいを水に浸し、腫れの一つひとつにゆっくりと当てていった。

「珠は牧野様をお恨みいたします。お前様をこのような目にあわせて」

「牧野殿のせいではない。私が悪いのだ」

「お前様が悪いはずがございません。それに、そんなことは珠には関わりありません。たとえお前様が牧野様に同じことをして仕返しを受けただけだとおっしゃっても、珠は

牧野様を許しませぬ」

清左衛門は重そうに首をふっている。

「私は智恵もなく、木刀を振りまわすこともできません。ですが珠の目は生涯、お前様のこの傷を忘れません。珠はこの先どんな喜びがあっても、牧野様のお顔だけは死ぬまで覚えています」

珠のこの手は清左衛門に手ぬぐいを当てることしかできない。だが心の中でずっと恨むことはできる。

「珠」

「なんでございますか」

「長崎へ帰らぬか」

珠は手を止めた。

「お前はなにも申さぬが、私は分かっておるつもりだ。この半年……、晴信公が亡くなられてから周りの者の目も変わったのではないか。晴信公が死をたまわったのは私のせいだと、みな申しておるだろう」

「珠はそのようなことは信じておりませぬ。ですから珠はなにも気にしておりません」

あわてて桶に手ぬぐいをつけたので水がはねた。

「夫婦になった時分、私たちは誰にも口をきいてもらえず、辛かったではないか。あの

辛さに比べれば、身に受けた傷など何でもない。私はこの身が打たれてようやく分かったとも。この半年、珠はどれほど辛かったであろう」

「お前様……」

「なあ珠。長崎へ帰ろう。長崎で土を耕そう。長崎ならば晴信公のことで私を恨んでおる者もそうはおらぬ。珠も清助も玄蕃も、安んじて暮らしてゆかれよう」

「お前様」

珠は清左衛門の背に頰をつけた。これほど打たれて、どうして人に優しくなれるのだろうと思うと、涙があふれて止まらなかった。

「長崎でマンショの墓へ参ってやろう。何もしてやれなかったと、せめて詫びたいのだ」

清左衛門は前を向いたまま、珠の手にその手を重ねた。

三

慶長十九年（一六一四）十月、長崎湊では大きな南蛮船が帆を巻いて、明日の澳門への出発を待っていた。星の明るい夜空に、糸くずのような細い月がそっと輝いていた。

清左衛門は長崎奉行の長谷川藤広らに伴われ、桜町に新しく造られた牢の通路を歩い

ていた。

「そのほう、切支丹には蛇蝎のごとく憎まれておると聞いたが、まこと、よいのじゃな」

「はい。お慈悲をいただき、かたじけのう存じます」

奉行はちっと唇を鳴らし、足を早めた。

今年一月、幕府は伴天連追放文を出し、正式に天主教を禁じた。幕府直轄領だけでなく各藩各地に伴天連の追放と天主堂の破壊を命じ、かろうじて残されたのは慈悲屋と呼ばれる南蛮医術をほどこす家屋だけになった。

ここ長崎でも岬の天主堂をはじめ、学林や修練院がことごとく打ち払われた。桜町の牢には諸国から司祭たちが集められ、そろって南蛮船に乗せられて明日、日の本を出されることになっていた。牢にいるのは南蛮人のみならず日本人の司祭や修道士、親が切支丹という幼子から切支丹大名の高山右近まで、総勢三百五十人に及んだ。幕府に捕らえられて来た者、天主教を禁じられるなら生国を捨てる決意をした者、それぞれが二度とこの国に帰ることのできない船出を待っていた。

マルチノも牢にいた。だがジュリアンはついに今日まで見つからず、清左衛門は奉行に、マルチノからジュリアンの居所を聞き出すように命じられたのである。

「そのほうにはまだまだ働いてもらわねばならぬ。牢で切支丹どもに殺されるようなこ

とになっては困るのじゃ」

どちらでもよいと思いつつ言っているのは清左衛門にも分かっている。

清左衛門は深々と頭を垂れた。

「外へ引き据えてまいっても吐きますまい。長谷川様のお手をこれ以上わずらわせるわけにはまいりませぬゆえ」

まあよいわ、とつぶやいて奉行は牢を開けさせた。背を押されて清左衛門は中へ転げ込んだ。

ほとんど光のない牢の中で大勢の息だけが聞こえてきた。暗がりに少しずつ目が慣れてくると、皆が清左衛門の周囲で遠巻きに輪になっていた。

「マルチノ。マルチノはおらぬか。ミゲルだ、マルチノ」

みげる、みげる、とあちこちで名が唱えられた。あの南蛮使節のみげるか。修道士でありながら棄教したみげるか。まだ生きておったのか、この日の本の面汚し。大村藩主を棄教させ、有馬藩主を死に追いやった悪魔め——

すぐに人をかきわける気配がした。

「ミゲル？　ミゲルか」

人垣の後ろからマルチノが現れた。

「マルチノ！」

二人はしっかりと抱き合った。牢のざわめきが高くなった。
「皆、悪いが垣根になってくれ。話が牢の外へもれぬようにな」
マルチノの言葉に、だれもが顔を見合わせながら輪になった。中央にマルチノと清左衛門が座り、それぞれが少しずつ背を高くして何重にも取り囲んだ。
「ミゲル、どれほど会いたかったことか。さぞ苦労したろう」
マルチノはいたわるように清左衛門の頭や顔や首をなでた。マルチノは清左衛門のために涙を流してくれていた。
「なにを言う。私たち四人の心はいつも一つではないか。私は辛いと思ったことはない、いつも三人が共にいてくれたからだ」
マルチノの涙は止まらなかった。
あの幼かったマルチノが、明日はこの牢の人々をひきいて澳門へ行く。
「マルチノ、私はなにも案じておらぬ。お前の南蛮語なら、皆の口となり耳となってやることができる。お前がおれば、この国を離れても皆、生きてゆける。お前が南蛮へ行ったのはこのときのためだったのだ。お前の道はここから始まるのだ」
マルチノは両手で顔をおおって何度も何度もうなずいた。
「案ずることはない。お前なら必ずできる。なにも恐れることはないのだ。そしてな、

よいか、絶対に帰って来るな」
マルチノは顔をあげた。
「よいな、この国でこのさき何があろうと、マルチノは絶対に戻るな。澳門で何を聞こうと、四人でたてた誓いを忘れるな」
「誓い……」
清左衛門はマルチノの目を見てうなずいた。
この国のことはこの国の司祭が引き受ける。南蛮人ののぞむ殉教など、この国の者には一人もさせせぬ。生きて、天主の道を歩む。
「ミゲル……。ジュリアンが来なかったのだ。どこにいるか分からない。ジュリアンはこの国に残るつもりなのだ。あれほど私たちは殉教せぬと言ったのに……」
清左衛門はマルチノを抱きしめた。四人の中で頭一つも小さくて、誰にとっても弟のようだった。真っ赤な頬をして、天主様に殉教させないでくれと祈ると言っていたマルチノが、ジュリアンを案じて泣いている。
だれも殉教させたくない。幼いマルチノも、ジュリアンも。
「ジュリアンは決して殉教させせぬ。私がきっとジュリアンを守る」
「でも」
「よいか、ジュリアンは澳門の皆にはお前一人で十分だと思ったのだ。ジュリアンは何

も案じてはおらぬのだ。それにジュリアンは南蛮語ができぬだろう。お前のかわりにジュリアンが澳門に行くことはできぬ。皆の役には立てぬのだ」

「……」

「私たちはつねに四人ともにいると誓ったではないか」

「だが、ミゲルはずっと一人だったではないか」

マルチノはまた両手で顔をおおった。皆が息を詰めている牢に、司祭のマルチノの嗚咽だけが響いた。

「マルチノ。これからはマルチノが一人になる番だ。マルチノは一人きりで澳門で堪えぬくのだ。何があろうとも」

「何があろうとも……」

清左衛門は力強く、そうだと言った。

「ジュリアンには私がついている。私がジュリアンを守ってみせる。だからマルチノはこの国のことは何も案じるな。私たちはいつもそうだったろう」

マルチノは涙をぬぐいながらうなずいた。

「ミゲル。ジュリアンは口之津へ行くつもりなのだ」

「口之津だと」

「ジュリアンが博多で伝道していたのは知っているだろう」

清左衛門はうなずいた。藩主黒田長政が切支丹だった時分は天主堂もたくさんあった地だが、棄教して全て焼き払われた。今は他国にもまして天主教が迫害されているという。

「ジュリアンはしばらく長崎に戻っていたが、口之津辺の司祭に任じられたのだ」

「なんだって」

日の本にこれほど禁教の嵐が吹き荒れ、切支丹が行き場を失っているというのに、南蛮人はまだ切支丹の数を増やせというのだろうか。

マルチノが小さくうなずいて胸の前で十字を切った。そして清左衛門にも同じようにしてくれた。

「ここに集められた私たちはまだ恵まれているのだ。澳門にさえ渡ればもう」

マルチノたちはもう棄教か殉教かと迫られることはない。

清左衛門はマルチノの肩を引き寄せて互いの額を近づけた。

「……何も言ってやれぬ私を許してくれ」

マルチノは小さく頭をふった。そして、言ってくれ、とささやいた。

「天主の平安がいつもミゲルと共にあるように」

「……また、マルチノと共にあるように」

二人は互いを強く抱きしめた。もう二度と会うことはできない。徳川の世がくつがえ

らぬかぎり、この国から禁教令がなくなることはないからだ。
「マルチノ。私は何も案じていない」
「ああ。私もミゲルのことは案じていないとも」
清左衛門は思い切るように立ち上がった。四人の心は一つだ。清左衛門はマルチノであり、マルチノは清左衛門なのだ。明日澳門へ旅立つのはマルチノであり清左衛門でもある。
牢の扉へ、ゆっくりと人垣が割れていく。その間を清左衛門は静かに歩いて行った。
「ぱあどれ」
後ろで老婆の声が聞こえた。そうだ、こんな年寄りが今さら日の本を離れて、マルチノがいなければどうやって生きていけるだろう。
マルチノは老婆の口となり、耳となる。
「ぱあどれ」
「ぱあどれ」
この大勢の、か弱く貧しい日の本の人々をマルチノは一人で支えていく。そのためにマルチノは司祭になったのだ。今日、これからの日のために。
「ぱあどれ」
ふいに着物の裾を引かれて清左衛門は振り返った。

「ぱあどれ。ぱあどれを天主様がお守りくださいますように」
顔も知らない女が清左衛門に言った。
「ぱあどれ。天主様の平安がいつもぱあどれと共にありますように」
別の男がそう言って頭を下げた。
清左衛門は呆然と立ちつくした。
「私はパードレでは……、司祭ではないが」
皆がそれぞれ首をふった。
「どうぞお元気で、ぱあどれ」
「私たちのためにお祈りくださいませ」
天主様の祝福を、ぱあどれ。天主様がみげる様をお守りくださいますように——
「私は……」
マルチノが清左衛門にうなずいていた。
「天主の平安がミゲルと共にあるように」
「マルチノ……」
「私たちのために祈っていてくれ、ミゲル。今も、いつまでも」
マルチノの姿がにじんで見えなくなった。

珠たちが大村の琴海に着いたとき、伊奈姫の屋敷にはほとんど男がいなかった。大坂でついに徳川家と豊臣家のいくさが始まり、大学頭も手勢を率いて出ているのだという。それで迎えに行けなかったのだと伊奈姫は詫びて、そのあいだ清左衛門がいてくれると心強いと言った。

「殿方はいくさじゃ禁教じゃと本当にせわしないこと。徳川様の幕府が立って十年というのに、今になってまたいくさとは。女子は振りまわされてばかりですね」

伊奈姫は珠をねぎらうようにほほえんだ。

伊奈姫は齢は五十近いはずなのに、珠よりもずっと若く見えた。髪は黒々として、肌は真珠のように艶やかで白かった。

「お子たちも大きくなったこと。ここにおれば何も心配いりません。童は童どうし、大村も有馬もなく、すぐになじみますよ」

伊奈姫にほほえみかけられた二人は、顔を見あわせて嬉しそうにうなずいた。清助は十二、玄蕃は八歳になっていた。

珠たちは日野江を出て長崎で暮らしをたて始めたのも束の間、まるちのたちが澳門に追放されたのを機に伊奈姫のもとへやって来た。

長崎から時津を通り、なつかしい大村湾を対岸から眺めつつ歩いているときも、清左

衛門はほとんど口をきかなかった。まるちのとの生涯の別れと、じゅりあんの居所を厳しく訊かれたお調べの辛さは察することができたから、珠は清左衛門の後ろをただ黙々と歩いてきた。清助たちがときおり明るい声をあげたときだけ清左衛門は振り返り、ちゃんとお前たちのことも覚えているぞという顔でほほえんだ。

伊奈姫の館は、そのまま大村湾につながる船着き場までの広い庭が、まるで町家のようになっていた。びっしりと長屋が立ち並び、海から上ってくる朝日を見ることのできた景色が、すっかり姿を消していた。

「驚いたでしょう、珠。あとで戸根の天主堂にも行ってごらんなさい。喜前公が伴天連追放令を出されたとき、大急ぎで周りを塀で囲んだでしょう。表はあのときのまま日蓮宗の寺院のようですけれど、中はここと同じになりました」

思いきり口をぽっかり開けてくださいね、と伊奈姫は肩をすくめて笑った。からかうような、こちらを楽しくさせる笑い方も全く変わっていなかった。

だが伊奈姫こそ、弟の喜前公が棄教し、切支丹にきびしく臨むのを目の当たりにした辛い歳月のはずだった。自らの館にこうして長屋を建てて大勢の切支丹を匿ってきたが、ここに入れなかった者たちは伊奈姫の目の前を、長崎や島原へ落ちていったのだ。

そして島原、長崎と順に切支丹が行き場を失うと、ある者は命からがら、ある者は一族うち揃ってまた伊奈姫の元へ帰ってきた。それを伊奈姫はこの華奢（きゃしゃ）な体一つを盾にし

て守り通している。公儀として挑む喜前公には熊本の清正公由縁（ゆかり）の日蓮宗寺院だと突っぱね、館うちでは不安に泣く切支丹たちを励まし、慰める。体がいくつあっても足りないに決まっているのに、伊奈姫の顔から明るい笑みがたえることはない。

　それなのに珠は、まだ手がかかる齢の子を二人も連れて戻ってきた。清左衛門ともども、伊奈姫の元に置いてもらおうという算段なのである。

「まりいた様。珠にお手伝いできることがあるでしょうか」

「何を言っているの。猫の手も借りたいとはここのことですよ。働き者の珠が戻ってくれて、こんなに助かることはありません」

　伊奈姫の優しい目を見ていると、つい何も案じなくてよいという大らかな気分にひたることができる。そうだ、珠は働くだけが取り柄の女子なのだ。天主の子の言葉も聞かずに働いて、天主の子に叱られた女子、まるた。

　はっとして珠は立ち止まった。天主の子に叱られた……？

「どうしたの、珠」

　伊奈姫がふりむいた。

「清左殿なら戸根の天主堂を見に行っておられます。どこぞ物陰から密かに見たいとおっしゃったので。珠も先にそちらへ行きますか」

「いえ……」

　天主教の教えの中にあるたとえ話。天主の子の訪れに、働き者のまるたは皆をもてなそうと懸命に働いた。ところが妹のまりあは姉を少しも手伝わず、天主の子のそばに横たわってうっとりとその言葉に耳をかたむけていた。まるたはだんだん腹が立ってきて、天主の子に、妹を叱ってくださいと言うのだ。

　それからどうなったろう。そう、たしか天主の子はまるたを諭（さと）されるのだ。

諭す……。そうだ、天主の子はまるたが間違っているとおっしゃるのだ。

「珠？」

「まりいた様。まるた姉妹のたとえ話を教えてください。まるたは働いて叱られて、まりあは寝そべっているのに褒められたのではありませんでしたか。どうしてまるたは叱られたのですか」

　伊奈姫は優しい顔のまま首をかしげていた。

「まりいた様」

「ええ。まるたは働き者だったけれど、天主様の言葉を聞くほうが大切なことだった。天主様の子をもてなしたり……、馳走したり美しい着物を着せかけたりするよりも、あのとき姉のまるたは、妹のまりあのように天主様の子のそばで、その話を聞いているべきだったのよ。だって私たちにとって天主様の言葉を聞く以上にやらなければならないことはないのですから」

もう一度首をかしげて、伊奈姫は目をぱちぱちとさせた。どうして今ごろそんな分かりきったことを尋ねるのだというような顔だった。

だが珠は清左衛門にまるたと言われたのだ。働く女子まるた。いつも珠は働いているだけで、清左衛門の話は聞いてこなかった。

清左衛門が珠をまるただと言ったとき、清左衛門とともにいて話をし続けていたのは伊奈姫だった。いつも珠は話を聞くことより働くことを選び、伊奈姫は清左衛門のそばで話を聞いてきた。八年にわたる南蛮のありさまや、お城や江戸で起こっていることや、なぜ清左衛門たちが家移りを続けてきたか。それだけではない、なぜ清左衛門が修道士をやめて、ついには棄教までしたか。珠はいつも笑って清左衛門に従うだけだった。それを清左衛門が望んでいると、珠自身が心の底で知っていたからだ。

清左衛門はきっと珠には何も話さない。珠はまるたにしかなれない。清左衛門は珠をまりあにはしない。

まりあは伊奈姫だったからだ。

「珠、どうしたの」

「……天主様はまるたより、まりあのほうがいいとおっしゃったのですね」

「珠？」

珠はじわりと涙がうかんできた。

こんなに働いてきたのに。珠はこんなに、清左衛門のことだけを考えてきたのに。伊奈姫とも清左衛門ともちがって、珠は他になんの取り柄もないから、働くことしかできなかったのに。

そのとき伊奈姫があぁ、と手のひらを合わせてほほえんだ。

「珠。ここではそんなことは言っていられません。私たちは一所懸命働きましょう。天主様に叱られたら叱られたときですもの」

伊奈姫はたっぷりと珠に笑いかけてから、くるりと背を向けた。

伊奈姫が先に立って歩いていくと、春の花のような残り香が珠を包んだ。

この姫は何もかも持っている。身分も美しさも賢さも、度量の大きな夫までも。それなのに、そのうえ清左衛門の心まで取ってしまうというのだろうか。

珠は大急ぎで頭をふった。ばかなことを、つまらないことを考えるものじゃない。珠には清左衛門の子が二人もあるのだ。あの子たちさえあれば、珠はだれよりも強く生きていけるではないか。

庭の長屋の一つへ案内されたとき、珠は大きく息を吸い込んだ。今日からここで新しい暮らしがはじまる。清左衛門と子らと、珠はついに伊奈姫の元で落ち着くのだ。

珠は勢いよく引き戸を開いた。清左衛門が戻るまでに掃除をすませてしまおうと思ったとき、珠の頭からはまるたの話も伊奈姫の姿もすうっと消えていった。

清左衛門が戻って来たのは夜も更けて、子らが寝静まってからのことだった。
「すまぬ、遅くなった。少しマリータ様と話してきた」
珠は胸がちくりとして、またあわてて頭をふった。
全く、何を妬いているのだろう。だけど、ここに暮らしている女房衆はひょっとして皆同じかもしれない。あんなに美しくてお優しい伊奈姫様が目をかけてくださるのだもの、長屋はあっちでもこっちでも、毎日ちくりちくりとしているのだろう。
珠は一息吸って笑顔になった。昔から憧れだった伊奈姫の下で親子そろって暮らしていくのに、珠だけ夜叉のような顔になっていたらもったいない。
「まりいた様が明日、清助たちを天主堂へ連れて行ってくださるそうです。まりいた様が一声かけてくだされば、清助たちはすぐに皆の中にとけ込めますね」
「ああ、そうだな。ここに来ればもう何も心配はいらぬ」
清左衛門は上がり口に草履を脱いで、ひとわたり、中を見渡した。八畳ほどの板間が二つに、上がり口には小さな竈がついている。板壁の右と左には同じような住まいが続き、昼の間は子らの声もよく聞こえていた。
「周りもよい方ばかりのようで、珠は明日からの暮らしが楽しみです」

「珠は働き者ゆえな。皆にかわいがってもらうといい」
どことなくよそよそしい気がしたが、清左衛門も疲れているのだろう。今日ようやく戸根に着き、その足で天主堂を見に行って深夜まで伊奈姫と話してきたのだから。
急いで布団を敷こうとして燭台を動かしたとき、清左衛門の頬がちょうど炎の照り返しで輝いた。
「お前様……」
頬に涙のあとがついている。
珠がたたんだ布団の上に膝をつくと、清左衛門が笑顔を浮かべて珠のほうを向いた。
「珠、私は口之津へ行かねばならぬ。明日、発つつもりだ」
なんのことだろう。珠たちはようやく伊奈姫のもとへ着いたばかりだ。
「有馬の……、日野江の藩主を珠は覚えているか」
珠はこくりと頷いた。有馬晴信公の後を、直純公が継がれた。棄教されてしまったけれど、もとは清左衛門と同じ、みげるという洗礼名をお持ちだった。
「有馬家はふた月前、島原から日向国延岡へ転封になった」
もう一度珠は頷いた。
直純公は幕府に、藩内の切支丹を始末しろと言われて、さすがに気が重くなって転封を願い出たのだ。大勢の切支丹の家臣たちが直純公について行くのを拒み、侍の身分を

捨てて百姓になったことも知っているから、隼人正が今時分どの辺りで何をしているかぐらいは、ずっと頭の隅においてある。

「直純公が居られなくなったので、お前様は島原に戻られるのですか」

どうして珠は今こんなに怒っているのだろう。いつだってどこへだって、珠はだまって喜んでついて来た。長崎で夫婦になり、玖島へ行くと決めたときも、玖島を追われて日野江へ来たときも、また長崎へ戻ったときも。珠は無心で土を耕して、ようやく土が柔らかくなったときに琴海へ行こうと言われて、それでも珠は気分良くついて来たではないか。珠が怒ったのは一度だけ、清左衛門が修道士をやめて、どこか珠の知らないところへ行ってしまうと思ったときだけだ。

珠が抗ったのは清左衛門が珠を置いていくと思ったからだ。

珠には分かる。清左衛門は珠を置いて口之津へ行くつもりなのだ。

「なぜ口之津へ行かれるのです。ここで、お前様もともに暮らすのではなかったのですか」

清左衛門は最初からそのつもりだったのだ。珠と子らを伊奈姫にあずけ、己だけでどこかへ行こうとしている。なぜ珠は連れて行ってもらえないのだ。珠は清左衛門のために懸命に働いてきたのに。

働く女子というだけでは清左衛門には足りないからか。珠が伊奈姫のように話のでき

る女子ではなかったからか。

「口之津にはジュリアンがいる。ジュリアンは澳門に行かず、この国に残る道を選んだのだ。私が助けてやらねばならぬ」

「助ける？　お前様に何ができるのです。修道士でもない、ましてや棄教なされた身で」

「だからこそだ。だからこそ、できることがある。マルチノやマンショにはできないことが私にはできるのだ」

「おっしゃる意味が分かりません！　珠はまりいた様とちがって、ばかですから」

清左衛門はしいっと、くちびるの前に一本指を立てた。

「よく聞くのだ、珠。直純公が移られて、島原には次は幕府が念を入れて選んだ大名が入るだろう。そしてそれまでの間、彼の地の仕置を任されたのは長谷川様だ」

清左衛門を牢へ入れ、じゅりあんの居どころを探らせた長崎奉行だ。

「長谷川様は島原じゅうに天主教を棄てるよう布告を出された。もし従わねば死罪だと、きつく申し渡されたのだ。あの御方は大村の喜前公とも有馬の直純公とも違うて容赦されぬ。これから島原は大変なことになる」

「……なぜじゅりあん様はそのような土地に」

「島原にもまだ切支丹はおる。マルチノが澳門へやられる切支丹を支える道を選んだよ

うに、ジュリアンはこの国の切支丹を支える道を選んだのだ」

「ですがじゅりあん様もまるちの様も司祭ではありませんか。棄教したお前様がそのような危うい土地に行かれることはありません。どうかお止めください」

清左衛門は静かに首をふる。

「私の身だけが安寧なのだ。私は喜前公を棄教させ、晴信公をも棄教させようとした背信者であろう。私が棄教者であることは長谷川様も、この国の切支丹も一人残らず知っておる」

珠は清左衛門をにらんだ。わけが分からない。四人が無二の友であることは知っている。けれど四人の道はとっくに分かれたではないか。いまだに司祭でいる者のために、なぜ清左衛門が妻も子も捨てて危うい目を見なければならない。

清左衛門はまっすぐに珠を見返した。

「私は棄教者ではないか。むしろ切支丹に襲われることのほうを案じねばならぬほどの身だぞ」

笑えるはずがないのに、清左衛門はおどけて見せた。

納得できるわけがない。だれが清左衛門を口之津などへ行かせるものか。

「では私も連れて行っていただきます」

清左衛門はため息をついた。

「清助と玄蕃はどうするのだ。マリータ様に面倒を見させるか」

ぐっと珠は詰まってしまった。

「よいか、人にはそれぞれ与えられた道がある。もちろん、その道を行かず、あっさりと全てを投げ出すこともできる。だがそれでは珠自身が苦しいであろう。それは珠が、己の道は別にあると分かっているからだ」

「ではお前様の道は……」

私たちとではなくじゅりあん様と生きることですかと、言いたいのに続かなかった。

珠はいつもそうだ。胸の奥にうかんだ言葉が、うまく口から出ないのだ。

「珠の道は、清助と玄蕃を立派に育てることだ。ここにとどまりマリータ様を手伝うことだ。その道を行かず、私について来れば、珠は清助たちを思うて毎日泣かねばならぬ」

珠はそっと襖のほうへ目をやった。その向こうで、珠の命より大切な清助と玄蕃が静かに寝息をたてている。

「それに私の道は、珠がおれば邪魔になる」

珠の背を冷たいものが流れていった。珠は邪魔、清左衛門のために働いてきた珠は、もうまるたですらないというのだろうか。

「長谷川様のお調べのむごさを知っているか。親が切支丹なれば、子も同罪だ。親が切

支丹をかくまえば、子も磔にされる。珠は人がよいゆえ、一晩軒を貸してくれと言われれば誰でも喜んで泊めてやるだろう。明くる日にそれが切支丹と分かれば、珠は手足を切られるのだぞ」

「……清助と玄蕃もでございますか」

珠はおずおずと清左衛門に目をやった。清左衛門はきつい目で、そうだと言った。

「珠がおれば切支丹が寄って来るであろう。だが私には切支丹は近づかぬ。切支丹にとって私は奉行よりも忌まわしい者ゆえな。私一人ならば、どこにいようと火の粉はかからぬ。だが珠がおれば私まで仕置を受ける。切支丹をかくまった者の夫としてな」

「そんなおっしゃり方をなさって、お前様は卑怯です。珠がお前様をどれほど大切に思っているかをご存知なのに」

「ならば珠も分かるだろう。お前たちに累が及ぶと思えば、私は何もできぬ」

「………」

「ジュリアンはこの国に一人きりなのだ。一人きりになったジュリアンを、私は助けてやらねばならぬ。私たちはつねに四人で一人なのだ。今、一人で苦しんでいるジュリアンは私でもあるのだ」

珠が何と言おうと行くのだと、清左衛門は言った。

「お前様は何をなさるおつもりなのですか」

清左衛門は案ずるなというふうに珠にほほえんだ。

「何もせぬつもりだ。清左衛門は何もせぬと示すために、口之津へ行くのだ」

珠にはいつも何も分からない。それなのに清左衛門を止められないということだけ分かるのだ。

珠はこれきり清左衛門と会えなくなるのだろうか。

せめてそれだけでも分かれば、珠はこれほど顔をぐしゃぐしゃにして泣いたりしない。頬に涙のあとをつけながら、珠のためには泣いてくれない清左衛門のために、珠だけ泣いたりしないのだ。

第四章　落日

一

清左衛門が珠たちと別れてから七年が経ち、元和七年（一六二一）になっていた。その間、大坂の役では豊家が滅び、それを見届けたように家康公がみまかった。大村でも伊奈姫の弟、喜前公が亡くなり、嫡男が跡を取った。島原では有馬直純公が延岡に転封したあと長崎奉行の支配が続き、さきごろ正式に松倉家が藩主となった。だがもちろん大村も島原も天主教を厳しく禁じている。今では禁教令は日の本中にどっかりと根を張り、もうこの国に切支丹の逃げこめる場所は残っていなかった。

清左衛門はわらを敷いただけの寝床で、まんじりともせずに夜が深まるのを待っていた。今夜あたりジュリアンが加津佐から戻るはずだった。

清左衛門は七年前、口之津にやって来て土地を耕しはじめた。といっても村に入れるわけはなく、村人が入会（いりあい）にもしていない捨て山に小屋を建てて小さな畠をこしらえただけだった。ちょうど直純公が転封になった時分のことで、百姓になった旧家臣が日野江

を離れ、口之津にも入ってきていた。それらの侍たちは土地さえ耕せば喜んで村へ迎えられたが、棄教者の清左衛門だけはそうはいかなかった。清左衛門が行くよりも前に噂が流れ、土地はおろか、空いている斧一つ貸してもらえなかった。

清左衛門は村人と口もきかず、獣道さえついていないこの山へ入った。そう上へ行かなければ芋くらいなら育てることができたし、川もあった。雨になればたちまち木立を泥が流れて溝ができ、苗も実も流してしまうのだが、だからこそ村人も何も言わなかった。世にうとんじられた棄教者が、行き場を失って流れついたにふさわしい場所だった。

だがここは日も当たれば水もある。清左衛門は崖を背にして雨露をしのげる屋根をつけ、どうにか小屋とよべるものにした。七年のあいだには村に下りて捨てられた鍬を拾うこともあり、野生のにわとりを捕まえることもできた。木の実のなるところも見つけ、衣は戸根から持ってきたもので十分だった。

暮らしはじめてすぐの頃、清左衛門の案に相違して初めにこの小屋へやって来たのは公儀の役人だった。直純公のあとに島原を支配していた長崎奉行が諸藩の一万からの兵を従えて日野江に入り、切支丹改めを行っていたが、里山でもない山中に欠落者（かけおちもの）が住んでいると聞いて確かめに来たのだった。

男が噂どおり千々石清左衛門だと知って、役人はあざけるような笑みを浮かべた。切支丹を見つけたら訴えて出られよ、褒美をとらそうほどにと言って、時を惜しむように

帰っていった。

それから日をおかずに口之津で大勢の切支丹が捕らわれた。いや、捕らわれたというのではなく、七十人もの切支丹が自ら名乗り出たのだった。

かつての耶蘇会の天主堂は公儀の陣屋に造り替えられていた。そこへ行けば殉教できるとささやかれ、進んで拷問を受けようとする者さえあった。

やはり清左衛門たちが考えてきた通りだった。この国の人々はあまりにも殉教を恐れなかった。こんなことが修道士でもない一介の切支丹にできるのは稀有といわねばならない。一家を支えるあるじが殉教し、修道士でもない者が、わざと信仰を明かして命を捨てた。生きて、土を耕していくだけでは足りないと、口之津の人々はその身の全てで叫んでいるようだった。

清左衛門は大勢の廉直な人々が死を望むのを止めることができなかった。この口之津のどこかにジュリアンもいて歯がみしていると思った。ジュリアンが必死で皆を止めようとしている姿は目に浮かぶのに、清左衛門はジュリアンに会うことすらできなかった。

清左衛門は待ち続けた。山の中にみじめな棄教者の清左衛門がいると、いつかジュリアンに噂が伝わることをひたすら祈っていた。

そしてついにジュリアンはやって来た。

「ミゲルが口之津へ来たことは最初から知っていた。だがなかなか辿り着けなかったのだ」

小屋に入って来たジュリアンは、戸を開いていきなりそう言った。ジュリアンは口之津の切支丹の家を転々としており、しばらく山に潜むと言ってようやくここへ来ることができたのだった。

清左衛門とジュリアンのあいだでは、長崎での苦難のさなかに死んだマンショのことも、一人澳門（マカオ）へ旅立ったマルチノのことも、なにも語るまでもなかった。この国の人々を守り、殉教などさせないという幼い日の思いは、四人の胸を一日も離れることはなかった。

清左衛門がジュリアンの隠れ家となるために口之津へ来たことも、ジュリアンはとうに分かっていた。

口之津の山の中で、清左衛門は何もしなかった。何もせず、ただの棄教者として人々からさげすまれ続けていた。南蛮にまで行った使節でありながら天主教の悪を説く者として暮らしていることが、ジュリアンの隠れ家には最適だった。これこそ天主が清左衛門に用意した道だった。

ジュリアンは清左衛門の小屋から切支丹の講（こう）へ出かけて行った。口之津ばかりでなく、かつて四人で学んだ天草や八代、遠く柳川や小倉へも足を運んだ。司祭だけが餅を聖別して秘蹟として切支丹にさずけてやることができるから、どこの切支丹も飢え渇いたよ

うに司祭の到来を待っていた。切支丹にとって秘蹟は、さずけてもらえば幾日も飲まず食わずで働けるほどのものだった。

　ジュリアンが小屋を離れると、清左衛門はたとえ雨だろうと雪だろうと引き戸を細く開けたままにしておいた。戸がそうなっているときは中に清左衛門しかいないということだ。こんな山腹のうち捨てられた小屋でもふいに公儀のお調べを受けることがあるし、清左衛門を快く思わない切支丹が厭がらせを仕掛けに来ることもあったからだ。

　ある冬、朝目覚めると引き戸がぴたりと閉じてあり、まさか開け忘れたのかと戸口に飛んで行ったら、ジュリアンが横で泥のように眠っているということもあった。

「真冬に戸を開けておくのは体に毒だ。私が確かめてから入るから、引き戸は閉めておいてくれ」

　素足に草鞋というジュリアンが、頭に雪を積もらせて戻ってそう言ったときは、清左衛門のほうが涙をこらえられなかった。

　清左衛門はただ体を横たえてジュリアンの帰りを待っていることしかできない。ひとたびこの小屋を出たら、ジュリアンには何が待ち受けているか分からない。どこで公儀の手に落ちて拷問を受けるか知れないのだ。

　それなのに清左衛門は安穏と小屋で眠りについている。

　十に一度でいい、清左衛門がジュリアンとかわってやることができたら。死に急ぐ切

支丹に、それは違うと止めてまわる苦しみを清左衛門が分け持ってやれたら。

　棄教した苦しみなど、ジュリアンの苦難にくらべれば万分の一にもあたらなかった。最も苦しい道を選ばされたはずの清左衛門が、今や地上にのこされた三人のうちで最も平坦な道を歩いていた。

　細く開けた引き戸からは月の光も差していなかった。この闇が今このときはジュリアンを守っている。雲でさえ月を隠してジュリアンを守るのに、己は何をしているのだろう。

　そのとき乾いた草を踏みしめる音が小さく聞こえてきた。

　清左衛門は起き上がって引き戸を開いた。

　闇の中で人影が小さく手をあげて、そのまま影法師のようにするりと引き戸の間をすりぬけてきた。

「ジュリアン、終誓願はうまくいったのか。加津佐はどうだった」

「ああ、うまくいったとも。だがこの辺りはどこも同じだ。日のあるうちは動けなくなってきた」

　口之津にほとんど隣りあっているのが加津佐村だ。六年前、両村ともに大勢が自ら手をあげて殉教したが、一帯には今もまだ切支丹が多かった。百姓家の粗末なわら小屋が天主堂のかわりを果たし、切支丹たちはそこでジュリアンを出迎えていた。

司祭となり十三年が経ったジュリアンは、加津佐に潜んでいる南蛮人司祭から特別の祭礼を受けた。終生、司祭をつらぬくという堅い決意を南蛮にまで伝えるためであり、ジュリアン自身が力をさずかるためでもあった。

耶蘇会ではこうして時をかけ、一段ずつきざはしを上るようにして修道士を育てていく。それが新しい場所で伝道を始めるとなるとさらに歩みは鈍くなる。ただの切支丹を生むためではなく、切支丹をみちびく司祭を生むためには、耶蘇会は他の修道会の倍も三倍も時をかけ手間をかける。だからこの国にやって来た南蛮人の宣教師は選りすぐりの司祭、修道士ばかりで、日の本の人々はたちまち天主教に魅了されたのだ。

そこまでは良かった。彼らが己の親兄弟を捨ててまで伝道してくれたから清左衛門たちは天主教を知ることができた。だが天主教を知らなければ死なずにすんだ幼子や、酷い目をみて死ぬ真正直な人々がこの国には多すぎた。天主を知るのに殉教と抱きあわせでなければならないというのは、天主教本来の姿とあまりにもかけ離れている。

清左衛門はそっとジュリアンに近づいてその手を握った。

今このときをマンショはどれほど喜んでいるだろう。やがてこの報せが澳門に届けば、マルチノもどんなに喜ぶだろう。

ジュリアンも力強く手を握りかえした。

「ミゲル。私は一人ではない。いつも四人で共にいる。終生の誓願を立てたのはミゲルでもあるのだ」

清左衛門は首をふった。棄教者の清左衛門だけは決してそうはならない。

「しかしよくこの島原に南蛮人がおられるものだな」

「そうだな。見つかれば即刻死罪というのに」

元和二年（一六一六）、南蛮船の入港は長崎と平戸に限られることになり、それ以外の場所へ南蛮人が動くときは公儀の役人がつくようになった。そんな中で光をはじく髪に青い瞳、白い肌の南蛮人はいやでも人目を引く。ジュリアンならとっさに百姓にでも紛れることができるが、南蛮人は目を開いただけで見つかってしまう。そしてもし見つかれば、屋根を貸した者はおろか隣に立っていたというだけで幼子まで仕置にかけられる。かくまった者はたとえ棄教したところで死罪という具合に、徳川の禁教令は日に日に厳しくなっている。

「南蛮人の宣教師はなんと強いのだろうな。日の本がこのようなありさまと分かっていて、それでも決死の覚悟で伝道に来る。長崎で切支丹に小舟を出させて、この島原へ渡って来るのだ。浜に舟を着けさせて、その者に累が及ばぬように己一人を置き去りにさせるというぞ」

「はじめに見つけるのが切支丹とは限らぬのにな。じかに公儀に見つからずとも、関わりあいを恐れて訴え出る者もあろう。仏徒とておる」

それが蛮勇とよぶにはあまりにも尊いことは清左衛門にも分かっている。だがなぜそこまでせねばならぬのだろう。なぜこの国だけは、天主教を奉ずるのにそこまでの強さが求められるのだ。なぜこの国の人々だけは。

「どこで間違ってしまったのだろう。いつ、どこで私たちは何をし足りなかったのだろう」

ジュリアンのつぶやきはそのまま清左衛門の問いたいことでもあった。この国の切支丹の行く手には殉教しか待ち受けていないのだろうか。

「いったい幾度、殉教を見ただろうな」

ジュリアンはぼんやりと、粗末な板を張っただけの壁を見つめた。

ある者は手足の指を一本ずつ切られ、鼻をのこぎりで削がれ、向こう脛に鉄釘を打ちつけられた。公儀の役人に、殉教者になれると感謝して体を差し出した者もある。あまりにその数が多いので、役人は田の耕し手が減らぬように名主たちばかりを選んで殉教させているほどだ。

常から皆をまとめてきた者の尊い殉教の姿は、それだけで次の殉教者を生む。殉教者が続けば、公儀は棄教させるためにより厳しい仕置をかける。

このような世に、一体どうすれば殉教の流れを止めることができるのだろう。

「疲れたか、ジュリアン」

ジュリアンは壁を見たまま、明るい顔で首をふった。

「ミゲルこそ疲れたのではないか」

清左衛門は笑い返しただけだった。

「おやすみ、ジュリアン」

わらの中に体を横たえると闇に沈むような眠気がおとずれた。

二人はついに、ともに最も心にかかっていることについては話さなかった。かつて日野江の学問所でそろって学び、この国で初めての司祭となったセバスチャンが、棄教した切支丹に密告されて公儀に捕らわれたのだった。

伊奈姫が珠を居室に呼んでくれたのは夕餉の片づけが終わって半刻ほど経ってからだった。よい話でないのは決まっているが、夕刻、使者が着いてすぐに清左衛門は無事らしいと教えられていたので、珠はおちついて座敷へ行くことができた。

声をかけて障子を開くと、伊奈姫は膝元に文を広げて置いていた。

「珠、遅くなってごめんなさいね。これが此度、仕置を受けられた方々です。清左殿の御名があるかどうか、己の目で確かめてごらんなさい」

伊奈姫は文を珠のほうへすべらせた。

元和八年（一六二二）八月五日、長崎の西坂でまた大勢の殉教があり、伊奈姫はその名籍（みょうせき）を手に入れた。伊奈姫は殉教のあるたびに名籍を集め、それをすべて珠に見せてくれていた。

今回、仕置を受けた切支丹は五十五人にのぼっていた。分かるかぎりで齢や生国が書いてあり、その中には四歳の童の名まであった。

「これほど大勢の方が仕置にかけられるとは。一年あまりも責め続けた挙げ句に斬首、火あぶり……。将軍様もむごいことをなさるものです」

年が明ければ徳川秀忠公が将軍職を譲って大御所になられるというのが専らの評判だった。家康公が大御所時代に出された禁教令は緩まるどころかますます厳しくなる気配で、もう誰一人、代が替われば、藩主が転封になればと淡く待ちもうけることすらしなくなっていた。

「じゅりあん様の名もありませんね。清左衛門とももども、ご無事のようですね」

珠はほっと息をついて文をたたんだ。

伊奈姫は口之津の大殉教のときも、京で殉教があったと伝えられたときも、帯取（おびどり）というところで大村藩初めての殉教者が出たときも、すべて名籍を調べて珠に教えてくれた。

珠はひたすら清左衛門の名しか探していないが、伊奈姫は毎度、誰彼となく知っている者の名を見つけるようで、珠が名籍を見せてもらっている間じゅう、ぼんやりと膝に目

を落としていることもあった。

「珠は木村様のことは覚えていないかしら」

「木村様？」

文をもう一度開いて見ると、木村せばすちあん五十八歳、生国平戸とあった。

「じゅりあん様たちが司祭になるために澳門へ出立なされる前、長崎の天主堂で司祭に叙せられる祭礼があったでしょう。あのとき司祭になられた御方です」

「では、日の本の人で初めて司祭になられたという」

「ええ」

天主堂じゅうの人々がぬかずく中、大司祭に白い冠をかぶせられていた修道士の姿が珠の目によみがえってきた。

「清左殿と同じ日野江の学問所で学ばれ、使節のお四方とも仲の良かった司祭様です。三年前の殉教者の名籍には木村様の従兄弟の御名があったのですよ」

このところの切支丹の殉教では、一家もろとも幼子まで仕置にかかることが多かった。少し前までは村の名主や家の戸主のようなまとめ役ばかりが見せしめとしてかけられたのに、今や家から一人切支丹が出ると、残りがことごとく公儀のお調べを受けるようになっていた。

「木村様のおじいさまというのが、その昔、ざびえる司祭様を館に泊めて接待なさった

方だったのです。それで一族の方はことごとく切支丹になられたのですよ」
「ざびえる司祭様……」
「日の本に天主教を最初に伝道なさった御方です。この国へ至る道のりは大変なご苦労だったでしょうけれど、よい時代に来られました。薩摩などは今も昔も天主教嫌いですけれど、そのほかの土地では皆、歓迎しましたもの」
よい時代もなにも、ざびえる様の伝道がすばらしかったからでしょうけれど、と伊奈姫は寂しげな笑みを浮かべた。
「まりた様は、ほかにもお知り合いの方がおられるのですか」
「ええ……」
大村藩では元和三年（一六一七）に殉教者を出していた。
幕府によって禁教令が出されて四年、前年には特に九州の諸大名に切支丹改めが命じられていた。碧眼に茶色い髪の南蛮人宣教師などすぐに見つかって、大村湾を見下ろす帯取の丘で斬首された。
帯取は琴海の対岸だった。伊奈姫は館の船着き場から大急ぎで船を出したのだが、仕置には間に合わなかった。前の年に弟の喜前公が亡くなり、代替わりした藩主は、禁教にまっすぐに異を唱える伯母の伊奈姫を煙たがっていた。南蛮人を二人も殺すとは伊奈姫には言いにくく、知らせてきたのは仕置が終わってからだった。

伊奈姫はさぞかし仁王立ちになって怒るだろうと思ったが、意外にも甥の新藩主には食ってかかることもしなかった。見つかった南蛮人宣教師をそのままにしたと知れたら、今度は大村藩全体が同じ目に遭わされる。宣教師を助けるというならば、徳川幕府といくさをする覚悟がなければならなかった。
ねえ珠。これでも皆、南蛮人を見つけぬようにしているのですよ。幕府の手先として……、公儀として南蛮人宣教師を探さねばならない。仕置にかけねばならぬ、もとは切支丹の大村藩士とて不憫だと思いませんか——
この大村でも伊奈姫は戦っている。どんな戦い方をすればいいかも分からぬながら、ときには南蛮人を逃がし、司祭をかくまい、方策をたずねる修道会と話しあいを続けている。
「今時分……、清左衛門様も戦っておられるのでしょうか」
つい珠は尋ねてしまう。己などより伊奈姫はよほどたくさんのことを抱えていると分かっているのに、つい伊奈姫を頼ってしまう。
伊奈姫は決して弱音を吐かない人だった。
「ええ、そうですよ。じゅりあん様とともに。あの方が戦っておられると思うから、私も戦えるのでしょうね」
まるであのお二方は私と珠のようね、と言って伊奈姫はほほえんだ。とんでもないこ

とです、と珠は首をぶるぶると振った。

　伊奈姫は長々とため息をついた。

「各地の殉教者の名籍をながめては、肩を落としているだけとは情けないこと」

「そのようなことはありません。まりた様は切支丹の皆のお支えでございます。まりた様がいらしてくださるので私たちは暮らしていかれるのです」

　十度に一度くらい、胸で考えたことをそのまま言えるようでありたい。いつもうつむいてもぞもぞするのではなく、はっきりと頭をあげて己の考えを伝えたい。珠も伊奈姫のように強い女子になりたい。

　伊奈姫が優しくほほえんだ。

「珠はまた私のことを、まりたと呼ぶようになったのですね。ほら、昔はまりいたと呼んでいたでしょう」

　珠もほほえんだ。でも昔も今もまりた様は変わらずにお美しいですと、するりと口から出てきたらどんなに楽しいだろう。

「ここではどなたも、まりた様とお呼びになりますから。前は清左衛門様の口ぶりがうつっておりましたけれど」

　そういえば、と珠は首をかしげた。

「どうして清左衛門様はまりた様をまりいた様とお呼びになっていたのでしょう。南蛮

語の音かと思ったこともありましたが、じゅりあん様はまりた様とおっしゃっていたようでございます」

　珠は宙を見上げて考えた。たしかにじゅりあんはまりたと呼んでいた。ほかに誰かが清左衛門のような呼び方をしているのは聞いたことがないようだ。

「幼い時分のくせが抜けなかったのですよ、きっと」

　珠が目をやると、伊奈姫は静かに名籍を奉書紙に包んでいた。

「この大村湾は波がまろやかで、よい真珠がたくさん採れるのです。幼い時分、私は真珠が大好きで……、父上様に真珠を連にしたろざりおを作っていただいて、それは大切にしていたのです。あるとき清左殿は南蛮人に、南蛮の言葉で真珠をまるがりいたと呼ぶと教わって、私といえば真珠だから、私の洗礼名はまるがりいたにせよと、うるさいほどおっしゃられて」

　伊奈姫は袖を口元にあて、そのときのありさまが見えるとでもいうように一人でほほえんだ。

「父の純忠公はそれは豪快な人でしたから、大村の真珠だなどと、謙遜からほど遠いわと幼い清左殿を庭へ投げ飛ばされて」

　本当に投げてしまったのですよ、と伊奈姫は笑いながら、おかしさのあまり湧いてくる涙をぬぐった。

「父は司祭様のすすめるまま、私の名をまりたにしました。清左殿はそれは怒ってしまわれて。何度も父に後ろからつかみかかって倒そうとしたのですけれど、あの父が童などに転ばされるわけがありません。清左殿はそのたびに逆にひどい目にあわされて」
伊奈姫の明るい笑い声が居室にひびいた。
「腕節（うでっぷし）ではかなわぬと分かってからは、聞こえよがしに私のことを、まりいたと。父も笑っておりました。こうと思えば貫くのは、清左殿は幼いながら見どころがあると」
「ではまりいたは、まるがりいたの、まりいた……」
「ええ。童なりの精一杯の智恵だったのです。少しは似ているでしょう」
伊奈姫は幼い清左衛門をかばうように、上目づかいで珠にたずねた。
「……ええ、似ています」
「ああ良かった」
「清左衛門様にとって真珠はまりた様のことだったのですね」
大村の真珠。真珠のように美しい伊奈姫。大切に南蛮にまで連れて行った——
「清左殿はもうお忘れでしょうけれどね」
忘れているはずがない。たとえ今どこで何をしていようと、南蛮にいた八年半、ずっと覚えていたのだから。
珠は伊奈姫から目をそらすことができずに、ただぼんやりとその美しい笑顔を見つめ

ていた。

口之津をすべて映しているような大きな満月がまぶしく輝く夜だった。村は隅々まで照らし出され、清左衛門の小屋が立つ山も、清左衛門たちの歩みでうっすらと獣道がついているのまで浮かびあがるようだった。
下草をかきわけて進むと、小屋の引き戸が細く開けられているのがはっきりと見てとれた。出かけるとき閉めたはずだと思うと、その日はじめて清左衛門は胸のあたりが少しあたたかくなった。きっとジュリアンが、いつも待っているだけの清左衛門になったつもりでわざと開けておいたのだろう。清左衛門の身には危ういことなどありはしないのに、ジュリアンは心底思いやりが深い。
「ミゲル？」
案の定、清左衛門が引き戸に手をかけただけでジュリアンは走り寄ってきた。
「大丈夫だったか」
「決まっているだろう。私はどこを歩いても、ジュリアンのようなことはない」
「いいや、ミゲルのほうが危ないのだ。島原は切支丹だらけだからな」
まるで闇夜に出かけねばならぬ公儀の役人たちの口ぶりだと思うと、どちらともなく

笑みがこぼれた。どんなときも笑うことができる明るさが、もしかしたら四人共通の生来の資質だったかもしれない。

「風が冷たいゆえ引き戸は閉めておけと言ったのに」

「いつもミゲルは開けて待っていてくれるのだ。せめて一度くらい私も同じことをしてもいいだろう」

こんなに心根の優しいジュリアンばかりがなぜ悲しい思いをするのだろう。

「ジュリアン、思った通りだ。雲仙へ連れて行かれたのは私も見知った顔だった。多分、庄助ではないか」

ああ、と短く叫んでジュリアンはしゃがみこんだ。

一昨日、公儀の役人がふいに口之津に顔を出し、たびたびジュリアンも泊まって世話を受けていた百姓家を調べたのである。

もちろん口之津の切支丹で今もまだ十字架や御絵(ごえ)の類を持っている者はいない。庄助の住まいにも切支丹と明かす物は何もなかったし、皆もかたく口を閉ざしていた。

だが切支丹を証しする物を持っていたのは役人のほうだった。

役人はふところから切支丹が奉ずる天主の母子の御絵を取り出して、庄助の足下に放り投げた。

踏んでみろ――

庄助は仰天した。草履で顔をなでるのが何よりの侮辱というこの国で、野良の草履で御絵を踏むことなど切支丹にできるわけがなかった。

庄助はあっさり切支丹だと発覚して役人に連れて行かれた。

それからどうされるのか、まさかジュリアンが確かめに行くことはできない。だから清左衛門が呆けた顔で後ろをついて歩き、雲仙にまで引かれていく切支丹たちを見とどけてきたのだ。

「ほかにも幾人かが連れて来られていた。よくしゃべる役人がいてな。これからはこの手を使うのだと道々話しかけてきた。雲仙に着けばこの男もすぐお前の仲間にしてくれよう、楽しみに待っておれと申してな」

雲仙は火の山だ。山の頂(いただき)からのぞきこめば穴の底が真っ赤に火を噴き、山腹からは火に溶けた岩が臭い気を放って流れ出ている。そこかしこから黄土色の煙があがり、灰色に濁った熱湯池が煮立った釜のように大きな気泡を弾けさせているさまは、まさに地獄のようだった。

役人は臭気を放つ熱湯を柄杓(ひしゃく)にすくい、さあ棄教せよと言いながら庄助の足にかけた。

さあ、棄教してしまえ。天主がおるなら、なぜお前を守らぬ。なぜこのように苦悶するお前を助けぬ。今ならまだ足を失うだけじゃ。手にも胸にも、顔にも湯をかけられぬうちに棄教するがよい――

そして役人はまだ湯気の立っている柄杓で清左衛門を指した。

ほれ、この男のようになればよい。南蛮まで行き、天主などおらぬと証ししおったではないか。さあ、手間をかけさせるな。今なら命までは取らぬ。棄教せよ——

熱湯をかけられて縮かんだようになっていた庄助は、そのときすっくと顔を上げた。

儂は切支丹じゃ。棄教せず、喜んで死ぬる——

そして庄助は清左衛門をにらみつけた。

みげる、とくと見ておくがよい。棄教せぬ者の姿を、お前のその汚い目に焼きつけておけ。儂はお前のような転び伴天連になるくらいなら、死んだほうがましじゃ——

役人は怒り狂って柄杓を振り回した。熱湯が飛び散って、あたりで悲鳴が上がった。そのたった一滴が清左衛門の脛にもかかり、清左衛門は矢に射抜かれたような痛みに膝をついた。

役人は熱湯を糸のように細くして、たらりたらりと庄助の体にかけていった。大の男の絶叫と体の焼ける臭いに幾人もが吐いた。

最後は手足が溶けて、庄助はなめくじのような姿になっていた。

「それでもまだ息はあったのだ。火の穴へ蹴り入れられたとき、うなり声が響いたからな」

清左衛門は目を閉じた。

「私は天主に背いたのだ。庄助の言葉はもっともだ」

ジュリアンは耳をふさぐようにして首をふった。

この地の切支丹改めは、またさらに過酷なものへと歩を進めた。これまでなかった踏み絵という手段と、雲仙山送り。しかも庄助は村の名主というわけでもなかった。ただの百姓が御絵を踏めなかったというだけで棄教を迫られ、殺された。幕府はたとえこの地を耕す百姓がいなくなろうと、天主教を根絶やしにすると決めたのだ。

雲仙でのむごい仕打ちなど今さら驚かない。殉教した切支丹は誰もがこれ以上ないという苦悶の中で死んでいった。生涯忘れられない死にざまは、なにも庄助だけではない。

だが踏み絵は別だ。これまでは口を閉ざしさえすれば切支丹であることは隠しておけた。修道士をかくまったことが露見しても、口先だけで切支丹ではないと言えば見逃された。

けれども切支丹に天主の母子絵が踏めるだろうか。踏める者はいい。だが踏めぬ者はどうなるだろう。司祭でも修道士でもないただの切支丹であるにもかかわらず、御絵が踏めぬ者は。

「この国の切支丹はみな、殉教か」

ジュリアンのつぶやきはつねに清左衛門のものでもある。

だが四人は決して諦めるわけにはいかない。

「……まだ告解(こっかい)がある」
清左衛門はつぶやいた。
「ジュリアンなら、皆の告解を聴いてやれるではないか」
「告解……」
切支丹に課されていることはいくつかあるが、その一つが司祭相手にする告解だった。己の犯した罪を、司祭を通して天主に明かし、司祭の口を通して天主の許しの言葉をもらう。天主の許しをもらうということは罪が消えるということだ。
「司祭が御絵を踏めと勧めることはできない。だが御絵を踏んだ罪を許してやることはできるだろう。ジュリアンは、御絵を踏んだ者を許してやると言えばいい」
「御絵を踏んだ者を許す……」
「そうだ。後から許してもらえると知っていれば、御絵を踏むことができる切支丹は増えるはずだ」
この国から一人も殉教者を出さないために四人は司祭を目指したのだから。
そしてもう一つ、急いで決めなければならないことがあった。
「ジュリアン、もう口之津は離れたほうがいい」
庄助が捕まったとなれば真っ先に考えなければならないのはそのことだ。
ジュリアンは不安な色を浮かべて清左衛門を見つめていた。清左衛門はこのジュリアンとともにどこへでも行くのだ。
「これまでもジュリアンは口之津を足がかりに八代や久留米へ行っていただろう。今度はそこから告解を聴いてやりに口之津を訪れるのだ」
「………」
「ジュリアンは捕まるわけにはいかぬのだ。皆の告解を聴き、罪を許してやれるのは司祭だけだ。分かるだろう」
四人はいつも、殉教者を出さずにすむ道を選んできた。これからも、できることは何でもやる。
「小倉はどうだろうか」
「小倉?」
かつて少しだけ政に関わった清左衛門には、ジュリアンには見えない理が見える。ジュリアンが潜むなら多少でも地の利のある土地がよいに決まっているが、八代は肥後国だ。肥後国といえば加藤清正公の領国で、代は替わっているが日蓮宗がさかんなはずだ。幕府が禁教令を出す前から切支丹が忌み嫌われてきた国で司祭がやすやすと身を隠せるはずがない。
ほかにここ数年ジュリアンが働いてきた土地は天草、柳川、久留米、小倉である。天草は島原同様、幕府が念を入れて切支丹改めをさせており、柳川、久留米にはジュリア

ンが長く転々とできるほど多くの切支丹はいない。それにくらべて小倉は脇街道の始点で人の往来も多く、切支丹も紛れやすい。

　なにより今、豊前国小倉藩を治めているのは細川忠利公だ。その母は関ヶ原の戦いで人質にとられることを拒んで死んだ、ガラシャという高名な切支丹だった。

「小倉の細川様は切支丹に温情があると聞いている。切支丹の家臣を仕置せねばならぬとき、ずいぶん手を尽くして仕置を先送りなさったというではないか」

　その家臣は結局仕置は受けたが、妻子は命を助けられた。切支丹改めの厳しい九州でそのような話はほかで聞いたことがない。

「小倉へ……」

　ジュリアンは頭を上げた。屋根板の継ぎ目から明るい月の光が差していた。

「珠、珠」

　畝(うね)の向こうから伊奈姫の明るい声が響き、珠は小川で洗濯板をつかう手を止めて振り返った。仲間の女衆に、いいから行っておいでと言われて珠は駆けだした。さっき長崎の商人が伊奈姫を訪ねて来ていたから、なにか分かったのかもしれない。

　伊奈姫の庇護の下で暮らす切支丹たちは、日が高いうちは畠に入ったり食膳をととの

えたり、皆で力をあわせて共同で暮らしをたてていた。珠もその中に加わって、今日は天主堂の外を流れる小川で洗濯をしていたのである。

　伊奈姫の館の庭は長屋のほかは一面の畠になっている。四月の今はまだ作物の丈も低いが、これが秋になると畝の先は見えなくなる。小川も屋敷から隠れてしまうから夏場は困ると思いながら、珠は畠の畦を全力で駆けた。

「まりた様、なにか……」

　分かったのですか、と言おうとして息が続かなかった。珠ももう五十四だ。

　そんな珠を見て、伊奈姫は少女のように朗らかに笑った。この姫は六十を過ぎたのに、いつから二人は互いの齢をとりかえたようになったのだろう。

「珠があわてるのも無理はありませんね。口之津を離れられてから、清左殿の行方は全く知れなかったのですもの」

「では」

　やはり清左衛門の居どころが分かったのだ。

「清左殿は小倉におられるそうですよ」

　はあはあ、ふうふうと珠は息をついた。

「口之津のときのように山なかで難儀な暮らしをしておられるのかと案じておりましたけれど、小倉では通詞(つうじ)をなさっておいでとか」

「通詞？」

「南蛮人の話していることを皆に教えるお役目です。小倉は商いがさかんな地ですから、南蛮の言葉ができる清左殿は重宝されていらっしゃるのですよ」

　南蛮人や商人たちとつながりの多い伊奈姫は、清左衛門が珠たちをおいて琴海を出たときから、手を尽くしてその行方を調べてきてくれた。琴海を出た足で口之津に入った清左衛門は、そのまま一人で十年あまりもその地にとどまり、おととし寛永三年（一六二六）の夏ごろに姿を消した。そうなると、じゅりあんを匿いながらの村はずれでの暮らしはなかなか明らかにならず、二年がむなしく過ぎていた。

　だが意外な賑やかな土地で、清左衛門は細々ながら身を立てていたようだ。

「じゅりあん様もご一緒でしょうか」

「もちろん、そうでしょうね。もう島原は危ないとお考えになって移られたのでしょうから」

　この十年、大村といわず島原といわず、各地で殉教が相次いでいた。大村では玖島城下にほど近い放虎原(ほうこばる)で五人が火あぶりにされ、島原では二十人を超す切支丹が雲仙山送りにされた。しかもそれらは伊奈姫が名籍を手に入れられた者だけだから、元和から寛永にかけて、正確にはどれほどの数の切支丹が殺されたかは分からない。

「小倉は安全なのでしょうか」

　伊奈姫はうなずきも首をふりもしなかった。

　この国の切支丹にとって安全なところなど今は一つもない。東北の米沢に、切支丹でもない藩主が切支丹の家臣を手あつく守っている国があるときいたが、そこも代替わりでついに処断されることになったという。もうどこに行こうと切支丹は信仰を明らかにすることはできないのだ。

「なぜ清左衛門たちは小倉へ行ったのでしょう」

「小倉藩主の細川様は天主教に温情がおありだそうですから」

「でも、切支丹にお優しいご藩主様というのは」

　信用がならないと言いかけて、珠ははっとして口をつぐんだ。伊奈姫のほうが先に肩をすぼめて笑っていた。

「かまいませんよ、珠。私もそう思います。九州の大名家は切支丹が多かったというのに、今は一人残らず迫害の側にまわっているのですものね。小倉とて、いつどうなるか」

　古くは大友宗麟に大村純忠、そして大村喜前、有馬晴信。小西行長は滅んだが、平戸の松浦家も対馬の宗家も、唐津の寺沢家も五島列島の五島家も、元はみな切支丹だったのだ。それが今やあちらでもこちらでも、ぞっとするような仕置の話ばかりが伝えられている。

「このような暮らしは一体いつ終わるのでしょうか」

捕吏（ほり）の目をおそれて逃げ回り、夫婦が何年も生き別れになって、消息さえ満足に分からない。ひょっとしたら清左衛門の心の内ではもう珠は忘れられているのかもしれない。実際、清左衛門は珠たちを捨て、じゅりあんを取ったのだから。

「いつかまた共に暮らせるのでしょうか」

「珠……」

長男の清助は二十六になり有馬家に仕官しているが、領国の延岡は遠く、どうしているのかもよく分からない。次男の玄蕃は二十二歳で大村家に仕え、琴海の対岸の玖島に暮らしているが、こちらは藩主に連なるという身分の高すぎる妻をもらい、とても珠が気軽に訪ねて行くことはできなくなった。

「珠は清左殿に会いたいのですね」

うなずいた拍子に涙がこぼれた。清左衛門が珠より伊奈姫に会いたかろうと、珠は清左衛門に会いたい。清左衛門にとって珠は真珠ではなくても、珠は清左衛門と暮らしたい。

「そうですね……。それがいいかもしれませんね。だってもう十五年もお会いしていないのですもの」

伊奈姫は珠の顔を見つめて、小さくため息をついた。

「口之津のお暮らしでは夫婦でというわけにはいかなかったでしょうけれど、小倉で通詞をなさっているのなら珠がともに暮らすこともできるかもしれません」

「まりた様？」

「通詞といってもどのみち隠れ蓑なのですから、食うに事欠く毎日にはかわりないのでしょうけれど……。町なかで人目を欺くお暮らしなら、珠も行かれるかもしれませんね」

珠は目を見開いた。珠が、行ける？

「私が、小倉へ？」

「ええ……」

でも伊奈姫は珠と目が合っても、いつものようにほほえむことはなかった。

「本当は別に暮らしているほうが互いに無事でいられるのでしょうけれど、私も女子ですから珠の気持ちは分かります。ともにつつがなく別の場所で暮らすよりも、どれほど危うくとも一つ処で暮らしたいでしょう」

「はい。それはもう」

たとえ清左衛門を危険に陥れることになるとしても、珠はわがままを通したい。あのときは幼い子があったから諦めたけれど、今なら珠は身一つだ。珠のせいで清左衛門が危ない目にあうときは、珠が体を張って守ればいい。

「私が清左衛門様をお守りいたしますから」
「……それは無理ですけれどね」
伊奈姫はゆっくりと首をふった。
無理なんかじゃありません。きっと私は清左衛門様を守って、盾になってお二人を逃がします――
「小倉で暮らしていらっしゃるのも、通詞として南蛮人とつき合っておられるのも、すべてじゅりあん様の隠れ家となるためです。それを珠は忘れずにいられますか」
「はい、決して忘れはいたしません。じゅりあん様は私にとっても大切な司祭様です」
伊奈姫はうなずいた。
「珠は清左殿の大切になさっているものを大切にすることです。もしも珠のためにじゅりあん様の身元が知れるようなことになれば、きっと清左殿はご自身を責めて、珠や私には二度と会ってくださらなくなります」
珠は首をかしげそうになって、あわててしっかりと頷いた。どういうことかよく分からなかったけれど、珠も清左衛門も棄教者なのだから案じることはない。司祭のじゅりあんを人の目から隠してやればいいだけだ。
「大丈夫です、まりた様。珠は貧しい暮らしには慣れております」
「ええ」

そんなことは少しも案じていませんよ、と伊奈姫はようやく少し優しい顔になった。
「では、まりた様。珠はいつ……」
すると伊奈姫は吹き出した。
「珠は明日にでも小倉に発つつもりなの。女子の足で街道を行くつもりですか。佐賀も福岡も越えて、豊前国まで行かなければならないのですよ。庭を横切って来ただけであんなに息を切らしているお前に、街道を歩いてなど行かせられるものですか」
「でも、まりた様」
伊奈姫は笑みを浮かべて珠を見つめ、珠はいいわねと呟いた。
「珠が行くと心を決めたのなら、清左殿にお伝えしなければならないでしょう。もしかしたら清左殿は、珠と暮らすために住まいを新しくなさるかもしれません」
「でも、先に話してしまったら清左衛門様はどこかよそへ移ってしまわれるのではないでしょうか」
「そんなことはなさいませんよ。清左殿もご事情さえなければ珠とお暮らしになりたいのですから。それに珠がいるほうが町の暮らしには溶けこみやすいかもしれません」
「それで私を……」
伊奈姫はうなずいた。
「いいですか、珠。小倉の細川様は切支丹を泊めたというだけでお仕置はなさらないと

聞いていますけれど、他国ならばお前や清左殿も死罪です。小倉ゆえ、私も珠を行かせるのです。ですが」
と伊奈姫は一つ息を吸い込んだ。
「じゅりあん様はどこであろうと同じことです。捕まれば厳しい拷問を受けて……、転ばぬかぎりお仕置です。じゅりあん様だけは、どんなことがあっても捕吏の手に渡してはなりません」
お前を小倉へやったら、きっと私は清左殿に叱られますよと伊奈姫はほほえんだ。
「まりた様、私は」
「ええ、分かっています。珠は二人のお子を立派に育てたのですから、あとは清左殿の信じる道を己の道と思ってついて行くことです」
この大村には船が入る。その船が平戸から松浦、唐津に福岡と廻って小倉へも行く。珠はその船に乗って清左衛門のもとへ行けばよい。
「先に私が文を書いておきます。湊へ珠を迎えに来てくださるようにお願いしましょうね」
珠は涙でにじんで何も見えなくなった。
「どこぞ町はずれにでも家を借りていただいて、仲睦まじゅう暮らせればよいですね」
両手で顔をおおったきり、珠は顔が上げられなくなった。

二

寛永六年（一六二九）夏、珠を乗せた南蛮船はようやく小倉の湊へ入った。清左衛門が小倉にいると聞いてから一年あまりが経っていた。
長崎に着く南蛮船はいつも、いつの間にやら姿を消し、ふた月ほどしてまた長崎へ戻って来ていたものだった。どこでどうしているのだろう、ひょっとして似た別の船だろうかと珠は思っていたが、あれは小倉や福岡へ廻っていたからだったのだ。小倉へ着くまでも珠の船は湊から湊へと入り、長いときは十日あまりものんびりと一所に浮いていた。
そうして先々の湊で商いを繰り返し、船は七月のはじめに小倉に着いた。ここでは大坂辺りから来た商人たちとも商いをするので、南蛮船はひと月近くも碇（いかり）をおろしているという。もしも小倉で清左衛門とうまく会えなかったときは、珠はこの船でもう一度琴海へ帰ることになっていた。
船が湊に入ると、珠は船縁（ふなべり）に出て陸を見下ろした。奉公人をしたがえた商人たちや、辺りの子が群がって顔を上げている中に清左衛門の姿はなかった。
珠はひと月ほど小倉に留まって清左殿を探すと文に書いておきましたからね。湊に私

が文を託した商人の店がありますから、うまく会えなければ珠はそこで待っているのですよ――

伊奈姫は重いほどの金子を珠に持たせ、会えなかったときは必ず戻って、この金子を返すようにと言った。

いいですか、珠。これは私と大学頭が清左殿に使っていただこうと思って貯めてきた金子です。珠が清左殿を探すのに使ってはなりません。見つからぬときは誓って琴海に戻って来るのですよ。珠と入れ違いで文が来ているかもしれないのですからね――

珠にゆるされた時はひと月だった。

だが知り合いの一人もおらぬ土地で、小判を懐に抱いた女がむやみに人を探して歩くわけにはいかない。やはり伊奈姫に言われたとおり、珠はただじっと商人の店先に座って清左衛門の来るのを待つしかないのかもしれない。

船から見下ろすと、湊のまわりは伊奈姫の館も足下に及ばないほどびっしりと長屋が立ち並び、そのどれもが商いをしているらしかった。人出も相当なようだし、なだらかな斜面にはずらりと屋根が続いている。一体この町のどこから手をつけて清左衛門を探せばいいのか、目算もつけられない。

珠は腹に巻きつけた金子をさらに手のひらでかばうようにして身を乗り出した。

伊奈姫の教えてくれた糸問屋らしい店が見える。畳二枚もあるような大きな暖簾に大

村やと染めてあり、ぴんと張るように下を石に結んであった。

暖簾のそばに男が立っている。ぼんやりと南蛮船を見上げて、横を客が入っていくのに会釈もしない。

何を見ているのだろうと目を凝らしたとき、珠は男と目が合った。

珠はごくりと唾をのみこんだ。髪がほとんど白くなり、周囲と見くらべても手足は一回り細い。だけど杖はついていないし、目にはここまで届くくらい力がこもっている。衣もそれほどひどくない。良くはないけれど悪くもない。目をしばたたいて何度も見た。何度も何度も見て、たしかに清左衛門だった。

「お前様！」

珠は思いきり伸びて手をふった。

男も手をあげて珠の船に近づいた。珠は船縁を駆けだした。

艀舟に乗りかえ、いやにのろい船頭に当たったものだと思いながら、膝のふろしきをじっと抱きしめていた。

桟橋についたときには、船頭が手を出しているのも振り払って飛びおりた。誰を押しのけたって、珠は十五年ぶりなのだ。

「お前様！」

珠は清左衛門の腕に飛び込んだ。

「珠。よく来てくれた」
清左衛門がしっかりと珠を抱きとめた。
まさかこれほどうまく会えるとは思わなかった。琴海で別れたときには、もう一度会えるかどうかも分からなかった。
珠はこれからまた清左衛門と生きていけるのだ。
「お前様、まりた様がこんなにたくさん金子を……」
珠がふところに手を入れようとしたのを清左衛門が笑って止めた。
「分かった、分かった。人がいるところで止さぬか」
はっとして周囲を見まわしたが、だれも珠を見ていなかった。
なつかしい清左衛門の笑顔が横にある。清左衛門さえいてくれれば珠は何だってできる。
「さあ行こう」
そう言ってから、清左衛門は湊の南蛮船を振り返った。
「珠が南蛮船で来るとはな」
珠ははずんだ鞠(まり)のようにうなずいた。
「本当ですね。私もこの齢になってあんな南蛮船に乗るなんて」
「そうだな」

「お前様、珠は五十五になったのですよ。あまりに齢をとったのでお分かりになられなかったのではありませんか」
「ちゃんと分かったではないか。珠は少しも変わらぬぞ」
清左衛門こそ変わらない。優しい物言いも、珠の心をよく分かってくれるところも。
清左衛門は黙って珠の小さなふろしき包みを持った。
にぎやかな町家を通り越し、青田の横の一本道を並んで歩いていった。
畦の行く先に屋根がぱっくり破れたお堂があらわれた。手前に墓石がいくつも転がって、屋根の後ろはこんもりと椀を伏せたような小山になっている。
「あそこに住んでおられるのですか」
「ああ。屋根はひどいが、下はちょうど土間ゆえ、難儀はせぬぞ」
このような処にしか住ませてやれぬのは不憫だが、と清左衛門は口ごもった。
珠は清左衛門と暮らせるなら、どんなところでもかまわない。
「長いあいだ村の菩提寺だったというが、町なかの天主堂が空いたゆえ、寺は墓ごと天主堂の跡へ移ったらしい。墓石が転がっておるのは気味悪かろうが……」
珠は首をふった。人が寄りつかず、木立に紛れてじゅりあんが出入りしやすい場所を清左衛門は苦心して選んでいるのだ。これからは珠も、じゅりあんのために役に立ってみせる。

「お前様は一人でご苦労なされて……」

それがそうでもないのだと清左衛門は笑った。

「この辺りは暮らしやすくてな。川魚じゃ茄子じゃと、持ってきてくれる者もある」

湊も街道もあり、もとから欠落者の多い土地だった。はじめは破れ寺に住みついた清左衛門を誰もがうろんな目で見ていたが、そのうち南蛮使節だった棄教者のみげるだと知れると口をきいてくるようになった。口之津では村人がいっせいに背を向けたが、ここでは逆に天主教の悪を説く者として村人の輪に加えられているという。

それだけ天主教が憎まれるようになってきたということだ。

「私が暮らしやすいということは、そのぶんジュリアンの身は危ういということだ。いやな世になったものだ」

「ですがお前様は相変わらず、切支丹には目の敵にされておいでなのでしょう」

「そうでなければ困るではないか」

清左衛門は明るくほほえんだ。

清左衛門は昔のままだ。ただじゅりあんを守れさえすれば後はどうでもいいのだ。

珠はそっと清左衛門の袖に触れた。

「珠もお手伝いいたします」

「ああ、頼むぞ」

田圃に入っている百姓たちが手を止めて珠を見ていた。こんな村では珠が共にいるほうがいいはずだ。

「じゅりあん様は今どちらに……」

清左衛門は屋根に大きな破れのある堂をすっと指さした。

「あそこだ」

「まあ」

「驚いたか。ジュリアンも珠に会うのを楽しみにしておるぞ」

清左衛門は珠をからかうように明るくほほえんだ。

珠が土間におりて手燭でジュリアンの足もとを照らしていた。ジュリアンは草鞋の上にしっかりと脚絆を巻きつけた。

「じゅりあん様、くれぐれもご用心なさってくださいまし」

珠の声は半ば泣いているようだった。

ジュリアンは小倉を南へ下り、直方（のおがた）、太宰府と歩いて久留米の講に立ち寄った後、柳川で舟を使って島原へ渡ることになっていた。

夜半まだ暗いうちに清左衛門の堂を出、明るくなるまでに行けるところまで行ってお

く。集落はそうあるわけではないから日中もそのまま道を歩くこともあるが、それでも人気のない山中を選ぶようにする。雨の日もあれば地面がぬかるんでいることも、西国の酷暑に干上がることも、吹雪に行く手を阻まれることもある。夜中は獣も出るし、猟師に見とがめられて山狩りをされたこともある。幾日も飲まず食わずで山中をさまよい、ようやく切支丹の小屋に着いたのに着の身着のまま逃げ出さねばならなかったことも一度や二度ではない。

「ミゲル、そんな顔をするな。私たちは殉教するわけにはいかぬのだ。だから捕まりはせぬとも」

　行かせるのが危ないことは分かっているが、二人で歩けばなおのこと露見しやすかった。これまで二人組で伝道していた宣教師がどれだけ捕まったかしれないのだ。

　口之津をはじめとする各地で、切支丹がジュリアンの祭礼と告解を待っている。行かなければならないことは分かっている。

　ジュリアンは上がり框(かまち)に座ったまま、ふと脚絆を巻く手を止めた。

「昨日、マルチノの夢を見たのだ」

「まあ、まるちの様の。どうしておいででしょうね」

　珠は手燭を持ってジュリアンの足もとにしゃがみこんだ。

「私やミゲルのことは何も案じていないと言っていた」

　清左衛門は無言でうなずいた。

「南蛮からの帰りに、マルチノが臥亜(ゴア)の南蛮人の前で話したことを覚えているだろう。あの姿は生涯忘れぬな」

「そうだな。マルチノはあの童のような頭と耳で、どんな南蛮語も見事に聞き分けた」

「唇をとがらせて、こましゃくれた口をきいてな。南蛮人たちを始終絶句させたものだった」

　だが南蛮の旅の終わりに臥亜の大きな天主堂に立ったマルチノはすばらしかった。たった一人で壇にのぼり、ラテン語で天主の真理について半刻あまりも説きつづけた。南蛮人の司祭たちがそろって感嘆のため息をもらし、人買いにかどわかされて澳門へ来ていた日本の人々にとってはなによりの勇気になった。日本人は智恵が劣るから司祭にはできないと噂がたちかけていたのまで、マルチノは見事に跳ね返した。

　あのときからマルチノは澳門でたたかうさだめだったのかもしれない。南蛮人を相手に日本の人々を守り、南蛮が日の本にいだく虚像を打ち砕く。それがマルチノの行くべき道だったのだ。

　日の本の人々は南蛮人のために殉教などしない。天主教を信奉するために残虐な死まで受け入れさせられることはない。この国の人々を、異国人の信仰を強める礎(いしずえ)として死なせはしない。

「ミゲル。マルチノは帰って来ぬな」

「ああ、大丈夫だ。長崎の牢で私たちは誓った。二人の誓いは、四人の誓いということだ。マルチノは約束を違えはせぬ」

ジュリアンは長く細い息を吐いた。

長崎に南蛮船が入るたび、次の船にこそマルチノが乗っていると噂が流れるようになったのはいつからだったろう。九州各地では殉教が続き、二百人より以上いた南蛮人宣教師も、ある者は澳門へ追放され、ある者は棄教を迫られ、そのほかの者はことごとく仕置を受けて殺された。

九州の司祭の数が減り、なかなか祭礼をさずけてもらえなくなった切支丹たちはいつからかマルチノの帰国を待ち望むようになった。黒目黒髪のマルチノならば自在に村々を歩くことができる。なにも危険を冒して南蛮人の司祭が来ずとも、マルチノが戻ればいいではないか、と。

人は勝手な生き物だ。マルチノには澳門でせねばならぬことがある。マルチノは彼の地で一日も休まず働いている。長々と船に乗り、この国へ帰っているひまはない。マルチノは黒目黒髪というだけでこの国へ戻るような愚はおかさない。

そのときジュリアンは脚絆をしっかりと巻き終え、脇に置いた背負子に手を伸ばした。珠が手燭を背負子に持ちかえてジュリアンの背にのせた。

「ミゲルはマルチノの夢を見なかったか」

不安げな顔をして、ジュリアンが清左衛門を振り仰いでいた。

清左衛門も暗い顔でうなずいた。

「そうか、やっぱり見たか」

「ああ。だがマルチノは笑っていたな」

ジュリアンがふと口元に笑みを浮かべた。

「私たちは女子と踊ったのだったな……」

生涯最初で最後の舞踏会というもので、四人は女子の手を取って広間で踊った。

東洋の小さな島からやってきた四人の少年は、行く先々でたいそうな歓迎を受けた。トスカナ大公国では盛大な祝賀の宴が開かれ、四人は着飾った貴人たちと踊ることになったのだ。

「南蛮の踊りは男と女子が手を取り合い、音楽に合わせて二人で組になって舞うのだぞ。男が、これと思う女子の前へ行き、ともに踊ってくれと頭を下げるのだ」

「まあ……。男と女子が共に……」

珠は目を白黒させた。

旅立つ前、日野江の学問所で四人は音楽を習い、踊りの講席も受けていた。だが大公国の宮殿へ入ったとたん、十六歳の少年たちの頭は瓶でもさかさにしたように、すっか

り空になってしまった。

「私たちは言葉もおぼつかず、さりとて壁ぎわで突っ立っておるわけにもいかず、船の上で司祭様相手にさらった足踏みを頭の中で懸命に反復しておった。ところが」

ジュリアンはちらりと清左衛門に目をやった。清左衛門も、こたえられないというようにくつくつ笑い出した。

「ジュリアンはからくり人形のようにぎくしゃくと、さる奥方の前へ歩いて行ってな」

珠はうんうんと頷いて目を輝かせた。

「じゅりあん様はその奥方様に踊りのお相手をお願いなされたのですね」

「ああ、そうだ」

「どんな踊りをなさったのですか」

ついに清左衛門とジュリアンは吹き出した。

「ジュリアンは広間の中央で奥方にぐるぐると振り回されておった。まるででんでん太鼓のようで、我らは大笑いをした」

奥方も他の貴人たちも、女子はみな裾が椀のように丸く広がった衣を着ていた。ジュリアンは奥方に両手をつかまれて、衣の裾を踏むなとばかりに、軽業のように宙を回されたのだ。

「しかもその奥方というのが、十五、六の孫を連れたおばば殿でな」

珠は目を大きく見開くと、ちらりとジュリアンを見てうつむいた。膝にうずめた顔の下から笑い声がもれだした。

「そのときマルチノだけは達者な言葉と悠然としたふるまいで、その輝くような孫の姫君のほうを誘ってな。蝶が舞うように広間の中央へ踊り出たのだ。南蛮の女子の衣は、男がしっかり支えて回してやるとそれは美しく広がるのだ。我らばかりでなく、じっと見ておった貴人の間からも感嘆の声があがったな」

「それでようやくジュリアンは我に返ってな。己の手が皺だらけのおばば殿の手をつかんでおるのを見て、あごがはずれたように口を開いたのだ」

清左衛門とジュリアンはもう一度声をあげて笑った。そして二人そろって胸の前で小さく十字を切った。

ねえ、ミゲル。踊っているとき、あの姫様はなんて言ったと思う——

音楽が止み、三人のもとへ小走りで戻ってきた幼いマルチノは、息をはずませて清左衛門の胸に飛び込んだ。

幼いマルチノ。三人のかわいい弟のようだったマルチノ。清左衛門たちが南蛮人たちの前で困っていると、小さな体で鉄砲玉のように走って来て、顔を真っ赤にして三人分、言いたいことを言ってくれた。

ねえ、ミゲル。僕、姫様に、しっかり殉教してくださいねって言われたんだよ。海の

向こうでずうっと、じっと見ているから、きっときっと立派に殉教してくださいねって──

清左衛門の目に涙がにじんできた。

ねえミゲル、ジュリアン。僕らは殉教しなくちゃいけないの？　ねえ、日の本で、天主様はすばらしいって、天主様に感謝しながら生きていたら駄目なの？　僕らは死ぬために切支丹になったの、ねえ──

そのときジュリアンが立ち上がった。

清左衛門とジュリアンは互いの肩を強く抱いた。

「行ってくる。ミゲル」

「ああ。……天主の平安がいつもジュリアンと共にあるように」

「またミゲルと共にあるように」

二人は額と額を近づけた。

ジュリアンは力強くうなずいた。

「待っているぞ、ジュリアン」

細い月の下で、清左衛門と珠はジュリアンの姿が見えなくなるまでじっと立っていた。

どれほど目を凝らしても畦に何も見えなくなったとき、珠がぽつりと尋ねた。

「お前様。まるちの様はこの国へ戻っておいでになるでしょうか」

「……来ぬだろう」

「でも、あれほど仲が良くていらしたのですよ。じゅりあん様の難儀を知れば、手伝わねばならぬと思われるのではないでしょうか」

清左衛門は静かに首をふった。だから天主が先にマルチノを連れて行ったのだ。

「でも、お前様」

「マルチノはきっと天主の御許に旅立ったのだ。小さな体で精一杯働いて、ついにこの国に帰ることもなく……。マルチノはもう、死んでしまったのだ」

マルチノは幼い日の己自身との誓いを果たした。澳門へ連れて行かれた日の本の切支丹たちを、一人として殉教させぬよう守り通して死んだのだ。

ジュリアンを見守るこの密やかな月が、清左衛門にはマルチノのように思えた。

三

寛永九年（一六三二）秋、じゅりあんがついに小倉城下のはずれで捕まった。清左衛門の住まいを拠点とした、九州各地の切支丹の告解を聴く旅の何度目かの終わり、あと半刻も歩けば清左衛門の堂の屋根が見えるという寸前の町なかでのことだった。豊前国小倉を治めていた細川家がひと月前に熊本へ転封となり、後に入った小笠原家にとって

は、切支丹改めを厳しくした矢先の大手柄となった。
日の暮れかかった町で、田圃に入る百姓づたいに切支丹が捕まったらしいと噂が流れてきて、清左衛門と珠は土を触る手を止めて顔を見あわせた。藩主が代わってからこちら、切支丹改めが繁くなり、細川家のあいだに小倉を出たじゅりあんとは、今度戻ったらさまざま話し合わねばならないと言い言いしていたところだった。清左衛門もじゅりあんも口に出したことはなかったが、万一小倉から細川家が動くようなことになれば、じゅりあんたちも動かざるをえないと珠にもどことなく分かっていた。そうなればどうなるだろうと、そのときも珠は己のことばかり考えていた。
夜、捕まった切支丹は何人だろう、すぐお仕置だろうかと話していたら、明くる朝一番で代官所から清左衛門に呼び出しがかかった。捕まった切支丹が中浦じゅりあんと名乗ったということで、同じ南蛮使節だった清左衛門に顔を検(あらた)めさせたいのだという。
清左衛門は草履も履かずに飛び出して、後から追いかける珠も役人も懸命に走ったけれど、とても追いつかなかった。
珠たちが代官所に着いたとき、清左衛門は代官所の閉じた大門を狂ったように叩いて、
「千々石ミゲルでございます、切支丹の千々石ミゲルでございます」
と叫んでいた。
大門をかきむしって爪から血を出した清左衛門の手を、珠の横にいた役人が乱暴につかんで止めさせた。清左衛門は六十三歳、麻幹(あさがら)のように痩せた総白髪の年寄りで、三十恰好の役人に腕を持たれた反動で大門の前に尻餅をついていた。

四半刻ののち清左衛門と珠は代官所の白州の上に座らされた。正面の板間の床几(しょうぎ)に代官が腰掛け、両脇に腕節の強そうな役人が坐していた。
板間の右に四角く囲った土間があり、引き戸が開いたとおもうと、じゅりあんが転がし出されてきた。
清左衛門はうっと息を呑んでうつむいた。名を呼んで駆け寄ることはできなかった。何があってもこの男がじゅりあんだと認めるわけにはいかなかった。
「さて、千々石清左衛門。この男はかの天正年間、南蛮へ渡って司祭となった中浦じゅりあんであろうかの」
代官は大きく足を開き、目尻を下げて上半身を乗り出した。
「よもやとは思うが、妙な隠しだてをすれば、そのほうも同罪ぞ」
「はい、承知しております。ですがこの男は中浦ジュリアンではござらぬようでございます。ジュリアンの顔はもう少し……」
代官は手に持っていた扇で清左衛門を指し、くいくいと上下させた。
「先に申しておくが、こやつは首に十字架をさげておったのじゃ。天主の母子絵は踏めぬし、切支丹であることは疑いがない。申し開きできぬと腹をくくって、自ら中浦じゅ

りあんじゃと吐きおったのじゃぞ」

清左衛門はちらりともじゅりあんを見なかった。

「のう、じゅりあん。そのほう、昔のよしみで言うてやれ、儂の名は中浦じゅりあんじゃとな。昔はともに南蛮にまで行ったものを、棄教して顔まで忘れおったかとな」

清左衛門はうつむいて首をふり続けていた。

「ミゲル。私はジュリアンだ……」

清左衛門は耳をふさいだ。さらに大きく首をふった。

「もうよいのだ、ミゲル。この国の切支丹は滅びるさだめなのだ。ただ各々の心の中に天主がおわせばよい。もうそれでよいのだ」

清左衛門は終わりまで聞かずに首をふった。そして両目でじっと白州を睨んで言った。

「この国から司祭がいなくなれば誰が切支丹の告解を聴いてやれるのだ。ジュリアンは死なぬ。この国の最後の切支丹が息絶えるまでジュリアンは生き続けねばならぬ」

「ミゲル、私はもうこれ以上罪を重ねたくはない」

そのときはじめて清左衛門はじゅりあんのほうを向いた。

じゅりあんは涙を浮かべていた。

「私は切支丹に会うたび、御絵を踏めるようになれと説いてきたのだ。それは罪であろう？　私はずっと罪を説いてきたのであろう？」

私は司祭だぞ、とじゅりあんはつぶやいた。

「祈るとき決して暗い顔をするなというのが天主の言葉だ。祈っていると人に知らせずに祈れと天主は教えておられる。それゆえ、たとえ御絵を踏んでも心の中で祈っておれば天主は許してくださると、私は行く先々で説いてきたのだ」

清左衛門は静かに首をふる。

「だがそれがどれほどの罪か、一度でも棄教すると口にせねばならなかったミゲルにはよく分かるはずだ。もうこれ以上、私は……」

そのとき代官がまたうるさそうに扇を上下させた。

「清左衛門。もう一つ教えてやろう。この者が中浦じゅりあんではなく、ただの切支丹ならばの、即刻この場で首を刎ねるぞ」

清左衛門は驚いて代官を見返した。

「中浦じゅりあんであれば他にも詮議の段があるゆえ、そのようなことはせぬがな。どうじゃな、それでもこやつは中浦じゅりあんではないと申すか」

目の端でじゅりあんが静かに頷いている。

「清左衛門よ……」

童でもあやすように代官は言う。

「私は司祭なのだ。いつわりは申せぬ……」

じゅりあんも静かに言う。

「では……」

清左衛門はすっと頭を上げた。

「お代官殿に申し上げます」

「ふむ」

「私も切支丹でございます」

珠はぎょっとして清左衛門を振り返った。

清左衛門はそばに珠などいないかのようだった。

「この小倉でジュリアンをずっと匿っておりましたのは私でございます。どうぞ揃ってお仕置を願わしゅう存じます」

扇を額にあて、代官が渋面をつくった。

「清左衛門よ、手を焼かさんでくれ。そのほうにはこれからも手伝うてもらわねばならぬことが多いのじゃ」

「ですが私は真実、切支丹でございます」

代官の両脇の役人が、顔を見あわせて歪んだ笑みを浮かべた。

「この日の本にそのほうほど名の高い棄教者はおらぬぞ。それを切支丹じゃと思うて仕置したと知れれば、この小笠原家が世間の物笑いとなろう。何を血迷うて切支丹などと」

「いいえ、まことでございます。私は御絵を踏めませぬ」

「これはよい。絵が踏めぬゆえ切支丹か。なるほどのう、踏めぬと逆手に取る者には初めて会うたぞ」

代官と役人がそろって声高に笑った。

「そのほうのこれまでの暮らしぶりを見ておれば分かるではないか。そのほうが切支丹のはずがない」

「いいえ、お代官殿。私は心の中では一度たりとも棄教したことはございませぬ。耶蘇会を出たのも修道士をやめたのも、事情があって世を欺いたまでのこと。心の中でまで天主を裏切ったことはございませぬ。私は切支丹でございます」

「そう激するな、清左衛門よ」

そのとき代官の左側に座る役人がもぞもぞと体を動かして、中央の代官をあおぎ見た。代官はちらりと目をやって、胸を反らせてうなずいた。

左側の役人は大げさに頭を下げて、独りごちるように言った。

「そこまで言い募るとは、よもや切支丹ではございますまいか」

ぴくりと珠は体をふるわせた。

同時に代官も目を見開いた。

「なんじゃと。まさか、そのほう……」
清左衛門は意を得たというように強くうなずいた。
「私は耶蘇会にいた時分、病で手足が動かせぬようになりました。それゆえ私は耶蘇会を出されたのでございます」
珠は口をぱくつかせて首をふった。嘘だ、清左衛門は誰にも天主堂を追い出されはしなかった。清左衛門は珠と、手に手をとって自ら岬の学林を出たのだ。そう言いたいのに、うまく口が動かない。
すると左側の役人が口をはさんだ。
「なぜそのようなことで耶蘇会を出される。彼奴らはそのような足萎えどもの世話ばかりしておるではないか」
お代官様はそうお尋ねなのだと、役人は付け足しながら代官に目をやった。
「おう、そうじゃ。なぜわざわざ耶蘇会を出た。それはそのほうが、天主教が悪と知ったゆえであろう」
代官は勢いよく話に入ってくる。珠はただ体がふるえるだけだ。
「私の病のことが羅馬（ローマ）に届いたゆえにございます」
「羅馬？」
代官は左側の役人を顧み、役人は代官に、天主教の本山がある南蛮の町でございましょうか、と上目づかいに問うた。ふむ、さようであると代官は清左衛門にうなずいてみせた。

「それまでも羅馬では、日の本の者たちは智恵が足りぬゆえ司祭にしてはならぬと囁かれておりました。日の本は忠実に天主に命をささげる切支丹のみを産すればよいと」
「なんと無礼な者どもじゃ」
珠は目だけを動かしてじゅりあんを見た。二人の目線のただよう先、顔のうつむけ加減、額に浮かんだ皺、それから握りしめた拳の形までも、清左衛門とじゅりあんはそっくりだった。
「醜い足萎えの私が耶蘇会におれば、羅馬はますます頑なになりましょう」
代官はまた左側を見た。
私から尋ねてもよろしゅうございますか、とその役人は代官に尋ねた。代官はふむふむと頷いた。
「なるほどそなたが耶蘇会を出たわけはそれとして、さすれば棄教したのも羅馬の差し金か」
「いいえ。あの時分、私は大村藩に仕えておりました。大村家は切支丹が多いゆえ、禁教へ傾いておりました。徳川様の御代となり、世は禁教令が出てからでは間に合いませぬ。早いうちに切支丹を追放せねばならなくなったのでございます」

「……御一門払いの折か」
「はい」
「あれはそなたが大村喜前公に棄教を説いたと聞くが」
「そのような形にせねば喜前公が藩内の切支丹から命を狙われると聞かされました。一度天主を欺いた私ならば、たとえ殺されようと惜しい命ではありませぬ」
「お前様……」
珠が声をもらしたのも清左衛門には聞こえていないようだった。
「天主に仕える者にとって、天主との誓いに背くことはそれほどに重い罪でございます。生涯、天主に仕えると申しておきながら私は」
清左衛門は白州に手をついて深々と頭を下げた。
「どうか私にもお仕置を願わしゅう存じます」
「お、お前様、何をおっしゃるのです」
珠は清左衛門の袖をつかんで揺すぶった。
だが清左衛門は振り向きもしない。
「お代官殿、私は十八年も司祭を匿ってまいった切支丹でございます」
「ではその横におる女子はなんじゃ。そなたが司祭を匿ってまいったと申すならば、妻も同罪じゃぞ。ともに首を刎ねるか」

「これは私の妻ではございませぬ。身の回りの世話をさせるために雇い入れた雑仕女でございます」
「お前様！」
「この女は何十年も前に棄教いたし、祈りの言葉の一つも知りませぬ。御絵も見たことがござりませぬ」
珠は必死で首をふった。祈りも知らなければ踏み絵も知らない。けれど珠はずっとずっと清左衛門の妻だった。
「妻などではありませぬ。妻と思うたこともありませぬ。私は修道士でなくなったことを誰彼なく明らかにしようとしました。それゆえいっとき、無理に添うたのでございます。つねに修道士の心でおりました私が、妻など持っていたはずがございませぬ」
「これは、なんとしたことじゃ？」
代官が焦れたように清左衛門と左側の役人とをかわるがわる見た。
珠は必死で首をふり続けて頭に血がのぼってきた。
いつもいつも珠は頭で思ったことを口にできずにきた。智恵が回らないから清左衛門からもじゅりあんからも、伊奈姫からも蚊帳の外に置かれてきた。珠は言われるままに住むところを変え、十五年も別に暮らし、一人で堪えてきた。それなのに今また清左衛門を奪われようとしている。いやだ、いやだ、もう一人になるのはいやだ。珠は清左衛

門が南蛮に行ったときも、琴海を出て行ったときも、言いたいことの一つも言えずに俯いているばかりだったではないか。

「お役人様！」

珠はがばりと白州に頭を下げた。精一杯の大声を上げたので、口のまわりの砂利が吹き飛んだ。

「私が清左衛門の妻か妻でないか、お堂の周りの百姓たちに聞いてもらえればすぐ分かります。お役人様、私も清左衛門も切支丹ではございません。島原の日野江に暮らしておりましたとき、牧野隼人正と申す切支丹に、この棄教者めというて清左衛門はめった打ちにされましてございます。切支丹のために何度殺されかかったかしれません。私たちは天主教のために辛い目にばかり遭うてまいりました」

代官がまた左側を見た。お前が解きほぐせというような顔だった。

役人がいそいで口をはさむ。

「われらとて清左衛門を棄教者と認めるにやぶさかではないが……」

「いいえ、私は切支丹でございます」

「お前様は切支丹ではありません！　そんなことは珠が一番よう知っております」

苦しげに首を振っていた清左衛門は、じゅりあんのほうを振り向いた。

「ジュリアン、私はずっと切支丹だったであろう。ジュリアンは一人で殉教するつもり

なのだろう。ならば私もともに殉教させてくれ！」

珠は両手に砂利をつかみ、清左衛門めがけて投げつけた。

「何をおっしゃるのです！　じゅりあん様、後生でございます。清左衛門を連れて行かないでくださいませ。清左衛門は私の夫でございます。誰のものでもない、私の、珠のものでございます。お役人様、絵をかしてくださいませ。天主の絵など今ここで破り捨ててやる！」

珠は犬のように砂利を掘っては清左衛門に投げ続けた。

「切支丹は牧野隼人正じゃ！　お前様の背には傷が残っておりましょう。脱いでお役人様に見せなされ！　お役人様、清左衛門の背を見てくださいませ。それこそ切支丹ではない証にございます」

珠は清左衛門の襟をつかんで、上衣の袖を思いきり引っぱった。

「ここに証がございます！　ごらんくださいませ、清左衛門が切支丹でないという証でございます！」

「やめよ、やめよ」

代官が扇を上下させると用人たちが割って入って珠を抑えた。

だが珠は渾身の力で暴れた。負けるものか、清左衛門を奪われるものか。

「珠……」

そのときじゅりあんがゆっくりと口を開いた。

すべての目がじゅりあんに向けられ、珠も用人も動きを止めた。

「珠、案ずるな。私がちゃんと代官殿に話すゆえ」

「ジュリアン！」

清左衛門が悲鳴のような声で呼んだとき、じゅりあんは静かに首をふった。

「代官殿、この者は切支丹ではござらぬ。皆もよく知る通り、この者は天主との誓いに背き、修道士をやめた……。切支丹ならば天主との誓いを破るはずがありませぬ。それがどれほどの罪か、真に切支丹たる私にはよう分かっております。この者は修道士をやめ、あまつさえ切支丹であることすらやめた。禁教令も出ておらぬ時分のことですぞ。誰に強いられたのでもない、己で天主教の下から去ったのでございます」

静まりかえった代官所に、じゅりあんの声と珠の荒い息だけが響いていた。

「私はこの者に、悪行の数々を羅馬へ書き送られたくなくば私を匿えと脅しました。……昨日まではうまくいったのでございますが」

じゅりあんは誰にともなく、ふんと鼻息をついた。

「もう十分だ。ミゲル、幼い日の誓いをまさか忘れてはいないだろう。われらは誰にも殉教させたくなかったのであろう」

「………」

「珠の姿を見たか。あれこそ我らが殉教を嫌うた一番の理由ではないか。天主の名で人を悲しませ、苦しませてどうするのだ」

清左衛門はふらふらと立ち上がった。すかさず珠がその足をつかまえた。

「そのほうども、いい加減にせぬか」

代官が床几からわずかに尻を浮かせた。

「見苦しいことよの。珠とやら、案ぜずとも清左衛門は殺しはせぬわ。伴天連にまでなり、そののち転んだ者はまさしく公儀の面目よ」

「ありがとうございます」

珠は即座に頭を下げた。こんなところ、早く清左衛門を連れて帰ってしまいたい。

その珠の心の声が聞こえたのか、代官はまた扇を軽く振った。これまで上下に動かしていたものを横に振り、それが合図でじゅりあんは土間へ引かれた。

「ジュリアン、待ってくれ。ジュリアン！」

清左衛門は泣いて、じゅりあんの後へすがった。今度は珠が止める前に用人たちが清左衛門をおさえつけた。

「もうよい。大儀」

代官は立ち上がって大きく伸びをした。

「ジュリアン！　ジュリアン！」

きっちり頭を下げている珠の横で、清左衛門はなおももがいていた。

じゅりあんは土間に放り込まれるまで、もう二度と清左衛門のことも珠のことも見なかった。

四半刻の後、珠と清左衛門は棒で小突かれながら代官所を出た。二人の後ろで大門が閉ざされた。

「ジュリアン！　聞こえぬか、ジュリアン！」

それでも大門を叩き続けていた清左衛門は、最後には野良犬のように背を打たれ、辻まで引っ張って行かれてそこで放り出された。

そのときも珠は深々と頭を下げていた。

寛永十年（一六三三）十月二十一日、中浦じゅりあん司祭は長崎で穴吊しの責めを受けて六十五年の生涯を閉じた。前年の秋、潜伏先の小倉で捕まって一年あまりも棄教を迫る拷問を受け続け、誰よりも果敢に戦いぬいた末のことだった。

じゅりあんをなんとか棄教させようと執拗な拷問を繰り返した長崎奉行は、一年も経つとさすがに打つ手をなくしていた。最後に残された手は穴吊しだが、これをすると当人が棄教の合図を出さぬかぎり吊しは止まず、ついには死に至る。年寄りは一日ともた

ずに息絶えるので、転ばせたい者には使えない。長崎奉行としては、使節として南蛮にも渡り、日の本に生まれながら司祭となったじゅりあんだけはなんとしても生かして棄教させたかった。

じゅりあんを責め続けて一年、長崎奉行は最後の手段としてじゅりあんに人を会わせることにした。その者がじゅりあんを転ばせられればよし、無理ならば穴吊しで死ねということだった。そして十月十七日、長崎西坂の牢に召し出されて来たのは珠だった。

珠は腰に縄を打たれ、だが白髪はきれいに撫でつけられて、しんしんと冷えの上がってくる土間に座らされた。一年前じゅりあんが小倉で捕らえられたときに白州で暴れた話が長崎にも伝えられており、腰縄を打たれていたのだった。

あのときと同じだと珠は思っていた。土間の正面は一段高くなっており、長崎奉行が一人だけ床几に座っている。だが両脇に役人はおらず、かわりに珠の後ろに立っていた。暴れればいつでも打てるように、役人は手に棒を持っていた。だが珠は暴れたりしない。もう守りたいものはなくなったから。

珠が座るとすぐにぼろくずのような老人が引きすえられてきた。髪は後ろで一つに結わえられ、一年前、最後に別れたときに着ていた衣がほとんど茶一色になってその身にまとわりついていた。

だがふしぎと手足は輝くようにつややかで、花のようにいい香りがしていた。珠の大

嫌いな伊奈姫のような匂いだった。

「千々石清左衛門の妻、珠じゃ。そのほうに話があるとな。お慈悲である、存分に語り合うがよいわ」

　長崎奉行はまっすぐに珠を見て言った。珠の周りは嘘ばかりだ。珠は話したいことなど何もない。珠はいやいや、ここへ連れて来られたのだ。

「珠……」

「じゅりあん様、早く棄教なさってくださいませ。皆様のお手をわずらわせて、見えもせぬ天主だの、天主の言葉だのと。もういいかげんにしてくださいませ」

　じゅりあんは珠に伸ばしかけた手を止めた。

　嘘つき。皆なにもかも嘘ばかりを珠に教えたくせに。

　珠はなりたくて切支丹になったのでもなければ、棄教者になったのでもない。いつも周りに従ってきただけだ。最初は大村純忠公に言われて切支丹となり、次は幕府に従って棄教した。なぜ日の本に生まれて南蛮の天主などに翻弄されねばならない。珠はただ日の光をあおいで、海を見下ろして暮らしていければよかった。南蛮の天主など、この国に来なければ良かったのだ。

「珠、ミゲルは」

「死にました」

「……そうか」

　どうしてそんな澄ました顔ができるのだ。はじめからとうに知っていたみたいに。たった今聞いたくせに、なぜ驚きもしない。

「また夢にでもごらんになったのですか。いつだったか清左衛門と二人で、まるちの様のことをさんざん話しておられた。そうしたら確かに同じ時分に澳門で亡くなっていらしたじゃありませんか。切支丹というのは一体、妖術でも使うのですか」

　正面に座る長崎奉行がふふんと笑った。

「清左衛門がどのように死んだかお教えいたしましょうか。それとも清左衛門も、じゅりあん様の夢枕には立ちましたか」

　珠だけはいつも除け者だ。清左衛門も伊奈姫には手を伸ばし、話しもしたのに、珠には最後まで口をきいてくれなかった。

「何も食べなかったのではないか」

「何がでございます」

「私が捕らわれた日から、ミゲルは飲みも食いもしなかったのだろう」

　珠はじゅりあんを睨んだ。どうして分かる、どうして知っているのだ。珠が夢にも思わなかったことを、どうしてじゅりあんも伊奈姫も。

　珠はぷいと顔をそむけた。

「じゅりあん様が捕らわれたことを知り、伊奈姫様が小倉に迎えの船を遣わしてくださったのです。私たちはそれに乗り、大村へ帰ったのですよ」

「伊奈姫様……？」

誰がまりたなどと呼ぶものか。

じゅりあんは青ざめた顔をうつむけている。その胸で何を思っていようと、珠はこんな顔はもう見飽きたのだ。

伊奈姫の迎えが着いたのはじゅりあんが捕まって十五日あまりの後だった。それまで珠は清左衛門に何か食べさせようと思えば泣きわめかなければならなかった。何を並べても飲まず、食わずで、珠が泣いて頰をたたいて、食べてくれと懇願したときだけ小さく口を開けた。

もとから細かった体はあっという間に骨と皮になり、珠が八方ふさがりの気持ちでいたところへ伊奈姫の文が届いた。きっと何も食べぬのだろう、やせ細って死ぬとは自ら命を絶つにひとしいと書いてあって、珠はわけが分からなかった。

「伊奈姫様の文のおかげで清左衛門も少しは食べるようになりましたが、遅すぎました。背負うようにして船に乗せ、赤児の機嫌でもとるように世話を焼きましたけれど、水もろくに飲まぬのですから」

珠はふふんと皮肉に笑い捨てた。

陸（おか）でほとんど食べなかった者が慣れぬ海の上で食べるはずはなく、岬伝いでも冬の海は荒れて、五日後に船を下りたときは清左衛門は戸板にのせられていた。

船が琴海の伊奈姫の館につけられたとき、清左衛門は薄く目を開けた。

覚えておいでですか、お前様。まりた様のお屋敷でございますよ。見えますか——

だがうつろな目に珠の姿が映ることはなかった。代官所でじゅりあんと別れてから清左衛門はずっと宙を見つめて、珠の声には耳を貸すことも言葉を返すこともなくなっていた。

あのとき珠が戸板に寄り添って歩いていると、ふわりと花の香りがして清左衛門の顔に影が落ちてきた。

顔をあげると伊奈姫がそっと清左衛門の名を呼んでいた。珠にはあのとき清左衛門が少しほほえんだように見えた。

まりた様、清左衛門様が一言も口をきいてくださらぬのです。何も召し上がってくださらぬのです——

伊奈姫は清左衛門の顔から目を離さずに小さくうなずいた。

清左衛門の戸板はそのまま伊奈姫の居室へ運ばれ、そっと布団に移し替えられた。

お前様、目を開けてください。まりた様がおられますよ。ねえ、お前様——

珠が清左衛門にさしのべた手を、あのとき伊奈姫は軽く払いのけるようにした。

清左殿、このままお一人で旅立たれるなど許しませぬ。お目にかかれなかった二十年分の、私の話を聞いていただかねばなりませぬ――

　伊奈姫の頬を涙が伝って落ちた。伊奈姫は妻の珠よりも清左衛門に近づいて、その胸に顔をうずめて泣いていた。

　私の恨み言を聞いていただかねばなりませぬ。私はずっと一人で戦ってまいったのでございますよ――

　かすかに清左衛門はうなずいた。

　清左殿には最後の一いくさが残っておりましょう。じゅりあん様が立派に殉教なされるよう、祈ってさしあげねばなりませんでしょう――

　珠は夢中で首をふった。違う、違う、清左衛門はじゅりあんに殉教させたくなかったのだ。だからじゅりあんの命を惜しんで、あれほど代官所で抗(あらが)ったのだ。

　それなのにあのときの伊奈姫の顔。なぜあの女は珠よりも、ずっと清左衛門のそばにいた珠よりも、清左衛門のことを分かっていたのだ。そして清左衛門もまた、最後に伊奈姫の名を呼んで。

　まるがりいたと、清左衛門は言った。いまわの際のかすかな声でも、珠には聞き取れた。

「清左衛門は珠に腹を立てておられた……。そうでございましょう、珠が……、清左衛門は棄教者だと申したから……」

　じゅりあんはかすかに首をふった。ほほえんでいるように見えたのは、きっと珠の気のせいだ。

「清左衛門は……、棄教していなかったのですか」

　珠はふるえをおさえるために両手をあわせて握りこんだ。

「じゅりあん様。伊奈姫様が申されたのでございます。これから先、じゅりあん様には何が残されているのか考えねばならぬと。殉教なさらねば棄教なさるということだ、そのような悲しいことがじゅりあん様の身の上にまで起こってよいのか、と」

　珠には何も分からない。形のみの棄教がどれほど苦しいことか、同じだけ苦しいならせめて殉教を遂げさせたいと伊奈姫に言われて、途方に暮れることしかできなかった。

「じゅりあん様、清左衛門は苦しかったのですか。清左衛門は切支丹に背骨が折れるほど打擲(ちょうちゃく)されました。それなのにもっと別の苦しみも背負っていたのですか。珠は……、珠は、形だけの棄教をしていた清左衛門に、棄教者の烙印を押してしまったのですか」

「珠……」

「清左衛門様は珠に怒って口をきいてくださらなかったのです」

　わっと涙があふれて珠は両手で顔をおおった。珠には何が分かっていないのかも分からない。だから肝心なところで間違えた。きっと珠は清左衛門が一番してほしくないこ

とをした。だから清左衛門は珠を見てくれなかったのだ。

天主教などこの世からなくなってしまえばいい。伊奈姫も清左衛門も、天主教をこの国に伝えた者も、天主教に関わる者は一人残らず大嫌いだ。珠は智恵が足りなくて力も弱くて、仕返しもできない。その相手がどこにいるかすら分からない。

珠には清左衛門しかなかったのに。清左衛門がすべてだったのに。それなのに清左衛門は最後の最後で珠に背を向けた。

「珠」

縄でくくられた手を珠に伸ばそうとして、じゅりあんは役人に打たれた。

「珠、ミゲルはお前に怒ったことなどただの一度もなかったぞ。お前を見なかったのは、ずっと別のものを見ていたからだ」

珠は泣きじゃくりながら顔を上げた。

「ミゲルはずっと天主様を見て、天主様と話していたのだ。それゆえお前の声が聞こえなかったのだ。だが珠が悲しむのは無理もないことだ。ミゲルに会えば、お前が泣いて怒っていたと伝えておこう」

「じゅりあん様？」

じゅりあんは笑顔を浮かべて頷いた。

「ミゲルがお前に腹を立てるはずがない。お前が代官所からミゲルを生きて連れ帰った

ゆえ、ミゲルは天主様に会えたのではないか。あのとき代官所でミゲルを救えたのはお前だけだ。私でもマリタ様でも、それはできなかったのだ」

「なぜでございますか」

お前が何も知らぬゆえだとじゅりあんは言った。珠がどんなに目をこすっても、その優しい笑顔は消えなかった。

じゅりあんは膝を折りたたんで珠の前に座った。

「潔いミゲルにとっては、誰に何を話すのも言い訳に等しかったのだ。それゆえお前にも何も話さなかった。だが珠には私が聞かせてやろう。だからお前もゆっくりと思い出してごらん。私たちが南蛮から帰って耶蘇会士となり、司祭になるために学問を続けていた時分のことだ」

じゅりあんは促すように珠にほほえみかけた。

「私たちが京の聚楽第へ招かれたことは知っているな」

「はい。太閤秀吉様にお会いになりました」

「そうだ。あのとき秀吉は私たちに仕官をすすめた。とりわけミゲルには熱心にな」

「清左衛門様に……？」

じゅりあんは静かにうなずいた。

「すでに秀吉は伴天連追放令を出していてな、われら四人が四人とも司祭になるのは都

合が悪いと言ったのだ」
　日の本中の注目を集めている清左衛門たちが聚楽第で秀吉と親しく話しまでして、それでも秀吉より天主のほうがよいと言えばどうなるか。
のう。儂の威光は丸つぶれではないか——
　すべての始まりはそのときだった。
「四人ひとかたまりで天主に仕えるというなら、黙って見過ごすことはできぬとミゲルは言われてな」
「なぜ清左衛門様が」
「ミゲルは秀吉に見込まれてしまったのだ。ミゲルが仕官せぬなら、四人まとめて伴天連として追放すると脅された」
　だが四人は追放も死も恐れない。どれほど脅されようと、司祭を目指して学問を続けると言いきった。
　弱ったのう、と秀吉は頭を垂れていた。
　この先きっとその道を行けぬようにするゆえ、悪く思わんでくれよ——
　たとえ何があろうと四人そろって司祭になるつもりだった。それなのに。
「聚楽第でミゲルは毒を盛られたのだ」
「毒？」

「そうだ。砒霜（砒素）といってな、少しずつ体に溜まり、手足がしびれて思うように動かせぬようになる」
　珠ははっと目を見開いた。
　聚楽第から帰り、修道士になった前後から清左衛門はよく物につまずくようになった。長崎の西坂で二十六人が殉教したとき、たしか清左衛門は引きずる足で天草から大村へ渡り、珠は伊奈姫にくれぐれもよくお世話するようにと言われた。その後じゅりあんが八代の天主堂へ移った時分には清左衛門は杖なしでは歩けず、三人が澳門の学林へ旅立ったときはほとんど足萎えのようになっていた。そして天主堂を出て珠と夫婦になると、まるで嘘のように手足のしびれは消えたのだ。
「じゅりあん様、それは……」
　じゅりあんはゆっくりとうなずいた。
「そしてまた秀吉は、耶蘇会で切支丹になれば清左衛門のような足萎えになると、耶蘇会の中に噂を流した。それぞれの修道会が反目しあい、競いあっていた最中にな」
　秀吉はその全てをよく知っていたと、じゅりあんはつぶやいた。
　この世には数多の修道会があり、それぞれが少しずつ異なる思惑を持っている。日の本へ南蛮人司祭を送りこんでいた耶蘇会と小さき兄弟会、説教会のあいだにも、そしてまた南蛮船を送り出す国々のあいだにも異なる利害が渦巻いていた。

そして耶蘇会の中にもまた意見の違いはあった。秀吉に一人返せと言われたときは、まさに日の本から司祭を出すか出さぬか、羅馬の耶蘇会が大きく揺れていたときだった。

「秀吉は耶蘇会の上長に申したのだ。一人でよい、儂の元へ返せ、さすれば羅馬の思惑にまで口は出さぬと」

この日の本から伴天連を出さぬつもりとは祝着じゃ。そのほうら、儂と同じ考えではないか――

耶蘇会の修道士になれば足が萎えるという修道会内部での噂は、日本人を司祭にせぬ考えの者たちを勢いづかせた。やはりこの国の者にとって天主教はまじないなのだ、そのような智恵の足りぬ種族に司祭がつとまるものか、南蛮人が導き日本人が導かれるという上下の間柄を保つべきだ、日の本の者どもは忠実な切支丹にさえしておけばよいのだ、と。

だがこの国から司祭を出そうとしていた者たちにとっては、この噂が広まることは日本人司祭の道を閉ざすことだった。

「はるかな海の向こうから大きな船を仕立てて命がけでやって来るのだ。それぞれに思惑があり、それなりの成果が求められるのは仕方のないことだったろう。修道会は修道会どうし、新しい切支丹の数を競い、司祭の質を競い、どの修道会も、よそには負けられぬと思うていたものだ」

そして秀吉もまた。

一人でよい。一人、羅馬の帝国ではなく日の本の天下人を選ぶというなら儂の面目は保たれる。さすれば噂も消える、みげるも治る。儂はな、誰が転ぶのでも足りぬ。南蛮をその目で見た者が儂のもとへ戻ってこそ、真の天下人なのじゃ――

「秀吉が死ぬ時分には、どこが始まりかも分からなくなっていた。日の本から司祭を出そうとする者は噂を消そうと躍起になり、出したくない者は、ミゲルが会にとどまっていることこそ出さずにすむ道と、噂にうべなった」

じゅりあんは今そのときのその場所にいるように、苦しげに目を閉じた。

「だがミゲルはくじけなかったぞ。体の辛さにも学問の後れにも音をあげず、懸命に励んでいた。それは珠もよく知っているだろう」

珠はうなずいた。その時分のことなら、清左衛門を一人残して澳門に行ってしまったじゅりあんたちより珠のほうが詳しいほどだ。

だが力尽きた。結局、秀吉のまいた噂には勝てなかった。

「われら四人はお前のような者を殉教させぬために、何を犠牲にしても司祭になりたかった。四人そろって国外へ追放されるわけにはいかなかったのだ」

「………」

「われらはな、珠。幾人もの切支丹を殉教から救ったぞ。だがどうだ、幾人もの切支丹

を救ったミゲルを、救ったのは珠だったのだぞ。珠は大手柄を立てたのだ」

「珠が……。幾人もの切支丹を、清左衛門様が……」

何をしのごの申しておる、と奉行が声を挟んだ。申し訳ござりませぬ、この者が司祭の私に棄教を勧めますゆえ、とじゅりあんは珠から目をそらさずに言った。

珠は土間に突っ伏した。

「なぜ、なぜこのようにお優しいじゅりあん様が殉教なさるのですか。なぜ天主を棄てて、生きていてくださらぬのですか」

珠は夢中でじゅりあんにしがみついた。襟をつかんで揺さぶったが、奉行も役人も止めようとしなかった。

「じゅりあん様、どうか殉教などお止めください。珠がお世話いたします、どうかどうか生きてくださいませ」

「珠、私はそれはできぬのだ」

「じゅりあん様！」

「私は司祭なのだ。司祭ゆえ、それはできぬのだ」

じゅりあんは縄を打たれた手で珠の頭を優しく撫でた。

「小倉で珠が畠に入っておるとき、私とミゲルはよくお前の話をしたものだ。幼いときからずっと、私たちのそばにはお前がいただろう」

「………」

「珠がほほえんで日を見上げる姿こそ、天主様がなにより喜んでおられたとは思わぬか。ミゲルも私も、珠を守るために励んできたのだ。珠がいたから我らは励むことができたのだ」

じゅりあんの顔には優しい笑みが浮かんだままだった。

「珠はマリアとマルタのたとえ話を知っているだろう」

天主の子の言葉を聞かずに働いた姉まるたと、じっと耳を傾けた妹まりあ。天主の子はまりあを褒め、働いてばかりのまるたをお叱りになった。最後まで天主の子の言葉が分からなかった珠はまるただったのだ。

「今のこの国ではマリアではならぬ。皆、マルタにならねばならぬのだ」

「まるたに？」

それは違う。天主の言葉をちゃんと聞いて、珠たちは皆、まりあを見習わなければならない。

「よいか、天主の言葉を聞きたくとも聞けぬときがある。これからのこの国では皆、マルタとなって生きてゆかねばならぬ」

「でも……」

「ミゲルはいつも珠を褒めていたぞ。天主の言葉など聞きもせぬ、ただひたすら働いて

おる、なによりも尊いではないかと。そのようなお前のことをミゲルが怒るはずがない。小倉の代官所でもまたお前は褒められることをしたのだからな」

ぽかんと口を開いたきり、珠は何も言葉が出なくなった。じゅりあん様と呼びかけようとしたとき、その声は長崎奉行に遮られた。

「そのほう、転ばせたがよいぞ。穴吊しがどのような責めか知らぬであろうがな、大の男が息絶えるまで呻き通しじゃ。中浦じゅりあんのごとき年寄り、半日ともたぬわ」

臓物が下がらぬように体を縛りあげて逆さに吊す。こめかみに切り目を入れて、頭に滞った血を一滴ずつしたたらす。血で破裂しかかった頭は気を失うことさえできず、最後の血の一滴が落ちるまでその苦しみは終わらないという。

「およそこの世にこれほど苦しい責めはない。呻き声を一度聞けば、どれほど苦しいかはそのほうにも察しがつこう。我らもな、またあの呻きを聞かねばならぬと思うと気が重うての。婆よ、なんとか転ばせてくれぬか」

最後は珠も耳をふさいでいた。

「珠、珠」

じゅりあんが優しく呼びかけた。

「なにも案じることはない。私は一人ではないのだからな。私たちはいつも四人だったのだ。そうだ、お前にはその証を見せてやろう」

「あ、証を？」

珠がかすれた声で問い返すと、じゅりあんはにっこりと微笑んだ。

よく清左衛門とじゅりあんは、ほんの小さな戯れ話を言ってはこんなふうに明るく笑ったものだった。清左衛門とじゅりあんと珠の暮らしは、いつも明るくて楽しくて、あたたかかった。

「珠。私は穴吊しに四日、堪えてみせよう」

「四日……？」

「ああそうだ。一人、一日だ。四人で一日ずつ、穴吊しをつとめることにしよう」

「そんなことが、できるのですか」

「ああ、できるとも。天主様におできにならぬことはない」

そのときのじゅりあんは、珠が目を開けていられないほどまぶしく輝いて見えた。

「私が一日、ミゲルが一日、マンショとマルチノも一日ずつだ。よいか、珠。私が四日生き長らえたら、それは私たちが常に四人だったという証だ。そうだろう」

「じゅりあん様」

「泣かないでおくれ、珠。私は最後に我らが四人だった証を残していくことができる」

そのときじゅりあんは、はっとしたように目を見開いた。

「珠……。お前はミゲルを助けたばかりではないのだな。……私も助けてくれたのだな。

私はたった今、お前になによりの勇気をもらった」
珠はただただ頭をふった。珠にお助けできることはない、珠にして差し上げられるものはない、珠は、珠は――
じゅりあんは珠の頰を優しくぬぐった。
「珠、お前に会えてよかった。さあ、ミゲルになんと伝えておこう？」
珠が顔をあげると、じゅりあんは少しおどけたような笑みを浮かべた。
「泣いて怒っていたと伝えるか」
珠はあわてて頰をぬぐった。
「いいえ、いいえ、じゅりあん様」
「珠は笑ってじゅりあん様をお見送りしたと……、これからはお天道様を見て清左衛門様を思い出すと。元気に畠を耕しておりますとお伝えください」
じゅりあんは満足そうに大きく頷いた。
「必ず伝えるぞ、珠」
それからじゅりあんは奉行に見えぬように珠の額の上でそっと小さく十字を切った。
「天主の平安がいつも珠と共にあるように」
珠は息を吸い込んで、また司祭様と、と言おうとした。
だがじゅりあんは珠の唇に一本指をかざし、小さく首をふった。言うなということだった。
じゅりあんは笑顔で立ち上がり、珠に背を向けた。
「お奉行様。もはや話は決しました。私は棄教いたしませぬ。さあ、穴吊しにまいりましょう」
「じゅりあん様！」
追いすがろうとした珠を、役人が棒でさえぎった。
それきりじゅりあんは振り返らなかった。寛永十年（一六三三）十月十七日のことだった。
その翌日にじゅりあんの穴吊しの責めは始まった。そして四日後の同月二十一日、この世に最後まで残された南蛮使節じゅりあんは厳かに命を終えた。

結

おお、玄蕃。良かった、そなたはまだおいでてくれましたか。年寄りの話は長いゆえ往生したであろう。お役人様がたは帰られたな。いやいや、かまいませぬ。肝心の天草四郎など影も形も出てこぬのじゃもの、無理はない。お役人様はさぞかし惚(ほう)けた婆じゃと思われたでありましょう。

天草四郎時貞殿、か。そなたはどう思います。まこと、父上様のお子であろうか。

ただ一人の女子？　母にも心当たりがあると申した？　ふふ、まりいた様に決まっておりましょう。

そうとも。確かにまりいた様は、私よりも清左衛門殿よりも年嵩(としかさ)じゃ。天草四郎の母になれようはずはない。

ですが天草四郎は、まこと十八であったのか。

そうでありましょう。十ほど若く見える男など、ざらにおりますぞ。もし天草四郎がまことは二十八であったとすれば何とします。それならば母は三十五、七つ上のまりいた様も四十二。子はまだ生めましょう。いいえ、からかってなどおりませぬ。母より七つ上と申しても、あの御方のほうがよほど若く美しかった。あの時分なら、まだ二十じゃと申しても通られたであろう。

玄蕃はまりいた様のお若い時分を覚えておらぬゆえ、そのようなことを申すのじゃ。それはもう、美しいなどというものではなかった。犬や猫までまりいた様を振り返って見ておったのだから。いいや、嘘でなどあるものか。初めてこの手を取ってくだされたときなど、母はもう、己の手が輝きだすように思われたもの……。

そのうえ誰彼となくお優しい御方でな。しかもお優しいばかりではない。あの御方ほど強い女子を、母はほかに知りませぬ。

そのような姫様に、いかな清左衛門殿と申せ、思いをいだかれなかったはずがない。そしてまりいた様もまた、清左衛門殿のことは格別に思し召しでありましたろう。

まりいた様、のう。生涯ついに嫌いになれませんでしたな。幾度となく、もう厭じゃ、もう二度と顔も見ぬと思うたものであったがの。そしてまりいた様もまた、どんなときも私と清左衛門殿を見捨てられることはなかった。人が天主を恨んで、離れようと抗い、ついに離れられぬ……、それと同じことだったかもしれませぬ。

いやいや、母は天主教などついに分からずじまいじゃ。

ですがな、この母は徳川様がなにほどのものじゃとは思うておりました。私は弱く、智

恵もないゆえ、清左衛門殿やじゅりあん様やまりいた様のように胸を張って切支丹を守ることはできぬが、お役人様を欺いて切支丹をかばうくらいのことはいたしますぞ。わが夫はじゅりあん様から穴吊しを一日引き受けて、見事お役目を果たされた御方なのですから。

　そうでございますな。まこと四人で穴吊しをお引き受けなさったのか、それは母にも分かりませぬ。真実はじゅりあん様がお一人で堪えぬかれたのでございましょう。

　ですが母は知っております。あの御方たちは一人で四人、四人で一人でございました。それゆえじゅりあん様のお苦しみは、そのまま清左衛門殿たちのお苦しみでもあった。ああ、そのようなことは清左衛門殿やじゅりあん様と三日も共に暮らせば分かるものじゃ。

　それにしても天草四郎時貞殿が清左衛門殿のお子、か。

　母は、そのような風聞がたっておると知っただけで嬉しゅうございました。幕府の禁教令に屈せず、切支丹の頭目として皆の先頭に立って戦われた天草四郎殿の生きざまを、人々は清左衛門殿の生涯に重ねあわせてくれたのですから。

　生涯、切支丹として顧みられることのなかった清左衛門殿が、切支丹の頭目の父にふさわしいと思われた……。どちらも切支丹として戦いぬいた尊いご生涯じゃ。まこと天草四郎殿が清左衛門殿のお子であればよいと、母は思いますぞ。

　父上様が亡くなられて六年……、この国の切支丹はついに滅んだのでございますな。十三で南蛮へ旅立たれ、三十六で棄教なされ……、生きておられれば六十九でございますな。

　まりいた様もお加減が悪いそうじゃが……。あの御方は昔からよく文をくだされた。会いに行けば話が尽きぬゆえ……、畠が荒れまするでな。

　私はあの御方のことは何も案じておりませぬ。そうじゃ、清左衛門殿とじゅりあん様もよくそう言い合っておられた。そなたのことは案じておらぬ、天主様がよきように計らってくだされよう、と。

　のう玄蕃。母はやはり、清左衛門殿は最後にまるがりいたと申されたと思うております。父上様はいまわの際に、この母ではなく、まりいた様の名を呼ばれたのかもしれぬとな。

　ああ、そなたの申す通りじゃ。まるたかもしれぬし、たまかもしれぬ。

だが、もうよいのです。清左衛門殿が最後に誰の名を呼ぼうと、それが何ほどのことであろう。どのみち、この母は情けないほど清左衛門殿をお慕いしていたのじゃ。わが名を呼ばれなかったと恨むことなどできませぬ。

　どうぞお笑いなされ。母はこれでも毎日お天道様を見上げて、いつかは清左衛門殿に会えるよう、精一杯励んで畠を耕しております。死んで清左衛門殿と同じところへ行こ

うと思えば、この母など、まだまだ働きが足りませぬ。清左衛門殿は天の一番高いところにおわす御方ゆえ、母はまだまだ、まだまだ体が動かぬようになるまで励まねばなりませぬ。私はそれしかできぬ女子ゆえな。

のう玄蕃……。おていが朝長安昌様に嫁ぐそうでございますな。そなたの娘がもうそのような齢とは、私も婆になるはずじゃ。

それにしても私の孫が、まりいた様のご嫡孫と夫婦になるとはの……。清左衛門殿とまりいた様は二代を経て、血が一つになるのでございますなあ。清左衛門殿もどれほどお喜びであろう。

これをな、玄蕃。これをおていにやってくれませぬか。いやいや、この汚い巾着は私が持っておりましょう。

清左衛門殿がこれをまるがりいたと呼ぶと教えてくだされたのは、いつであったか。この世は真珠のように丸く、南蛮はこの真珠のように美しいと申された、あれは……。

母は、清左衛門殿が最後に申されたのはこの真珠のことであったろうと思うております。清左衛門殿の生涯を定めた南蛮の日々……、棄教者としてろざりおを持つことも許されなかった父上様にとって、南蛮を共に見てまいったのはこの真珠だけであったゆえ。

父上様はな、玄蕃。最後にただ、南蛮の日々を恋うておられたのでありましょう。生涯唯一の光明となって父上様を照らし、導きつづけたお四方での日々……。父上様は最

後に誰の名を呼ばれたのでもない、ただあの遥かな日々を眼に浮かべて旅立たれたのではなかったか……。

のう玄蕃、今日のお天道様はとりわけきらきらと、嬉しそうに輝いておられよう。

解説

縄田一男

平成六年、葉治英哉氏の『狄物見隊顚末』にはじまった松本清張賞も、次々と実力派作家を輩出、平成二十二年、第十七回の『マルガリータ』の受賞によって村木嵐氏という大輪の花を得ることになった。

村木氏は、この前年、第十六回の際にも明暦の大火を扱った『春の空風』を投じており、二度目で見事、その栄冠を手にしたことになる。平成二十二年六月、文藝春秋から単行本として『マルガリータ』が刊行されるまでは、故司馬遼太郎氏の妻・福田みどりさんの個人秘書であるという話題性ばかりが先行したきらいがあるが、なかなかどうして、受賞作を一読するや、歴史小説のファンが思わず唸らずにはいられない力作であった。

物語はいわゆる天正使節団の中で、唯一人、背教者となった千々石(ちぢわ)ミゲルの生涯を、その妻・珠の目を通して描いている。

ここに、何人かの選考委員の選評を引くと、

村木嵐氏は、昨年に続いて二度目の候補となったが、前作の『春の空風』に比べて、ずいぶん腕をあげられたように思った。欠点を修正し、難易度の高い大河小説に挑んだ、という決意のほどが窺えて、好感をもった。善人をあくまでも善意で描きたがる傾向のある作者が、人の心の移り変わりや理屈の通らない心情にも目を背けることなく、小説として昇華していこうとする姿勢が感じられた。

（中略）

作者は一作ごとに著しい成長ぶりを見せてくれている。テーマのいたずらな拡散に留意し、人間の剝き出しの姿を書くことを恐れなければ、今後、さらに優れた作品を書いていける方だと思う。受賞を心から祝したい。（小池真理子）

みげるもじゅりあんも、結局、皆、殉教したかったのだなと、ぼくは読者として納得をした。初めは、なんとか殉教者をなくすために動いていた彼らが、最後には殉教という道を選んでしまう——この、人間の弱さというか、強さというか、業というか、病のようなものが、きちんと描けていた作品だと思う。（夢枕獏）

数年前、ミゲルの墓が発見されて話題にはなったものの、資料のない棄教者の生涯を描くのは容易なことではなかろう。作者は、ミゲルの棄教の謎を探ろうと、伏線を張ったり、複数の理由を差し出

してくる。それを軸の揺れとして違和感を持つのも不思議ではない。しかし、私は好意的に読んだ。どの揺れも、その時点では納得できぬ話ではなく、そうやって己を納得させたのか、とミゲルの気持ちになれる。むしろ、著者の読み手に対するフェアネスを感じた。（桐野夏生）

天正少年遣欧使節は、明治以前の日本人の記録でヨーロッパに資料が残る最大のものだ。千々石ミゲルは棄教の理由を含めて日本の切支丹史で謎の多い人物である。そこに着目し、敢えて挑んだ作者の姿勢がいい。ミゲルの妻の珠の語りで物語が進行していくのも、ややもすれば暗くなりがちな切支丹の話に、あっけらかんとした女の明るさが光を与えている。

（中略）

物語を押しすすめる筆力は素晴らしいものがあるし、後半に四人の使者が交わす会話などは作者の熱気が伝わってきた。生身の人間が見えた気がした。荒削りな点は多いが、それを払拭する才能と粘り強い語り口に並々ならぬ力量を感じた。（伊集院静）

これらの選評に対し村木氏は、

このたびは松本清張賞に選んでいただきまして、どうもありがとうございました。まさか現実に受賞できる日が来るとは思っていなかったので感激でいっぱいです。

候補作に残ったとき、冗談半分で友人に水垢離を、別の友人に断食を頼みました。二人がそろって実行してくれたので、何もしなかった私は身を縮こめていました。

選考委員会が始まると電車に飛び乗って、家から遠く離れた公園でぼんやりと結果を待っていました。応募作を必死で書いていたときはちっとも一人で頑張っている気はしなかったのに、その公園にいた二時間だけは一人きりでした。

松本清張賞をいただけて、これほど嬉しく光栄なことはありません。応募作も私自身も至らないところだらけですし、何をどうすれば良くなるのかも正直分からないのですが、それでも、これからも努力は止めないと、俯いて拳を握りしめています。

名前を挙げきれません。感激以上に感謝で胸がいっぱいです。本当にどうもありがとうございました。

と、〝受賞のことば〟で答えている。

作者は、〝何をどうすれば良くなるのかも正直分からないのですが〟と記しているが、やはりこの一巻の魅力はベテラン作家に匹敵する村木氏の渾身の力量であろう。

再三記されているように、題材は、ローマに派遣された天正遣欧少年使節の中で、唯一、棄教した千々石ミゲルである。信長から秀吉へと変わる天下人の推移の中、八年後に帰国した彼らを待っていたのは〝禁教〟の二文字。

その状況下で、人たらしの名人、秀吉の巧妙な毒を吹きこまれたミゲルは、他の三人を救うため、形ばかりの棄教にはしる。が、さらに、秀吉から家康へと切支丹政策が強化されるなか、背教者と蔑まれるミゲルのことを真に思うのは、「満足に文字も書けない頭で（彼のことを）考える」妻珠と、或いは国外に追放され、或いは苛酷な拷問の果てに死んでいった三人の同志のみ。

そして私がこの作品を高く評価したいと思うのは、歴史小説界の大御所、永井路子氏と何度も話し合った歴史小説の鉄則——すなわち、歴史小説は、私たちが生きている現代と〝合わせ鏡〟になっていなければいけない、というそれを見事なまでに踏まえているからなのである。

結論からいえばこういうことだ。

戦後、アメリカの傘の下に入り、アジアの同胞を見捨て、朝鮮戦争における神武景気や、ベトナム戦争下の高度経済成長等により、物質的繁栄を謳歌した日本人は、誰もが背教者ではなかったか。そしてその中に、果たして、千々石ミゲルのような真の逆説的殉教者はいたのか、と作者は問いたいのではあるまいか。

そして唐突なようではあるが、ジョン・ダワーは『敗北を抱きしめて』（三浦陽一、高杉忠明、田代泰子訳、平成十三年、岩波書店刊）の中で「戦後のナショナリズムを満たす日本の指導者たちに残された唯一の現実的方法は経済面にしか存在しなかった」といい、その背景には「みずからの脆弱性への抜きがたい自覚とともに、国としての誇りnational prideを求めてやまない、敏感で傷ついた心情があった」と喝破している。

そして話を『マルガリータ』に戻せば、作中、特に哀れをとどめるのは、ミゲルの妻珠である。彼女は、「形のみの棄教がどれほど苦しいものか」、その理屈は分からない。唯、ミゲルの思いを理性ではなく、感情で知るのみである。それだけに彼女の思いは、より純粋であるといわねばならぬ。

そして再び本書の現代史との対応を考えれば、日本に一億総中流意識が蔓延し、差別や貧困がなくなったと偽装された中、社会の片隅には名もなきミゲルと珠がいた——私には、そう思えてならないのである。

加えてこの問題は、いまも現実のものとしてある、と私は考えている。

『マルガリータ』が力作たる所以であろう。

ちなみに、村木氏は、〈松本清張賞受賞インタビュー〉「司馬遼太郎に憧れて」の中で、何故、三代将軍家光の時代を選んだのか、という問いに対して、

この江戸時代初期というのは、政治や経済などのシステムもまだ成熟していないんですね。とても不思議な時代で、たとえば、島原半島の南端にある口之津という小さな漁村にはたくさんの外国人が歩いていたり、日本人同士の挨拶にも横文字を使っていたり、外科手術をしていたり……。普通の人たちが、今の私たち以上に異文化と触れ合っていました。そういうことが意外だったので、調べてみようと思ったんです。

と答えているが、それを裏書きするように、第二長篇『遠い勝鬨』を刊行。

こちらは、知恵伊豆こと松平伊豆守信綱の政治家としてのリアルな像に迫っている。信綱は、家光が将軍になったとき、小姓組番頭から老中へと就任。幕閣には、保科正之らがおり、彼らの心の中は〈無私〉であった、と作者はいう。

また、そうでなければ、大名改易、島原の乱、由井正雪の乱、振袖火事などの国難は捌き切れなかったであろう。徳川が政権を掌握したといってもまだ三代、誰もが二百六十年も続くとは思っておらず、まだまだ、〝遠い勝鬨〟を上げるべく腐心する信綱は、ラストでようやく、島原の乱の決着まで辿りつく。決して能吏とは書いていない逆説が現代政治への短い批判となっている。

最近では、娯楽性の高い連作も手掛けており、今後の活躍がますます楽しみだ。

ちなみに、ペンネームの由来は、気持ちにムラがあって乱れっぱなしと、みどり夫人に「ムラ気乱子」と呼ばれていたからだという。

（評論家）

単行本 二〇一〇年六月 文藝春秋刊

文春文庫

定価はカバーに
表示してあります

マルガリータ

2013年6月10日　第1刷

著　者　村木　嵐（むらき らん）

発行者　羽鳥好之

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社製作部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷製本・凸版印刷

Printed in Japan

ISBN978-4-16-783859-1

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

北方謙三
杖下に死す（じょうか）
剣豪・光武利之が、私塾を主宰する大塩平八郎の息子、格之助と出会ったとき、物語は動き始める。幕末前夜の商都・大坂を舞台に至高の剣と男の友情を描ききった歴史小説。（末國善己）
き-7-10

北方謙三
独り群せず（ぐん）
大塩の乱から二十余年。武士を辞めて、剣を揮う手に包丁をもちかえた利之だが、乱世の相は大坂にも顕われる。『杖下に死す』続篇となる歴史長篇。舟橋聖一文学賞受賞作。（秋山　駿）
き-7-11

北原亞以子
恋忘れ草
女浄瑠璃、手習いの師匠、料理屋の女将など江戸の町を彩るキャリアウーマンたちの心模様を描く直木賞受賞作。表題作の他、「恋風」「男の八分」「後姿」「恋知らず」など全六篇。（藤田昌司）
き-16-1

北原亞以子
埋もれ火
去っていった男、残された女。維新後も龍馬の妻として生きたお龍。三味線を抱いて高杉晋作の墓守を続けるうの。幕末の世を駆け抜けて行った志士を愛した女たちの胸に燻る恋心の行く末。
き-16-4

北原亞以子
妻恋坂
人妻、料理屋の女将、私娼、大店の旦那の囲われ者、居酒屋の女主人など、江戸の世を懸命に生きる女たちの哀しさ、痛ましさを艶やかに描いた著者会心の短篇全八作を収録。（竹内　誠）
き-16-5

北原亞以子
消えた人達 爽太捕物帖
「探さないで」と置き手紙を残し、忽然と消えてしまった幼馴染み弥惣吉の女房。中山道へ行方を追う爽太たちが出合ったものとは。若き爽太と江戸下町の哀歓を描く傑作長篇。（杉本章子）
き-16-6

北　重人
夏の椿
柏木屋が怪しい。田沼意次から松平定信へ替わる頃、甥の定次郎が殺された原因を探る周乃介の周囲で不穏な動きが――。確かな時代考証で江戸の長屋の人々を巧みに描く。（池上冬樹）
き-27-1

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

北　重人
蒼火（あおび）
江戸で相次ぐ商人殺し。彼らは皆、死の直前にまもなく大きな商いが出来そうだと話していた。何かに取り憑かれたように人を殺め続ける下手人とは。大藪春彦賞受賞作。（縄田一男）
き-27-2

北　重人
月芝居
天保の御改革のために江戸屋敷を取り壊され、分家に居候中の留守居役。国許からは早く屋敷を探せと催促され、江戸中を駆け回るうちに失踪事件に巻き込まれるのだが……。（島内景二）
き-27-4

黒岩重吾
落日の王子 蘇我入鹿（上下）
政治的支配者・皇帝と、祭祀の支配者・大王の権威を併せもつ地位への野望に燃える蘇我入鹿が、大化の改新のクーデターに敗れ去るまでを克明に活写する著者会心の大作。（尾崎秀樹）
く-1-19

久世光彦
逃げ水半次無用帖
幻の母よ、何処？　過去を引きずり、色気と憂いに満ちた絵馬師・逃げ水半次が、岡っ引きの娘のお小夜と挑む難事件はどれも哀しく、美しい。江戸情緒あふれる傑作捕物帖！（皆川博子）
く-17-3

五味康祐
柳生武芸帳（上下）
散逸した三巻からなる「柳生武芸帳」の行方を巡り、柳生但馬守宗矩たちと、長年敵対関係にある陰流・山田浮月斎一派が繰り広げる死闘、激闘。これぞ剣豪小説の醍醐味！（秋山　駿）
こ-9-13

堺屋太一
豊臣秀長 ある補佐役の生涯（上下）
豊臣秀吉の弟秀長は常に脇役に徹したまれにみる有能な補佐役であった。激動の戦国時代にあって天下人にのし上がる秀吉を支えた男の生涯を描いた異色の歴史長篇。（小林陽太郎）
さ-1-14

佐藤雅美
官僚川路聖謨の生涯（かわじとしあきら）
幕末――時代はこの男を必要とした。御家人の養子という底辺から勘定奉行にまで昇りつめ、幕末外交史上に燦然とその名を残した男の厳しい自律と波瀾の人生を描いた渾身の歴史長篇。
さ-28-2

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

佐藤雅美
信長（上下）
信長は突然変異のようにこの世に出現したのではない。曾祖父、祖父、父と三代にわたる血の結晶であり、信長は生まれながらにして天下人たるに必要な資質をそなえていたのであった。
さ-28-10

佐藤雅美
当たるも八卦の墨色占い　縮尻鏡三郎
鏡三郎のもとへ持ち込まれる事件が、近頃やけに艶っぽい。毒婦、奸婦と陰口をきかれる女、不義の子を宿した女、挙句は捨て物（忘れ物）から二本の張形まで現れて……。（末國善己）
さ-28-18

佐藤雅美
たどりそこねた芭蕉の足跡　八州廻り桑山十兵衛
働くばかりが能でなしと、縄張り外の出羽に向かい、「おくのほそ道」をなぞろうとした十兵衛だったが、盗賊一味と同じ道をたどってしまったから、さあ大変！　好評シリーズ第七弾。
さ-28-19

酒見賢一
周公旦
太公望と並ぶ周の功労者で、孔子が夢にまで見たという至高の聖人周公旦。弱肉強食の権力闘争から古礼、巫術の魔力まで、古代中国のロマンがいま甦る。新田次郎文学賞受賞。（末國善己）
さ-34-2

酒見賢一
泣き虫弱虫諸葛孔明　第壱部
口喧嘩無敗を誇り、自分をいじめた相手には火計（放火）で恨みを晴らす、なんともイヤな子供だった諸葛孔明。新解釈にあふれ、無類に面白い酒見版「三国志」、待望の文庫化。（細谷正充）
さ-34-3

酒見賢一
泣き虫弱虫諸葛孔明　第弐部
酒見版「三国志」ともいえるシリーズ第2弾は、正史・演義を踏まえながら、スラップスティックなギャグをふんだんに織り込んだ異色作。孔明出廬から長坂坡の戦いまでが描かれます。
さ-34-4

指方恭一郎
麝香ねずみ　長崎奉行所秘録　伊立重蔵事件帖
次期奉行の命で、江戸から一人長崎の地に先乗りした伊立重蔵。そこで目にしたのは「麝香ねずみ」と呼ばれる悪の一味に蝕まれた奉行所の姿だった。文庫書き下ろしシリーズ第一弾！
さ-54-1

文春文庫　歴史・時代小説

（　）内は解説者。品切の節はご容赦下さい。

指方恭一郎
砂糖相場の罠　長崎奉行所秘録　伊立重蔵事件帖
長崎では急落している白砂糖が、大坂で高騰している！　謎の相場を、長崎奉行の特命で調査する伊立重蔵の前では、不審な殺人事件が次々に起こる——。好調の書き下ろしシリーズ第三弾。
さ-54-3

佐々木味津三
旗本退屈男
額の三日月形の刀痕が目に入らぬか——東は仙台から西は京まで、庶民の味方、旗本退屈男こと早乙女主水之介が大活躍！　映画でも人気を博した大衆小説がついに復刊。（阿部達二）
さ-55-1

司馬遼太郎
竜馬がゆく（全八冊）
土佐の郷士の次男坊に生まれながら、ついには維新回天の立役者となった坂本竜馬の奇跡の生涯を、激動期に生きた多数の青春群像とともに大きなスケールで描く永遠の傑作青春小説。
し-1-67

司馬遼太郎
坂の上の雲（全八冊）
松山出身の歌人正岡子規と軍人の秋山好古・真之兄弟の三人を中心に、維新を経て懸命に近代国家を目指し、日露戦争の勝利に至る勃興期の明治をあざやかに描く大河小説。（島田謹二）
し-1-76

司馬遼太郎
世に棲む日日（全四冊）
幕末、ある時点から長州藩は突如倒幕へと暴走した。その原点に立つ吉田松陰と、師の思想を行動化したその弟子高杉晋作を中心に変革期の人物群を生き生きとあざやかに描き出す長篇。
し-1-105

柴田錬三郎
猿飛佐助　柴錬立川文庫（一）　真田十勇士1
猿飛佐助は武田勝頼の落し子だった。戸沢白雲斎に育てられ、忍者として真田幸村の家来となり、日本中を股にかけての大活躍。美女あり豪傑あり、決闘あり淫行ありの大伝奇小説。
し-3-1

柴田錬三郎
真田幸村　柴錬立川文庫（二）　真田十勇士2
家康にとって最も恐い敵は幸村だ。佐助をはじめ霧隠才蔵、三好清海入道たちが奇想天外な働きで徳川方を苦しめる。後藤又兵衛、木村重成も登場して、大坂夏の陣へと波乱は高まる。
し-3-2